

【完結】 お家とおち○ちんお取り潰し 残されたのは好敵手と子孫
を残す為の優秀な血統だけ？ 生意気ぼっちやまTS孕み嫁修行

あかん子を説法

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある時、ある国に。傑出した魔術師の才を持つ二人の若き男児がいた。

一人は古豪白神家唯一の嫡男、黎人^{レイト}。高慢で粗暴。しかしそれに見合う莫大な魔力と優秀な頭脳を持つ、齢十二にして歴代最強と謳われた神童。

もう一人は新鋭玄霧家長男、千隼^{チハヤ}。高潔で冷酷。神童黎人に引けを取らぬ魔力と頭脳を持つ、これまた将来を嘱望された天才児。

同時代に同世代として産まれた二人は互いに切磋琢磨し、己が才を過去類を見ない程に高めた。高め過ぎた。

魔術師は男女魔力的に釣り合わなければ子を成す事が出来ない。彼らは優秀過ぎるが故、世継ぎを残す事が出来ないという問題に直面した。

傑出しているとはいえたった二人。人材難に喘ぐ国はそれを許さない————二人の天才男児、その片割れを犠牲にするという手段で、未来を繋ごうとした。

目次

プロローグ	1
一話 不穩	7
二話 刻淫	20
三話 教育 前編	32
四話 教育 後編	39
五話 定期検診	51
六話 真打	65
七話 悪化	78
八話 喪失 前編	89
九話 喪失 後編	98
十話 醜女	110
十一話 主導権	120
十二話 新日常	131
十三話 墮淫	144
十四話 分岐点 前編	159
十五話 分岐点 後編	168
十六話 過酷	180
十七話 虚勢	191
十八話 初体験	200
十九話 悪女	210
二十話 赦免	220
二十一話 結闘 前編	230
二十二話 結闘 後編	245
二十三話 抱擁	259

二十四話 救合

二十五話 レイ

エピソード

273

286

298

プロローグ

「はぁー……はぁー……っ、んうっ……」
もじもじ、くちゅり。

鮮やかな赤の映える高級なマットの上、左右の太腿を擦り合わせる音に淫靡な水音が混じり、少女の悩ましげな吐息が染み入る。

ドアの前、産まれたての子鹿の如く内股でフラフラと立つモノトーンの給仕服姿をした少女。外は暗く、灯りは開いた窓の外から差し込む微かな月光とお洒落なスタンドライトが発する落ち着いた雰囲気
の光のみ。淡い光に照らされながら揺らめくその姿は何処か妖しげだ。

「来たか」

寝巻き姿でベッドの上に座り本を読んでいたこの部屋の主たる少年は本を閉じ一つため息を吐くと、青の瞳を怪訝に細め冷淡に言い放つ。

「なんだ、使用人か。こんな夜分遅くに何の用だ」

「はぁー……件の、夜伽にございますっ……」

「知らせに来たのか？ わざわざ」

「いや、お、わたしが、その相手で……」

「は？ なんだと？」

か細く絞り出された女声が確かな熱を帯びてそう告げた。

事前に馴染みのある人間が来るとだけ知らされていた彼にとって
は間違いとしか思えなかった。長身の彼より一回り小さな体躯と童
顔、歳下である事は容易に想像が付くが、その特徴だけでも既に当て
嵌まる者は身近に存在しない。

「久々に寄越して来たかと思えば……貴様、何処の血筋の者だ？」

春の夜風に揺れる、耳にかかる程度の長さでサラリと真っ直ぐな白
銀のショートボブ。前髪の下と同色の眉はハの字で、その更に下、猫
の如く愛らしい大きな紅の瞳はとろんとしている。鼻筋は綺麗に

通っており、紅潮した頬の肉付きは少し丸く幼なげだが無駄は無い。薄紅色の唇は息をする度に艶めき色香を発する。

総じて絶世の美貌となる可能性を秘めている。一目見ていれば忘れる筈が無い。年頃の男子である彼は密かに息を呑みつつ記憶を探ったが、途中で無意味と悟り辞めた。

「大方没落した何処ぞの貴族の出だろうが……俺を知っているなら無理だと分かっただけ」

「ふ、わからない、か……そう、だよな……っ、はあ」

自嘲する様に少女は笑った。苦しげに、切なげに。見るからに様子がおかしい。少年は警戒を深める。

少女はゆつくりと壁にもたれ掛かり、口を大きく開いたまま肩で息をする。部屋は広いのに背中を丸めて縮こまり、身悶えしているその様子は何処か窮屈そうだ。自身の腕を強く組んで服を握り締めしており、何かを必死に堪えている様にも見てとれる。

出方が分からず息を殺して様子を窺う少年。とそこへ、ぽつりぽつりと、彼にとつては耳を疑う様な言葉が投げ掛けられる。

「そう、だよなあ……ボクが、レイトだつて言っても……んっ、信じて、くれないよな……こんなん、じゃ」

「? は?」

レイト。それは約二年前、ある日の勝負を境に家名ごと消息を絶つた少年の好敵手^{ライバル}、白神黎人^{しらかみれいと}の名だった。

何を言っている……? 奴は男だぞ? 仮にそういう類の魔法だとしても、奴の実力だ。掛かりはしない筈だ。

冗談にしては突飛が過ぎて「急に何の冗談だ?」と彼は訝しんだ。が、引っ掛かる。

髪と瞳の色については類似する点がある。物言いも一瞬彼を彷彿とさせた。

しかし目元の雰囲気が違う。彼、レイトはもつと吊り上がっていて、子供ながらに陰しく鋭い目をしていった。

それが何だこの垂れた、媚びる様な蕩けた目は。

類似点があっても違う箇所が多い。その程度、その程度だ。なのに

何故か直感で、冗談だと断ずる事が出来ない。

「んはあつ……いいよ、別に」

「んなつ!??!」

突飛が続く。少女は突如給仕服を脱ぎ始めた。

するする、するり。布の擦れる扇情的な音がする。

少年の被夜這い経験はこれが初めてでは無い。しかしながらここまで異様で強引なのは久方ぶり。冷静な面の皮は瞬く間に剥げた。

「待て待て待て！ 何でそこで脱ぐつ!??!」と慌てふためき立ち上がり、詰め寄るも間に合わない。

「んっ、はあつ……」

はたり。脱ぎ捨てられた服が落ちる。露わになったのは、芸術品と見紛う程美しく官能的な少女の肢体。

「うっ!??!」

小さな背丈に見合わず、嫋やかな曲線の起伏に富んでいる。露出した瞬間、給仕服に押し込められていた胸と尻の柔らかな媚肉が解放され、ふるんつと瑞々しく弾けて揺れた。

甘く芳しい濃密な雌臭が解き放たれ少年の鼻腔をくすぐる。寸前まで近付いた足がすくんだ。何せ全身の絹肌を覆い隠す物が殆ど無い。触れるのも憚られ、制する為に伸ばした手も宙に浮いたまま彷徨ってしまった。

重心は後ろへ傾き、徐に尻餅をつく。目を伏せたフリをして、逃れる様に後退りしながら彼は伸ばした手を指差す形に変え誘る。

「なんて姿だ貴様……!」

前述の通り身に纏った物は少ない。足元の純白のニーソと部屋履と、首元に付けられたままの怪しげな白銀のチョーカー以外は肌の色ばかりが目立つ。

上半身はブラジャーの様でそうでない、胸の大きさよりも圧倒的に小さな他と同系色の布地二つ。双方その中央付近はわざとらしく穴が作られていて、丸くぷっくり膨れた二つの淡いピンクが晒されている。

下も同様。透ける前貼りや装飾的刺繍で華やかに飾り立てられて

いるものの、白地のTバックには悪辣なスリットが入っており、しとどに蜜を溢す股間の一本筋が露出。明らかに秘部を隠す意図が無く、寧ろ艶やかな花卉の色を際立たせている。

おまけに臍の下、子宮の位置と形をひけらかす様に赤く光る、娼婦でも中々居ないであろう程に強力で下劣な淫紋。何処かの誰かか、はたまた彼女自身か。芸術的女体を下品に貶める冒瀆性は、高い身分で育てられてきた若く高潔な精神の軽蔑と恐怖を誘うには十分だった。

「はぁー……っ……ふふっ」

少女は悪戯っぽくくすりと笑い、脳髓に滲み入る様な語尾の上がつた甘い声音で彼に迫る。

「お前の、そんな顔が見られるなんて……んひひっ、このカラダになつてはじめて、得したかも……っ」

「何を、言ってるんだ？」

その下腹部、淫紋からは部屋全体を包む程の淡い桃色の光が放たれ始める。

本来なら彼にとっては取るに足らない程度の低い幻惑魔法。しかし純粹に質が極めて高く、量が莫大だ。

処理し切れず少年の知覚は惑いだすも勘付く。

「この魔力、貴様本当に……っ!?」

人が発する魔力にはフェロモン同様個人特有の特徴がある。故に悟り、尚も信じ切れず彼は揺らいだ。

「んはぁーっ……くそっ、抑えてたのに勝手にっ、ああくそつていつたらっ、っんっつおっ！」

可憐な容姿にそぐわぬ乱雑な口調が吐かれた直後、淫靡な肢体は淫惨な獣声を上げると共に爪先立ちになって跳ねた。

プシュツ。その股からは淫水が噴かれ、下腹部よりまた幻惑魔法の波動が連続放出される。

さながら暴走機関。少年は目を瞑り、荒れ狂う波の中堪える事しか出来ない。そしてそれは少女もまた同じ。

「おっ、んっ、んんん……」

口元を抑えながら千鳥足でふらつき、今にも倒れそうだった。が、

何とか堪えると、「んん、っ、ふうー……っ、ふうー……」と必死に呼吸を整える。

「っふうー……うう、気付かれたくなかったのにいつ……くっ、恥ずかしい……」

少女は赤面し内股で身悶えながらも、こうなったらと改めて決心し進みだす。部屋履を脱ぎ一歩、また一歩。ひたり、ひたり。

少年は不安定ながらも右掌に青い光を収束させ、彼女へ向ける。

「くっ、くるなっ、これ以上近付いたらっ」

「殺して、くれるのかあ？　っ、はは。それも、本望だな」

「貴様っ……！」

歩みは止まらない。殺意を向けられても切なげに表情が歪むだけ。躊躇は一切無かった。

少年に躊躇いが生じる間に二人の距離は詰まり、そしてゼロになる。少女が躓く様に崩れ身体が重なった。

「うわあっ!?？」と狼狽える彼。少女は視線をその股間へ向け、舌舐めずり。

「はあー……んはっ、ちゃんと固く、なってるじゃん」

「なにがっ……うあっ!?？」

柔らかな感触と甘美な媚臭にあてられた男子のシンボルは、彼自身の気付かぬ間に既に寝巻きのズボンをテントの如く張り上げていた。

「ボクで興奮するとか、んっ、ヘンタイだなあ」

「やめろっ！　触るなっ！」

「おらっ、抵抗すんなっ」

ボロン。乱暴にスボンが下着ごと捲られ、少年の逸物が露わになる。

「貴様ホントに何者だっ!?？」

「ふうー……だからあ、言っただじゃん。レイトだっ」

「ふぎけるな！　アイツは男でっ……！」

目元の泣き黒子の位置、挑発的に上がる口角。月光が照らす彼女の顔が彼の面影と被った。

「お前……」

「っー……」

熱い吐息が重なり過去を紡ぎ出す。

二年前、彼女がまだ彼だった頃――

一話 不穩

「おらっ！　これで終わりだ！」

競技場を模した地下施設の一角。魔法によって空間拡張され擬似的な陽光の浮かぶ、野原の如く広大な升目模様の盤面下。少年の勝ち誇った叫びが木霊すと共に、燦然と輝く赤の光を帯びた人間大の歴戦の騎士駒が駆り、淡い青の光を帯びた一回り大きな王将駒と衝突する。

一閃。騎士駒の剣の一振りが王将駒を盾と鎧ごと真つ二つにして勝敗は決した。空間は収縮し、元の少年二人が相對して座る席の間に置かれた机上の盤面に戻る。

「はっはー！　ボ、私の勝ち！　最近ギャラリー多いからなあ、私も最強だって知れ渡っちゃうなあ！」

「……フン、今朝一番は負けた癖にいい気なもんだな」

「はん！　偶々だったんだろそりゃ、最近はお前の方が負け越してるんだぜ？」

「ならもう一戦やれば分かるだろう？　今の一回も、僅かに勝ち越している事も偶然かもしれない」

「おー上等だ！」

当時レイト十二歳、チハヤ十三歳。同世代の若い少年二人は、幼少の頃出会ってから当時のその日まで、機会があれば毎度あらゆる勝負で互いの優劣を競う仲であった。

魔術師の家系では子供は生まれた時点でその魔力と知力を他者と競わされる運命にある。

彼ら二人はその競争の中で抜きん出た世代のトップ。もとい、史上でも類を見ない程に傑出した麒麟児だった。

二人の戦いを見に集まった周囲のギャラリー。その中でも特待的な場所で眺める老若様々な男性の一団は語る。

「相変わらず凄まじいな……」

「両者共競技形式上ではもう我々が束になっても敵いそうにありませんな、ほっほっほ」

「これで盤術戦の通算戦績は一体幾つになった？」

「直近三ヶ月では先程の試合を含めると、64戦中二つの引き分けを省いて32対30。レイトが僅かに勝ち越していますが、然程差は無いと言つて良いかと」

「短期間にそれだけ戦っているのも驚きだが……そこまでやって差が見えないのか」

「確か実戦形式の模擬戦に於いてもほぼ五分だったな」

「はい。互いに片方の得意項目を競わせると一方的な結果が出たりはしますが、総合力を競わせると拮抗します」

「純粋な魔力量や魔法の出力に於いてはレイトが勝り、魔力の操作精度、操作可能時間はチハヤが勝る。徒手に於いても同様。体格自体は一回り劣るものの力や瞬発力ではレイトが、上背を活かしつつ精度と持久力でチハヤが優れていた。知力、精神戦でもその傾向は顕著。メンタル面でややレイトが劣るものの短期戦で彼が勝利する事もままあり、逆に長期戦で最終的にはチハヤが圧倒する事もあった。」

「良い加減両者欠点は知り尽くしているでしょうに、こうも噛み合いますかな」

「対策の張り合いが高度だわな。不思議な程同じ展開を見ん。そのせいだろう」

「一体何処で読み漁ったのか、先程は国外のマニアックな戦術を披露していたな。しかもかなり洗練されていた」

「らしいな、探究心が窺える……」

「彼らのスコアを初めて見た時は目を疑いました。ついて行ける者は、恐らく大人を含めてもこの国には居ないでしょう」

「他国でも怪しいだろう。前回の国別対抗戦ではやり過ぎて不正を疑われたそうじゃないか」

「はい。お陰でレイトの方は性格的な難を多分に露呈させてましたが、それでも全く問題にならず圧倒的な勝利を収めました」

「得手不得手有れど、それは両者を比べた場合にのみ表れる程度のも

の。他者と比べれば全て高次元で凌駕している。

双方互い以外に並び立つ者無し。故に彼らは競い合う。己が比類なき一番になる為に。故に高め合う。その争いにある種の決着が付く日まで。

「ほっほ、この国の未来は明るいですなあ」

「ふっ、そうも言ってられんわ」

「ああ、そうだな……」

しかし、だからこそ。一団は懸念した。

「確かに、優秀過ぎて頭を抱える問題も多いのも事実です」

「そうだな、あの成金玄霧め。日増しに声がデカくなってないか？」
「魔道具製造業の世界シェアを握るだけでは飽き足らず、国内外でかなりの資金を集めているそうじゃないか。次は一体何を始める気なのやら」

少年達の躍進が世に喧伝される程、彼らの家の力も大きくなる。

この世のパイは有限だ。特定の家力が過剰に強まれば、既得権は脅かされる事になる。

「チハヤ君、人気ですからなあ。例え優秀な魔術師で無くともあの容姿とクールな性格なら、金は幾らでも集まってしまいうさだ」

「アレはまだ良い、立場が弱い頃に取り決めた長女と次女の国側の名家との縁談が効いておるし、次男坊も我が家の大事な孫娘と許嫁になる話が進んでおる。まだ御せる。最悪なのは白神の方だ。目障りな古豪がいよいよ潰れるかと思っていたが、唯一の嫡男であるレイトがああの調子だ。最悪、過去一強と言われた頃の力を取り戻しかねぞ」

そうならないよう、彼らは古来知恵を働かせてきた。互いにパイを分け合う為、また牽制し合う為に、親族同士を血縁とする。それは争いの中で生み出された最もポピュラーな手段の一つであり、かつ昔から変わらず一辺倒に多様される程の最も強力なワンパターンであった。

一様に地下施設の空間を挟んだ向こう側、少年達の血縁者が座る席を見据え、表情を険しくした。

「はあ、確かに。チハヤ君は弁えてますが、白神のガキの方は生意気で尊大な態度が目にも余る。アレは相当我々を舐めてますぞ」

「やる事成す事全て成功していますからね。幼稚な振る舞いもそのせいか、或いは計算も含めてか。兎に角怖いもの無しでブレーキが有りません」

「アレで致命的な隙を全く晒さんのが腹立たしい。うつけ当主の方を突こうとしたがしっかり守っておった」

「噂では白神の最近の差配、全てあの坊主が取り仕切っている可能性があるとか」

「保険、銀行、鉄道、都市開発、エトセトラ、エトセトラ……手広く食い潰していただだけの過去の遺産を幾つか手放し、統合出来るものは統合。黒字化した資金を新規事業に振り大躍進とはまあ見事な手腕だが、あんな若い少年に可能なのか？」

「あの兎や猫の類の愛玩動物的顔貌に騙されてはなりませんぞ！アレは可愛さのカケラもない狡賢い生き物、小動物の皮を被った化生だ！」

「あの金にルーズな現当主がある日を境に急に無駄の無い経理を行うとは到底思えない……コンサルタントを雇った形跡も無い、悍ましいがあり得る話だ」

「そろそろ、何か手を打つべきやもしれんな」

「ほほっ、今更白々しい。既に皆各々打てる手は打ってませんか？ これ以上何かあると？」

皆押し黙る。と、その中で「あの」とこれまで発言の無かった一番の若輩が声を上げた。「レイト、チハヤ両名に直接縁談を持ち掛けるというのは」と。

提案は一同の失笑を買った。

「ふっ、何も知らぬボンクラの阿呆が。既にそんな事やっとするわ。それが出来たら今苦労しとらんわい……」

そして溜め息が漏れる。彼らの常套手段が直接両名に通用しない理由。それもまた彼らの傑出度合いが原因していた。

魔術師は基本その血筋でないと魔力を扱えない為、技能を絶やさぬ

様子孫を残す事を生来国から義務付けられている。婚姻はそれを前提として行われるのが決まりだ。

そこにハードルが存在する。魔術師は魔力的にある程度釣り合いの取れた者同士でない限り、子を作る事が出来ない。

「せめて魔力だけでも奴らに追い付くレベルの子女を育成しようと挙つて費用を投じたのだがな。無駄に終わった」

「近頃も成長著しいですからな、追い付く事は不可能でしょう。ほっほっほ」

一般的には十歳に入る頃には魔力成長が落ち着き、大方の将来の魔力量に推測が付く。そこで釣り合う候補を決め許嫁を設定。婚約可能な十四歳に入った所で結婚が決まる。

しかし、レイトとチハヤは十歳に入る段階で既に釣り合う候補は皆無。しかも魔力成長も未だ留まる事を知らず伸び続けている。

「でも、だったらそうだ、白神は嫡男が彼しかいないのでしょよう？
一代で潰えるのでは」

「親の当主がまだ生殖可能な年齢だドアホ。兄が完全に手を付けられなくなつてから弟が産まれたらどうする？」

「その点の解決手段は当主主導であれば幾らでもある。お飾りは黙つて口を閉じてろ」

「……………」

釣り合う相手を用意出来ない以上、婚約は成立しない。子孫を残すという義務の弊害になるという理由から子供を残す以外の意図の婚約も禁止されている為、ただ結婚するだけというのも無論不可能である。

国の決まりという本来味方する筈の強制力にも見放され、最強のワンプターンを完封された一同。それだけでまさかここまで手詰まりになるとは、その場の誰一人として予期しなかつたであろう。

「しかし勿体無いですなあ、これだけ優秀な者が子孫を残せないと。国家の損失では？」

「片割れが女子であれば良かったのやもな、ははは」

話題は崩れ、冗談に興じる雰囲気へと流れかけたその時。何気無い

一言で閃いたかの如く、新顔一人が動いた。

「……成る程な」

「む、なんだ？ 何か有るのかその」

「この場では話せない。聴かれています様なのでな。場所を移そう」

「何だと!?？ 何処のどいつだ!?？」

俄かに色めき立つが、老声による静止が入り静まるのは早かった。

「落ち着けい。とつとと動くぞ」

「ほっほっほ、ですな。恐らく探してみても証拠は有りません、時間の無駄ですぞ。とつとと退散致しましょう」

一団が去って行く。盗聴魔法によって聞き耳を立てていた盤術戦中の少年二人は静かに舌打ちした。

「クツツ、お前のせいで気付かれたじゃねえか」

「何がだ」

「とぼけんじゃねえよ、盗み聞きしてただろ。一瞬混線したせいで」

「ふん、そんなへまはしない。第一耳が腐る様な老人達の会話など聞いてられるか」

「聞いてんじゃねえか！」

「それより良いのか？ 手筋が散漫なお陰であと数手で詰みそうだが」

「……はっ、言ってる。こつから巻き返す！」

結局その日の戦績も五分。決着付かず時間が彼らを分つ。

優秀な二人である。忍び寄る悪意にも薄々気がついてはいた。

しかし彼らはまだ若く、甘く見ていた。大人達の執念深さを。

翌週。思わぬ一報が入り、国の直轄する競技会場、その待合所で二人は顔を合わせる事になる。

「おう、チハヤ」

「……やはりお前か」

お互い認識は同じ。相手を知らされず最低限の言伝だけ伝えられて呼び出されたものの、大方の想像は付いていた。

「急な御前試合とかわけ分かんねえよな」

「ああ。だが形式上は確かに国が主宰の催しだ。断れない」

「はあ、最近は忙しいんだけどなあ」

「だろうな……何か分かったか？」

「いんや、連中の動きが何か慌ただしいって事以外殆ど収穫無し」

「……そうか」

情報共有を始めて分かったのは、互いに些か露骨で大規模な統制が行われているという事のみ。

裏で何かが大胆に動いている事は明白。ただその尻尾を掴むには彼らはあまりに多忙で、時間が足りなかった。

煮え切らずモヤモヤする二人。間も無くドアが開き、国側の使用人の女性による呼び出しがかかる。

「ま、お互い気を付けるっつーことで。行こう」

「ああ」

一定の不安はありつつも、己に絶対の自信を持つ二人は堂々と向かった。

仰々しい廊下を進んで一つ門をくぐり、もう一つ。大きな門の前に立つ。暫くすると合図と共に開き、その先に進むと足元に大きな魔法陣があった。

間も無くもう一度合図が来て、視界は光で満たされる。目を瞑ると一瞬内蔵が浮いてかき混ぜられるかの如き錯覚に襲われた後、直ぐに元に戻った。

徐に瞼を開くと、眼前に厳かで絢爛な、コンサートホールの如き広大な空間が広がる。飾り付けられてはいるものの構造は競技場そのものであり、騒つく数多くの人間の気配があった。

彼らは入場を果たした事を知り見合う。と、その時。

「よく来た。玄霧千早特等、白神黎人特等」

目の前に実体無き国家元首のシルエットが浮かび上がり、老成した威厳ある声音を発する。二人は反射的に片膝を折り頭を下げた。

レイトは真顔を取り繕いながら微細な魔法によりチハヤへ思念を飛ばす。

(び、びびった。元首が名指しで話し掛けて来るのかよ)

(やめろ、バレるぞ)

「両名噂は予々聞かねがねいている。此度はそれを確かめる為招集した」

共に心音が跳ねる。二人が過去に幾度か賞与を賜った際でも元首は訓示の際に声音を晒すのみで、彼らへの賞賛は筆頭配下による言伝だけだった。元首が直属の部下以外の相手に直々に話をする事などほぼ前例のない異常事態。

しかし果敢にもレイトは切り込む。

「閣下、発言の許可を」

(おい馬鹿っ)

「許可しよう」

「有難う御座います。して、此度の招集、御前試合とだけ伝えられておりますが」

「その通りだ」

「御前試合は半年前に行われたばかりです。当時は確か千早と自分の二人を含めた六人の総当たり戦でしたか」

探る様に問うその態度はあまりにも危険に見え、チハヤは耐えかね思わず「やめろレイト！」と叫び割り込む。

「お許し下さい閣下！ レイトは魔術師としては非凡ながら人としてはまだ未熟で」

「よい。前例の無い招集に思う事があっても無理は無い。疑問に答える」

一呼吸置いて元首は答えた。

「改めて明言する。此度の御前試合は両名の真価を問う為、特別に催した物だ。先の総当たり戦で両名は抜きん出ていた。故に目を付け調べたのだ」

そして張り詰めた空気を続く言葉が裂く。

「断言しよう、両名はこの国の未来だ。そしてそれ故に宣告する。この場で雌雄を決し、頂点を決めよ」

「っ……………」

直後、ホールの観衆たるお偉方が一斉に盛り上がった。

なんと理不尽な大義名分か。突然一方的に槌が振りかざされ、机が

叩かれてしまった。二人は何も言えずただ息を呑む。

伝える事を伝え、盛り上げるだけ盛り上げた元首はそのシルエツトを消した。

アナウンスがホールに響き、競技内容が伝えられる。

引き返し難い大きな流れに呑まれた二人が出来る事はもう、勝負だけ。

「……やるしかないのか」

「ふん、やるからには勝つ。勝って、それからだ！」

そうして行われた五番勝負はつつがなく進行。当然の如く双方は拮抗し、二勝同士で最後の模擬実戦へともつれ込む。

「はあ……はあ……」

展開されたのは、数ある競技用の空間の中で最も広大な密林を模した場所。圧倒的にレイトの不利な空間だった。

両者競い合う中でそこはかと無い違和感を膨らませながらも、終ぞ訴えるには確信を持たず。不平不満を漏らす事なくいつも通りかそれ以上に真剣に戦った。

一方的になるかに思われたが、レイトの必死の抵抗により展開は二転三転。観衆を散々沸かせ、そして。

「勝負有り！ 勝者、くるぎりちはや玄霧千早！」

軍配はチハヤに上がった。

歓声の中空間が元に戻っていく。

「はあつ、くっ……」

（……クソ、クソッ！）

肩で息をして地に背を付けたままのレイト。そこへ滝の様に汗を流しながらも涼しい顔をしたチハヤが無言で手を伸ばす。

「……」

「……はっ、何か言えよ」

「……すまん、何も」

言葉を遮る様にしてレイトは強く手を取って立ち上がると、鼻息荒く熱り立った様子で入場の際使用した転移魔法陣へ向かい、半ば逃げ様な形でその場から立ち去った。

ただ敗北を引き摺っての行為では無い。無論悔しさが彼を突き動かしてはいたが、それ以上に嫌な予感がして外聞を気にする余裕がなくなった。

「レイト様」

「どけー」

引き留めようとする国側の使用人を退け、慌てて後をついて行くようにする白神側の使用人も振り千切る勢いで家路を急いだ。

競技会場を出てすぐ、道端にあった普段滅多に乗らないタクシーカラーの魔動車に飛び乗り「出せ！ 早く！」と指図までして。早る。焦る。

「はっ……はっ……はっ……！」

浅い呼吸と共に元首の言葉が脳裏で回った。この場で雌雄を決し、頂点を決めよ。”

勝った方は明確だ。しかし、負けた方はどうなる？

聞くわけになどいかなかった。戦いの場で、そんな事。考える事も憚られた。

しかし聞いておけば、考えておけば良かったと今一瞬思ってしまった。恥だ。恥だ恥だ恥だ。

たった一回の敗北が重くのし掛かる。元来戦いとはそういう物だとレイトは知っていた。重要なのは負けた後だという事も。

ただ直感が告げる。巨大な力が信じられない程の速度で振りかざされ、潰されたのは――

違う！ まだだ！ これからどうなる？ 考えろ。考えて答えを出せ。そして対処しろ。考えろ考えろ考えろ考えろ――

「――お客様、お客様！」

「……あ？」

「着きましたよ」

動悸と眩暈の中、夢の無い眠りの間の如くあっという間に家に着いてしまった。

「ああ……」

半ば憔悴した様子で少年は雑にカードで支払いを済ませると、ドアを開けてふらふら。初夏の陽光が突き刺さる中、冷や汗をかきながら白神家特有の古風な平家の屋敷の門をくぐった。

「はあっ……はあっ……」

敷地内に異変は無い。静かに呼吸を整えつつ、正面玄関から入る。ガラガラ、ピシヤリ。スライドのドアを開閉した後、気もそぞろに靴を脱ぎ、部屋履も履かずに木目の床を靴下を履いた足で歩く。

そうだ、まず母。母上に会おう。

滑る足取りで廊下を進む中、背筋はどんどん寒くなる。

使用人が一人も見当たらない。誰も居ない。

屋敷は死んだ様に静かだった。胸騒ぎが酷くなる。

「母上……」

母の居そうな部屋の襖を片っ端から開け放つが見当たらず。遂に父の書斎のドアに差し掛かった。

あまり気の進まない場所の為後回しにしようかと思ったその時、ガタとドアの向こうで音がした。

ようやく誰か居た。彼は藁にも縋る思いでドアを開ける。

「あ……父上……」

「……」

部屋の奥、椅子に座って背中を丸めた父が居た。

彼は徐に振り向く。と、過程で肘が当たり、机の上の酒瓶が倒れた。

「んなっ、父上、何故……」

昔は酒浸りになっていた父だが、近頃はすっぱりと酒を断ち更生していた筈。なのに何故。

濁った瞳が息子を写す。瞬間、その瞳は血走り、酒臭い口が開かれる。

「なんで負けた……」

「えっ」

弱々しく震える声。だが次の言葉は違う。

「なんで負けた！ 何で負けて帰って来た!? 何でだ、何で！」

この世の恨み辛み全てをぶち撒けたかの如き狂った怒声がレイト

へ浴びせられた。

父は息子へ飛び付くが如く迫る。が、足がもつれて直ぐに転倒。

「もう終わりだ！ 全部！ 全部終わりだ！ お前のせいだ！ 全部！ ああああああああ！」

その場で赤子の如く転げ回り始めた。

みつともない絶叫が耳をつん裂く。レイトは紅の瞳を凍り付かせながら静かに後退りして、震える手をドアに掛けそっと閉めた。

「はは……」

これは夢だ。何かの悪い冗談だ。

少年は乾いた笑いを浮かべ、覚束ない足取りで自室を目指し歩いた。

模擬実戦の疲労がここに来てどっと出ている。恐らく現実の自分は、何処かで寝ているんだろう。

だとしたら何処からが夢で何処からが現実なのか。そんな野暮な事を考えている内、自室のドアの前に来ていた。ゆっくりと開ける。

「っ、えっ……」

ギイ、ギイ。気味の悪い軋む音。縄を首に掛けて天井のライトにぶら下がる、母の姿。

何だこれは。何かの当てつけか。

「母上、何をやってるんですか？ 何を……」

現実が希薄で掴めなかった。するりと指の間を抜けていく感覚。

一歩も動けずレイトは立ち尽した。頭の中は真っ白で、目の前は真っ暗。

最中遠くから大量の足音が迫り、乱暴にドアを破壊する音がした。

ハツとして身構える。木の床板を踏み壊す勢いの重い足音が津波の如く迫り来る。

「居たぞー！ ここだ！」

会敵。相手は、国家警察だった。

「白神黎人！ 当主同様、国家反逆罪の罪で逮捕する！」

ああ、意味が分からない。

ぞろぞろぞろぞろ。大の大人が部屋の中まで入って来て、首吊り死

体に目もくれず少年を取り囲む。

「何を言ってるんだ……？ 我が反逆の意志などいつ見せた……？」

「罪状は固まっている、大人しく来て貰おうか」

「大人しくして欲しいならまず貴様らが筋を通せカスどもお、おとおおおお！」

レイトは激昂し、怒りに任せ全力で抵抗した。男達を家の壁をぶち抜く勢いで吹き飛ばし、家の外に出て意識を刈り取る魔法の雨霰受け、尚もそれを弾き返し包囲網と戦いを繰り広げた。

しかし既に消耗し切っている上多勢に無勢。150人余りの警察側の魔術師をのした所で力付き捕縛されると、麻酔薬を注射される。

「くっ、う……！」

くそっ、だれか助け……？

あれ？ 誰かって、誰だ？

哀れにもその時人生で初めて誰かに助けを求めた彼の脳裏に頼れる他者の存在は無く。虚しさの中闇の底へと沈んでいった。

二話 刻淫

一体何が起きたのか。レイトの聡明な頭脳を以てしても、意識を失うその寸前まで全く理解出来なかった。

しかしこれから先、身を以て知る事に、否、刻み込まれる事になる。頭脳だけではない。文字通り細胞レベルで、全身に。

「ん……」

ゆっくりと深い闇が晴れ、眩しいくらいの白が視界を埋める。

身体をゆっくりと動かそうとした。しかし、指一本動かせない。動作する関節一本一本、鋼鉄の拘束具によってロックされている様だ。

感触は素肌に戻る。どうにも全裸らしい。力を入れる度鉄が肉に食い込む。悍ましい事に尻の穴の中にまで異物感がある。

「ふう……ふう……っ！ ん……んっ！」

重い頭は出来事を反芻し、再び軽度のパニックに陥った。声を上げようとしたが、口は無機質な猿轡の様な物で塞がれている。くぐもつた声だけが発せられた。

しかし恐ろしい程響かない。吸音の壁なのか、空間の広さが全く分からない程音が殺されている。背中の感触から有る程度クツション性のある物の上に寝かせられている事は確かだが、レイトからは今いる場所が床の上なのか大の上なのかも分からない。

魔力まで、吸われてっ……！

無秩序に放とうとした熱が霧散していく感覚で、一気に醒める。

ああもうっ、これは、聞きしに勝る魔術師の檻だよったくっ……クソっ、随分と大層な物を。

国家に捕らえられたという事実を自覚し、全身の力みを解く。

分かり易いそれが、幾分かレイトに事実を事実として受け入れる余裕を与えた。万全とはいかないまでも思考が回り始める。

成る程な。連中、どうやったかはまだ分からねえけど、見事に大義名分を得てボクの排除に成功した、って所か。んで、殺すのは勿体無

物であるとお考え下さい」

回りくどく、指し示す所は奴隷であった。

この女、ゼツタイ殺す。

当然受け入れられず少年は憤慨。女の言い方も相まって怒髪天を突き、殺意剥き出しで額に青筋を立てて暴れた。

と、そこへ「あー気が散るので暴れないで下さい」と女に告げられ、直後にぶすりと針の様な何かが首筋を刺す。

一瞬の痛みに声を上げる間も無く薬液は注入され、針は抜かれた。すると忽ちそこからじんわり痺れが広がり全身が弛緩。少年は意識を持ったままぐったりと脱力してしまった。

何事も無かったかの様に音声は仕切り直される。

「つきましては、現在貴方は国家の所有物です。私、及び私の所属する組織は国からの委託を受け、貴方の施術を担当致します」

大規模な機構が駆動する音がして、真っ白だった天井から鈍色の棒が伸びた。

同時に辺りが淡いピンク色に光り始め、怪しげな魔力で満たされる。

女の声は小声でヨシと呟いた。すると先程までのやる気の無い声はどこへやら。

「じゃーまあ必要な説明はこんな所ですので、施術を開始致します。まあーすう。少し痛いですが、ガマン、して下さいねえ」

うへへぐへへと気持ち悪い笑い声を交えながら、興奮した様子で語尾はねっとり抑揚たつぷりにそう告げた。

直後、銃口の如き鈍色の棒が下腹部に突き付けられ、ビイイイイという高周波音と共に濃い桃色をしたレーザーが射出。臍の下辺りの皮膚の一部が熱を感じ、少年の腹筋は強張った。

「んっ、ぐうっ……！」

苦悶の音が漏れる。痛いという程痛くは無い。ただ皮膚に留まらず腹の中まで通る、こそばゆく、気色の悪い熱だ。彼の弛緩した身体が不快感を露わに勝手に振れようとして、拘束具に阻まれ続ける。

「ぶっっ、ぶっっ……！」

「むふふつ。あのお、ここから話す事はほぼ独り言でただの趣味なんで聞き流して下さいねえ」

一体何をされているのか。解析中の脳に、女の陰険な語りがへばり付く。

「クライアント、まあつまりは国なんですけどお、凄い無茶振りなんですよお？」

「んぐつ、ん、んん……！」

「絶対に消えない魂魄肉体複合式で、かつ多重に術式を刻み込める隷属刻印をお望みの上、かつそこに超強力な肉体改変術式を付与しろなんてえ、笑っちゃいますよねえ？」

少年の思考を読み反応を試すかの様なわざとらしい、ぞくりとするネタバラシだった。

こつ、こいつつ……！」

「あつ、いい顔お……すつごくかわいい……！ まだ小さいのに、噂通り優秀な魔術師さんなんだねえ！ 分かってくれるんだあ……！」

「ん、つ、んんんんつ……！」

術者が特定される。国内最悪の魔術医学師、ドクターヘルゼン。

魔術師ならばその名を知らぬ者は居ない。一般人魔術師問わず人を騙し違法に人体改造魔法を施す稀代のマッドドクターであり、被害件数は判明しているだけでも千を裕に超える。

「てか分かってたけどやっぱすつごお、ここまで干渉レーザーが通り難い身体初めてだよお！ お国が私なんかを頼る訳だねえ！」

最近名前が上がらないから捕まったと噂が出ていたけど、まさか国に飼われていたとは……！」

「でもやべえ〜マジで全然通らねえ〜！ ミニミニち〇ちゃんは勃つてるし、感覚神経には干渉出来てるっぽいんだけどなあ……！」

「っー！」

少年の小さな逸物は何故かピンと勃ち張り詰めていた。

彼は多忙故そこまで意識した事は無いが、知識はある。相手が誰であれ羞恥せずにはいられない。

「あつ、赤くなつたあ！ ああくかわいいいつ、かわいすぎ……！」

もつと欲しい〜メチャクチャにしたい〜」

「つゝゝゝゝ！」

「でもレーザー通らなきや術式刻めねえ〜！ 私が優秀でもマシンパワーが足りなかつたら意味がねえ〜！」

しかし、何やら手を拱いている。もしかしたら。

「ふっ、ん、んんんううっ、うう、っううううっ？」

（ふっ、今ならまだ、許してやるぞ？）

まあ許さねえけどな。楽に殺してやる位の配慮はしてやるが。

と、そんな微かな期待を女は愉悦たつぷりに打ち砕く。

「ほんと軍資金で設備強化して無かつたら私もお手上げてたかもなあ……しゃーない、じっくり虐めたかつたけどジリジリやってたらオーバーヒートするまでダメそうだ。出力上げるねえ、えいっ！」

掛け声と共に空間は俄かにその色を増し、ジイイイイイ……！とレーザーの音と勢いが増幅した。

直後、腹を突き抜ける熱い感触が少年を襲う。「ふぐう、っ!?？」と紅の瞳は白黒して、涙が滲んだ。

更に熱は動き出し、身体の内外を灼いて、かき混ぜていく。

全身から汗を吹き出し、生意気だが上品な知性に溢れていた童顔は遂に崩れた。

悶える様なくぐもった声が悲鳴に変わる。

「ん、んんんんんんふう、うううううううううううううううううううう!!」

？」

（あ、あああああつアツついアツいイタイいいいいいいいい!!？）

絶叫。ピギイという擬音が似合う、変声期始まりたての喉を潰す様な甲高い濁声。

薬で弛緩した全身の筋肉が痙縮を繰り返す。頬は紅潮し、鼻水と涎を垂れ流し続ける。

その様には品性を取り繕う余裕の一切が窺えなかつた。女声はよりヒートアップする。

「あああ〜きたきたきたあ……!! これなら通りそうぞおヨシヨシ

てえ……あはあ素敵い〜！」

「ふっん ふうふうふう！ ん ん ん ん ん ん ん！」

（よっせ ええええええええ！ やめろおおおおおおお！」

いやだ、これはなんか、だめだっ……………！

鼓動が速まり、激しく耳を打つ。何か漏れ出る。予感が迫る。

堪えた。堪えようとした。が、迫り上がる力はずっと大きくて、

あつという間に抑圧を突破。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふうっ、うふうふうふう……………！」

ぐっ、ぐっ、ぐうううううう……………！

「んっ！」

びゅくんっ！

「ん ん ん ん ん ん ……ん ん ん ん ん ん！」

びゅくっ、びゅっびゅっびゅっびゅっびゅっびゅうう……………！

カツと頭裏で弾ける様な快感と共に、放たれてしまった。竿先から

白濁の液が、彼の人生で初めて。

「あつ、あらあらあらあ……………でちやつたねえ」

「ふっ……………ふん ん ん ん ……ん う う う う う う ……！」

（くっ……………くそおおおおお、ぐそお おおおおおお……………！）

もうただじゃ……………ただじゃ殺さないぞお……………！

ただの粗相を超えた粗相。圧倒的屈辱感と羞恥。惨めさで彼は咽

び泣きたくなった。

が、その暇すら無い。光線は全く止まっていない。少年の下腹部を

休まず蹂躪し続ける。

ジユウウウウウツ！ 下腹部に掛かった白濁液に光線が触れ、音

と蒸気が上がった。

「ん ぐう ううううう……………」

「でもまだまだまだまだ…………… たーっぷり描いて、搔いて、カキ

まくるからねえ……………！」

一切容赦無し。刻まれる。描かれ続ける。ハート、楔、またハート。

曲線的で、女性的なデザインが背徳の形を帯びていく。

こつちが弱ってるからっていい気になりやがってええええ……………

！

快感に似ていた感覚の成分は一気に苦しみに寄った。殴打された後の様な重だるい身体が、先程と同様かそれ以上にかき混ぜられる。

「ほおくらここ、まだ詰められるっ……！ここも、よしよしいぞお〜！」

「ん、んっ、ふっ、ふんう、うううううううっ！」

(な、にっ、いっ、てんだよおおおおおおおっ！)

無理矢理に痙縮させられ、重い刺激が下腹部を抉る。一度放出し萎み始めた逸物も強引に引き起こされ、引き攣る度に涙の如く情けない汗を垂れ流す。

まだ詰めるってっ、一体幾つ刻み込むつもりだこいつうううう？
ただ不快なのに怪しい熱は溜まり続け、先程の感覚を引き出そうとしてくる。

と、そこで少年は強烈な刺激に隠されていた途轍もない異常に気付いた。

「う、っ……っ？？」

お、おかしいつ、身体の魔力の、流れがっ……っ？

「ここも、ここももうちよいいけるっ、あとここもここもお……っ！」

「ふう、うっ、う、ううんっ……っ！」

(おまえっ、ちよつとまてっ……っ！)

魔力が、いつの間にか際限なく下腹部に集まる様になっていた。

通常はどんな術式であれ起動の為に魔力が必要となる。身体に刻む術式も、発動時に術者から魔力を供給する仕組みになっている事が殆ど。

ただそこには任意性の付与が義務化されている。無秩序に術式から魔力を喰らわれたら術者が乾涸びてしまう上、術によっては使い物にならなくなってしまう。危険であり、数少ない例外を除けば何のメリットもないただの禁止事項だ。

現在起きている事態には明らかにそれが無い。その上術式自体が完結していない筈なのに、既に魔力を吸い集め、何らかの作用を始めている。通常術式ではあり得ない程膨大な量を吸い集めながら、着々

溜まる熱の量が飛躍的に高まり全身に広がっていく。光線に嬲られる感触でゾクゾクとした震えが身体の芯を駆け巡り止まらない。飽和する。溢れる。

やばいなんかっやばいやばいやばい無理ムリむりっいゝイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

「んゝっんゝっんゝっ、んゝんんっ！ んんゝんんうゝううううううう！」

びゅくっ！ びゅっびゅっ！ 小さな逸物は跳ね、二度目の射精へ至った。最初より水っぽい濁り汁が下腹部を濡らす。

が、尚も衝撃は続く。逸物の奥の奥、尻の裏の方が猛烈な熱を帯びて痙攣し快感を発する。

「ふっ、ふうゝっ、うゝううっ！ ふんうゝううううゝううううっ！

（やっ、やめゝっ、やゝううっ！ やんめゝえええええええええっ！）
「あはっ、かんわいいい……！ チョーいいかんじだよお！」

腹回りが汗と汁まみれになったせいで蒸気が大量に上がる。凄まじいカルキ臭が鼻を突く中、思考も碌に纏まらず少年は悶絶地獄に陥った。

「んゝうゝううううううっ！ うゝううううううっ！」
体感時間が引き延ばされる。いつまで経っても終わらない。何度

も何度も女の「まだいける！」という言葉を聞かされ、弄ばれ続ける。もういいだろっ、もう十分だろおっ！ 満足しろよおおおっ！

「まだいけるよお、がんばってえ……！」
「んうゝううううううっ！？ ふんゝううゝうううううううっ！！

？」
（まだああああああっ！？ もうゝいいゝだろおおおおっ！！

？）
「あっ……っ！ ……いけるっ！ そらっ……！」

痛いのか苦しいのか何なのか、最早どうにも分からない。頭が、ど

んどん真っ白になっていく——
びゅくんっ！ 三度目の射精が訪れたが、もう精が放たれたと言っ

ていいか怪しい。びゅぷつ、びゅつ、びゅつと断続的に、サラサラした液が撒き散らされるが、そこに最早境目が無い。

まだっ、なんかくるっ、出るっううううっ……！

「んぐっ、ふっ、ふうううっ、うっ、うううっ……っ！」

刹那、ぶしやつ、ぶしゅしゅっ！ 何度目かの痙攣の後、遂に決壊したかの如く透明な、小水に近い噴射が起こった。

なっ、あ……！

「おっほ、噴水だあ……！」

「っんううううっ、ふううううう……！」

一瞬の閃光に脳を灼かれたかの如き錯覚の中少年は白目を剥き、悲鳴は徐々に掠れて弱々しくなる。体力、魔力、術式の許容限界が近い事の表れだ。

が、「ああつとまってまってまだ枯れないでえええく！」と女声。直後、尻穴の異物が急激に熱を持ち、魔力が注ぎ込まれ始めた。

「んっ、ふっ、ふうっ……？」

「あつぶねえく全然魔力切れ起こさないから忘れかけてたよおくめんめん！」

「う……うううう……！」

引き起こされた少年の涙で滲んだ瞳が、絶望の色で染まる。

「んじゃ、もーちよい、いつてみよつかあ……！」

女のもうちよいという、少年の気が遠くなる程の時間の後。漸くレーザーの射出が止まる。空間に満ちるは立ち込める蒸気の性臭と、過酷の後の虚脱感。

「うっ……んっ、っ……！」

「ふうーできたあ……文句無し、最高傑作……！」

誇らしげなヘルゼンの声音。微かに痙攣する少年。その下腹部に赤く浮かび上がる、淫猥な紋様。

「んっ……ふうー……ふうー……っ」

彼は分かっていた。これが終わりではなくただの始まりだと。それでも束の間の解放にただ安堵してゆつくりと目蓋を閉じ、意識を手

放す他なかつた。

三話 教育 前編

何処かの屋敷の階段踊り場、窓から朝の陽射しが差し込む中、大柄な妙齢家政婦長の猛々しい声が響き渡る。

「レイッ！ なにボサツとしてんだい！」

「つぐつ……！」

女性物の給仕服を着せられた少年は新たな名で、使用人としての仕事を叩き込まれていた。

仕事は簡単な窓拭き。しかしその身振りはぎこちなく、常に腰が引けている。

震える膝は内股で、歩くどころか立っているのもやつとの様子。

彼の隣に付く、同じ給仕服姿の指導員らしき女が冷たく言い放つ。

「レイ、仕事をして下さい」

「ぎけつ……そう思うのでしたらこれを止めつ……んぐうつ!!？」

刹那、びくんっ！ くの字に曲がった少年の細い腰が跳ねる。びゅくつ、びゅぶつ、ぶちゅつ。黒のロングスカートの奥、穿かされた女性物の下着の中、彼の逸物から精が解き放たれた音がして、溢れた雄汗がぼた、ぼたと床のカーペットを打った。

「うっ、つぐ……！」

「……また、いつものかい？」

「はい。此方の指導が至らぬばかりに、申し訳ございません。出そうな時は合図しろとそういったのですが」

家政婦長は青臭さに鼻を摘み、指導員はその高い背丈から彼を見下ろす。対し「くつ、うううつ……！」と少年は泣き腫らした紅の瞳で耐え難き屈辱を訴えた。

「驚きました、まだそんな目が出るのですね。臭くて汚い猿ガキが」

「ぎっ……！」

「罰、というのも烏澁がましい。早くその汚したカーペットを清掃

しなさい」

指導員は彼の膝を折り、腕を取り、乱れた白銀の短髪を足蹴にして、汚れた床へ顔を近付けさせる。

「っ……………」

少年は首を逸らし、無言で女性の方を睨み反抗を示した。

彼女は心底落胆した様子で言う。

「……………はあ、仕方ない。仕事が出来ないのであれば懲罰房へ戻します」

パチンと彼女が一つ指を鳴らせば、何処からともなく現れた使用人に扮した女衆四名に彼は取り押さえられ、問答無用で担ぎ上げられて運ばれて行く。

無力な少年は自分にしか聴こえない程小さな声で捨て台詞を吐いた。

「ふんっ、馬鹿の一つ覚えだ……………どれだけ貴様らがボク……………我を貶めようともっ、我は我だっ、変わらないっ、変わらないぞっ……………」

その数日前、かの施術が施されてから、まだ間もない頃。

「ふうっ、んっ、んんっ……………」

叫び疲れて枯れた声音が猿轡に遮られくぐもり、辺りに静かに木霊す。

かちやかちやと手脚の鉄枷が鳴る。指の爪が壁を弾く。

目が覚めた少年は、薄暗く狭苦しい部屋の中、長時間に渡り大の字の形で壁に磔にされていた。

真っ白な空間から打って変わって、光源は微かに灯る魔石灯のみ。その灯りによって浮かび上がるのは、腕に繋がれた点滴以外、拷問器具とは似て非なる性玩具や淫猥道楽装置の影ばかり。

次はなんだ……………？ このっ、くそっ……………！

未だ身を包む衣類の感触は無く、季節は夏の筈だが、空気は微かに肌寒い。

がしかし、下腹部に刻まれた紋様だけが強烈な熱を放ち、その存在をこれでもかと主張している。

軽い首輪の様な物が付けられているが、拘束では無い。曲げられる。

視線を落とせた。お陰で、彼はその有様を視認する。

うっ……こんな、女郎に刻まれている様な……いや、もつと酷い、なんと、なんとつ……！

ハートと楔の様な曲線の模様で構成された、淫猥で醜悪な刻印。その下劣さに相反し、呼吸に合わせて明滅する赤に近いピンクの光の線は複雑かつ緻密である。

一体どれ程の数の術式を織り込まれたのか。少年の魔力は常にそこに向かって流れ、自身の肉体を蝕む作用を大量に産み続けている。

最早他者の助けが無ければ魔法の発動は絶望的。それだけでも魔術師としての彼は終わりに等しかった。

「っ、ふー……んぐっ……う、ううっ！」

が、被害はそれだけに留まらない。少年の両胸と逸物、そして尻穴、各局部を包み込む様にして、何やら見た事の無い白色の物体が密着していた。

いやっ、これ、尻の穴……奥まで、蓋されてっ……！！？

感触はさながらゴム。弾力がありそこそこに重い。外見の模様は機械的で機構に近いが、起伏が無くつるりとしている。

滑り落ちそうに見えるが、肌と癒着しているのではと疑われる程落ちる気配が無い。少年は魔術装具の類であると推測するが、その用途は計りかねた。

これっ、何なんだよっ……！ 少しは説明し——

「ふっ、うっ……」

チクチクチクリッ。身体の力を抜いた瞬間、両胸の乳頭部と、逸物の尿道奥、尻穴の最奥にそれぞれ鋭い痛みが走って気付く。

痛ッ、い……？

ゴムの感触の中には尖った針の様な物があった。

よからぬ作用があるのは明らか。あの時照射された光線の如く、単純な痛みの中にこそばゆさがあった。

ぞくりとした官能がせり上がり、逸物が張り詰めた感覚が強引に維

持される。そして更には物体の内側、肌と触れ合っている面が唐突に生物めいて動き出す。

「ふっ、んふうっ！　ん、ふううっ！」

何だこれやめろっ！　くすぐったっ、いいっ！

ビクツと不意を打つくすぐったさで身体が跳ねた。

悶える最中、突如部屋のドアが開き、一人の使用人の服装をした女が入って来る。

カツカツと部屋履にしては硬質な足音を鳴らしながら彼女は接近し、正面に立った。

少年は背の小さい部類だが、彼女の背丈はそれと比べて頭二つ分高かった。そこから高圧的な視線が見下ろし、腹に据えた低い声で事務的に発言する。

「初めまして。当面貴方の教育指導を担当させて頂く、キクチと申します。以後お見知りおきを」

肩まで真っ直ぐ伸ばされた手入れの行き届いた黒髪が会釈で揺れる事は無く、丁寧な敬語に一切敬う気持ちは込められていなかった。寧ろ軽蔑している様なニュアンスを多分に含んでいたと言つていだろう。比較的美麗な類の筈の容姿は眉間に皺が寄り、暗い藍色の三白眼はキツく吊り上がっている。

「ふうっ……ふうっ……！」と呼吸と身体の反応を抑え、敵意に敵意で返す少年。対し一層高圧的にキクチは言う。

「まず初めに言っておきますが、ええと、今の名前はレイ、でしたか？」

違う。そう少年の目が訴えた。

彼女はため息を吐く。

「はあ、其方の事情はある程度把握しています。が、其方はどうでしょう？　まだあまり理解なされていないのでは？」

「ふっ……っ？」

そしてわざとらしく右手人差し指につけた指輪を見せ付けた。

局所に密着している物と同色同質。明らかに関係している代物だ。

それが、彼女の左手の指の腹でさつと撫でられた。

瞬間、各所から連続する電気ショックめいた刺激が開始。少年は「ふんぐうううう!!？」と情け無い悲鳴を上げ激しく痙縮する。

さながら官能に特化したマツサージ機。尻穴では程よい硬さの電極棒が振動と電撃を伴いながら暴れ、両胸は痺れを伴うザラついた舌の如き物体が肌を舐り、逸物は蕩ける様な肉感のあるヒダ付きの内壁が吸い付いたり離れたりして搾り取る様に蠢く。

鋭敏化された神経の集まる肉が揺らし解され、強引にその官能が拓かれる。

これっ、あの光線の時よりも直接っ……内と外から強引に、引き出されてっ——

「ううっ！……っつゝゝゝゝゝ！」

ぶびゅっ！ ぶちゅっ、ちゅっ、ちゅぶっ、ぶっ！

あつという間に射精させられて、装具の縦の模様の隙間から白濁液が漏出し下品な音が立った。

「うっ……ふぐううっ……！」

余りに惨めで不潔な姿に、引き起こした張本人は微かに「うわ……」と嫌悪を露わにした。

尚も装具の動きは止まらない。半ば強制的な電気刺激による痙攣も、ウンウン唸りを上げて行われる物理的動作も容赦無く続く。

パタン、パタタン。溢れた液体が股下の、人の頭程の大きさの鉄バケツに滴り落ち、甲高く響いた。

「ふうっ！ っ！ んんううっ！ んんううっふ……！」

(おい！ 止めろ！ 止めろっつ……！)

腰は抜け、瞳は宙を彷徨う。身を以て装具の悪辣な役割を知った少年は、行き着く間もない苦悶に耐えかね頭を振って必死に声を絞り出した。

「止めて欲しいのですか？」

「うっ……！ うううっ！」

当たり前だろうが！ 弄びやがって！

憤慨する少年。対し、彼女は見透かしたかの如く冷めた眼差しで「そうですか」と口にして、その場を去っていく素振りを見せる。

「ん、ん？　ふう、うつつ……ん、ん？」

おい待てと言葉にしたが、猿轡に遮られたままでは伝わる筈も無く。相手は一瞥もせずそのまま部屋を出て行ってしまった。

え、ウソつ、だろ……このまま、放置されたらっ……！

「っ、つつつ……！」

——数時間後。

ドアは再び開いて、自称教育指導担当者の女、キクチが入って来た。最初とは違い彼女の手には手袋が嵌められており、点滴パックの替えが握られている。

少年の元へ歩み寄り、付け替え作業を行う。

「ふひゅー……ひゅー……っ、うぐっ、うっ……」

虫の息の少年は項垂れたまま、腰から下をただ静かに振るわせる。涙でぐしょ濡れのその表情にはもう力が無い。口元からは涎を垂れ流している。

「はあ……臭い」

「う、っ……っ……」

床に置かれた鉄バケツの中から立ち込めるのは、咽せ返る様な獣臭。

溜まった体液は、実に底から数センチ程度の量を満たしていた。

ただ臭いの割に白濁液はあまり無く、殆どが透明。少し血が混じっている。

少年の顔と股から水滴が落ちた。ぴちよん、ぴちよん。

「つつ……！」

ぶしゅっ、しゅううっ。腰が跳ね、股間から体液が漏れ出す。赤色の混じった、殆ど粘性の無い液体がバケツの液だまりを打った。

そこへキクチは問う。

「ではもう一度聞きます。止めて欲しいですか？」

今度はただ純粹に、心の底から頷きを返す他無かった。すると「よろしい」と、思いの外あっさり動作が停止される。

「っ……ふー……ふー……っ……？」

「この指輪は其方の心理状況をある程度把握出来る代物です。以降

はそれを前提に態度を改める様に」

伝えたかったのだろう。先程までの拷問は真にただの下拵えしか無かったと。

色濃い倦怠感に頭を落とす少年に、「では改めて、レイ」と覇気のある冷声が飛ぶ。徐に虚な視線を返すと、話は続いた。

「貴方にはこれから女性の使用人としての礼儀作法、心得を学びつつ、それに相応しい姿へと変わって頂きます」

返事は？ とキクチは投げ掛ける。

そう言われても、彼は歴とした男児である。何故女性の使用人なのか。そうする理由は、相応しい姿に変わるとは一体何なのか。

言葉の端々が不明で引つ掛かる点が多く、キョトンとしてしまった。

リアクションの悪い彼に対し、彼女はスツと指輪を見せる。

「っ…………ふぐっ、ふぐうっ…………」

限界を超えて痙縮を繰り返した身体はもうボロボロだ。耐えられない。少年は訳も分からず必死に頷きを返してしまった。

「よろしい、理解が進んだ様で何よりです」

キクチはゆっくりとその手を彼の頭の後ろに伸ばすと、かちやり。猿轡のロックを解除した。

「返事は、はい。それだけで良い」

「は、い…………」

四話 教育 後編

翌朝から、過酷な指導が始まった。

「ぐあゝっ!?? ふあゝ ああっ!??」

「起床時刻です。起きなさい」

モーニングコールは装具による刺激。無理矢理叩き起こされ、射精させられた。

ぶちゅっ、ぶちゅっ、ちゅっ……!

なっ、なんでっ……昨日、枯れる程搾られたのにつ……!

「ふっ、ふぐっ、うゝうう……」

「はあ、折角洗浄しても意味がありませんねこれでは」

「くっ、普通に、起こせないのかっ……うあゝっ、ぐううっ!」

尊大な態度を取ったと見られても勿論、装具は起動される。

だめだっ……迂闊に言葉を口にしちゃっ!

衰弱した少年は出来る限り従順に従って体力を温存しようとした。が、しかし、実質名代当主として渡り合って来た中で、染み付いた習慣とプライドはそう安易と取り払え無い。

「っ、悪かったっ、文句は言わなっ、あふっ、うゝううっ!」

「謝罪の言葉が違う。『申し訳ありませんでした』です。復唱しなさい」

「申し訳、ありませんっ……っつゝゝゝゝ!」

「言葉遣いからです先ずは」

問われては罰せられ、求められる答え以外の言葉を発すればまた罰せられ。キクチの言葉に咄嗟に問題無く返せるか暫しテストされ続けた。

結局途中で気を失い、再び起こされる所から始まる。

「起床時間です」

「っ……は、い……おはよう、ございます……?」

あれ、まただ……身体は重怠いのに、沢山出した筈の逸物の活力が

戻ってる……。

「……まあ、良いでしょう。もう朝ではありませんが、こればかりに時間を掛けていられませんからね」

キクチは指輪の存在を意識させながら少年の点滴と手脚の枷を外す。

「っ、ありがとうございます、ぎいいます……」

久々の手脚の自由。自然と礼が出た。

だが喜べる程余裕は無い。壁や枷に体重を預けられず、膝から崩れ落ちる。

はあっ……これで、休みとかは、

どさり。眼前の床に使用人の服と、女性用の下着一式が置かれた。

ない、か……。

「着て下さい」

「っ……」

少年は一瞬間を曇らせた後、すぐさま取り繕う。「分かりました」と淡々と答え、衣服を手にとった。

昨日の話からこれは覚悟していた。予想できていた。問題ない。今は余計な事を言わず従う、余計な事を言わず従う……。

無心でこなすタスクに落とし込む。ある種今までも名代としての責務で常に過酷な状況下にあった少年の持つ、生き残る為の適応術。それが発揮される。

これなら指輪による心理洞察も問題無し。だが一点、疲弊した彼の脳は問題を軽視し見逃していた。

……？ あ、れ……？ これ、どうやって着——

「遅い」

装具が起動された。両胸と、尻の穴だけ。

しかも強烈に身体を責め立てる感じでは無く微弱に甘く、責め立てられた。

こそばゆさに「はぐうっ!?？」と最初少年の背は跳ねるが、刺激の違いに困惑する。

「何をぼーっとしているんですか？」

「えっ、はっ……お、あの……」

「なんです？」

「ぼ、我、男……着方、分からな、っ！」

心理も思考もこんがらがった片言な言葉は、その刺激が強まる事によつて遮られた。

「ん、っ、んお、っ、くっ、うう、っ、うううう……!!?」

尻穴が振動する電極で抉り揺さぶられ、肉の無い両胸が無数の舌の様な何かに舐られる。

「色々指摘したい事はありますが、取り敢えずまず一点。分からない事があるのなら丁寧に、敬意を持って質問して下さい」

「なんでっ……これっ、ちんっ、弄られて、なはあっ!!?」

「そして質問は一度につき一つまでです……はあ、まったく、赤子の世話では無いんですよ？」

「くあ、ああああっ！ 申し訳っ、っはあ、っ！」

一瞬、チカッと閃光が走り、射精感が伴わないにも関わらず少年の頭は灼け痺れ真っ白になった。

全身を強く痙縮させて蹲り、情けない声を上げて悶える。

「嘆かわしい。適切な親の躰を受けて来なかったというのは本当の様ですね」

「こんな者が上に立っていたとは、信じ難い事です」と、小さな声で付け加えられる。

些か理不尽で、言葉の隅々まで棘がある。強い敵意と憎悪が感じられた。

「こいつ本当に何者だっ……何故ここまで目の敵にするっ……！」

「っ……申し訳、ありませんっ……！」

「言葉だけ取り繕えば良いという問題でも無い事も理解なさってはいるでしょう？ っはあ、面倒だ」

少年も苛立ちを露わにしたが、装具の動きは再び微弱に戻る。

キクチは怒りを抑える様に何度も荒く息を吐き言う。

「仕方ありません、本日は予定が有ります。一々立ち止まっつていては間に合いませんから、下着の付け方を一度だけお教えます」

「っ、分かりました。有難う、御座いますっ……うっ」

「態度には気を付ける様に」

着衣が済むと、指導は本題である使用人としての仕事の指導へ。

「この館の家政婦長との顔合わせをします。ついて来て下さい」

少年は肉体への刺激を継続されたままキクチに連れられ、足取り重く部屋の外に出る。

ここは何処か、何て聞く余裕は、今はないな……。

淫紋、淫猥装具、女装。人目を気にせずにはいられない。

服を着ている分幾らかマシだ。淫紋と装具は見えないし、黒のロングスカートが絶妙に反り勃った股間を誤魔化している。

女性使用人の服装は現状ある意味最適。そう理由を付けた。

しかし、それでも羞恥と屈辱は抑えきれない。

「はあっ……っ、くっ……」

歩きながらこっさり服の上から胸の装具に手を掛け、剥がれないか何度も試した。が、ツルツルした素材が隙間無く密着していて指が掛かりそうも無い。

散々余計な所に気を回し、結局道中の間取りを覚えるのが精一杯で、逃走を考える間も無かった。

廊下を歩き、階段を上がって、また少し廊下を歩いた先。先導者は厨房に入ると、割烹着姿の大柄で妙齢の女性の前で脚を止める。

少年は装具を気にした小さな歩幅で懸命に後から追い付き、相手を見上げた。

この人が、家政婦長……？

「こいつが件の……？ 顔色が優れないが大丈夫なのかい？」

「はい。名はレイと申します。ご迷惑をお掛けする事になりますがどうぞ宜しく願います」

「……そうかい。いいよ、常に人手は不足してんだ。猫の手でも有難い。宜しく頼むよ」

気安く寄られ、軽くトントンと背中を叩かれた。

普段であれば「使用人風情が！ 気安く触るな！」と罵っていた所だが、それは許されない。

込み上げる癩癩を抑え、彼は「っ、宜しく、お願いします……」と会釈して見せた。

「よし、じゃあ早速だけど皿洗い、お願いするね！」
「えっ、あ、はい」

何の配慮も無く、いきなり下働きの者がする仕事が割り振られる。つい反応が遅れ、態度に出してしまった。

キクチの鋭い視線が刺さり、尻穴の装具が暴れだす。

少年はその場で情けない声を上げ崩れ落ちた。

「っあっ、っ、ううっ！」

「うわっ、びっくりするねえ、何だい」

「仕置きです。気になさらず、怠惰な豚だと思って尻を叩いて下さい」

「……しつかりしな坊主！ ほら立って！」

軽々と抱え上げられ、隅の方、大量の皿が並ぶ流し台の前に立たされた。

「坊主ではなくレイとお呼び下さい。それと、必要でしょう。これを」

「おっと、そうだね」

足場台の様な物も足でサツと出されて、乗るように指示される。

どっ、どこまで侮辱する気だっ……！

ギリギリ蛇口に手が届く程度に見えるがしかし、無駄に位置が高く台の口が深い。

確かに必要だが、彼は絶妙な敗北感に苛まれる。腰が浮く程の装具の刺激も相まって、すぐに脚が出なかった。

「レイ、家政婦長の指示です。仕事を始めなさい」

「っ、申し訳、ありま、せんっ……！」

微弱な胸の装具の刺激が追加。急かされ、懸命に台の上上がった。

途中の脚を上げる動作で気付く。

ううっ、下着が濡れてる……!?? 太腿つめたくて、ぐちゅぐちゅ

するっ……！

ただ上がっただけでは許されない。刺激は続く。仕方なくへっぴり腰になりながら蛇口を捻り、水を出し、皿を洗い始めた。

「っー……ふー……くっ、う」

膝が笑う。時々力が抜けて崩れ落ちそうになる。

呼吸が整わない。視界が涙で滲む。

何故ボクがこんな事をつ……。

父はどうなったのか。白神家は取り潰されたと聞いたが、関わっていた事業はどうなった。勝利した玄霧は。

口に出せない余計な思考がぐるぐる回る。心が乱れ、集中出来ない。

こんな事してる、場合じゃ、ないのにつ……。

皿洗いなど誰にでも出来る作業で、本来魔法の使える自分がやる仕事では無い。そもそも魔道具さえ有れば、皿洗いなんて簡単に自動化出来る。何て無駄な事を。

魔術師である彼にとって、皿洗いの認識はその程度の物だった。

しかし、いぎやってみると皿は溜まっていく一方。尻穴の刺激も一向に収まる気配が無い。

「っ、は、あ……？」

ある時気付く。洗った箸の皿が返されていた事に。

流石に堪忍袋の尾が切れる。

「くそがっ……やってられっ、っっー！」

装具の刺激も全開化。手に持った皿が落ち、大きな音が辺りに響いた。

この場に数人存在する他の使用人達の目が一斉に此方へ向く。「何だい!?!」と妙齢女性の迫力のある声が遠くから近付いて来た。

背後からキクチが声を上げる。

「レイが仕事を投げ出しました。対処致しますので少々お待ちを」

「ふっ、何が対処だっ、私の邪魔をしていたではっ、な、うううっ……！」

振り返った少年は目を剥く。怒りと性感で今にも叫んでしまいそ

うだった。

台に捕まり、手で口を抑えて声を押し殺す。

「邪魔？ ああ、貴方の洗った皿をチェックして、戻していた事ですか」

「そう、だっ……はっ、んんんうっ……！」

「キッチンと洗えていない皿を戻す事の何が邪魔なのでしょう？」

「射撃感はどうどん迫って来る。反論もままならない。」

「こっ、のっっ!? ……ふうっ！ つっ！」

結局耐えかね絶頂射撃。腰を突き出し、ぶびっ！ ぶちゅっ、ちゅっ、ちゅっ！ スカートの下で下品な音が立つ。折角隠れていた突起のシルエットが浮かび上がってしまった。

片手で股間を抑え、今度は身体をくの字に折る。唇を噛み締めながら、静かに沈んでいく。

「はっ、あっ……みるなっ、見るんじやつ……んんううっ！」

スカートを伝いびちゃちゃつと、雄汁が溢れ厨房の床を打った。

集まる好奇、嫌悪、蔑みの視線。

「はあ……何て無様な」

中でも特大の悪感情をぶつける者は、少年を見下ろしそう吐き捨てた。

とそこへ「はい皆！ 手を止めない！ 仕事に戻って！」と家政婦

長。集まる視線を散らし、キクチの元へ詰め寄る。

「嫌な予感でしたけど何やってんだい!?？」

「申し訳ありません、管理不行き届きで」

「仕事をしないのなら他所でやってくれないかい？ ええ？」

「それはごもつともです。これから厳しく指導致します」

「それを他所でやれてんだよ！」

「配慮するよう善処致します。しかし此方としてもノルマが御座いますので、ここは何卒ご理解を」

「ああ？ こんな場で、一体どんなノルマだっただい？ ええ？」

「契約時にご説明した通り、詳細はお伝えし兼ねます。何卒ご容赦を」

「……………チツ、ならちやんとやりな！ その生臭い坊主、死にそんな顔してるよ！ 仕事どころじゃないだろ！」

「……………っ！」

薄れ行く少年の意識は指を弾く音と、四人駆け付ける女衆を最後に途切れた。

家政婦長とキクチ。彼女らは明らかに一枚岩では無く、そのやり取りは幾分少年に期待を持たせた。

しかし、それが救いになる事は無い。

翌日、庭の清掃。

「新入り！ ほらっ！ こうやって、腰を入れてしつかり磨くんだよ！」

「っ……………これ付けてたら、腰に力なんてっ……………っ、うっっ！」
箒を支えに内股で震える少年。その足元にハタタとシミが作られる。

「っ!?? どうした!?? ……まさかまたなのかい!??»

「その様ですね。これからは出そうな時は言わせましょうか」

また翌々日、女子トイレ清掃。

「我は男子だっ、やはり女子のトイレを掃除はっ……………んぐう、待てっ、出る！ でるでるでるっ！」

「そこに入ってすれば宜しいではありませんか」

個室に入れたがらない少年に、キクチは入れと促した。装具の強度を高めながら。

「っ、男だってっ、っ、っ……………！」

堪らず入ろうとしても最早間に合わず。少年は女子トイレで雄汁を溢した。

「変態が……………皆様申し訳ありません、すぐ懲罰房へ連れて行きますので、何卒ご容赦を」

連日に渡って清掃の仕事を理由に貶める場を用意され、その場で口答えした瞬間、辱められた。次の日も、そのまた次の日も。

家政婦長は多かれ少なかれ「仕事をしろ！」としか言わない。場所によつては新入りだからと現場に立ち会い、仕事のやり方こそ指導し

てくれるものの、肝心な所に口出しはしてくれなかった。

少年が男子である事を知っている口振りであり、物言い自体は目上の立場だ。しかしながら、少年に対する決定権は全てキクチが持っているらしく、彼女は横暴を可能な限り看過するばかり。

黙し蔑みの眼差しばかりを向ける他の使用人達は言わずもがな。誰からも救いの手は差し伸べられず。

そうして今日もまた、少年は懲罰房へ。館に来て最初に目覚めた、薄暗く冷たいあの部屋へ送られ、折檻される。

「毎度毎度……仕事もせずに使用人達の面前で粗相をするだけのクソ猿が」

スパアン！ 空を裂く鋭い打音と共に「ぐあああつ！」と悲鳴が上がった。

天井から吊るされた鎖に両手首と腰回りを繋がれ、軽く尻を突き出す形で吊り下げられている全裸の少年。

赤い紅葉が幾つか付いた子供らしい小さな丸尻を、ダメ押しと言わんばかりにひたすら鞭が打つ。

「出す前に言えと言いましたよね？」

「っ、言ってもっ、トイレ、行かせてくれなっ！ うあ、あつ！」
スパアン、スパアン、スパアン！ 乾いた音が爆ぜる、爆ぜる。

「そのザマで何故まだ口答えが出来るんでしょう？ 本当に不思議でなりませんね」

「あ、っ、ぐっ、っ……！」

少年の呻き声は徐々に小さくなり、意識を失っていく。

が、反応が薄れたと見るや否や気付として一発、平手が尻を打ち、引き戻される。

「何を寝ているんですっ？ これは指導ではなくっ、仕置きですよっ？ 休憩は、許されせんっ」

「ひっ、あ、あつ、っ！」

パチンツッ！ バチンツッ！ 言葉尻に合わせて連続で平手が打たれ、尻が真っ赤になる。

「謝罪の言葉はどうしたんですかっ？ その口は何の為に付いてい

る？」

「っ、もうしわっ……っ……っ！」

また鞭が飛ぶ。背中、太腿、無差別に。

スパアン！ スパアン！ スパアン！

やがてキクチ側も息が上がり始めるが、今日は特別機嫌が悪く、それでも続く。

尻を叩いて叩き起こし、気絶するまで打っては、また叩き起こす。打音が途切れない。

「キ、キクチ主任、そろそろ……」

いつから居たのか、どこから現れたのか。女衆の一人が背後からそう告げ、漸く鞭打ちが止まった。

「っ……くひゅー……ひゅー……」

少年の喘鳴が静かに木霊する。顔以外全身の至る所に赤いみみず腫れが浮き出ている、誰の目にも痛々しい。

熱り立った息を吐くキクチは徐々に冷静さを取り戻すと「はあ……はあ……有難う」と女衆に言い残し、鞭を手放して一度外へ。

残った女衆は少年に触れられる距離まで近付き、その手から緑の光を放って彼に浴びせた。すると各所の腫れは徐々に薄くなっていく。

「こんなこと、繰り返して……なんの、意味が、あ、っ」
謎の液体が入った注射器が刺さり、譫言の様な言葉が遮られる。

甘い声が耳元で囁く。

「今日の分の栄養剤です。それと……」
するするり。女衆の下履きが脱がれた。

彼女は光を放ち続けながら正面に周り、少年の腰を抱えると、静かに身を寄せ重ねる。

ずぶ、ずぶ……。装具の付いた逸物が、彼女の割れ目に飲み込まれた。

「う、ああ……っ！」

「ふふ……この体勢、ちょっとやり難いけど……んっ」

「っ、お前っ、誰だっ……？ 何を、やってるっ……っ……っ？」

ハッと気付き見開かれた紅の丸い瞳に、上半身に使用人服を着たま

ま行為に及ぶ女衆が映る。

「うそっ、意識が……初めて、でしょうか？　ちよつと、恥ずかしいですね……」

少年より少しだけ大きい程度の華奢な体躯に、妖艶な腰使いと声。髪は艶のある淡いクリーム色のベリーショートで、顔は認識阻害魔法の白いベールに遮られ見えない。

「ふざけるなっ、ボクはっ、こんなことっ……！」

「あっ、初めてってというのは、意識がある時について話で……レイちゃんに寝てる時には、もう、何回かっ」

「はっ？　そんなこと、聞いてなっっ……なんてしれものっ」

初体験がいつの間にもやら奪われていたという衝撃的事実に打ち震え、彼は怒りを露わにしようとした。

直後、赤く腫れた子供尻が優しく撫でられ「ひんっ！」と跳ねる。

「ええと、応急処置と、夜伽教育を担当していますっ、シスイと、申します……」

「なんだっ、それえ……」

「本当は、もつと後になってから名乗ろうと、思ってたんですけど……仕方ないですね」

更に、ペろ、くちゅっ。耳元が舐められた。

少年の背筋をゾクゾクとした痺れが駆け上がり、堪らず情けない声が漏れる。

「ふあっ、やっ、やめろおっ……！」

「まだ全然男の子みたいですけど……折角ですから、少しだけ教えちゃいますね」

「ふあっ、おまえっ、またっ、そうやっ、てえっ……っつっ！」

媚肉が装具の外側から締め付け、蠕動する。搾り取る様な動きは装具以上。暖かい体温と妙な安心感が、深い官能へと彼を誘う。

「ふっ、っ！　っ……！」

忽ち射精させられた。どくっ、どくっ、どくつと、シスイと名乗る見知らぬ女の中で逸物が脈打つ。装具の隙間から漏れ出た精が、女陰を汚していく。

だが、出した後の気怠さは皆無。寧ろ少年の身体には活力が満ち満ちていく。

「っ、もうっ……相変わらずっ、出すの早いなあ……普通の男女だったら、もう孕んでますよ」

そうかつ、起きた時の妙な回復具合は、この女のっ……！

「まだですか」

「うゝ あっ!?？」

キクチがいつの間にか戻ってきていた。少年は込み上げる羞恥と共に背筋に寒気を感じる。

「あっ、もう少しです主任、お待ちをっ……はあっ、ああっ！」

女はビクンッと背筋を逸らし、その肉脛を数回痙縮させた。

また殊更に絞り上げる様な動きをされて、少年は「んおおっ」と情けない声を上げてしまう。

パァン！ 鞭の音が床を打った。

「はいっ、すみませんっ！ んっ、退散しますっ！」

彼女は女陰をゆっくり引き抜くと、その後は風のように去っていく。再び残されたのは、キクチと少年だけの時間。

「……まだまだ元気そうですね」

使用人としての仕事の指導、もとい辱めと難癖を受け、罰として折檻。その後房中術によって回復され、時によってはまた飽きるまで折檻。

これらが館に送られてから実に約一週間程度、ほぼ絶え間なく繰り返された。

五話 定期検診

普通の人間であれば、とうに折れていたであろう。

この短期間受けた少年の心の傷は、他者では想像も付かない程深い物の筈だった。

親を失い、家を失い、魔術師としての素養も半永久的に封じられ、人としての尊厳も踏み躪られた。

ましてや当時十二の少年である。メランコリックを通り越し、心が壊れても全く不思議ではなかった。

しかし、少年にはまだ残っていた。人並み外れた知性と、これまでの成功に裏打ちされた圧倒的自信が。

十二年の人生は苦難の連続であったが、全て覆してきた。

一過性の屈辱など論ずるに値しない。何れ押し潰す。親を失った？ 家を失った？ 多少恋しいが元より頼れた覚えは無い。封じられた魔術師としての才も、最高位ではあるが真価はそこではない。

人の上に立ち、思った通りに人を動かす。最終的に己の勝利に繋げる様に。

彼はそれこそが自身の力だと信じて止まなかった。原点こそ他者にあれど、以来自己の研鑽のみによって培われた、真に独力の力だと。全てを失っても、どんなに傷付けられても。己さえ残っていれば何れ取り返せる。

どんなに心乱されても、そこに絶対の自負がある。故に折れない、壊れない。

壮絶な虐待を耐え凌ぎ、少年は少しずつ情報を集め把握に徹した。懲罰房で一人、静かになった所で、現在分かっている事を纏める。

——ここは恐らく連中の所有する別荘地の一つ、片田舎の台地に建てられた旅館規模の館だ。

庭の掃除の時や、廊下を歩いている時窓の外に見える景色で分かった。

海も川も近い、海拔の高い土地に建っている。立地条件が良く、稀

に羽振りの良さそうな客の来訪がある事から見ても明らかだ。

後は気候の傾向をある程度把握すれば、そう遠くない内に特定出来る。

場所については問題無い。問題なのは、キクチと四人の女衆。そして自身に刻まれた淫紋と装具だ。

彼女ら五人はどう見ても他所者で、使用人では無い。キクチは不明だが、女衆は相当の手練れである。魔術に長けており、身のこなしは訓練していた者のそれ。万全の状態でも、準備無しに戦えば手傷を負わされるクラスの者達だ。

若くて才気のある人間はこの国では限られている。女性ともなれば殊更に目立つであろう。

レイトが今まで集めてきた知識を以てすれば分からない筈は無かった。しかしどうにも特定が出来ない。

国が動いてる前提から考えて……表に出ていない育成機関で育てた人材だろうか。

まだ自分に利用価値があると見ている事は確かだが、どうしてそこまでするのか。少年はどうしても解せなかった。

“女性の使用人としての礼儀作法、心得を学びつつ、それに相応しい姿へと変わって頂きます”

“まだ全然男の子みたいですけど……”

ボクを女性使用人に仕立て上げてどうしたいんだ？　ここまで妙な手間を掛けて成し遂げたい何かがあるのか？

言葉通り受け取った場合、狙いは女性化によって優秀な母体を確保する事だと推測される。

女にして手籠にして子供を孕ませれば、本人の意思を無視して国に貢献させられる。外道だが裏切り者に対してやる価値は一定程度あるかもしれない。

が、そこには問題が複数ある。

性別を変える魔法は存在する。それなりの危険を伴うものだが、魔術師が被術者でない限り、外科的手術と同程度の時間と手間であつという間に成功する代物だ。

だが魔術師相手となると話は別。その身は常に魔力を通していたが故、そういった改変魔法の類による変化を受け難い。

困難であるというだけで、時間をかければ不可能では無い。ただ宿していた魔力量が増えれば増える程、必要な時間と手間が増える。

少年程の傑物の肉体ともなれば、変化はほぼ不可能に等しい。というの一般的な常識だった。

少年は顔を上げ、いつの間にか置かれていた姿見に映る自身の惨めな姿を見る。

銀の首輪をした、銀髪紅瞳の奴隷。淡い光源の下、胸と股間に白い何かを貼り付けた、貧相な身体の男児のシルエツトが闇に浮かんでいた。

股間の突起はまだ健在。寧ろ過去一その存在を主張する様な肥大した状態を維持されている。

仮に変化出来たとしても、これまた魔力量が邪魔をする。

優秀な母体ほど、優秀な父体が必要とする。過去解決手段を探した事例は存在するも、全て失敗に終わった事は現状の国の魔術師人口を見れば明らかだ。

故に釣り合いの取れる相手を探さなければならない。

少年は想像した。国内で自身に比肩しそうな人間を。

……まさかね。

不快感が走り、取り辞めた。

全て繋がるが、答えとしては無理がある。少年は憶測を切って捨て、目下の最優先事項を決定する。

キクチ達をどうにかするには、彼女らの背景の把握は勿論の事、最終的には使用人達に働きかける必要があるだろう。

ただこのザマのままでは話すら聞いて貰えない。

だから、まずは装具と淫紋、どちらかを解消する。一時的に構わない。その方法を探す。探さないと——

「……あぐっっ！ ううっ！」

また頭が真っ白になり、下半身からはしたない音が立った。

特に装具っ……！

時間設定があるのか、キクチが暫く操作しなくても勝手に軽度に苛んで来る。その為中々気が休まらない。

体感、熱っぽい気息さが増して、余裕を持って思考出来る時間が徐々に短くなっている。タイムリミットがある可能性を少年は考慮した。

これを付けられてからは排便の自由も奪われている。いや、それだけならまだ良い。自由が無いというより、感覚すら狂わされている。小便是漏出していたりするけれど、大きい方は果たして何処に行っ てしまっているのだろうか。食事を摂らせて貰えていないとはいえ、老廃物はある筈なのに。

尻穴を埋めるそれは、ただ永続的な異物感を齎し、僅かな便意と排便事に味わう様な開放感を交互に与え続けて来る。

「はー……っ……っ……」

浅く息を吐く度思い知る。

もう暫く何も食べていないのに空腹感も久しく感じていない。喉の渇き方も妙だ。決まった時間に給水させられているとはいえ、常に少し渴いている様で、それ以上に乾く事が無い。

生き物として当然の感覚や行為が失われている。気味が悪い。

付いてたら、逃げられないし……これは、何とか、しない、と……。

そしてまた朝が来た。

「起床時間です」

「っ、はい……おはようっ、ございます……」

殆ど、眠れなかった……。

片目を引くつかせ、少年は瞼を開ける。

そしておや？ と肩透かしを食らった気分になる。いつもの過激なモーニングコールが今日は無い上、予め給仕服が着せられていた。

「ふっ、どうしたんですか？ 間抜けな顔をして」

「……………」

短気で癩癩持ちの彼だが軽度な煽りはもう通じず。右から左へ聞き流す事が出来た。

キクチは小馬鹿にした表情を咳払い一つで怪訝な物へと戻し言う。
「誠に不服ながら、本日はレイ、貴方の定期検診が予定されておりま
す。その為使用人としての仕事、及び指導は休養です」

「っ……」

マジで？ やったあ！ などと少年は小粋に心中で喜んでみたが、
ちつとも心は晴れなかった。

勿論休養という言葉自体は喜ばしい。ただそれよりも前に告げら
れた定期検診という言葉が不穏過ぎた。

身構えている間に拘束具が外されていく。

「早速ですがドクターは既にお待ちです。行きましょう」

足取りは重くとも嫌々を滲ませまいと歩く少年に、キクチは二階の
客間の一つを案内した。

「ここです。お入り下さい」

ドアが開かれる。と、その向こうには即席の診療所の様な空間が。
奥の影から、顔に防毒マスクを被った白衣の女が現れる。

「ああっ！ やあくやあくお久しぶりいっ！ ってそこまで久しぶ
りでもないかあ〜」

魔術師の檻の中で散々聞かされた、胸糞悪い声だった。

ドクター、ヘルゼン……！

計ったかの如く動き出す装具に意識を持っていかれながらも、少年
は強く拳を握り見据える。

施術者が様子を見に来る。思えば当たり前の事だけれど、まさか本
当に姿を晒すとは。

「どうどう〜今どんな感じいっ？ 詳しく聞かせてえん」

彼女は若干癖のあるブロンドの長髪と袖の余った白衣を振り乱し、
少年にひしと抱き着いた。

ふにゆん。柔和な胸の肉が頭に押し付けられ、薬品と柔軟剤の香り
が鼻腔を攪る。

何たる無防備、舐められている。

しかし、現在の彼は事実その程度。握られた拳を鳩尾へ飛ばせる

程、短絡的にはなれなかった。ぐつと堪え、口を真一文字に結ぶ。

とそこへキクチ。いつもの業務的口調で「こちら、約束された物です」と、少年の背後で白衣の悪魔と何やらやり取りする。

「あら、どうもお」

「これで宜しいのでしょうか？」

「うんうん、あつてるよお」

「……では、受け渡し完了という事で。定刻にまた伺います」

「はあーい」

僅かな時間で済んだらしく、キクチはカツカツと硬い踵音を残り去っていった。

存外あつさりで、何か一言釘を刺されると思っていた少年は拍子抜けする。

「う、結構いっぱい要望入ってんなあ……」

が、直ぐに何やら呟いているヘルゼンに集中。言葉を選び、まず一つ投げ掛けた。

「つ……よく堂々と姿を現す気になったな、特級犯罪者が」

「んん？ えく？ やだなあく施術者として被術者の経過を診に来るなんて当たり前じゃないかあ」

飄々と返事された。まるで相手にされていない様だ。

フレンドリーな姿勢を曲げず、頭を撫で回したり背中をポンポンと叩いたりして来る。

一層癩に障ったが嫌な話、言葉遣いや態度ですぐに罰して来て取り付く島も無いキクチよりは遥かにマシに感じられてしまった。

「ああ、訂正しよう、犯罪者じゃないか、今は。立派に国の犬やっつんだもん」

「はいはい！ 良いから良いからー！」

「なあっ!?」

少年は軽々と抱き上げられてしまった。

抱く腕は女の細腕とは思えない程力強い。少し抵抗したが、微動だにできなかった。

あつという間に部屋の奥へと運ばれ、診察台らしき物に乗せられ

る。

「じゃあ服ぎ脱ぎしよつかあ〜ぐへ〜」

「きつ、はっ？ 誰が脱ぐかつ！」

「ええ〜？ だったら脱がしちやうよお！」

獲物を前に、ヘルゼンはワキワキと指を踊らせる。

「脱がすの得意なんだなあこれが」

「なっ……やめっ」

「いくよお〜？」

瞬間、彼女の背から先端の尖った機構の腕の様な物が八本出現。目にも止まらぬ速さで駆動し、給仕服を「そおい！」の掛け声一つで引き裂いた。

「……ふえっ？」

「あつはあくかあんわええ〜！ 撮影撮影！」

少年の霰もない姿へ向け、連続してフラッシュが焚かれる。

「女の子下着ももう着けてんだあ〜！ やべえ〜！」

「つ〜〜！」

「あつ、恥じらい顔っ！ 美味しいっ！ もつとくれえ！」

「きつ、キツツシヨっ！ しねっ！ 今すぐしね！」

「そんなこと言ってえ〜！ そう言う事言う子は下着も脱ぎ脱ぎい〜！」

「うっ、うあああっ！」

そ、そういう事かよ……。

想定はしていたものの、それでも足りてなかった。相手はただ姿を隠してコソコソやって来ただけの悪党では無い。人を、生命を長年弄んできた怪物だ。

見た目女の皮を被っているだけの、理解の及ばぬ人外。その片鱗を前にして、少年は微かに薄寒くなった。

「ふへへへ……女の子服、全部剥けちやったねえ。男の子に戻れたねえ」

「死ね、マジで死ね」

身に纏っていた物は破れ散った物含め全て片付けられてしまった。

残るは、胸、股間、尻の装具と、頭のカチューシャ、首元の首輪のみ。

機構腕は装具の三点を指し、ヘルゼンは言う。

「んでんでどう？ 気に入ってくれた？ 『ススム君』は？」

「……そんな名前なんだな、これ」

「そうだよお、君のカラダの変化を促進する為に作っちゃったんだぜい？」

案の定、これも彼女の作った物だった。

いやしかし、変化を促進、って事は。

「なんだ、刻印だけじゃ、我のカラダは変え切れないのか？ それともお、っ……！」

「おお、ちゃんと動いてる動いてるう。良い感じだねえ」

「はっ、話を聞きたいならっ、動かすんじやっ、ね、えっ……！」
動かしたのか、それとも時間による自動の作動か。

きっかけを作ろうとした挑発的な言葉は腹部が引き攣れて最後まで出なかった。

話の主導権を掴みたいのに、これでは難しい。

「しかしその目の下のクマ、あんまり眠れてないみたいだねえ」

「当たり前だろうがっ……！ こんなもん、付けてたらあっ！」

首輪に機械腕の先端が刺さった。それで何かが分かったのか、ヘルゼンは眉を顰める。

「衰弱も見て取れる。どんだけ扱かれても大丈夫な様にしてる筈なんだけどなあ〜」

何処までも自分勝手。会話にならない。

キクチよりマシという評価も少年の中で訂正され始める。

「うーん……まあその辺は後々調整しようか」

彼女はそう口にする、「んじや早速、拝見させていただきまあ〜す」と機構腕を使って唐突に両胸の装具を取り外し始めた。

腕の先、尖った先端が、何やら模様の隙間を突く。するとぶしゅつ、と微かに気の抜ける音がして、装具の動きは止まり淵の一部が浮いた。

先端は枝分かれして、器用にそこを摘み、ペリっ、ペリペリペリっ！

「んっいいいっっ！」

少し剥がされただけで瘡蓋を剥がす様な痛みが走った。

声を上げた少年に「あつ、痛かった？ ごめえん」とドクターは平謝り。ベイツ！ と一気に剥がす。

「うあっっ！っ、っ、っ……！」

一瞬の刺痛の後、ひりりとした灼熱感が残った。

被せ物が取れた開放感、だけでは無い。視線を落として見ると、少年は愕然する。

乳頭と乳輪が、元よりも二回りは赤々と腫れ上がっていた。

しかも紫に近い桃色の光を放つハート型の刻印のおまけ付き。

「ああっ……あああっ……！」

自身の勝手知ったる肉体が、既に一部原型を留めて居ない。

堪らず声を荒げた。

「っ、こんな所にまでっ！」

「んふっいいいでしょ素敵でしょおっく？」

「そう思うのはお前だけっ……だあっ……っ？」

ひりひりひりひり。装具の外れた箇所が久々の空気に晒される感触に苛まれる。下腹部が急に引き攣れて、身体を丸めてしまった。

「他のところも外していこうねえっ」

「っ、ちよつと、まっ」

咄嗟に股間を隠した両手と閉じた太腿が腕達によって広げられ、押さえ付けられる。

胸の時と同様の手順で尻、股間の装具が同時に浮かされ、剥がされていく。

ペリペリペリペリペリっ！

「うぐうっ、いっっ、あ、ううううっ！」

「あははっ、いい反応するう」

「や、えっ、っあ、っ！ あ、ああっ！」

更に全体を剥がされたら、「よおし、抜くよお」と尻穴を埋めている

棒が引き抜かれる。ぬろおおおっ……！

「はあっはあっあゝっ、んおゝっ……ふっ、うゝううっ……！」
少年の思った以上にそれは太く、長く、苦しかった。瞳は白黒し、舌を放り出した口から嗚咽混じりの悲鳴が上がる。

そして間も無く、ぬぽんっ。全て引き抜かれ、「っ、あゝあっ！」と悲鳴がひっくり返ると、挿入っていたモノの全容が露わになった。

「おっほおゝでたであゝ！ すんすん……くっはあゝ！」
ヘルゼンは白色の棒を目の前で嗅いで見せた後、「嗅いでみい？ トブゼえ？」と態々少年の胸板に置く。

童顔が嫌悪で歪む。みじろぎし、即座に身体の横に転がした。

「はあー……はああー……！」

「むう、ノリ悪いなあ。えいつ！」

ちゅぽんっ。逸物を包んでいた装具が一気に外される。

直後、振られたシャンパンの栓が抜かれたかの如く一気にせり上がり、溢れてしまった。

どくっ！ どぶっ、どぶっ、ぶっ……。

「っ……ふっ、っ……！」

「うおっ、よく出るねえ！」

虐め抜かれて真っ赤な肉筭。脈打ち筭先から垂れる白濁液。そこに浮かび上がる、胸にある物と同じ類の刻印。

下劣なコントラストがこの上ない恥辱のスパイスとなる。耐えかね、少年の目尻からこめかみに涙が伝う。「ぜってえっ、ゆるさねえっ……！」と睨むが、すぐさま瞳はとろんとして瞼が降りてしまった。

「おち○ちんはまだまだ元気だねえ、もう少し効果強めてもいいかなあ？」

「ただじゃ、すまにやつ……すまないぞっ」

胸同様、尻と逸物も異様な程ヒリつき、ヒクつく。その度ずんと頭が重くなる。呂律が回らない。

「っはー……なんれっ、取った後のが、キツいんらよおっ……！」

「そりゃ、今のところ刻んだ術式の制御も兼ねてるからねえ。首輪だけとなると結構辛いでしょう。」

「はあっ……う？」

外せばマシになると、思ってたのにいつ……！

少年の真上、機械腕はその下半身がすっぽり入る大きさの四角い枠を作り、彼に向けて数回光を放つ。

直後、枠内にホログラムスクリーンが現れ、少年の体内を透写した物が映し出された。

「……ふんふん、中の方は思ったより順調だねえ」

ヘルゼンからは見えるが、少年からは見えない。

順調という言葉に不安を抱く。「何が、順調なん、っだよ」と声を尋ねた。

が、白衣は翻り、ぶつぶつ独り言を言いながら何処かへ歩いて行ってしまおう。

「おいっ、まてっ……！」

取り残され、手脚が自由になった。

今なら逃げられる。そう思えたらどれだけ良かったか。

「っはあー……っ……ふうっ、っ……」

心臓は早鐘を打ち、荒い呼吸と共に発汗した全身が震える。

身体の疼きが酷かった。蓋を失った箇所が、何か物足りない感覚に苛まれ切なさを訴える。

埋め合わせる為に殆ど無意識にゆっくりと、右腕は胸を抱き、左掌は股間を包んだ。

「はっ、ああっ……っっっ！」

じんっ！ 火傷したみたいに熱い肌の搔痒が満たされ、脳髄を侵す快感が滲んだ。

一度触れたら最後。目覚めた官能が暴れ出す。

最早手に負えない。少年の瞳が助けを求めて回る。

まてっ、まてまてまてこれどうするっ、っ！

「っ、ふうっ！ んっ、くうっ……！」

尻の穴まで疼いて、埋め合わせを要求して来る。

股間に持って行って行った手を、尻穴へ向かわせた。中指がつぶんと挿入る。

「つっ~~~~っ~~~~！」

背筋が反り返り、視界で星が散った。

逸物がより一層刺激を求めて脈打ち、張り上がる。

胸を抱えていた右腕を下げ、掌は逸物を掴んだ。

びくっびくんっ！ 浅ましく腰が跳ねる。

「あゝっ、あぁっ！」

寝返りを打って身体を丸めた。強く太腿を締め、下唇を甘噛みし堪える。

右手に返る感触が知っている自身の小さな逸物とまるで違う。滑っていて硬い。太い。熱い。

しかし自分の物じゃないみたいなのに、肉竿側にも感覚がある。張り詰めていて、皮が剥けている。痛い。剥き出しの先端がジリジリ灼ける。なのに切ない。

あくまで自分に生えている物が変わり果てた姿なのだ教えられない。

何だよこれっ……どうすればいいんだよおっ……！！

そういう行為があると知っていても、少年に自慰の経験は無かった。

具体的な方法を知る事は憚られ、学ぶ事を避けていた。故にそれに近い事をしようとしていると理解はしても、その先のイメージが湧かなかった。

そうこうしているうち、空いた両胸がじんじん疼きだす。両腕を必死に締めてカバーしようとする。

手が……手がたらないっ……！！ 手があっ……！！

「はぁーっ……ふうーっ……ふー……！！」

しかし、自慰よりも先に学ばされていた。本格的官能を。行為を。刺激を。

否が応にも記憶は反芻され、手指は動作を再現する。

逸物を上下に扱き、尻穴を穿ってしまう。

「ふっ、ふっ、うゝっ……んはっ、うっ！」

待ったっ……だめだっ、こんなっ、自分でなんてえっ！

装具だけを外しても何の解決にもならない。寧ろ状況が悪化する。そう理解させられた少年は、惨めにも再び装具を付ける様ヘルゼンに懇願する他無かった。

想像を遥かに越える、自身の肉体の、悲惨な実状の数々。

検診を境に、それらは次々明らかになっていく。

六話 真打

また少し日が経った頃。

「んくっ……んんっ……」

当日は女湯の床掃除当番。

少年はデツキブラシで床を擦り上げる。

「はあっ……んんっ、んんっ……」

「チンタラやってたら終わんないよ！ ほら！ 頑張りな！」

「は、いっ……」

家政婦長の櫛が飛ぶ。ただはいと返事はすれど、身体の支えにしなからで無ければ立っていられず。大きく動かせない故、速度が上がる事は無い。

わかっているくせにつ……くうっ。

「ふっ、うううっ……！」

ぽたたっ、ぽたたたっ。特に射精感を伴った訳でも無いのに、透明な粘液は装具から漏れ出し、更には給仕服のスカートの下、吸い切れなくなったぐちよぐちよのオムツからも溢れて床を汚した。

「レイ、また、汚してますよ」

「っ、申し訳、ありません……」

装具に何か機能が追加されたのか、それとも純粹に連日過剰な刺激が続く事によって破綻したのか。

検診の目を境に、逸物は歯止めを失った。

所謂我慢汁^{カウパー}。その分泌が止まらなくなってしまったのだ。

先日の移動中に判明した事だ。暫くすれば収まるだろうというキクチの希望的観測は外れた。折檻された後悪化し、扱い切れなくなつた。

「漏らして当たり前。そんな使用人に指導するつもりは毛頭ありませんでしたから、着用させない方針でしたが——」

応急処置、曰く苦肉の策としてオムツの着用を義務化された。

酷い屈辱だったが、漏らすよりもマシと受け入れた少年。これでも問題ない。さあ安心して働けとなったのも束の間。

逸物の装具の隙間から溢れる分泌液は、たった数時間の清掃業務だけでオムツのキャパシティを超えた。

掃除中の書架の間で、裏庭のタイルの上で。連日醜態を晒した。

お陰で流石に許しが出なくなったのか、以来汚しても然程問題無いであろう場所での当番しか回らなくなった。

予定外の事態らしく、キクチは業を煮やす。

「はあ……キリがありませんねこれでは」

「あの闇医者め、要望書に目を通して無いのか……？」とボヤキが聴こえた。

彼女も辟易としているらしく、もうお漏らし自体を咎めない。

「仕方ない。ミマタ、シスイ」

「はい、何でしょう」

「レイを懲罰房に戻しておいて下さい。仕置きは任せます。私はこれからドクターの元に向かいますので」

「承知しました」

少年は二人の女衆に運ばれ、その日も懲罰房に戻された。

そしてキクチ不在の中、片割れが名乗りを上げる。

「んっふっ、よくし。任されましたあ、副主任、調教担当のミマタでえっす」

その蒼白で細長い右手の人差し指で、白い指輪が光る。

キクチよりは低く、シスイよりは高い背丈の、やたら細い身を蛇の様にくねらせる女衆の一人。他女衆とは違い、認識障害が目から上だけという特徴を持つ彼女が此度の担当者だった。

彼女はシスイと協力して、用意された台の上、三つの窪みのある縦板のそれぞれに少年の首と両手首を押しさえ付けて乗せると、同じ形状の窪みがある板で挟み込む。ガチャン。

「っ………いった……」

「あく手荒にしてごめんよお。ちよつと挟んじやったかなあ？」

錠を掛けると共に、彼女は印象に違わない長い舌をペロリ。恍惚に舐めずった。

そして背後に周り、少年の給仕服のスカートを脱がし、オムツを剥ぎ取る。

ねちよお……大量の粘液が糸を引いて落ち、青臭い性臭がむあつと解放された。

実行犯から「うわあすつごお」という感嘆が漏れる。

「役得だなあ〜まさかこおんなに早く出番が回って来るなんてねえ」

「……そう、かよ」

「そうだよお〜少なくともその『ススム君』？だったかが外れるまではアタシ実質キクチの補佐だからさあ、暇で暇で、正直我慢の限界だったんだよね〜」

「ミマタさん、あまり余計な事は」

「ああーんごめんごめんごお。やりましょやりましょ〜！」

前屈体勢で突き出された子供尻が開始の合図としてペチン！と叩かれ、甲高い音が鳴った。

「つくうつ……」

「しかしほんといいケツしてるよねえ。ずっと叩きたくなるキクチの気持ち分かるわあ」

ペチンツ！ ペチンツ！ 特に意味も無く暫し叩かれ続ける。

尻は叩かれる度ふるんつと震えて、打たれた箇所には赤い紅葉を残していく。

が、ある時何の前触れも無く止まった。

「でもさ少年、叩かれてばっかは飽きてきたよね？」

「……………」

「痛いのも慣れて来てるっしょお？ ねえねえ」

慣れて来ているかと問われれば、その通り。痛みは事ここに至った少年にとっては、正気を保つのに丁度良かった。

何せ、一部の物を除いて感覚が加速度的に鈍麻し始めている。気付けが無ければボーツとしてしまって仕方が無かったのだ。

——ヘルゼンとキクチの齟齬、女衆とキクチにも温度差が……熱っぽいのは風邪の影響も……何か腹も痛い……。

故に逸物や、その他身体の具合の異変。キクチと女衆らのパワーバランスについて等々。今ならばと思考に耽っていて、大半の言葉を聞き流していた。

「訊いてるじゃんさあ！」

刹那、もみゆんっ！ 小さな桃尻は叩かれるでもなく揉みしだかれた。

鋭いこそばゆさに「ふぎゆっ!!？」と少年は素っ頓狂な声で跳ね、引き戻される。

「おおっ、良い反応〜」

もみゆっ、もみゆっ！ 強弱緩急織り交ぜられ、丹念に捏ねられる。尻穴の装具の動きにも合わせて、もみもみ、こねこね。

装具に包まれた竿先が揺れ、止めどなく滴り落ちる粘液が振り乱される。揉まれる度、まるで絞り出されたかの如く量も増す。

預かり知らぬ刺激に、彼は情けない反応を我慢出来ない。

「くっ、はっ、っ、ふあっ!!？」

「ほらどお〜？ なんか言つてよお、言つてみて？」

「んっ、申し訳っ、あひまつ、ありませんっ……！」

「いやそんな定型句じゃなくてさあ〜？ お話しようつて言つてん、のっ！」

パチン！ 改めて尻が張られた。瞬間火の出る様な電撃が背筋を駆け抜けて、脳裏で火花が散った。

「んはっ……!!？ ああっ……？」

「そうだ質問してよ質問。聞きたい事いっぱいあるっしょ？ ねえねえ、してよ」

「はあっ……っ……！」

「正直今だって何の懲罰で叩かれてるの〜とか訊きたいっしょ？ 良いんだよ訊いて。どんなのでも問題無くし、暫くキクチいないから」

「ミマタさん……！」

シスイの静止が入るが、「いいっしょちよつとくらいく」と彼女は譲らない。

しつこい。手つきも、口調も。ヘルゼンの様にへばり付く感じとはまた異なり、湿度、粘度共に高くネチネチしている。

少年は痺れを切らした。

「つ……興味無いっ……勝手に、やつとけつ……」

「あつ、やつと返事してくれたあ！」

嬉しいなあと喜ぶ彼女はよしよしと尻を撫で回す。

腫れてひりつく肌は敏感だ。叩かれるよりもある意味芯に効かされた。

が、そこに懲罰的意図は見えない。言葉遣いで罰する気は無い様だ。

「つくつ……ううつ……」

「でも興味ないかあ、そっかあ残念だなあ。アタシ色々知ってんだけどなあ」

「ふんっ……言うだけなら易いっ」

「三年前、伏魔財閥、都市開発事業、役員裏切り、四月九日、灰原病院」

「っ！」

「こいつ、何でそれを……!?」

「アハっつ、ここまで言えば分かるよね？」

「その情報、国に売ったのか……？」

「いやーやだなあ売ってないよお、売ったところで信じて貰えるものじゃないし」

「だとしたら、脅しか……？」

少年の彼女に対する警戒度が跳ね上がり、空気が一気に張り詰めた。

「んーやめてえー、これはホントにアタシの少年に関する知識の証明の為だけに上げただけだから」

「もう少し、マシな嘘をつけ……！」

「ほんとだってばーキクチと違って少年の事嫌いじゃないし、寧ろ

ファンなんだから。ホントにほんと、害する意図はな〜し」

「だったら、我が食いつく様な餌を、用意すれば済む話つ……それをいきなり劇物で歓待とは……明け透けが過ぎて、ヘドが出る。物知りなら尻から手を離して、もう少しつ、頭を使ったらどうなんだっ？」少年の嫌味を歯牙にかけず、「じゃあじゃあ〜」とミマタ。手元の尻を揉み擦りしながら、提案の方向性を変える。

「普通の食事とか久々にしたくない？ ここに来てから注射や点滴で直に栄養ぶち込まれてばっかで、食事まだ一度もしてないっしょお？」

「つ、この流れで、言葉通りの餌で釣るとは……アホなのか？」

「でも欲しいっしょ流石に〜？ 今日はまだ栄養注射もしてないし〜？」

彼女は手元に中身の入った注射器を取り出し振って見せた。「ミマタさん貴方……！」とシスイが騒然とする。

少年は俄かに顔を顰めた。

欲しくないと言えば嘘になる。ここ最近の口寂しさは、料理の味恋しきにも近い。

ミマタは返事を待たなかった。一時何処かに歩いて行ったかと思えば、直ぐに戻って来て正面に回る。

「そう思つて……持つて来ちゃいました〜！」

突然、彼の目の前に馳走を隠す類の銀の蓋が出された。

「じゃ〜ん」の一言でそれが外される。中身は、この館の食堂で作られた賄いだろうか。牛角煮とネギの混ぜられたまんまだった。

良い香りが広がり、ダイレクトに鼻腔を刺激する。久しぶりにク〜つと腹が鳴り、少年は複数の点で違和感を覚え訝しんだ。

「それ何処から持つてきたんですか!?？」

「シスイちゃんステイ〜、お堅いなあもう。ただ単に今日のアタシの分の賄い持つてきただけだよ〜」

「……何のつもりだ」

「何のつもりってやだなあ〜、交渉材料の一つだよ、さっき言われた通りのさ」

不審の間が空いた。ミマタはくだを巻く。

「だからなんでそう警戒するのさ、チュートリアルだよ、ちゅーとりあるう。あやしくないよお」

話のペースに巻き込まれるのは不服であった。

しかし、そうも言ってもらえない。空腹と熱感で再び思考が浅くなり始めた。

「ふっ、しない方がおかしいだろ……当然の事ながら、何か代わりに差し出せってんだらうからな……」

「ん、流石元名代様！ 話が早い！」とミマタ。両の手を打ち、瞳を怪しく輝かせる。

「で、何を出せってんだよ……今の我には、何の持ち合わせも」

「あるよ、あるある。尊厳が、まだある」

案の定、碌でも無かった。

「それを、どう差し出せと……？」

「簡単だよお、少年が自分で、自分を貶める手段を提案するのさ」
彼女の長い舌がチロチロと回る。

「アタシ一応調教担当だから権限があつて、その淫紋にちよつとした条件を付与したり出来んのよ。ホントは少年のその『ススム君』？ だかが外れてからやろうと思つてた遊びなんだけどね——」

少年の頭にはもう余計な情報を入れる余裕が無かった。
故に要約すると以下の通り。

・彼女は己が口にする事、ないし行動する事でどの様な罰が下るか、術式に条件を付与可能である。勿論条件設定の無い永続効果や、いつまで持続するかも設定可。一時の行動を対価とする場合の制約にする事も出来る。

・それを自身で決める事で、代わりに彼女はそれに見合った情報や、求める物事を与える。

・釣り合っているかどうかは彼女の心証と、指輪によって見透かされる少年の心理が基準。余程で無い限り最初の提案から擦り合わせが行われる。

・求める物事に見合わぬ条件を告げる事なかれ。相応の罰が下る。
「ずっと見てただけどキクチホント下手だよねえ。自分の恨み辛みをぶつけるばっかできく、調教とは何たるかをまるで理解してないんだもくん。これじゃいつまで掛かるか分からないじゃくん？だからやきもきしちやつてさくあ」

「キクチへの愚痴は、もういい……話は、分かったから……」
酷い話だ。訊いているだけで消耗させられてしまった。

喉が乾く。腹が鳴る。身体は疼く。

何か頼み事をしなければいけない、悪条件を飲まざるを得ない状況を、強引に生み出されている。

「ほんと？　じゃあ早速」

「待てっ」

そこで一つ待ったをかけ、彼は妥協する条件を再提示した。

「別に、食事はいい……まず、注射をくれ……」

「えく？　折角用意したのにく？」

そして主導権を取り戻さんと突き付ける。

「とぼけるなっ……コソコソとっ……飢餓を引き起こす魔法を、使っただろっ……！」

尻を揉んだり叩いたりする間、彼女は仕込んでいた。少年を、自身の土俵に持ち込む為。

「んええく？　少年程の肉体にかけられる様な大魔法打つたらもつとバレバレだと思うんですけどおく？」

「体内の栄養素だけを奪う分には、耐性はそう問題無いだろうがっ……！」

魔力順応に於ける魔術師の耐性はそんな万能な物では無い。細胞等が変性しないだけで、その存続に必要な物質に働きかける事は容易である。例として、肉体の水分だけを奪う魔法が戦場で猛威を振るつたのはあまりに有名な話だ。

接触出来る程の超至近距離ならば、精密な操作は可能である。高度な技術であり一介の魔術師には到底不可能だが、そうでない事は明らか。故に少年は確信した上で指摘した。

「少しずつなら、バレないでも思ったかつ……?」

「ふくん、証拠は〜?」

「っ、魔力使用の痕跡が残ってるのは、そのシスイとかいう女が調べれば、分かる事だ……」

「そんなの〜、シスイちゃんが少年の味方するかなあ〜?」

シスイとミマタ、両者の視線がぶつかると。認識障害のベールに隠されていても、それは誰の目にも明らか、蛇に睨まれた蛙だ。シスイは怯えすくんで何も言わなかった。

が、しかし、彼女はただの蛙じゃない。その目には決してただ飲み込まれてやるつもりも無いという意味も感じられた。

彼女は面倒になったか、頭を振って半ば観念する。

「……はー分かったよお。でも、ホントにいいの〜? この注射器の中身知ったら」

「しつこいつ……いいからとつとと進めてくれっ……!」

「む、じゃあいいよお。言ってみて」

これなら、比較的安い対価で済む筈だ。

少年は脳内で勘定を済ませた後、一つ呼吸を整えて言った。

「お前に、キクチの時同様、しかたなく敬語で話す様にしてやるっ……破った場合の、罰則は」

パリン。即座に注射器が床に叩きつけられ割れた。

「は? おい何やってっ……!」と少年が声を荒げようとしたが、その前にミマタは目の前の膳を持ち去り、彼の背後に回った。

カタン。

「何でっ」

「言っただしよ〜? 相応の罰が下るって」

「でも、それは」

「歳上の人間、それも女性に対して敬語で話す事は当たり前前の事でしよおお〜〜?」

パアンツ! 有無を言わず、力強く尻が張られた。

「そんなのっ」と口答えしようとする少年の言葉も、続け様に乱れ飛ぶ強烈なスパンキングに遮られる。

「口答えするんじやありません！ 下々の私にそんなのあり得ない？ そう思うなら情操教育に失敗していきま〜す！ もう一度ママのお胎の中からやり直してくださ〜い！」

「ひっ、うっ、あ、あっ」

パンパンパチベチパパパパアン！ 最早彼の尻は彼女の説教を刻む為のドラムだ。

「当たり前前事を天秤に乗せても質量はぜ〜口！ 論外論外論〜外！ 神妙に罰を受け〜い！」

「っ……！ それを言ったらっ、本来はっ、既に打たれてた筈の注射だろがあ、っ………！！？」

「はいとぼけなくい！ 知ってるっしよおお〜？ タダの施しなんてなあ〜い！」

「はあっ、っ………」

痛い分には問題無い。そう少年が反応を閉ざした瞬間、「そ〜も〜そ〜もお〜！」と動きは揉み擦りに切り替わる。

「んぎゅっ!?？ つうっ!?？」

「君はもう立場の弱い人間で〜す！ 誰かの庇護無くしては生きていけない雑魚で〜す！」

「あ、っ、ぐうっ………！」

「生きていくには敬意は必須ッ………！ 庇護される為敬うッ………！ 然もなくば死あるのみッ………！」

もぎゅっすりゅっもぎゅっ。痛みではなく、快感によつて神経を嬲る本気の手捌きだ。

叩かれていた時はやけに鈍かった衝撃が、恐ろしい程ダイレクトに伝わって来る。ぞくんっ、と頭の天辺からつま先まで響いて、脚がぴんと伸び腰が浮く。

「や、えっ………ふっ、うっ………！」

息が吐けず少年の顔はみるみるうちに赤くなる。涙と鼻水も溢れ、額を脂汗が伝う。

尚も止まらない。すりっ、すりゅっ、もぎゅっ！

揉み潰され、その度腹の奥から迫り上がった物が竿先から滾れ落ち

「ハハア〜本来ならダメだけどお〜今回は初めてだし、お漏らしにも免じて特別大サービスト。どうぞお食べ〜」

「っ……い！」

賄い料理は、器の半分程が彼自身の体液で満たされ、汚されていた。青臭さとアンモニアの臭いが食物と混じり合った異臭が鼻腔を刺す。

忽ち胃液が上がり、喉奥を越える。

「うゝぶっ……！ おえゝ えええっ……！」

「ああっ、何で吐くのさ〜？ 自分のじゃあないか〜」

「っ……っ……！」

「少年の身体は今水分も、身体の維持に必要な栄養も枯渇してる。過酷な環境下でこの先サヴァイヴしなきゃならないであろう君に配慮したんだけどなあ〜」

「ふざっ……っ、ぐうっ……い！」

飢餓は深刻なまでに進行していた。

胃が空く。何かを口に入れねば、飲み込まなければ。なんでもいい何か食べたい食べなきゃ食わせる食うクウクウ——っ、クソオオオッ！

強烈な衝動に自我が吞まれかける。

「そうそう、お近づきの印に耳寄りな情報を一つ。キクチはそれに文句言いに行っただけど、ヘルゼン氏曰く『量が多くてエネルギー変換しきれないから排出せざるを得ない』体液だから」

「ふうっ、ううゝっ」

「だから〜、もしかしたら飲めば元気が湧くかも〜？」

「っっ、あゝああっ……あああゝっ！」

少年は食した。否、苦味酸味エグ味、全ての入り混じった流動物を、ただ飲み込んで胃に入れた。

入れる度尊厳と引き換えに少しずつ、渴きが癒されていく。

「おおゝ おおほおゝ、いい食べっぶりい〜」

ミマタはそれをただ恍惚とした表情で眺め舌舐めずり。

後方、いつからか押し黙っているシスイに近付き、出来る限り彼女

だけに聴こえる様な小さな声で言う。

「少年、気付いてるかなあ〜？ 姿見に映る自分の顔お〜」

「っ、趣味が悪過ぎますっ……………」

「ええ〜？ キクチよりよっぽどいいと思うんだけどなあ〜？ これぞ教育的指導つてもんでしょお〜？」

「我々の任務は、彼の身体に継続的負荷を与える事…………破壊ではありませんが、心身の崩壊を招き兼ねない程の心理的負荷は、推奨出来ませんっ……………」

薄暗い部屋に少年の嗚咽が木霊する中、不吉に灯りが揺れた。

「…………フツ、壊してあげるのも、良心的な気がするけどねえ〜？」

七話 悪化

とある施設のたとある一室。機構仕かけの白い自動扉が慌ただしく開いて、息を切らした長身の女性が硬い靴音を鳴らし駆け込む。

「失礼しまつ……？」

給仕服姿の彼女の少し強めの語気は、途中で減衰し消え入った。

理由は室内に入つてすぐ飛び込んだ、狭めの一室を埋め尽くさんばかりに広い、膨やかな男の背中。

高級感と独特の圧のある大きな黒の羽織を翻し、その巨漢は物腰柔らかに言う。

「む、何ですかな使用人がこんな所……ああ、なんだ君ですか」

その奥で「ややつ、キクチ主任？」と緊張感の無い女声が上がる一方、彼の尊顔が自分に向くや否や、彼女は膝を付き頭を下げた。

「つ、お取り込み中失礼致しましたっ！」

「ほほつ、問題有りませんぞ。丁度用事は済んだ所で、もう帰る所ですからな」

「左様、ですか……」

「して、何かトラブルですか？」

「ついえ、ここへはただ、ドクターへの意見具申に参っただけで……貴方様のお手を煩わせる様な物ではありません」

「そうですねかそうですね。まあ、既にミズチの私兵から問題無いと報告が入ってます。先程ドクターにも初見を伺いましたが、いずれも順調そのもの。心配はしてませんな」

彼は手を後ろ手に組んだまま、ほっほっほとツヤのいい丸い頬と余った顎肉を揺らす。

「とはいえ何か困った事があれば、遠慮なく報告するんですぞ」

「はっ……」

「では引き続き、宜しく頼みますな」

のっしのっし。重い足音が横を通り過ぎ去っていく。

自動扉が開閉してその音が失せると、場の張り詰めた空気も解けた。

彼女は静かに溜息を吐く。

「はあっ……なんなのほんと」

「あやあ、大変そうだねえ中間管理職は」

そんな事関係無く先程から気の抜けたスタイルのまま、椅子の上で脚をぶらぶら揺らしている白衣の女。

対し彼女は小さく「そうだったならまだマシだったの」と呟き、すつくと立ち上がって膝を払うと、怒気を隠さずその防毒マスクで隠された面に詰め寄り、響めつ面で咳払いして仕切り直す。

「ドクターヘルゼン。不躰で申し訳無いのですが」

「あーあーアレでしょ、要望書の」

「分かっているなら、何故っ……!」

「ちよちよつ、ミマタちゃんに話した筈なんだけどお？ 伝わってない？」

白衣の女は後退し続け、デスクに椅子の背をガンとぶつけた。両手を上げ、余った袖を降参の旗印の如くひらひらと振る。

彼女の整った顔が響められ、「っ、よりよってっ……!」と黒髪が俄かに掻き乱された。

「返答は私に直接、お願いします!」

「ううう分かった分かったよお! で? 排泄液の漏出の問題でしよ?」

「はあ……そうです。全く改善されない所か悪化しています。多少なら戒めにも使えましたが、アレではノルマの妨げになりますので、早急な改善方法の提示を求めます」

と、そこで「ん? 悪化した?」と防毒マスクは首を傾げる。

「特に排泄機構は弄って無いから、悪化したとすれば……」

「その弄ってない理由をお伝え願えませんか?」

「ふむふむ、次の検診が楽しみですなあ」

「ドクター……?」

「ああっ話しますっ、話しますからあ——」

数日後。昼下がり、館の外、庭木の側で。

「はあっ……っ……はあ……」

少年は言い渡された範囲の草刈りを行なっていた。

中腰で草を持ち、根本に草刈り鎌の刃を当て、碌に力の入らぬ腕で懸命に引き千切る。

ある程度切れたら、それを運び出す。よたよた、よたよた。脚を肩幅程に開いたままのヘンテコな歩き方で往復し、また草を刈る。

比較的涼しい気候の土地とはいえ、夏場に入り強さを増した陽光に照らされながら朝からほぼ半日、それを繰り返していた。

「はあ、っ……ああっ……」

揺れる紅の瞳は滲んで何も映さない。苦しげに口を開き、肩で呼吸をして、微かに苦悶に喘ぐ。

——あたまが、おもい。おとが、とおい……

全身から大量に発汗し、意識は朦朧としている。外気の暑さによるものと思いきや、体内の異変によるものが殆ど。

ふぐり、またなんか、へん……。

睾丸は装具によって常に手厚く包み込まれ、保護されている。その上で陰茎にばかり刺激が行っていたのもあって、最近までは恐ろしい程に感覚が無く、意識を欠いていた。

しかし、ここの所はどうにも居所がおかしく、急に気にする機会が増えた。

具体的には、奥まつてしまっていて窮屈なのだ。戻そうと思って手で弄った所で装具が邪魔して戻せず、そもそもきゆうきゆうと引き込まれる様な感じで、戻る気配が無かった。

そんな症状が連日続いていた。脚が閉じられないのはその為である。

お陰で歩行はおっかなびっくり。その上、
うっ……はらが、ずくずく、する……。

下腹部、臍の下辺り。淫紋の丁度その奥も、いつの間にか脈動の渦に苛まれる様になった。

吐き出したくなる様な不快感。にも関わらず、装具から刺激が伝わって来るとその辺りがコリコリと痠り、奇妙な浮遊感に襲われてしまう。

「っ、っ……！」

何かの拍子で身体が弾む度、全身の骨、肩や膝、特に股関節と骨盤周りが軋んだ。その周りの筋と肉は熱を持ち、ずーんと重たい。

尻穴を責める装具の刺激は一層重く脳髓を耽溺させ、同時に奥まった睾丸が痛み、ボディーブローの如く腹奥に苦痛と快楽が蓄積していく。

涙も、股間から漏れる体液も、全て汗と混じって誰にも分からない。分かるのはただ、ぐっしよりと濡れた給仕服の袖やスカートの中から止めどなく水滴が滴り落ち、地面に染みを作っていく様だけ。

「あつ、っ、っつ……！」

時折口元を軍手をした手で抑え、身体をくの字に折り、内股になって身を震わせた。草が上手く捌けず尻餅を付く事も幾度もあった。その都度悶絶し「いつそ殺せ、懲罰房に戻せ」と訴える事もあった。しかし、彼は今も草刈りをさせられている。最早房に戻され鞭打たれる事の方が幾分か楽とバテてしまったからか、はたまた単純に幾ら漏らしても問題無い仕事が用意出来たからか。簡単に罰する方向から、決められた範囲が終わるまで何事も許されないノルマ制にシフトした故、止められない。終わらない。

「ねえ……なんか、さ……」

「ちよつと、やめなよ……」

「ほらそこっ！ 手え止まってるよー！」

遠巻きで伺うばかりの周囲で仕事する使用人達は、その様に何処かいじらしさを覚え、つい目を奪われては家政婦長に尻を叩かれる。

しかし誰も、近寄って来ない。助けは無い。

キクチだけが、用のある時に近付いて来る。

「水です。飲みなさい」

「っ……は、い……ありがとう、っ……い、ますっ……っつ」

手渡された水筒の水を震える手で受け取り、大人しく飲み干す。

返事にも所作にも最早余裕が無く、そこにはもう反抗の意思が見られない。

飲み終わればまた草刈り鎌を持ち、その手で必死に草を刈る。刈つて、刈つて、刈り続けて――

「っ……はっ……」

かくして、範囲内で最後の雑草が刈られた。

夕陽の下「おわり、ました……」とキクチに報告し、少年の心理は次なる理不尽に備える。

が、返事は意外にも罰する言葉では無かった。彼女は表情を変えず、冷淡に言い放つ。

「良くやりました」

「……え？」

「カゾノ、ハルノミヤ」

知らない名前が呼ばれ、指が鳴らされれば「はい」と二人、女衆が現れる。

「レイを風呂場で身体を洗わせ着替えさせた後、食堂で食事させます。カゾノは風呂場に随伴、ハルノミヤは回復食の準備を」

「はい」「っ、承知しました！」

女衆の一人。カゾノと呼ばれた一番小柄なツインテールの少女は、「ほら行くよ」と話を飲み込めて居ない少年の手を引く。

「っ、どう、いう……」

「いつもこの位従順に従っておけて事よ。分かったなら黙って着いてきなさい！」

無理矢理引かれるが、体力はもう残っていない。少し歩くだけで「っあっ、いっ……！」と痛みを訴え、顔を顰めてしまう。

「っそっか治療しないと……っこれシスイちゃんの仕事じゃないんですか!?!」

「シスイは本日非番ですし、キッチンと貴方の管轄内だと思いますが」「ああそっかつ、御免なさいすみませんっ……っ、っ……!」

少し手を施した所で緑に状態の改善されなかった少年は、結局「あ

あもう面倒臭いなっ！」と痺れを切らしたカゾノに背負われ風呂場へと連れられた。

「まっ……こっち、女風呂っ……」

「掃除の時散々入ってんだから今更でしょっ」

有無を言わず赤い暖簾をくぐらされ、脱衣所で降ろされる。

彼女は魔法の如き即脱衣を決めた後、ぼっ立ちの彼を急かす。

「おりやつ、早くそのぼっちい服全部脱げ、遅れたら叱られんのは私なんだからさあ」

「いやっ、魔法で、洗浄を……」

「使用人風情に一々魔法使ってられっか！ 背負う時汚い汁垂れるのやだからちよっと思っただけどきー！」

立ち振る舞いや物言いは幼く、背丈も同等で、何処と無く少年と歳が近い様子を窺わせる。

だがしかし、それでも歴とした女衆。例に漏れずその顔はベールがかかって見えない上、右手人差し指にはあの白の指輪がある。

「もー！ まだ分かってないの!? 自分で脱がないなら無理やり脱がせるけど良い!?」

「っ、もうしわけ、ありません……」

同じ年位の相手なのに、凄まれて反射的に謝罪の言葉が出た。

ずっと酷い屈辱を味わってきた筈なのに。分かっているても親近感を抱かせる雰囲気ので、鈍麻していた恥辱感がぶり返し少年を悩ませる。

そういえば、脱がされるばっかで、自分で脱ぐ機会、あんまりなかった、よな……。

オマケにオムツ。しかも中はぐちよぐちよ。

気にしてしまい、スカートに手を掛けた所でまた止まってしまった。

「くっ、う……やっぱ見ないで、くれない、か」

「いやだから今更だっの！ 乙女か！ って乙女になるから良いのか……じゃなくてもうっ！」

「うあっ！」

結局、焦ったくなつたカゾノにオムツ一丁になるまで脱がされた。
「つたくお世話がかりじゃ無いつてのに。つてそーいや担当言つて無かつたな……あたしはカゾノ、生活指導担当ね！」

彼女は「服の畳み方は……今度でいつか！」と一瞬にして給仕服を綺麗に畳んで棚にしまふとすぐ、少年の手を引く。

「オムツは危険だから風呂場で脱ぐよ！ はい来るっ！」

「まっ……ゆつくりっ……っ　ぐっ！」

脚が追いつかず少年は転んだ。

「っあつ、ごめんさっ……大丈夫!?？」

咄嗟に出した腕が衝撃を和らげたお陰で大事には至らなかつたものの、顎を打ったせいでそこが少し出血を伴いながら赤く腫れる。

軽く脳が揺れたせいか、微かに目眩に見舞われ少年は目を回す。

本来なら痛い筈の怪我。だが違った。

「っ……っ……？」

外傷による痛みが、痛みを感じられなかつた。

無論痛いという事は分かる。が、そこにはじんつと何か、身体の芯を痺れさせる様な、官能に近い成分が含まれていたのだ。

「わー治療！　治療するよーごめんねえー！」

軽傷だった為、彼女の雑な魔法でも痛みは直ぐに取り除かれた。

「よ、良かった治つて……私治療系の魔法あんまり自信無くて……」

「……………」

「立てる？　肩貸すよ」

気のせいだったか、何だったのか。少年は心理に痙りを残したまま、カゾノの肩を借りて風呂場に入った。

シャワーの前まで来た所で放され、壁に取り付けられた姿見に、股間にテントの張ったオムツを穿いた何とも見窄らしい男児が映り込む。

仕方の無い事だが、細くなつてきている上、緩み始めていた。近年折角逞しい身体付きになって来ていたのに。

「手助け、いるっ！」

「…………いや、もう、いい」

「ほんと？　なら良いんだけど……」

今までの女衆の中では殊更に良心的な雰囲気を放っている彼女だが、早くも人となりの中で固定され、心理的距離が置かれていた。能力はあるがせっかちでドジ。一番信用ならないタイプだ。

監視の下、オムツのテープをべりつと剥がし、脱いでいく。

「ふー……っ……」

露出する装具の白い山とその麓からねっちよりと糸が引き、むあつ。濃密な性臭が香った。

そこで少年はまた違和感を抱く。

……？　青臭さが、薄い……？

生臭くはある。が獣っぽいニオイが薄れ、少し酸っぱさと鉄臭さが優勢になっていた。

気になって何度も嗅ぐうち、脳髓が痺れ瞳がとろんと蕩けていく。臍の下、その奥の熱がそわつき、息が浅くなって、意識が――

「ふー……ふうっ……っ」

「どうしたの？　っやっぱ具合が……！」

「い、いや……なんでも……」

カゾノのお節介で引き戻された。

気を抜くと直ぐに頭がぼーつとする。具合が悪い事は確かだ。

シャワーを浴びれば少しは気分がマシになるかも。少年はそう期待し、ヘッドを手に取り蛇口を回した。

暖かい湯に打たれるという、人間らしい行為と感覚。久々のそれが、彼を癒す事は無かった。

病的な顔色の少年は引き止めようとするカゾノを無視する形で、ガニ股歩きでふらつきながら廊下を急ぐ。

「ふー……っ……ふーっ……」

「……っやっぱあたしがまた背負うってば！　キツそうだよ君！」

癒しはしなかったが、深刻性が暈けた頭を少しばかり鮮明にさせ、焦燥が身体を動かす。

「うっとおしいっ……あるきたい、キブンなんだよ……！」

胸の先や臍の下はむずむずちくちく痺れて、睾丸がズキズキと痛む。尻穴の奥と陰茎は相変わらず灼けつく様に熱く、気を抜くと視界が白んでしまう。

動いていないと気が変になりそうで仕方が無かった。

「むっ、心配して言ってるのにつ！」

カゾノは回り込み、進行方向に立ち塞がった。そして彼を半ば無理矢理背負い込む。

「大人しく運ばれてなさいってば！」

「やめろっ……」

彼は往生際悪く抵抗。脚をばたつかせたり、身をくねらせたりして抜けようとする。

が、身体は酷く怠くてもう殆ど力が入らず、脱出に至らない。

「っくっ！ やめないよ！ お湯で気絶した奴がカツコつけないでくれる!?？」

「っ……」

そう、言葉通り。少年はシャワーの湯を浴び、その刺激で気をやってしまったのだ。

正確には普段の習慣をなぞり石鹸で身体を洗い流した時だ。ただ心地良さを感じていた身体は突然、下腹部に浴びせた水流を官能として受け取り弾けた。

目の前が真っ白になって、次に気付いた時には脱衣所の長椅子の上。カゾノの心底ホツとした声を浴びせられて、自身がどうなったかを悟った。

「ほんとなら今すぐスイッチちゃんに看てもらいたい所だけど居ないし……ベッドで寝かせてやりたいけど、その前に回復食は食べないのだし」

「たのむっ、おろせっ……」

「意地悪なミママさんじゃないけど人に物を頼む態度じゃ無いし！」

「おねがいますっ、おろしてっ、くださいっ……！」

「ぶっ、いいよっ、もう着くしー！」

降ろされると、もう食堂の真前だった。

少年は大きくふうつと息を吐き、肩で扉を押し開ける。

「漸く来ましたか」

がらんとした一室の奥の方、料理の置かれたテーブルの向こう。隣にハルノミヤと呼ばれていた女衆の一人を侍らせ「遅い」と腕組みしているキクチの冷ややかな視線が出迎えた。

「すみませんっ！ ちょっとトラブルがありましたー！」

「早く席に着いて食べなさい。客の食事の時間が来てしまいます」

厨房の方では忙しく使用人達が働いている音がする。「急いでレイ！」とカゾノにまた軽く腰を抱き上げる様な形で運ばれて、少年は慌ただしく席に置かれた。

椅子の上に乱暴に尻が着いた瞬間、装具が最奥を刺激。「はぐうつ!?!」と彼は声を上げ、瞳を白黒する。

「あつ、ごめんまた乱暴にしちゃったっ!?!」

気もそぞろに項垂れると、大量の肉と野菜の盛り合わせが飛び込んだ。

「……カゾノ、其方は貴方の席です。レイは」

「すつ、すみませんっ！」

ガタンツッ！ シャツ、ドツッ！ 目にも止まらぬ速さで椅子ごと席が入れ替えられ、机の上の食器が鳴った。

また少年の尻穴に衝撃が走り、悶絶。

「っ！ つつゝゝゝゝゝ！」

「ああつ、ごめんなさいっ！」

はあ、とまたキクチの溜息が一つ。苦労の色が滲むと共に、彼女の鋭い視線は少年へ向けられた。

「どうぞ、冷めない内に召し上がって下さい。野菜の鶏ガラスープです」

彼女の指し示した机の上、少年の手元付近には、湯気を上げるスープ皿が。

「はー……っ……」

「う、いただきますっ……！」と隣で声上がる中、彼は上目な視線

を返す。

暫し流れる沈黙の時間。開いた口から出るのは浅い呼吸ばかり。言葉は無く、椅子に手をつき、もじり、もじり。普通に座っていられず、屈んだ身が振れる。

紅の瞳の奥で、真意を探る様な知性の光が付いたり消えたりするのを伺い、キクチはほんの僅かばかり目を細めた。

「はあ、何も入ってませんよ。これは本当にただの心付け。まあ憐れみも多分に含まれていますが」

「つー……どう、いうっ……」

「気付いていますか？ 身体の変化。最近の貴方、かなり血生臭いんですよ？」

いきなり気になっていた事を口にされ、少年は思わず一瞬目を丸くした。

隣で待るたましい女衆が、キクチの前のカップに紅茶を注ぐ。彼女は一言感謝を述べ一口含んだ後、眉間に皺を寄せ言う。

「ドクターが近日中にまた何うと仰っていましたから、詳細は追ってそちらで伺って頂くとして……近々、貴方は暫しの間活動が困難になるそうです」

「……えっ？」

「その為指導の方針も見直しを迫られ……はあ、これは余計ですね。失礼」

彼女の人差し指が暫しトントンと机を叩く。何か言葉を探して、その末諦めた様に嘆息。

「兎も角、不服ですが死なれては困ります故、配慮致しました」
そして席を立ち、去り際に言い残した。

「人間らしい感覚で生活を送る最後の機会です。有難く、享受する事を推奨します」

八話 喪失 前編

“人間らしい感覚で生活を送る最後の機会”
その言葉の意味を、少年は程無く知った。

「……………はあっ……………はあっ……………」

朝の日差しが差し込む、使用人部屋の一室。そのベッドの上でふと意識が戻る。

これまた久しぶりの、人間らしい寝床の感覚。

しかし、決して心地良くは無かった。安物の様で少し硬くて身体が痛む。

おまけにシーツや掛け布団、着せられている寝巻きらしきフワフワした服も汗でびっしょりと濡れており、熱い肌が微かにひんやりとして震える。

「あっ、起きたっ!?」

ボールに包まれたツインテ少女の顔が飛び込み、俄かに少年は驚く。が、その拍子で全身に壮絶な電流が駆け抜け「あゝぐうっ……………!!」と苦悶の声を上げた。

「うわっ、大丈夫!?」

「こらっ、カズノちゃん」

「だって……………わたしのせいかもだし……………」

「違うと思うし、管轄外でしょ。心配なのは分かるけど、私に任せ
て」

「う……………わかりました」

カズノがしよげ気味に引き下がり、今度は明るいくリーム色の短髪、シスイが前に出る。

彼女は嫺やかな仕草で少年の側にそっと手を置いた。

「お身体の具合はどうですか？」

「っ、みれば、わかる、だろっ……………」

「そこまでお辛そうですと、見ただけでは測りかねます」

此方もベールに包まれていて表情は何えない。艶のある声のトーンもいつも通り悪戯っぽい様でいて淡々としていた。

さらりと少年の髪を撫で、彼女は尋ねる。

「最後に覚えているのはいつでしょうか？」

「え……？」

少年は記憶を辿った。最後に覚えているのは、食堂でのキクチの話と、その後の感動的なスープの味。

「スープ、すごくおいしくて、ぜんぶのんで……えっ、あれっ……？」
どう足掻いてもそこから説明が出来ない。何があつて、どうなったのか。

大きな瞳を揺らし錯乱する彼に「なるほど、やっぱり」とシスイは頷く。

「その後昏倒しちゃいましたからね。今日が何日か、は……聞いても仕方がないか」

彼女はその口から簡潔に説明した。以来三日間、意識が戻らなかったと。

「三日、もっ……はあっ……っ……!?？」

「感覚過敏に超多感症状、それによる極度の疲労、でしょうか……ああ落ち着いて、深呼吸を——」

何で気を失った？ 食物に毒が？ いや、入れる意味が無いのはわかって、わかってうっ……。

俄かに動転し過呼吸気味になった少年の首筋に、何やらプスリと注射が打たれた。

急速に沈静して、呼吸が落ち着いていく。

代わりに瞳から一つ、二つ、ほろり、ほろりと涙が溢れて枕を濡らす。

「っ……くそっ……っ」

「今後は鎮静剤が必須になりそうですね。普通の食事もまだ大丈夫って聞いてたけど、ちよつと厳しそうかな……カゾノちゃん、キクチさんに報告して来て」

「っ、了解！」

部屋を元気に飛び出していくカゾノの声を最後に、少年はまた微睡む。

「ああ、薬の量、ちよつと多かつたかも……まあいいか。もう暫くしたらドクターがいらつしやいますから、それまでゆつくりお休み下さい」

意思に反し、自分の身体が他者の好き勝手に変えられていく。受け入れ難い事実だった。しかし、容赦無く突きつけられる。

「——つんお、あつ！」

突然、股間と肛門から生じた身を裂く様な鮮烈な刺激によって叩き起こされ、少年は素つ頓狂な声を上げた。

白い壁、使用人室より広い部屋。ぬぼんと抜ける尻穴の排泄感と、空気に曝され灼け痺れる各局部。かの館の一室に作られた診療室で今、装具を剥がされたのだと瞬時に理解すると、続いて「はいっ、おはよう〜！」という、興奮気味の女声が鼓膜を揺らす。

「寝かせたままあちこちいじいじしても良かったんだけど、見て貰いたい物があるからさあ、ちよつとお姉さんのお話に付き合つてねえ」

ダボついた白衣にガスマスク。ドクターヘルゼンは、彼の憤りの視線を確認するなり「つてことでこれ見て！」と背中から伸ばした機構腕で枠を作り、少年の目の前に出した。

次の瞬間、枠の内側に薄平たい光の膜が張られ、そこに映像が映し出される。

「じやくんどうよこれっ！今のレイくんちゃん的神秘的体内画像！」

現存する技術では説明の付かない、本当に輪切りにしたかの如く細部まで鮮明な人間の下腹部の断面画像だった。

「男児が女性化する途中の身体なんて滅多に撮れない超レアモノだよお？ すごくなあ〜い？」

画像と表現したが、動く。輪切りの角度や深さが、ヘルゼンの指先の動きに合わせて変化する。

小腸、大腸、膀胱、陰莖や、それに付随する尿道や血管等。様々な人体構造が画面上に次々曝け出されていく。

男性的器官がある以上、被写体は見るからに男児。だが、各所に異変があった。

「ほらほらここここお〜！ 精巣が身体の奥に入って、上がっていつちやつてるでしょお？」

こおんな感じで！ と更に時間経過による変化が再生され、それらが元あった位置からどう動いたかが克明に描写される。

「あと膀胱の出口のともほらっ！ 前立腺が尿道から剥離して、ひしゃげたハートマークみたいになってるの！ ってこれっ……っひゃあ〜！ 小室が分離肥大して子宮になってきてるのかなこれえ!?？ あとちよつと待つてここも——」

身体のシルエットを見るに恐らく良い歳をしているであろう女が、余った袖を振り乱し、幼少児の研究発表の如く無邪気に各種異変をピックアップして話す。

その度嫌と言うほど拡大される、男として重要な部位。強調されるその変化。

逸物と、その奥に不意に違和感を覚え、少年は視線を股間へ降ろす。

「っ……っ！」

先の赤いつくしんぼが目映り、その変化に愕然とした。

装具が外されていたが故、はつきり分かってしまったのだ。さめざめ泣いているが如く、先端より汗を溢しながら苦しげに震えているそれが、前に見た時より明らかに一回り細く小さく、根本の膨らみが失せている事に。

「あ……あ……」

その手で股に軽く触れば、中身を失った皺のある袋の上を指先が滑った。

ぞわり。こそばゆさが背筋を走る中、彼は青い顔をして首を横に振る。

「あややあ？ もしやこういうの苦手え？ この興奮を出来れば共有したいんだけどなあ」

ブロンドの長髪の生えたガスマスクが不思議そうに傾げられた。グロテスクが苦手という訳では無い。寧ろ勉学上見慣れている為、医学的知見として余す事なく理解出来てしまう。ただ、それ故に兎に角否定したかった。その画像が、自身の身体のものでは無いと。

「ならこっちは？ 胸部写真ならそれ程グロくはないっしょお？」
しかし、証明される。寄っていた絵が一度引いて、瞼を閉じた自身の顔が映し出された。

掠れた悲嘆が漏れる。

「いつ、いやだっ……」

「ええっ、なんでえ？」

そこからバストアップへと拡大されていく。赤く腫れ、ぷつくりと浮き出た乳輪、その中央で痼り立つ乳頭が悪戯に目に付く絵面になる。

意識させられた途端、ちくちく、ちくちく。胸の先が痛痒くなった。其方に目を移せば、確認出来てしまう。画面の中と同じ、赤々としていて痛々しくも、何処か甘やかなさくらんぼを。

「っ、やめろっ……」

「なんでさあ、まだ中身映ってないよほらあ」

写角が九十度変わり、上半身側面が映し出される。更に胸部、拡大、拡大。

時間経過が前後され、乳房の微かな膨らみ、その微細な変化が強調される。

「はあっ、やめてくれえっ……もうっ……!」

「んんん？ ちよつと膨らんできてるかなあ？」

写角が体内に潜り込んだ。

そして映り込む、乳頭部から胸筋膜に向かって伸びる、細胞によって形作られた茎と葉。

時は遡り、今一度進められる。茎だけだったその箇所先から葉がどンドン生い茂り、先の状態になる。

少年はその名を知っていた。茎は乳管。葉は小葉、線葉。

知識がある。意味を知っている。必然的に、それがどういう事なのかも理解する。

「おほおほ乳腺の発達がお早」

「やっ、つめ、ろおおおおおおお、おっ、っ……………!?」

恐怖と憤りが限界を超え、枯れた咽喉から哀叫が絞り出されたその刹那。本能的に溢れ出した魔力が、一気に下腹部へと流れた。

体感としては灼熱の奔流。それが臍の下、淫紋の一点に向け集まっていく。

「おっ、っ……………お、おおっ……………!?」

「うおっ、ちよっ、まったまったまった……………!」

集約、圧縮。強烈な圧迫と熱を感じ、横向きに寝ていた少年の身体はぐつと丸くなった。

そして、ぴゅくんっ！ 程なく限界を迎え、潰されたバネが解放されるが如く弾ける。「んお、っっ!?」という濁声と共に、股間から熱い液体が噴き出した。

「おっ、んっ、っ……………!?」

一瞬反って直ぐに戻った彼の腹部に熱い液体が当たり、血生臭いニオイが立ち込める。

霞んだ視界の中、彼に見えたのは赤く染まった自身の下腹部だった。

気付いた直後、その辺りに激痛が走り始め、少年は呻き苦しみます。

「うっ、あ、っあああ……………!」

「あーりやりやダメだよ無茶はあ」

機構腕が脱脂綿を手に取り、赤に濡れた腹部に当てがった。

ふわりとした感触に撫でられると、ズンツ、ズクンツ！ 灼け痺れた神経が衝撃を発し、幼気な肢体は強張り悶絶する。

腹筋は痙縮して、その度逸物から血の混じった汗が噴き出す。拭いてもキリがない。

「うっ、っ……………っ……………!」

「やばばあ……………! ちよつとシスイ君！ シスイ君いるう!?」

シスイが呼び出され、彼女の協力を以て事態は何とか収拾がつい

た。

事後の少年の見開かれた瞳から静かに一筋の涙が伝う最中、彼女とドクターは話し合う。

「だから言ったじゃないですか、近頃は手心を加えないと危険ですって」

「いやあ分かってたけど、流石にここまで魔力リソースが膨大とはねえ……」

「何とかならないんですか？」

「過剰な多感症状とか諸々は淫も……刻印に何かリソースを食う追加要素を加えて細かく調整していけばまあ、何とかなるとは思うけど」

「出血症状は、厳しいと？」

「そだねえー、主目的の実行で起こる致し方無い副作用だから、排尿器の置換が済むまでは気を付けないと——」

少年には確かに力があつた。膨大な魔力、明晰な頭脳、問題は有れど、由緒正しき家柄の長男という立場。

恵まれていた故に忘れていた。否、強くある為に否定しようとしていた。

そのどれか一つが欠けてしまえば、自身足り得なかつたという事を。

己が言う。『それでもボクは、我こそが絶対だ』

病床の役員も言った。

「そうだ、貴方が絶対だ」

個の力の追求と誇示に執心していたのには理由がある。

積み重ねた物が脆くも崩れ去った時、向き合う事になる。状況が彼を逃さない。

甘やかな感覚と共に薄らと意識が舞い戻る。

夢を見ていた気がした。ぼーっとした少年の頭は、願わくば今の現実こそが夢である様に願ったが、生々しい感覚の数々がそれを許さな

い。

「んっ……ああつ、目、醒めちゃいましたか……二度目ですね、失敗は……っ」

甘ったるい声、女ったらしい淫靡な香り。重なる熱い肌と肌。官能に蕩ける局部。仰向けの身体にのし掛かる体重と、軋む硬いベッド。彼は首をもたげたが、すぐさまぶら下がった二つのたわわな果実が視界に迫り、間も無く顔を塞がれた。

「んぶっ……っ？」

「小さ過ぎて、あまり上手く出来なくて……待ってて下さいね、今、んっ……終わります、からっ……っっ！」

股間がぎゅうっ、ぎゅうっと肉の筒に締め付けられた。突然快感がなだれ込み、彼の瞳は上擦って、背筋はびくんっ大きく跳ねる。

「っ、ん……ん、んんっ……っ？」

連続する痙縮と共に、とろとろ、とろとろ。出る物が出ている。

それだけの筈なのに、逸物自体が溶け出していつてしまっている様な、そんな錯覚に陥った。

蕩けた赤の瞳が不安げに揺れ、涙で滲む。身を強張らせ震える中、更に搾らんと抱き締められる。

「っ、~~~~~……っ！」

「んっ……熱いつ……っ！」

熱に浮かされた身体の節々が痛み、末端が痺れた。が、同時にそれも徐々に溶け出していく。

次第に力も抜けてだらんと脱力すると、漸く抱擁から解放された。顔を埋めていた乳房が離れ、「っはあっ……っ！ はあっ……っ」と肩で息をし相手を睨むと、ぬっぶと肉腔に包まれていた逸物も離され自由になる。

空気に触れ、灼け痺れる感触。良かった、まだ有ると一瞬ホツとしたのも束の間、被さっていた女体は下がったかと思えば、その艶めくクリーム色の頭髪を股倉に割り込ませ、逸物を啜え込んだ。

「ふうっっ……っ？ うっ……っ……っ……っ！」

じゅぽじゅぽくちゅくちゅ、舐められ、吸い尽くされ、その度熱や

痛みが快感に変換される。

「されればされる程どんどん小さくなっていく気がして、少年は必死に「やめろ」と声を荒げようとした。

しかし腹に力が入らず、腑抜けた嘆きが出るばかり。

「やえっ……おわるっ、おわるっ、てえっ……！」

「っ、ん、クールダウン、ですよ……はむっ」

「やっ……またでっ……っ！……！」

再び腰を仰げ反らせ、逸物はぎゅんっ、ぎゅんっと射精運動をする。その都度嘔き出す薄い精。直様舐め取られ、残さず吸い取られた。

「っふあっ……ふう。どうですか？ 幾分、マシになりましたか？」

「っ……っ……っ……」

羞恥に震え、口を結んだ少年は答えない。が、彼女はその顔色で熱と痛みが幾分マシになった事を察すると、少年の傍らに添い寝して、吐息の掛かる距離でぽっぴりぽっぴりと話した。

「ここ数日が山場である事。長引かせない為、暫くは尻穴以外の装具を着けない事。自分とカゾノが、ほぼ付きつきりで看病する事。」

「お陰で房中術による処置、思った以上に、沢山しなきやいけなくなっちゃいました……はんっ」

「んっ……んんんっ……っ？」

今度は唇が重ねられる。くちゅ、れる。舌を入れられ、艶かしく絡められ。少年の記憶上初めての経験が、またしても突然奪われた。

先程まで逸物を加えていた舌なのに生臭さは無く、ただ感じた事のない淫靡な風味が少年の脳髓を侵す。

抵抗はままならず。淫蕩の底に沈められていく。

「っんはあっ、ちゅっ……れるっ……ふっ、んちゅっ——」

九話 喪失 後編

気をやつて、起きて、また気絶。繰り返す内、激痛と淫熱は更になつた。

「っ、うううっ、うう ああああっ……！」

胸部は乳頭部を中心に張り詰め過ぎて常に痛む様になり、突つ張る逸物や蕩けた尻穴の奥を筆頭に各所粘膜や皮膚は灼け爛れた感覚に苛まれ、肉と骨は動く度軋んで痛む。

多少の取り留めを持つのは、シスイに抱かれている時だけ。

「また、小さくっ、なりましたか？」

「ふっ……ううっ……！」

「はいはいよしよし、また私のナカで、びゅーってしちやっして下さいねえ……っ！」

「いっ……でっ……っ！」

乳首を舐られたり、キスをしたりしながらぶちゅぶちゅと接合部を擦り付け合う間は、痛みと熱が引いて少し楽になる。

一時の安らぎを得て眠りに落ちていくが、彼女が離れるとすぐに激痛は再発。意識を取り戻し、苦痛に喘ぐ。

「はあっ、っ、あ ああああっ！」

「あれれ？ 足りなかった……？」

お陰で少年は海上遭難時、唯一浮かぶ流木か何かに捕まるが如く彼女にしがみついていた。見方によっては稚児が甘えるかの様に。無意識に彼女に依存してしまっていた。

そうしてシスイはほぼ四六時中、付きつきりで彼に付く事になるが、しかし、当然ずつとは続かなかつた。

「はあっ……はいっ、一回離してねえ。ちよつと休憩するからっ……」

「はっ……まっ、うあっ……！」

体力、魔力の限界が訪れてしまえば、彼女は離れていく。

「ふあ、つ、ぐつ……うあ、あああー！」

そうなれば、この通り。その身を何処にどう置いても苦しみから逃れられず、少年はベッドの上でのたうちまわった。

口元は酸素を求めパクパクと開いたり閉じたりを繰り返して、股間から血と小便を噴き出して、濡れた瞳を白黒させる。全身の節々が痛むにも関わらず局部は疼き刺激を求め、装具を突っ込まれた尻穴はヒクつき、うつ伏せになってはごわつく枕やシーツに乳首を擦り付け、仰向けになつては掌の中、小指の半分程になつた剥き出しの肉茎の感触に嘆きながら、浅ましく腰をへこへこ動かす。

痙縮の度、ぴりつ、ぴりつと肉茎の裏、尻穴の奥が裂ける様な感覚に苛まれながらも、止まれなかった。止まれば熱が滞って息が出来なくなつてしまう故、痛かろうが何だろうが動かすしか無かった。

「えつと、えつとおつ……！」

カゾノが多少の治療を試みるが、上手くはいかず。

「うつ、わたしじゃ無理だよおつ！」

治療しても治療しても追い付かなかった。

「シスイちゃあん！どつ、どうしようつ!!?」

「ええつ、またつ？鎮静剤は？」

「もう二本打っちゃったつ！」

「うそおつ流石につ、私も身体がもたないよおつ……休憩させてえつ」

「いやら、つ……あ、あああつ、あ、あああー！」

激痛の中、指先がなぞる凹凸は刻一刻と減つて、身体の境界線は丸みを帯びていく。

少年の心はただひたすらにいやだと叫んだ。叫んで、叫び続けた。

されど時は淡々と進み、肉体は変わる。

「うおっほおおお、子宮だいぶ出来てきたねえ！膣道も降りてきて……ん？おおつ!!? 見て見て凄いやレイちゃーん！」

「んぐうつ……う、うううつ……！」

「剥離してた前立腺が再生して、膣の方に巻き付こうとしてるよお!!? 何これどうなってんのお!!?」

「ドクターっ……いつ、落ち着きますか？」

「ええっ？　こんなの落ち着ける訳無いっしょおお!!？」

「いえ、ドクターではなく、レイの容態の方で……」

「あなんだそっちかあ……うーん、もうちよつとかかるかなあ、前立腺の再生で分かる通り、ここに来て身体が抵抗を——」

検診の度、多少妙な事はあれど、男性としての器官が女性としての器官へと移り変わり、発達していく様を見せつけられた。

その都度味わされた。残された数少ないアイデンティティの一つであり、生来の性別という生命の根源に近い部分が侵され、失われる恐怖を。それに対し有効な手立てが何一つ無い無力を。

己の絶対が揺らぐ。己の信じた己は、これ程までに脆弱なのかと。そんな筈は無いと否定した。何度も、何度も。

しかし、引導を渡される時が来る。

少しずつ痛みがマシになって来た頃の事。

「はあくい、こんばんはあくレ〜イチちゃん」

「うっ……っつ……!!？」

ある夜、その女は静かにドアを開け、するりと音もなく這い寄ると、ベッドの上、うつ伏せで自身を慰めていた少年を背後から捕えた。

「つはあくヤバイよこの部屋あく、スケベなニオイでむせ返りそ〜」

「みっ、んんっ!!？」

挨拶代わりに汗ばんだ桃尻が揉まれ、魔石灯の淡いオレンジの灯の下小さな影が跳ねる。

走るのは一瞬の快感と、その痙縮による激痛。「あっ、っ、っ、ふあああ、あっ！」と苦悶の声が上がった。

「んふっ、なんでえ〜って顔してんねえ〜。そんなにアタシの事待ってたの〜？」

「なっ……しす、い、はあっ!!？」

「腰痛で今日非番だつてえ〜、君があんまりにも煩わせるから〜」

「やっ、っ、いっ、いっ！」

「はあくまた触り心地良くなつたあ？　柔らかくて、もちもち、すべ

すべだぞお〜?」

「かつ、かぞのつ……つ……!?」

「彼女は外で待機してるよお〜、私が代わりの担当だって言ったら通してくれましたあ〜」

彼女は長い舌を少年の細い首筋に這わせクスクスと笑うと、その手を会陰に滑り込ませ、ぐっぐつと押す。

「そ、な……ん……ん……っ!」

「あははっ、しっかし随分と軟弱になったねえ〜、心も、身体もお〜」

「なつてな……っ、つ、んあ……っ!」

「なつてるよお〜、人に助けを求める様な人間じゃあなかったでしよお〜キミい〜?」

彼はくつと黙って目を伏せ、奥歯を噛み締める。

凶星。信用の出来ない女衆二人でも、この蛇女よりはマシだからと、救いを求める心があつた故、返事が出来なかった。

「んはっ、おつかし〜。その様子、まだ観念してないのお? 自分の身体あ、ちやあんと確認してるう〜? してないわけないよねえ〜?」

「つ……う……うっ!」

涙を流した首を横に振る。

とそこへ、パシンッ! 尻へのビンタが飛んだ。

「つあ……っ……っ……!」

「甘つたれてんなあ〜? やっぱ他の奴らが甘いせいかなあ〜?」

悶絶する少年を彼女は「よっこいしよお〜」と軽々抱え上げると、膝の上に座らせ、両脚を掴んで開脚させた。

その正面に置かれた姿見に、霞もない姿が映し出される。

「何の為に姿見が置かれてるのかって話だよねえ〜。ほら見なよお? 今の自分のなつさけない姿あ〜!」

ぼさつと伸びて肩まで届きそうな白銀の髪。微かに両胸の膨らんだ、あどけなくも嫋やかな肢体。臍の下で赤々と光る淫紋。ぴんと勃っているのに小指の先程しかない、小さな小さな、玉の無い肉竿。

性別不明の不可思議さと、痛々しく、それでいて悩ましげな妖艶さ

を孕んだ裸体がそこにあった。

「っ……ぐうっ……！」

打ちひしがれた彼は途中で目を瞑り、真っ赤な顔を必死に逸らして抵抗した。しかし脇下に腕を通され、胸元をひしと抱かれると、それだけでも身動きが取れなくなる。

「穴がまだ空いてないだけで、殆どクリトリスの大きい女の子でしよお〜？」

ぴんと反り勃った先の赤い小さな肉茎の下、袋があった筈の場所。縦筋一本のみを残して皺の一切が失せたそこを、ミマタの長い指先がすりすりとなぞる。

すると、ひくんっ、ひくんっ。痺れるこそばゆさが生じ、肉茎が不規則に跳ね、背筋が反り返った。

「ほおら、女の子みたいな反応お〜」

「ちっ、ちがうっ……うっ、くすぐっ……いたいっ、だけっ……！」

「ははっ、最初はみんなそう言うんだよお〜？」

くにつ、くにくにつ。縦筋の谷間に押し込まれ、弄ばれる。

華奢な肩は細かく震え、股座は微かにヒクつく。己の両手で退けようとしたり割り込もうとしても、相手の片手の動きに大した影響を与えられず。されるがままになってしまふ。

下唇を噛んで声を我慢する中、刺激は徐々に這い上がって肉茎の根本下の付近に到達。

「でもお……あはあっ、みいっつけ」

くにくっ。ほんの僅か窪んでいるそこを強く弄られた。瞬間、白い閃光が駆け抜け、「くはあっ!?!?」と少年の身は大きく跳ねた。

「はあっ、っ、なに、してっ……っっ！」

「多分、これから尿道になる所、なんだろうなあ〜」

くにくっ、くにくにつ。見つけた弱点をミマタはねちっこく責め立てる。痛いのに官能的に痺れる。灼ける。

妨害していた両手の片方は諦め、口元を押さえた。

「ほら、分かるう？ ちよおつと滑って来てんの」

「ふっ……うっ、うっ……っ……っ……！」

くにつ、くちつ。ドライだった音が湿り気を帯びる。

気付き、少年は恐怖した。痙縮の度に竿先だけでなく、逸物のその下付近からも何か漏れ始めているのだ。

「そろそろクリちゃんの方じゃなくて、こっちから出る様になるんじゃないかねえ」

「っ、くそっ……う、うっ……!」

「取り敢えず一回出してみよお〜? ほおくれ、しこしこお〜」

ミマタは下部の窪みを中指で弄りながら、人差し指と親指で肉茎の皮を程良く摘んで上下させた。

ちゅくつちゅくつちゅくつ。彼女の膝の上リズムカルに水音を響かせ、「んっ、ん、うっ、うう、っ」と切なげに腰が浮く。

その指使いは彼自身が弄るよりも遥かに上手だった。井戸水は筒がなく汲み上げられ、放たれる。

っ……ぶしゅっ! しゅっしゅっ!

「ん、んっつ! ……~~~~っ!」

「アツハハ! 出たね〜しよっぼいのが」

量は雀の涙程だったが、一応殆どが竿先からの噴射だった。少年はぐったりしっつ、少しばかり安堵に目を細める。

が、相手の責め手は緩まない。濡れたその手で、今度は彼の胸の先を弄び始めた。

「う、っ……ふっ、ぐっ……!」

「今ので射精のつもり〜? だとしたら最高に滑稽なんだけど〜」

「はあ、っ? っ、っ……!」

「いやだつて、どう見たつてももう子種入ってないでしよ〜! ほらほら〜ぬりぬりしても全然オスのニオイしないぞお〜?」

事実、血と小便のニオイの中に何か別の、発情を催す様な刺激的な香りがするばかりで、過去あつた青臭さは既にそこに無い。

「しかもこのぶっくり乳輪何〜? 乳首埋もれちゃってんじや〜ん」

「そ、っ……かんけつ、な、っい……んっつ!」

キュッ! 淫紋の浮き出た腫れぼったい輪が双方摘まれ、腰は仰け

反り脚がピンと伸びる。

続けて「大アリでしよ〜がつ！　こんなはしたないハートマーク浮き立たせてさあ〜あ！」と、くにくくに、埋もれた痼りを転がされた。するとその刺激は不思議と下腹部奥に響き、腹筋が引き攣り、少年は今度はくくくつとくの字になる。

「いっつ！　いたいっつ……やめっつ、つつっ！」

「敬語も忘れてるしさ〜？　神童さんなのに、この間の事もう忘れちゃったの〜？」

胸の先単体の刺激をここまで意識した事はあまり無かった。

故に理解が及ばず、困惑したまま瞬く間に追い詰められていく。

「そっ……よゆうっつ、ないっつ、えっつ！」

「こういう時に出来る様にするのが大事でしよ〜？　もお〜！」

やはり甘やかされ過ぎだとミマタ。可愛いからって絆され過ぎだの、もう少し自分にも役割与えろだのと愚痴を零しながら、彼の胸の先を一層激しく翳る。爪でカリカリ、指の腹ですりすり。搔いたり、擦ったり、摘み潰したり。

ねちっこい責めにゾクゾクと深い官能が背筋を駆け上がり、切迫した少年は堪らず訂正しようとした。

「つもうしわへっ、ありまつ……つつあゝあつ！」

しかし間に合わず。全身は雷に打たれたかの如く痙攣し、紅の瞳の奥で星が飛んだ。

ずり落ちそうになる華奢な肢体を、長い腕が「おつと」と抱き止める。

「つつっ、はー……つつー……」

「う〜ん、ほんと、良くないねえ〜良くない。何だかんだ世話されちゃってさ〜、自分の価値を再確認しちやってるんだよねえ〜キミつて奴は」

「ふー……ふっ、ふふっ」

少年は弱々しくも、涙と鼻水で濡れた面で嗤って見せた。

そう、態々国がここまでの手間をかけて自身を痛ぶり墮とそうとしている事自体が、影響力を未だ担保している。

強い立場さえ残されているのなら、付け入る隙はある。それが彼の縫る、現状最も強い理屈だった。

もぎゆっ。微かな膨らみが揉み潰され、俄かに浮かべた笑みは痛みで直ちに響められる。

「んいっ、っ!?」

「確かに価値はあるかもだけどさあ、それ物としての価値だぞお〜? キミってもう人権無いんだよ〜? ここから頑張っても意味無くなあ〜い?」

「ふっ、……かつてに、っ、きめてっ……え、あっ!」

瞬く間に少年は彼女の腕の中でひっくり返され、向き合わされた。

そして、「はあ〜そっか〜」という言葉と共に、つぷり。小さな肉茎が、彼女の割れ目に喰われる。

少年は慌てて腰を引こうとしたが、脚でしつかり腰を抱き込まれ逃れられなかった。

姿勢を維持出来ず、そのまま胸の上に倒れ込む。

「このまま歪んでいくなら、ここで一度無理矢理壊しちゃってもいっかなあ〜」

「はあっ、はっ……ああ、っ!?」

急激に魔力が吸われ、直後何らかの術式が展開。禍々しい紫の光を放つ陣がベッドの上から部屋の隅まで広がる。

「餞別代わり、気持ち良〜く最後の射精、させてあげよう」

「いっ、っ、うう、っ……!」

「シスイみたいに加減されたやつじゃない、本気の種付け体験、させてあげるよお〜」

「だれがっ……んはあ、っ!?」

腰を抱く脚の力の加減と、肉茎を包む割れ目の蠕動が彼の逸物を導き、半ば勝手に腰が前後に動きだす。

自分から動かしている様でいてそうでは無い。力無くうつ伏せに倒れた唯のマリオネットだ。

「そそっ、じよ〜ずじよ〜ず」

「つつ、っはあ、っ、ぐああっ!」

ぱちゅんと肌と肌が打ち合うと、雷に打たれる様な痙縮が連続して意識が白んだ。

その度竿先からびゅくびゅくと何か大事なものが溶け出していく。霞みがかつた頭は浮かび上がる陣とその体感から、術式を割り出した。

「つこえつ、なんれつ……!?」

精神変換漏出術。俗称、人格排泄術。人格を司る精神を溶かし魔力を含んだ流動体、又は液状物質に変換、排出させる術。

現行術式は、小水と魔力への変換。常に漏れ出している物に溶け、排泄されていく。

「ご名答。こんな状況でも魔法の事はちやくんと分かるんだから、えらいねえ。惜しいねえ。」

厳密には脳、記憶領域に働きかける物であり、彼の肉体であれば受け付ける筈の無い術だった。

しかしながら、明確に何かが欠落する感覚に襲われ続けている。疑いようもなく、効かされている。

いやだ、有り得ない、何で。無数の恐怖とプライドから来る痼癢と否定感情のノイズの中、少年は理解した。

その瞳に一瞬灯った知性からミマタは察し、惜し気もなくネタを明かす。

「何で効いてるかも分かったかなあ？ まあ単純に、この部屋が君の魔力だからだからなんだけどさあ！」

シスイ不在で清掃が後回しにされた部屋の中。撒き散らした体液が、淫臭が、凶らずも舞台を整えてしまっていた。

魔力の大量転用が可能な、少年専用の儀式燭台として。

「まっ、よっ……やめっ、くっ……っ……！」

「んんん？ やめてっでなんでさ？ 自分から腰振ってるくせにっ？」

「ちがっ……そっち、があっ……んぐうっ!?」

気付けば腰は動きのサポート無しに、自らへこへこ動き始めた。

精神漏出の初期症状、肉体制御の喪失。

身体はもう、理性によつては動作しない。本能のまま勝手に快楽を求めて振る舞う。

「まあどうしてもやめてつてんなら、前の、思い出して〜?」

「あゝっ、っ……………」

「君の尊厳を差し出して、覚悟を見せてくれれば、考えなくもないかなあ。もう殆ど残つて無きそうだけども」

「はあゝっ、はっ、あゝあっ!」

「こんなの、もうっ……………」

「因みにちよつと見解を聞きたいんだけどお、漏出後の精神つてどうなると思う? ねえねえ?」

「っゝっ……………?!?」

彼女は「壊す」と言つていた。しかし、口振りからしてその結末に都合良く楽になれるという要素は含まれていない。寧ろ徹底的に逃げ道を塞いで、地獄への道を案内してやるという悪意に満ち満ちていた。

もみゆっ、すりすりっ。無防備な両胸が揉まれ、先端が擦られる。

腰はがくがくと震え、変換が一気に進む。

「くああつ、あゝあっ!」

「意識つて残つてるのかなあ? それとも、身体に戻るまで消えてるのかなあ?」

たちゆっ、ぱちゆっ、ぱちゆっ。尚も腰振りは止まらない。寧ろ中期症状、快楽情報以外の痛覚の喪失が始まり、よりペースアップ。

「あゝっ……………かつ、はあっ……………」と紅の瞳は白黒し、口元は舌を放り出して涎を垂れ、苦痛の取り除かれた悦楽に喘いだ。

「個人的には、散らばつてる最中とか、加工後の意識の在り方とかちよつと気になつて——」

「さて、やめろ、やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ——」

脆弱化している肉体はあつという間に末期まで駆け上がり、聴覚の喪失と、この上無い切迫を訴えた。

迫り上がる。出る、出てしまう。

最早待ったなしの状況。刹那、少年の脳裏に走馬灯にも似た光景が過ぎる。

幼少期。両親を差し置いて半ば一人で来た社交会、その遊戯場。

盤術戦場で小さな黒髪の男児がたった一人、大人を相手取り、次々に倒していく。

——ああ、あの子が……。

初めて抱いた憧憬。その感情が蘇る。

——あの子みたいになりたい……！

心が裂ける音がした。初めての挫折だった。

初めて自己解決を諦め、不確実な救いを願い、結論を出す。

「……………」

謔言の様に口にした言葉は、彼自身の耳に届かなかった。或いは、意識にすらも。

ミマタが脚と膕を締め、腰の動きを止める。

少しの沈黙の後、「……………ほんとおく？ それでいいの？」と尋ねた。

少年には聴こえない。弱々しい謔言が繰り返される。

彼女はニイーっと口元を怪しい笑顔で歪めた。

「なあ〜んて。訊くのも野暮な、素敵な尊厳提示だねえ〜！ よ〜

やく趣旨を理解してくれたみたいで嬉しいなあ〜！」

よしよしと頭を撫でられる。ヒクヒクと痙攣しながら、彼の強張りが抜けていく。

許しを得たと、肉体が勘違いしたその時。

「んじやく、辛いだろうから一回、出そっか！」

ぎゅんっ！ 不意に脚で締め上げられ、ぶちゅっつと接合部からはしたない音が鳴った。

「ツツ……………！」

我慢されていた全てが、どくどくと濁流となって解き放たれる。

少年は断末魔を上げ、腹上で果てた。

「…………ふう」

事後の肉体の痙縮が治まり、ミマタは抜け殻をそつとベッドの上に戻す。

展開された紫の陣を掌サイズまで手元に収束させた後、「あ、念の爲つげとくかく」と懐から何かを取り出し、ぐつたりと横たわる華奢な肢体の股間部に装着。

その後再び立ち上がって見下ろし、満足気にニタアツと笑った。

「おめでと〜う、レ〜イちゃん」

開かれた股座は、キャップを付けられて塞がれた肉茎からでなく、その下の方から残りの淫汁をとろり。微かに垂らしていた。男子としての終わりを儂んだ、静かな落涙の様に。

「約束はあ、守っておくからねえ〜」

十話 醜女

朝。秋も深まり、窓の外では紅葉の葉が散る。

外の景色は移ろい行くが、館の中は変わらない。今日も忙しく使用人達が働いている。

その中で一際可憐でしおらしく、歩みの遅い少女が一人。

「はあっ……はあっ……っ……」

か細く儂げな吐息を吐きながら、盆に乗せた食器を運んでいた。フラつく度揺れる白銀の長髪の下、濡れた紅の瞳から涙が溢れ、赤らんだ頬を濡らす。

家政婦長の立場にある妙齡の女性が櫛を飛ばした。

「遅いよレイ！ ほら、頑張りな！」

「はい……っ……っ……っ……」

配膳作業の最中、彼女は机の上に食器を置くと、口元を抑える。

くぐもった声を漏らし、急に腰を引きガクガク膝を震わせたかと思えば、糸が切れたかの如くへたり込んだ。

その下へ黒髪長身の鋭い目付きをした女が腕組みしながら歩み寄り、低い声で言う。

「レイ、立ちなさい」

彼女はその女を見上げ、一瞬ゆらりと瞳を揺らした後「っ……はいつ……」と従順に返事して、すつくと立ち上がる。

「仕事を続けなさい」

「っはいつ……っ……っ……っ……」

見た目に相応の、聞いた者の心を締め付ける様な愛くるしい声を残し少女は仕事に戻っていく。

残された黒髪長身の女。そこへ家政婦長が詰め寄った。

「暫く見なかったと思えば、あんたあの子に何をしたんだ？」

「……ふっ、私は何も」

遠い目をして彼女が力無く笑ったのを見て「ああ？」と家政婦長は

凄む。

静かな溜息が返り、「いけませんね」と表情は冷徹なものへと戻った。

「不干渉の条件、お忘れですか？」

「……………忘れてないよ」

「なら、引き続き宜しくお願いします」

彼女は踵を返し、甲高い靴音を鳴らして去っていく。

女の名はキクチ。直近の出来事を回想し、より強く、踏み鳴らされる。

「んおおおおおめでとおおおおおおおお！ 元気な女の子ですう！」

診察台の上、意識無くぐったりと寝そべる少女の前。白衣の女の、ガスマスク越しの雄叫びが室内の白壁に木霊する。

検診の結果、レイの肉体は学術的に女性の物と呼べる段階に移行した事が分かった。

曰く多少のイレギュラーはあれど、もう数ヶ月すれば更に女性としての性徴を深め、子を孕み産める様にもなるとの事。

計画は安定軌道に乗った。当初の予定通り。順調な経過報告の筈だった。

「あー、でも、これ言っているのかなあ……………」

「……………？ 何ですか？」

「ん……………ミマタちゃんが、ちよつとこの子のリソースをねえ——」

語られたのは、またしても彼女の独断専行の痕跡の話だった。

キクチは今度こそ冗談ではないと問い詰めた。

「どういふつもりですか？ ミマタ副主任！」

「ん？ 何が？」

「とぼけないで下さい！ レイの刻印の大幅な追加に、精神系術式の勝手な使用！ 明らかかな越権行為ですよね！？」

今後の予定に響く勝手な行動だと、あわよくば断罪し、上に突き出

さんという剣幕で捲し立てた。

しかし、ミマタは休憩室のソファの上、寝そべり頬杖をついたまま飄々と答えた。

「でも、これで良かった。でしよお〜?」

「はあ!?」

「いや、だって、これで私の復讐をダラダラと続ける必要無くなつたじゃあ〜ないですかあ!」

「っ、貴女っ……!」

「無駄な懲罰でちよおつとずつあの子の心を砕くより、先に術で心を折って効率的に進めようっただけですからねえ〜! 上もこつちの方を推すんじゃないですかねえ〜!」

彼女は全て見透かしていた。

ミズチの私兵最優の女、占理眼せんりがんのミマタ。

初めから警戒していたものの、案の定御せない。御し切れない。

「はああつ……!」

肩を怒らせ、キクチは廊下を歩く。カツカツ、カツカツカツカツ。と、何やらおつとりとした声が掛かる。

「主任……キクチ主任」

「何ですか!」

思わず声を荒げて振り返った先には、頬に手を当て困り顔のハルノミヤがいた。

キクチは「っ、すみません」と俄に正気に返り、言い直す。

「何でしょう?」

「いえ、先程から食堂の周りを延々とグルグル回っていましたので……それよりレイさんから目を離して大丈夫ですか?」

ハツとした。担当業務を離れるまで、レイから目を離してはいけなかった。

「ありがとうございます」と慌てて礼を言って戻ろうとしたその時、俄に食堂が騒がしくなる。

「くっ……!」

現場に駆けつけると、そこには内股でへたり込んだレイの姿があった。

足音を踏み鳴らし、野次馬使用人達をかき分ける。

近づき見下ろせば、床に付いて広がった給仕服のスカートの端からじんわり。シミが広がっていく様子が伺えた。

「つゝ……！ カゾノ！ ハルノミヤ！」

「はい」「はっ、はい！」

参上した二人に久々に告げる。

「懲罰房へ連れて行きなさいっ！」

服を剥かれ、密着装具だけになった可憐な少女は鎖に繋がれ、床に膝立ちになる形で吊るされた。

相変わらずひんやりとした懲罰房の空気に曝され、その肢体は静かに震える。

「はあ……久しぶりですね」

「つー……つー……」

何も答えない。時折ふっ、ふつと苦しげに息を吐き腹を凹ませる以外は、悩ましげに眉を顰め、身を振り吐息を吐くばかり。

キクチは手元に握り締めた鞭を振るい床を叩く。

パアン！ 乾いた音が木霊すると、愛くるしい色白の童顔は微かに強張り曇った。

「ふっ、女々しい……変化の苦痛が相当答えましたか、すっかり女子ですね」

真つ黒な視線が見下ろす。

筋張っていたのも今や昔。細さはそのままに、より華奢に、より角が取れ柔軟になった肉体は、何処からどう見ても成長途中の女の物。

「お似合いですよ、今の装具」

それに合わせ、かつて股間に膨らみを作っていた装具もつるりとした女性型へと変わっている。

デザインは前よりも美的に洗練されていて、一見しただけでは少しピッチリしていて小さめの、機構的模様が入っているだけのセクシー

くくくく！

は？

鞭打つ手が止まった。

「今、なんと……？」と今一度訊けば、せがむ様な言葉が返る。

「きもひつ……いいんれすつ……とめないで、くらしやい」つ……！

意味が分からず、キクチは固まった。

確かに以前「痛みの方がマシ」と言っていた。しかし、それは確かに「痛い」のであって、決してその他の感覚では無かった筈。

唯の強がりか、煽りだろう。そう解釈した彼女は無言で少女に迫り、その硬いヒールで脚を踏み付けた。

「くあ、あああああ、あつ！」

「今のが問いの答えですか？」

「ああつ……はい、つ、そう、れすつ……！」

より一層踏み躪る。メリメリと音がした。

甲高い絶叫が上がる。が、その語尾は何処か上擦っていて甘ったるく、判断が付かない。

気に食わないキクチは、その右拳を握り少女の鳩尾を殴った。

「つ、……かはあ、つ！」

瞳を白黒させ、彼女は嗚咽する。

「これでも？」とキクチは尋ねた。

対し紅の瞳は揺れ、恍惚に渗む。

「つあ、つ、ん、つ、つ……！」

しよおおおお……。

漏れた尿がしめやかに床を濡らした。

「……汚い」

鎖が緩められ、ガクンと少女の頭が下される。

キクチは白銀の頭髮を掴んで、濡れた床場に顔が付く様押し付けた。

そして掌から魔法の赤い雷を生成し、華奢な裸体に通電させる。

「ん、つお、おおおおつおお、おおおおお！」

少女は白目を剥いて絶叫した。

その余りの激しさに殺害の危険を感じたカゾノが遂に声を上げる。

「キクチ主任！ やり過ぎです！ 止めて下さい！」

「どこがですか!?？ 善がってるじゃないかこのメスガキはッ！」

「っそうは見えまつ……せっ？」

ビクビクと跳ねる、地に伏せられた肢体。その股倉、装具のスリットからぷしっ、ぷしゅっつと液体が飛ぶ。

壮絶な叫び声を上げ悶えるその様は死ぬ寸前の光景の様にも思えた。

しかし、その場の彼女達は気付く。その絶叫の何処かに、甘く響く何かがあると。

「ぺ、ペインライトニングを受けてるのに……」

赤い雷として放たれるそれは直接痛覚に訴えかける強めの魔法だ。用途は拷問から対人殺傷まで。被術者は全身の神経が焼け剥がれるかの様な激痛に襲われ、強度、被術時間によつてはショック死に至る。

魔術師の肉体耐性に無関係の物理的作用を狙った魔法であり、どんな者だろうとゼロ距離では激痛による筋肉の過剰反応で骨が折れ身体がひしゃげる筈。

だが、目の前の少女はそうなっていない。知っていたカゾノは、知識との差異からすぐ「もしかして、痛覚が……」と異常を察した。

そして喫緊の問題はそこでは無いとハツとして言う。

「いや、主任！ 効果に関係無くその魔法は範疇を超えています！」

ダメですよ！」

そこで魔法は乱暴に解かれ、ゴツと少女の頭が床を打つ。

手元の自由になったキクチの怒りの矛先はカゾノへ向く。

「カゾノ！ 貴方何故ミマタの好きにさせたの!?？」

「ゴっつ、ごめんなさいっ！ でも、私じゃあの人に逆らえなくて……」

詰め寄ったその時、「はいはいストップ」と、話題の蛇女が二人の間に割って入った。

「カゾノちゃんを責めないの。彼女はアナタと違ってキチンと仕

事をこなしてたんだからあゝ」

「っ、ミママアツ……!」

双方視線をかち合せ、火花を散らし睨み合う。

暫しの沈黙の後、口火を切ったのはキクチだった。

「何故邪魔をするんですか!?!」

「邪魔をしているのはそっちだよお、一応ふぎけた仕事だけど、国家事業なんだよおこれえゝ」

「何を言う? 私はその国に仕事を任されて、主任としてここにいるんですよ?」

「そりやそうだけどさあゝ」

「分かっているなら下がりなさい! 決定権は私に」

「君は、国が君に期待している事を理解してますか?」

認識阻害のベールの奥、切長の眼差しが怪しく光り、がなる怒号は遮られた。

ミママはくつくつ笑いながら話す。

「いや国が、というと現状は暈けるからやめるかゝ。概ね取り仕切ってる伏魔財閥の名代、伏魔以蔵ふくまいぞうと名指ししておこゝう」

「っ! 何その名を平然とっ……!」

「いやあねえゝ、まああの方もこの子に唯ならぬ怒りを向けていたからねえゝ。利害の一致ってやつなんだろうけどさあゝ、実質もう済んだ様なものでしょ? 復讐ゝ」

「……何を以てそうお考えに?」

「はは、だつてゝ、もう満足しちやってますでしょ?」

「してませんが?」

「してるのよ、彼の方はゝ」

キクチはその一言で顔を強張らせる。

言い返す言葉が出てこない中、「で、改めて訊くけどゝ」とミママ。
「君は何を期待されて、ここに主任として連れて来られたのかなあゝ?」

「っ、それは、私が、適任だからっ」

「うーんまあ間違つてないけどおそんなぎつくりとした答えは求

めてないなあ。何故、適任だと思われたと思う？」

「それはっ……私がっ……元令嬢でっ、事情を知っていて、このっ、このガキをっ、適切に扱えろっ！」

「うん、まあ最後以外概ね正解！ 偉いねえ！」

軽くておざなりな拍手が行われた。

対面の黒くサラリとした前髪の下、額の青筋が怒張する。

「おちよくってるんですか……？」

「そうだけど、それはどうでも良くてえ……答えを言っちゃうと、単純に君は伏魔が寄越した、あの子に対する嫌がらせ装置なんだよ」

「……………」

キクチの立場を、これ以上なく的確に表現した言葉だった。

彼女自身理解していたが故、一度目を伏せた後フツと笑って開き直る。

「だとして、何か問題が？ 役割を全うしていますでしよう？」

「うん、出来てるつもりなのか……優秀そうに見えて、やっぱお父上そっくりの残念な子だなあ」

刹那、キクチはミマタの胸ぐらを掴み、壁に追いやった。

背中が打ちつけられドンツ！ と大きな音が鳴る。

「父さんの何を知っているって言うの？」

「ったあ、暴力反対」

悠然と両手を上げ、細長い指がひらひら揺らされた。

その場にいたカゾノが「キクチ主任！」と構え、警告する。

「頭を冷やして下さいっ！ これ以上は、上に報告しないといけませんっ！」

更には音も無く「あらあらどうしたの？」とハルノミヤが現れ、シスイ以外が勢揃い。

「……………ッ、成る程」

キクチは何かを察しつつ、不服そうに手を離れた。

そして息を整え、胡乱に微笑う蛇女に尋ねる。

「私が用済みというのなら、何故解任通達が来ないのです？」

「さあ〜ねえ〜？ それはご自分でお考え下さいな〜」

「……分かりました。そうさせて頂きます」

キクチは靴音を鳴らし、大股で去っていった。

靴音が離れて聴こえなくなると、ミマタは両手を打つ。

「あつ、そっか私副主任か〜。カゾノちゃん、ハルノミヤさん、申し訳ないけど各々平時の使用人としての持ち場に戻ってくれろ〜？」

「分かりましたけど……」

「レイちゃんの治療は!?？」

「それはアタシがやつとくからさ〜」

彼女の申し出により二人も退出。懲罰房にはミマタと、打ち捨てられたままの少女の二人だけが残った。

細く長い脚がひたり、ひたり。虫の息の少女へと歩み寄り緑光を放つと、彼女の耳元で囁く。

「これで思い通りになった〜、とか思ってるろ〜？」

びくんっ。少女は背筋を跳ねる。

乱れた白銀の長髪に隠された、赤らんだ顔貌。涙と涎で濡れた口元は僅かに微笑んでいた。

十一話 主導権

時は少し遡る。

少女と成り果てた少年はそうなる間際、謔言の様に言った。

「手脚の自由と引き換えに、思考の自由の担保と、キクチの、情報
を——」

「——っ！」

ハッと目覚めた。感じたのは、少しの血生臭さの中に混じる、癖になる様な甘い香りと、全身を包む寝巻きの肌触り。痛みが引き、熱感の質が変わった重怠い肉体。それを撫でる冷たい風。

微かに一頻り息み続けた後「っ……はあっ……」と息を吐く。

か細い手脚は、自身の意志では動かなくなっていた。

「おっ、ようやくお目覚め〜?」

ヌツと床から生えるが如くミマタが現れ「おはよう」と挨拶する。

彼は少し間を置いた後、臍げに決した自身の選択を理解し、反省した。緊急だったとはいえ、馬鹿な事を言ったと。

そして頭髮と同色の白銀の眉を顰め、挨拶代わりに文句を返した。

「っ……ぜんぜんっ、よくなって、ないぞっ……っっ」

股間から臍の下、その奥にかけて。着々と育っていた痙縮する痼りが開通してしまっていて、そこを何かに押し広げられ、揺さぶられている。

尻奥を弄る物とは別の、少し前側に並行して開拓されたルート。ずっと何か裂ける様な痛みに苛まれていた箇所で、今では猛烈な搔痒を訴えキュウキュウと締まる肉の芯。そんな未知の局部に、意識は引き摺り込まれていく。

チラと目の前で揺れる細長い指に付けられた白い指輪を一瞥し、訂正した。

「ない、ですよ……どういう、っこと、ですかっ……っ」

痛みは無い。ただ体感のベクトルが変わって前よりも耐え難く、堪らず歯が食いしばられギリッと音が鳴った。

頭の靄は思考に絡み付き、瞳は気張っていないと直ぐにとろーんと微睡んで、淫靡な熱の中に溺れてしまいそうになる。

最中「いや、そんな事はないよ」とミマタは頭をゆるりと振って言う。

「正確に意識してみて〜？ 身体から、意識を遠ざける感じ〜」

「ふっ……なにをっ……」

何を意識するでも無く意識は靄の中に沈んで、現実から遠ざかってしまう。

だったら、と、逆のイメージ。必死に靄を振り払い、意識をそこから必死に引き離す。

ギュツと目を瞑って、暫し身を強張らせた後、徐々に脱力しスウツと見開いた。

「……出来た」

「でしよお〜？」

それは、さながら精神のセーフティスペース。今までであった入れ物の外に、何か別の容器が作られた様な感覚だった。

その場所だけは先程までの狂ってしまいそうな悶々としたムラつきが嘘の様に風いでいて、とても静かだ。

しかし、完全では無い。常に元の容器の方へと引き戻される重力が感じられた。

「でも、これキツいっ……!」

おまけに、「そうなの〜？」とミマタが胸元へと手を伸ばし、もみゆん。思った以上に存在する、思いの外硬めの膨らみを揉めば、「うひゃんっ!!?」と訳の分からない恥ずかしい声を上げ、華奢な女体は弾み、意識は一瞬の閃光に撃たれ元の淫熱地獄に墮とされる。

「っはー……っつっ……!」

ミマタは直ぐにパツと胸から手を離し、その柔らかな赤い頬を「アツハハ〜、『うひゃんっ!!?』だつてさ〜! かわい〜」と指でぷにぷに突いた。

「っ、わりやつ、わらうわ、ないで、くださやいつ……！」

こそばゆくも、湯に浸かった瞬間の心地良さを数十倍にも濃くしたかの如き快感を伴う甘美な痺れだった。

腰から脳天にかけて、通り抜けた後の身体の芯が爛れて熱を持ち、余韻となつて肢体を震わす。刺激を反芻し苦悶する中で、再び先の手順を踏む事で何とか復帰する。

「はあっ……ん、んっ！っ、ん、んっ！んっ！」

必死に咳払いをして先の甲高い嬌声を払拭しようとした。

が、幾ら咳払いしても、幾分真っ直ぐ喉を通り出てくる声は以前と異なる。ここに来てからのしゃがれていた声とも、変声期直前の少し低くなり始めていたものとも違い、幼少の頃に戻ったか、はたまたそれ以上に何処か愛らしく、女々しく甘美に響く。

自覚した童顔が不機嫌に歪められた。

「っー……クソっ！何がどうしてっ、ここまで変わったっだっ……ちきしょうっ！」

「それを話すのもアリだけど、いいの？キクチの情報は？」

そうだった、と癩癩が中断され、濡れた紅の瞳は訝しげに細まり蛇女を映す。

「……ケチらず話して……くれますか？」

そうしてモチのロンと語られた話は、ケチられた物でも、偽りでも無く。裏付けの取れた事実であり、元名代にとっては、とても聞き苦しい物だった。

「——そうか。あの役員の、娘だったか」

ありふれた、と切り捨てるには些か稀有で酷な転落人生だろう。

華やかな立場にあった令嬢が親の失敗によつて一族郎党恨みを買ひ、奴隷に墮とされ、ただの道具として扱われる、なんて話は。

「アイツは、知っているのかっ……っ、ますかっ……？」

「いくや？でも、知らなくとも、逆恨みするには十分じゃなくい？」

あつ、真つ当な相手にしてるんだから逆恨みって言うのは変かあゝ！

その不幸の大元は、白神黎人。今は亡き名を過去に持っていた自身

にある。

動機は十分。故に黎人に思う所のある人物に拾い上げられ、利用された。

「ははっ、因果応報って本当にあるんだねえ」

「……そうだな」

曇る横顔に、ミマタは瞳を輝かせる。

「アハハっ！ 君って罪悪感とかあるんだろ！ いや、それともただの後悔〜？」

「……………分からない」

「……………ふ〜ん」

彼女は頬杖をつきながらその様をじいつと観察した後、その心根を汲んだかの如く尋ねた。

「なら、どうする〜？ どうしたい〜？」

「つ……………尊厳をまた、差し出せと？」

「うんうん〜、アタシの有用性はあ、十二分に理解したでしょ〜？」
懐に滑り込む様な、毒々しい蛇の笑み。

直面した薄紅色の幼げな唇は引き上がり、苦々しくも微笑んだ。

「……………零のレイ、ですよ？ このザマで、まだ其方のお眼鏡に叶う物があるかどうか」

「ははあ〜、ほ〜んとそうだね〜おかしな事だけだね〜……………その口振りの時点で、ない訳が無いでしょ〜」

悪魔だろうが何だろうが、一度売り渡した以上、躊躇いは無かった。

——三日間、痛みの全てを快感に変換する。代わりにその間、キクチを煽り追い込んで欲しい。

場面は再び懲罰房へ戻る。

「確かに〜、己を顧み無い覚悟さえ決まってしまうえば、実に簡単、ではあるんだろ〜ねえ」

「つー……………つはー……………」

実行後、キクチへの揺さぶりは成功し、確実に彼女の立場は弱くなった。

「まあ、天秤の吊り合わせも巧だったよ〜？ 手脚の不自由も、痛覚変換も……こつちとしては納得しか出来ないものだしさ〜」

ミマタは手元から治療魔法の緑光を放ちながら「あ、ちよつと四つん這いになって〜」と指示。すると、ぐったりとしていた肢体は指示をこなすべく動き、その通りの姿勢を作る。

自由の奪われた手脚は首元の魔術刻印の入った白銀のチョーカーによって制御されており、指輪を持つ者の命令によってのみ、その命令の範囲内でだけ動かす事が出来る。身体がどれだけ辛く動かし難くても、魔力によって命令の実行が強制される動作サポート付き。命令する者の指導に忠実に動く。動かされる。

「アタシとキクチ、双方の性格と立場を鑑みた上で、必要最低限の条件を確保して〜」

徹底した自由の排除。しかしそれは裏を返せば、指導役の責任がより明確になるという事。

そうなってしまうえば、責任感の強いキクチは他者の視線に耐えられない。元よりあるミマタとの対立も兼ねて彼女は苛つき、自滅する。

「更には無様さも逆手に取ろうとするなんてなあ〜」

最後のひと押しとして下腹部刻印に付け足された痛覚変換も、リスクこそあれどキクチや他の女衆を焦らせる決定的一打になった。ただの演技では、あそこまで危機感を煽れなかつただろう。

尤も、何もしなくともいずれこうなっていた可能性は高い。ただ早めただけであり、ミマタの掌の上という感は否めない。

「凄いや〜、すごい。中々出来る事じゃないかも〜」

おぎなりの称賛。明らかに何か言いたげな態度を取るミマタ。

彼は突っ伏したまま訝しみ、言葉を絞り出す。

「っ……何か……文句でも……？」

「い〜や？ ないよ〜？ 納得しか出来ないって言ったじゃ〜ん、

取引自体はさ〜」

緑光が徐々に弱まり、そしてフツと消えた。

「でも〜、すこ〜し、分かってない」

刹那、パァンツ！ ミマタの掌は目の前の丁度良い位置に置かれた

瑞々しい白桃を打った。

伏せられていた真つ赤な童顔は「つ、ふあ、っ……!?」と舞い上がり、涙で滲んだ瞳が白黒する。

「アタシに任された仕事は、君の調教、なんだよお？」

二度、三度。同様に気持ちの良い音が木霊し、甲高い嬌声が相槌の如く続く。

「つつ……んあ、あつ……！」

「お遊び的な取引もその手段のひとつ」

「う、っ、ま、つてつ……はあ、っ！」

「幼気な元坊ちゃんには、ちよつと理解し難かったのかもしれないけど……別にただ憐れな少年を虐めて、愉悦しに来たわけじゃあな、いの」

叩かれた後は擦られ、強く揉み潰される。

痛みが変換される事を前提にした、乱暴で力強い指圧。華奢な背筋が跳ねる。反れる。

まっつて、まっつてとしきりに口にすれど、加減される事は無く。瞬く間に限界が来て、「やっま、っ、でりゅっ、てっ、つつ、くくく！」と哀叫が上がり、スリットからプシュツ、シュツ！と勢いよく淫汗が吹きこぼれた。

「それに……君のカラダはもう女の子。勝手にちがう」

「つつ……ううう……っ！」

「せつかくたく、これからそれをキツチリと教え込んで、あつ、げっ、るう」

事実、彼の見通しはまだ甘かった。

大幅に譲歩し、これでもかと切り詰めた筈だった。

しかし、あくまで調教。全ては、彼をある目的の為最適化するプロセスに過ぎない。

端から心身の自由など、奪う前提で進む話。

どんなに手を尽くしても、能動的に働きかけられる問題では無かったのだ。

「ふっ……ふっ……なっ、なに、をつ……っ！」

新たな拘束具によつて両手両足を広げた形で、仰向けに寝かせられた彼の肢体。そこへ「ハハアっ、垂らすよお〜？」と上からミマタ。椅子に座りながら火の灯された白い蠟燭を構えると、その溶けた蠟を太腿に一滴垂らした。

はたり。傷一つ無い透き通る様な白桃色の絹肌が濁った白蠟で汚された瞬間、刺激を受けた意識はその熱で一気に沸騰する。

「あぐっ！！？ つつ……っ！！？」

「どう？ 普通最初の内は熱くて痛くいつてなると思うんだけど
〜」

「うっ、いひやっ、いひやいっ……んぐうううっ！！？」

「うんうんそうだよね〜」という生返事と共に更に数滴垂らされた。

はた、はた。灼熱が内腿に付く度、鋭い快感に堪らず絶叫し仰け反り、腰を突き出す。

「敬語の浸透率もまだまだだしく、嘔吐きだしく……な〜んかまだ、勘違いしてるよね〜」

「ふっ、ふっ、んううううっ うっ……っ！！？」

蠟の落ちた場所には余熱が残り、育まれた官能は長々と燻される。彼の精神はその一切を処理出来ず、くねる肢体と共に悶えるばかり。

『肉体や体面がどんなに穢されようと、内面は絶対に変わらない。我は我だ〜』とか、未だにそんな事思つてな〜い〜？』

蠟燭が下腹部、淫紋のすぐ横に構えられた。

「やっらっ！ つちがうっ、おもつてな〜いっ！」と白銀の頭髮が横に振られる。

が、その返答は意に介さず、改めて肉体に問うが如く、はたり。

「ひゅぐうっ！！？」

更に装具に隠されていない鼠蹊部右端に、「思つてないよね〜？」とはたっ。「うあっ！」とひっくり返った嬌声が弾む中、間髪入れず「思つてるの〜？」と左端にもはたり。

「はあ、っ！ あああつ、っ、くくくく！」

「思ってるんだく？」

急に顔に近づき、胸元、装具の上、鎖骨付近に構えた。

恐慌に染まった表情が炎の灯りで照らされる中、いや、いやと左右に振られる。

「そつかく残念だなあ〜！」と無慈悲に蠟燭は縦に振られ、はたり、はたり、はたり。垂らされた。

「変わらないモノなんて無いって、君なら分かっていると買ったんだけどなあ〜！」

「あ、っ、っ、ふあ、あああつ——」

肌の上を燻すそれらが、嬾やかな身体の境界線をハッキリとさせていく。

そうして明滅を繰り返す意識も、全身も、白濁に染め上げられた後。スパアン！

「あ、っ……んっつ、くくくく！」

鞭の音で、碎かれる。

「はあ、っ、っあ、っ、っあああ、っ……！」

取り止めもなく喘ぐ彼の滲んだ視界に映ったのは、腰と両手首を天井に吊り上げられている、白濁に穢された白銀髪紅眼の少女の姿。

虚に上擦った瞳からは涙を、赤らんだ額や首筋、白濁の隙間からは汗を流し、唇から放り出された舌からは涎を、筋の通った鼻からは鼻水を、股倉からは愛液を垂らす。痛ましく悩ましげで、息を呑むほど美しく瑞々しい、上品でいて下劣な、万人の劣情を誘いそうな芸術品。未熟な精神には過ぎたる過激な光景は、憔悴した心理を惹き込む。目が、離せなくなる。

「ねえ〜この間も言ったけどさ〜……鏡は、何の為にあると思う〜？」

ヒュパアン！ 空を裂く衝撃が尻を叩く。

合わせて彼の心身に閃光が走り、鏡の中の少女も「んはあ、っ」と背筋を逸らす。

「答えられたら、今日の所は楽にしたげるぞ〜？」

餌がぶら下げられた。彼は淫蕩の靄の中、相手が求める答えを追おうと必死にもがく。

が、ペシンツ！ と尻たぶを叩かれ、邪魔される。

「ん、んっ、あ、あっ……………」

「考えなくても分かるでしょ〜？」

仕方なく、震える声で一般的な回答を返した。

「っ…………じぶんの、すがたっ…………かくにん、するため、えっ…………」

「う〜ん、間違つてない、ふつ〜の答えだあ〜」

「ま〜今はそれで十分か〜」とミマタは嘆息し、こう続けた。

「なら、分かるよね〜？ 今、映ってる自分の姿が、何なのかさあ〜」どくんっ。心音が跳ねる。瞳は揺れ泳ぐ。鏡の中も同じ。

——ダメだ、受け入れたら、ボクは終わる。

根源的な恐怖が、視線を逸らさせた。

項垂れて返事の無いその様に、蛇女の口角がまたニイっとなる。

彼の顎を掴み、クイと上げて鏡に向けさせよう。

「これから毎朝、ハルノミヤとカゾノの二人と一緒に化粧する事になるから…………その度しつかり、確認するんだよ〜」

「返事は〜？」とペシペシ軽く尻を叩かれ、彼は身体を強張らせながら「はいっ、わかり、ました…………」ときこちなく返した。

彼女はヨシヨシと白銀の頭髪を撫でる。が、その後直ぐにわざとらしくハツとして見せた。

「つと〜、楽にするって言ったもんなあ〜ごめんよお」

繋がれた鎖が漸く解かれるのかと余裕の無い純な心が俄かに期待した、その時だった。

ぐいんつと装具の起動する音が、静かな懲罰房に木霊した。

「はっ…………んえっ…………？」

「辛かったろ〜？ イツていいよ〜」

胸と尻、そして股間。それまで軽く蠢く程度だった各所を埋める物が一斉に激しく動き出す。

「あっ…………あっ…………？」

「あつ、イクって言葉分かる〜？ 分かるよね〜？ まあ分からない

かつたら、それもじっくり教えるだけなんだけど——」

ミマタの声が遠ざかり、彼の耳に入らなくなる。胸と尻。密閉されたそこは、単純に快感を拾う範囲が大きく深くなっただけで概ね前とは変わらない。電気的刺激と、物理的に舐る様な刺激。蠕動し、官能を生む中枢を外側から抉られるだけだ。

しかし、もう一つ、否、二つは違う。

今なお微かに縮小を続けている肉茎、改め陰核が陰茎の頃と同じ扱いを受けているものの、何か流動物が通る感覚は無く、拾う官能は鋭く比べ物にならないのもそう。

だが、その下と言うべきか。尻穴とは別の、体内へ繋がるトンネルの開けられてしまった箇所は、明らかに追加された肉体の性感帯でありながら、その性感の根源に限りなく近く強く紐付いていた。

そこが、尻穴と似たパルスと抽送運動によつて揺さぶり灼かれています。ちゅととととととととととと……小刻みに最奥をノックしながら、ちゅぶちゅぶ、ちゅくちゅく。搔き混ぜられる。

「あつ、あつ……——」

鏡の中の少女の身体が徐々にくの字に折れ曲がると、彼の肺の空気が抜けるのに合わせて息が多分に漏れた、甘いニュアンスを含んだ女の嬌声が上がった。

間も無く、縮んだバネが弾け、ビクビクンツ！ いつもの痙縮が起こる。

何かが出る気がしたが、思った通りには出ない。そのせいで排出されなかった熱は対流し、腹奥に貯まる。

溜まった熱は今までとは違い、直に搔き回され、膨れ上がっていく。

「つ、つ、ああつ、つ……——」

止まらない。ぷしっ、ぷしいつ、と小水の如き何かを噴き出しても、射精とは違う。静まるどころか飽和して、尚も昂まる。「あああつ、つあ、つ、はあつ、あつ——！」と、女つたらしい嬌声もより切迫度合いを増し、彼の思考は蕩け、境目を失う。

逃れられない。腰を何処に逃しても、何度噴き出しても、芯に直接叩き込まれる官能が何処までも熟れる。

じゆくじゆく、ずぶずぶ。爛れる。狂う。

波が繰り返される。終わりが見えない様でいて、何か途轍もないモノが迫り来る。

これでは、コワされる——

誰でも良い、助けて欲しい。その方法を知らない理性に代わって本能が叫ぶ。

「あつ、なぐ、つ、これぐ、つ、むりぐ、つ、だれっだすけつ……あつあつあゝあつ、しぬぐ、つ、しんじやつ……——っ！」

よるべも無く破滅を迎えるかに思われたその時。大きくて柔らかな抱擁が彼を包んだ。

ただそれで救われるかと言えばそんな事は無く、「んきゅぐ、つ、つ、ふうぐ、うううつ……！」と臨界点を迎え、そして。

「ふぐつ、つつぐ、！ つつぐぐぐ——」

彼の意識はこれまでに無い強烈な衝撃を受け、連続で飛んだ。

「——つあゝつ、つ、はあゝああつ……！」

情けない女声が消え入り、彼の視界はチカチカと明滅しながら、徐々に白んでいく。

「あらぐ？ ハルノミヤ——なんで——」

「二人にする訳——規則で——」

間際に見たのは、母の幻影。尤も、乳飲み子の段階を最後に彼にこうして抱かれた経験は無いし、既に当人は目の前で他界している。

甘えた幻想だ。などといつもの様に気取る事はままならず、彼はひとと抱き返して瞼を閉じた。

十二話 新日常

曇り空。冬の到来の近さを感じさせる様な肌寒い朝。

使用人の寝泊まりする一室、その窓の向こうから、女性の落ち着いた声がする。

「そこに軽くチークを入れて立体感を……そう、上手です」

室内、鏡の前に並ぶ三名の給仕服姿の女子。その中で全体的に二回り程大きくふっくらとした身体付きの、ブラウンボブの頭髪をした女が声の主。

彼女は手を擦り合わせ感嘆する。

「飲み込みが恐ろしい程に早いですね……流石です」

「すごい……ちゃんと綺麗に、大人っぽくなってる……!」

そこへ割り込み、身を乗り出す様にして鏡を覗き込む、赤みがかつた黒いツインテールの小柄な少女。

彼女もまた感嘆を漏らす、釘を刺される。

「カズノさんも少しだけで良いので見習って下さいね。幼く愛らしいお顔でも、キチンと役に立つ事が分かったでしょう?」

「う……分かりましたあ……」

静かに肩を落とす傍ら、一人座って鏡に映る更に華奢で美しい白銀髪の少女は、気怠げに一つ熱っぽい息を吐き、淡くアイラインが引かれほんの少し大人びた目元を細めた。

——当然だろう。こんなの、ただ絵の仕上げをする様なものじゃないか……。

毎朝の面倒な日課が追加されただけ。愛らしい童顔の美少女の絵を、出来得る限り美麗さを損なわぬ範囲で、大人に見える様な仕上げを施す日課。

日々少女の顔貌と向き合わされる様になった彼は、そう定義する事で強固に自身を守る事にした。

勿論、そんな事が無くとも、身に纏う物がこれでもかと、肉体の今

を浮き彫りにし続ける。女物の下着が、給仕服が、装具が。淫熱で爛れた肌を包み、その輪郭をハッキリ示して止まない。

「はあ……っ……」

不意に吐息一つ、みじろぎすれば、ふるん。下着と装具に包まれた胸の贅肉が微かに揺れる。

——っ、ムネ、また……いや、気のせい、気のせいだ……。

だとしても、自己認識は最後の一线。得られた精神の安寧所に出来る限り自身を置きながら、少し的のズレた理屈で実状を捻じ伏せる他得なかった。そうしなければ、変化した日常に蝕まれてしまうから。

「レイ！ と、カゾノだったか？ その皿洗っておいでくれないかい!?？」

「っ、はいっ……」

「あつ、了解しましたあつ！ えつと、『あそこのお皿を取って、そっちの流しに運んで！』」

昼。使用人としての仕事は、特に説明の無い装具の常態刺激の鈍化と首輪のサポートによって日に日に問題が減り、配膳と清掃の作業であれば滞り無く行える程度になっていた。

「はあつ……はあつ……」

「レイちゃん、気を付けて歩いてねっ、私も気を付けるから……」
先の立場の弱化とも相待ってか、キクチの監視指導は遠目の物になり、もっぱらカゾノが肩を並べる様に。

——いつの間にか、背、抜かれてる……。

親しげに歩調を合わせて歩いてくれる彼女とのその高さの逆転は、果たして相手が伸びたのか、それとも。

「っ……はあつ……」

切なげに眉をハの字にし、虚な瞳に涙を浮かべ、息を切らしながらも、心許ない足取りは魔法の助力を得て前に進む。それを遠巻きに眺める使用人達は口々に噂する。

「……最近、だいぶ動ける様になってない？」

「なんか、そうだね……」

「てか、めっちゃ可愛いくなってるよね、お漏らし姫」

「ね、伸びた髪凄く綺麗だよね」

「前は通った後青臭かったのに、最近はなんか良い匂いするし……」
散々滅茶苦茶な事があつたにも関わらず、家政婦長含め、懐疑的ながらもいつの間にか距離感は近付きつつあつた。

これまでの憐憫も去る事ながら外面はまともになってきた様に見えるのだろう。

寧ろ正反対なのに。

「っ……………あつ、の…………」

「? なに?」

「トイレ……………行かせて、くださいっ…………」

聞き届けたカゾノが遠くのキクチにアイコンタクトを送り許可を得ると、「大丈夫だって! あつ、えーつと、『トイレに行ってください!』」と彼に指示を出す。

手脚はその目的を受けて、やっと行きたかった場所に向けて動く様になる。尤も、手を濡らしたままだが。

「ああつ、手を拭かないとっ…………」

「間に合いつ、ませんっ…………」

「あつ、ああああく仕方ないっ急ごっ」

女子トイレの個室に辿り着き、彼はカゾノを急かした。

「っ……………くそっ……………はやくっ……………」

「あつ、そっかつ、あああつ、『おしっこして、どうぞっ!』」

「はっ、あつ……………っ…………」

指示を受けた瞬間、当人の意志二割、指示者の意志八割という割合で、指示の範囲内に都合良く改竄、修正された電気信号と魔力による筋力補助が働き、身体の内外から手脚が動かされる。

当人がスカート脱ぎたくても、その手はスカートの中、下履きだけに手を掛け、膝の辺りまでずり下ろし、脚は片脚だけを抜く。股座と下履きの間にぬらりとはしたくない糸の橋が掛かり、太腿を微かに冷やしたが、奥ゆかしげな動作はつつがなく続き、少しだけ脚を開いて

便座に座った。

「っ……はあっ……」

やっとの思いで排尿。水音が正しく便器の中を打つ。瞬間、噛み締める様にしてカゾノが歓喜する。

「っ……はあああああ、よかつたあああああ！」

「はあっ、しずかに、してくれっ……」

「うううっ、ごめんなさい……でも嬉しくてええ……」

「お漏らし姫」の呼び名に違わず、ここに至るまで数日間、カゾノの目の前で漏らす日々が続いていた。

本人の意志の反映が薄いとはいえ、意向に沿っていて、尚且つ指示者の意図が不明瞭な場合、細かい部分は本人側の動きが反映されてしまうのだ。

具体例としては、便座に座れず、下履きも脱げず。立ったまましようとしたり、もしくは全て出来ても脚を閉じたままして、脚に小水を伝わせたり等々、失敗は様々。

「大変だったじゃん……ここまでえ……？　ようやくトイレの動作指示が簡略化出来たんだよお……？」

ミマタの言葉が彼の脳裏を過ぎる。

「君のカラダはもう女の子。勝手にがちがう」

完全な身体操作でなく強制的な動作学習を意図した首輪の補助の仕組みや、オムツをさせず、普通の用便を目指す方針には、そういった狙いもあったのかもしれない。

こんな所でも、身体の変化を思い知らされる。尿の通り道が下に来て短くなった事、前に飛ばなくなつた事。尿の通る感覚から何から、まるで違つてしっくり来ない。

「もうそろそろ大丈夫？」

「っ……もう少し、ゆつくりさせてくれよ……」

「うー気持ちは分かるーでもごめん、もう出てないなら早く仕事に戻らないと怒られちゃうから……」『おしっこ拭いて』

「っ、ちよっ、まっつ……っつ……っ！」

おまけに、刺激が常時ゆるかくされ、常にとろ火で身体を燻される

様になったせいか。装具越しにも関わらず、深く甘い搔痒を訴える股間は軽い刺激を受けた瞬間に表面のみ灼け痺れる。

「っ、あつ、んあつ、ああつ……い！」

ぬちっ、ぬちゅっ。手に取りあてがった紙が水気を吸い切つて湿り、いやらしい音を奏で始める。拭いても拭いても、濡れて終わらない。

「ああつ、しまったつ……うわっ、拭いた側からつ……い！」 『拭くのストップッ！』

「あつ、んっ、んんっ……い！」

「ごめんねっ、吸水パッド交換するからっ、我慢して——」

発情は半ば無理矢理蓋をされた。

変化した肉体は安易に刺激されたり、尿意を放置されたりしなければ、以前の様に大量の汁を嘔く事は無い。

「はいオツケー……っ、大丈夫？」

「ふっ……い……っ、っ……い……」

代わりに、耐え凌ぐ事に神経を注がなければ狂ってしまう程にかく熱が籠った。常に悶々としていて、普通ならその場に伏せつてしまふような、そんな生殺しが続く。

気を抜くとすぐ瞳は座り、とろんと蕩けた。

「休憩まであと少しだから、がんばってっ」

しかしどれだけ惨めな状態でも、指示さえ受ければ手脚は動く。絶頂させられて腰が抜けたりしない限り、動けてしまう。

故にひたすらに加減された。ある種の待遇改善、そう表現すれば聞こえは良いのかもしれない。

カゾノとの行動がメインになって以降、共にある程度の失敗をしてもお咎めは無し。偶にあつてもカゾノが少し叱られる程度で、寧ろ甘やかされているのではと、そう思わせる様な事が増えた。

仕事が終わってからもう。

「はい、どうぞ。今日もよく頑張りましたね」

食事もさせる方針に変わり、一体何処で研鑽を積んだのか分からない、ハイレベルなハルノミヤの料理を出された。

夕飯は牛ヒレ肉、アボカドサラダ、豆のスープ。どれも食欲をそそぐいい香りを放ち、疲労と淫熱でバカになった肉体に空腹を思い出させ、腹の虫を鳴かせる。

「ーっ……っ」

「レイちゃん、お疲れ様！ ほら食べよ！」

「レイさん、いただきますは？」

「……いただき、ます」

「ふふっ、いいですよ。『召し上がれ』」

食べない訳にもいかず。食せば、綱渡りな精神は一時の幸福感を得られた。最初は気絶した時のトラウマを引き摺ったが、その問題は無く。以前より研ぎ澄まされた舌は、漫然とその豊かな風味を享受し悦ぶ。

——ほんとうに、美味しい……味覚までいじられてるんだろうか……今まで食べた料理の中でも、一番美味しく感じる……。

こんな場所と事情でなければ。そんな儂い妄想に酔いしれながら、彼は頬を赤らませ、瞳をうっとりさせさせた。横目に見ていたカゾノが、その艶やかさに思わずごくりと息を呑む。

「相変わらず、凄く美味しそうに食べてくれて嬉しいわ」

「っ……」

「本当ならマナーも教える所なんだけど、凄くちゃんとしてる。上品さは染み付いてるのねえ」

「うっ、うるさいっ……」

尤もそれらは精神的な余裕を限界のラインで保つ為の配慮。肉体への焦らしが目的であり、全ては本格化する夜伽教育の為に用意された準備でしか無かった。

「ああ、レイちゃん。やっと来た」

食事の後、カゾノに連れられ風呂場に行けば、そこでは細身の白い裸体が待ち受けており、二人へ向けひらり手を振る。

クリーム色で短めの髪、艶っぽく響く声。彼が識別するその前に、「シスイちゃん！」とカゾノが小走りで駆け寄った。

「久しぶりカゾノちゃん」

「もう腰は大丈夫なの？」

「うん、それはもう大分前にバツチリです。それ以上に過労が祟って休みが伸びちゃってただけど……まあもう万全」

その言葉を聴くと、「って事は、今日から……」と初心なツインテール少女の頬は赤らみ、目が伏せられる。

「そ。カゾノちゃんも、一緒にやります……？」

「えっ、遠慮しとくわっ……あっ、そうだっ！ この後ミマタさんに事務仕事任されてるんだっつー！」

彼女はそそくさと退散してしまった。

嫌な予感がして彼も堪らず出口を見たが、脚は動かない。

そこへ「まったく、あの子ももう少し嗜みを学んだ方が良いのに……」とシスイ。背後に回りそつと近付いて、取り残されたその心細そうな肩に触れた。

「んっ……」

「まあ良いでしょう」

そのしなやかな手指は鎖骨をなぞり、胸をそつと撫でる。「ひあっ」と跳ねる中、もう片方の手もスカートの中に入り、腰に回され、臀部をゆっくり這った後、本来ある筈の無い割れ目に当てがわれた。

瞬間、ぬちっ。音が鳴り、腰が浮く。

「ひっ、やめっ、あっ、ああっ……！」

「やめろ」と口にしようにも、熱っぽい肌は卑猥な手付きで忽ち泡立ち、官能を露わにする。はしたない声が出てしまいそうで声を張れない。

「だいぶ、出来上がっちゃってますね……」

「はっ、はっ、はあっ……っ……っ……！」

耳元の囁き。心音高鳴り、脆弱矮小な肢体が小動物の如く震える。腕は一度その邪気を解き、背後からそつと抱いた。

「すみません、随分と可愛らしくなっていたので、ついいきなり意地悪してしまいました」

曰く、今のが殿方の触り方であるとの事。恐怖を感じたのであれ

ば、いずれ克服しなければならぬと彼女はさらりと話し、彼から離れて正面に立った。

そして不愉快に顰められた涙目の童顔を覗き込むと、その心根を悟ったかの如く仕切り直す。

「これより、夜伽教育に入ります。女性使用人としては必須の教育であり、現状の貴方にとって最も重要な物ですので、心して取り組んで下さいね」

彼は何と言っているか分からず口をぱくぱくさせた。最中「じゃ、レイちゃん。『服を脱いじやつて下さい』と指示が飛ぶ。

身が強張る中、あれよあれよと手脚は給仕服を脱ぎ捨て、下着だけになる。

「まったく、なんか、嫌だ！　といかがわしきを感じ、羞恥を滲ませ抵抗しようと身をくねらせるも、僅かな時間稼ぎにしかならず。相手の目の前で、ぬちゃあ……つと、糸引く脱衣を見せてしまった。

「っ、クソっ、サイアクっ……！」

「ふふっ、気持ちには分かります」

「分かる、もんかつ……！」

「まあまあ。では、その給水場でたっぷり水分を摂ったら……始めましょうか」

準備が整い、他には誰も居ない使用人用の浴場広間で。二人は姿見の前、シャワーを浴びられる場所に立つ。

当たり前の様に女性化の進んだ自身の肉体と向き合いながら、気絶した記憶を思い返し強張る華奢な両肩。そこへ背後からポンと両手を置くと、シスイは言う。

「まず始めに。私が教えるのは、夜伽の際、殿方を悦ばせる作法。これまででは殿方の視点で、ある程度体験して、学んで貰っちゃいました……」

そしてポンプ式のボディソープを手にとると、彼の目の前に回り、自らの胸元に垂らして見せた。セクシャリティーを全面に押し出した動作で、妖艶に。

「はっ、何を、バカなことをやって……」

両胸を擦り合わせ少し泡立てた後、彼の上腕をその谷間で挟んだ。
「うあっ……！」

「これからは、我々奉仕者の立場で、実際に自ら実践して、学んでいく事になりますっ」

ぬつちゆぬつちゆ。音を立てながら肉体を押し付け、前後に動く。彼にとつては未知の行動だった。「なっ、何やってっ……！」とひたすらあたふた。

「ふふっ、ご存じ無いのですねっ……これがっ、奉仕の技の一つです。俗には、ソーププレイと呼ばれてますっ」

「こんな不埒で非効率で、不潔な行為のっ、何があっ」
両腕が終われば、今度は背中。

滑らかで艶かしい、柔らかな質感が熱い肌の上を滑ると共に、相変わらずぞくりとする様な静かで妖艶な声音が耳元を擦る。

「うっ、ひああっ……！」

「あつつっ……んっ、ふふっ、レイちゃんの身体あつついっ」

「つう、ひんやりしててっ、すべすべ、もちもちっ……っはっ、なに
いってっ……んはあっ」

「すべすべもちちは、お互い様っ……んっ」

「ふあっ、っ、やつ、っ！」

それも終われば、残された前面。

「うあっ、こんなっ、こんなあっ……！」

「こうすれば、お互いの心音が伝わって……えっちな気分になっ
ちやいますよね？」

胸同士だと相手の固い乳首が装具の凹凸に少し引っ掛かったりして、こりんっ、こりんっと弾ける。

その度時折漏れる、二人の女子の如何わしい喘ぎ。低い女声が悩ましげに唸れば、高い声が初心な嬌声を上げる。

何度も行ったり来たりを繰り返し、互いの肌と肉に存分に感触が覚え込まされると、その頃には小さな方の上半身はすっかり泡まみれに。

「っ、ね？ 気持ちいい、でしょう？ とまあこんな感じで女子の身

体同士だと、様々な点で感覚が違う問題がありますが……先ずは練習という事で、んっ、はいっ。今のを、今度は貴方が、私を殿方に見立てて、して下さい」

「そっ、そんなはしたないことっ……くうっ！」

拒否権は無い。初心な彼は恥ずかしがりながらも、その手脚を動かされ、ぎこちない動作で先の手本をなぞった。

「首輪の機能、こういう時に便利ですね……ある程度、加減も効きますし」

「やだっ、っ……はううっ」

「……そう。装具が少し邪魔そうですけど、そうやって垂らして……胸でぬりぬりしちゃって下さい」

「こんなことっ、やらせてもっ……くふうっ」

そのまま暫し進行するも、相手にされると、此方がするとは大違い。

「氣をやったりは、大丈夫そうですね……キツそうですね」

「くうっ、よくもっ……っんっ、んんっ……！」

潤滑剤を纏った柔肌同士は思いの外暴れ、先程の様に手際良くは行かない。

気絶する程では無いものの、身体は狂おしい程に熱く、最早谷間と装具越しの胸で擦るともどかしさで腹がくねってしまふ。

「あーんもうっ、焦れてきちゃいましたっ」

「んんんっ！」

向き合った所で、不意に唇が重ねられた。

彼の脳髄は一気に痺れて、腰が砕け倒れそうになる。

が、抱き止められ、息のかかる距離で彼女に叱られた。

「んちゅっ……ふっ、だめですよっ、殿方側に突然キスされちゃう事もありますっ……そうなつても、ちゃんと奉仕、続けて下さい」

「っ、そんらのっ、むっ……んんんっ！」

何とか上半身の工程を終えても、今度は下半身。

「今度は、お股に垂らして……んんんっ」

「そっ、バカな、ことおっ……！」

股間で相手の太腿を挟んで、前後に擦る。

先程と同じく軽く手本を見せられた後、実践。

「っあつ、はあああつー！」

「ほら、頑張って動いてっ……ああつ、そんな自分ばかり善がる動きじゃ、殿方を怒らせちゃいますよっ」

「くっ、くそっ……くそおっ……！」

「悪態も厳禁ですっ、そんな子は……こうされちゃいますっ」

「んああっ、ー！」

またしても不意の刺激。胸を鷲掴みにされ、背筋が仰反ると共に、瞳はくりんと上擦る。

「っ装具越しだからかもしれないませんが、まだ硬くて芯がありますねっ……もつと大きくなりそ」

「やめ、っ、あつ、くるっ、あつ、ああつー！」

「っ？・ちよつと待っ」

腰は浮き、刹那、びくびくびくっ！ シスイの太腿の上、跨った華奢な肢体は浅ましく達して痙縮。「あつ、っ、んおっ、おっ……！」と腹筋を激しく凹ませた後、ゆっくりと弛んで粗相した。

しいっ、しいいい……。微かな水音と共に、その箇所が泡が流れていく。

「……はあ、これは、大変ですな」

「っっ……んううっ……」

「私を殿方に見立てて、と申しましたのに、こんな簡単に粗相をしちやうなんて……」

その時、終始彼に対し比較的柔和だった彼女の言葉は微かに震え、怒気が込められる。

察し、直ちに「もっ、もうしわけ……」と謝罪の言葉を彼は取り繕おうとした。が、間に合わない。装具が体内で動き始め、更に淫紋の辺り、彼女の手が添えられ、程良く圧される。

「んあ、っ、っあつ、っ？」

「胸を揉まれたにしても、腰を逸らすなり、もつと早く申告するなりあつた筈です。おしっこ掛けて悦ぶ変態さんですか？」

「ちがつ、ほんろにつ、わかんによつ……うあゝっ！」

「言い訳無用です。私が殿方だったならどうなるか……分かってますよね？」

「もうしわけありませつ……んんゝっ!?？」

最奥がノックされ、腰が跳ねた。くりりとした紅の瞳は見開かれ白黒する。

圧迫に合わせて、絞り出されるかの如く装具のスリットからは淫汁が噴出。「んはっ、くああつ……！」と口元は苦悶に舌を放り出した。

「まだ初日だから多めに見たい所だけど、ごめんなさい。仕事は手を抜けないタチなんです」

内部の蠕動が徐々に早まっていく。耐えようと腰をくねらせたり下腹部を強張らせても逆効果。外側から押す指先が的確に硬く張り詰め、コリコリした部分を押し、鋭い官能によってより追い詰められてしまう。

「あつ、子宮の下にも痼りが……これが言われてたやつかな？」

「つあつ……つゝ……！」

「凄い効き……まあいつか。今後の為に、どうなるか。今日キチンと覚えちゃって下さいっ」

「ふうゝつゝゝゝ」

その日の彼の記憶は、一度そこでぷつぷつと途絶えている。頭は良く覚えていなかったと言えよう。

しかし身体は、しつかりと覚えていた。

その後暫く後の、ぬるめの温度に設定された浴槽の湯の中。浸かり惚けた幼気な少女の顔貌は、緑色に光るシスイの腕の中でふと気付き、瞳に淡い光を灯す。

「……つ……はっ……ああつ……」

「あ、起きましたか」

舌に、胸に、臍下に。深く重い快感の跡がしつかりと刻み込まれていた。

そこから記憶が朧げに滲み出し反芻される。官能中枢の芯の部分

が直接刺激され弾ける、激しく深い、快感の数々。

「ああっつ……ふあああ……あ……」

熱が溢れ、融解する。湯船の中ぴんと脚を伸ばし、またしても粗相してしまった。

「ああっ、はしたないですよ、もうっ」

「つつっ、ごめ……なしや……」

「まったく……この後ベッドでもまだ続きがありますからね」

「はっ……う、そおっ……っ……」

「本物、本番はこんなものじゃありません。私はまだ生優しい方……あっ、寝ちゃダメですよ」

十三話 墮淫

渴いた寒風吹き荒ぶ、ある夜の事。

とある邸宅の、外とは対極の暖かくじつとりと湿った一室。

仄暗い室内を漂う淫臭、獣の息遣い。肌と肌のぶつかり合う音と、女の喘ぐ声とする。

「あつ、つぐつ……ふう、うつ」

仰々しい飾りのついた柱と、赤と金色のシルクの天蓋に囲われたベッドの上、汗に塗れ朦朧とする端正な女の横顔と揺れる黒髪が淡い灯に照らされ浮かぶ。

その頸の下、長身細身の美しい肉体のシルエットを背後から包むは、丸い巨漢の影。

「ほっ、良い締めりですなっ」

「はっ、あ、っ、あ、あっ」

ぱんっ、ぱちん。スパンキングの音が響く。合わせて反り返る女は、のぼせ上がった頭でつい少し前のやり取りを幾度も思い返し、悲嘆に暮れる。

何故ですか!?! 私を信頼し、任せると申していた筈——

ほっほ、そうとも。私は君に任せた。結果、君は信頼に答え、見事にやり遂げてくれましたな。

っ、嫌がらせを、ですか？

うむ。すっかりあのクソガキを追い詰め、苦しめてくれました。役目としては十二分でしたぞ。

そんな事はっ、まだアレは完全には折れてませんっ！ もっと痛め付け、苦しめる必要がありますっ！

落ち着きなされ。身体が女子になった時点で折れたと同義。ヤツは終わりです。

ですがっ！

他の名代だけでなく国主も関わっているんですぞ？ わきまえな

され。

かの私兵の言った通り、主人の興味は既に失せていた。彼女の仇は彼にとつてはもう、過去討ち捨てた者の一人に過ぎなかったのだ。

なっ、ならばっ、ならば私をつ……っ！

辞めさせはしませんぞ？ 自由にさせれば、何をされるか分からな
い上、信用問題に関わつてしまいますからな。

そ、んなっ……。

それに……今の貴方は実にいい顔をしている。この点だけは、あ
のガキに感謝しなければなりませんなあ。ほっほっほ。

暇を持て余した強欲な権力者は、新たな愉悅を欲しその矛先を女へ
向けた。

暗い瞳から溢れた涙が頬を伝う。

「どうですっ？ 貴女の本来の役割。思い出せましたかっ？」

「っはいつ、はいつ、私はっ、貴方様の性奴隷っ。拾われた御恩を、
身を以てっ、お返しするのがっ、私の役目っ……っ。」

女は持ち上げられ、体位は後背位から騎乗位の形に変えられた。

勢いで黒のランジェリーが捲れ上がる。その下腹部には、奴隷とし
ての証が鈍い桃色の光を放っていた。

「いいでしょう。我が精を受けない」

「はっ、あ、っ、あああああ、っ——」

翌朝。その女は何事も無かったかの様に冷徹な表情を取り繕い、胸
の前で腕を組み、首筋に汗を流しながら、使用人の寝泊まりする一室
のドアを開ける。

出迎えるのは、鏡の付いた化粧台の近辺の床を掃くツインテールの
少女と、散髪道具らしき物を片付けているふくよかな女性の女衆二人
の視線。

尚、彼女にとって用事のある人物はその二人の間。椅子にちよこん
と座り、背中を丸め目を伏せている、かつて生意気な少年だった者の
成れの果て。この場で最も小さくか弱そうな、白銀長髪の可憐な少

女。

「おはようございます」

「あら、おはようございます」「あつ、おはよう、ございます」

「……おはようございます」

三者三様の返事が返る中、彼女は部屋の中へカツカツ硬い靴音を鳴らし歩みを進めると、その少女を横目に見下ろし、有様を眺めた。頸がすっかり隠れる程伸びた髪。それと同色の、二重瞼が少し重そうな位ボリユームのあるまつ毛。日々女性らしさを増す体軀、丸みと嫺やかさを帯びていく輪郭全てが荒んだ女の心を慰める。

「……はあ」

昨今特に変化著しいのは、本人は気付かないであろう尻。給仕服のスカートをパンと張り上げその存在を主張し始めている。

彼女は心中嘲らずにはいらなかった。口元は感情を噛み殺し吐息一つで済ませるも、冷徹な瞳が、微かに恍惚の笑みを浮かべる。

——この姿、一目見て頂けさえすれば、もしかしたら……。

「キクチさん？ 本日は如何様で？」

ふくよかな方がやんわりと尋ねた所で、微かに咳払いし仕切り直す。

「本日は検診が御座います。支度、宜しく願います」

上方、長方形に広げられた機構腕からの光降り注ぐ、ひんやりとした診察台の上。白衣に防毒マスクの女の前で、彼はまな板の上の鯉になる。

意識のセーフティスペースに籠り、記憶の神殿の中、只管に退屈を凌ぐ事に執心して、表情を出来る限り殺し、静かに息だけを吐く。

「んふふう、すっかりしおらしくなっちゃってえ……あつそういえば前の検診では意識無かつたんだっけえ？」

はつきり意識ある状態では、一つ飛んで実に数ヶ月振りの検診。

「おち○ちん無くなった後はまだお話してなかったよねえ!?」と、わざとらしく神経を逆撫でする様な女声が俄かに嬉々とした。

彼は暗澹とした感情を隠せず吐露してしまう。

「……はやく、すませてください」

「ええ〜？ いけず過ぎない？ 訊きたい事いっぱいあるんだけどお〜」

機構腕の一本、その先端。模された手指のうちの人差し指が脇腹をうりうりと突いた。

こそばゆさと鬱陶しさに堪えかね、虚な童顔は豹変。「知るかつ……こっちはお前に付き合ってる余裕、無いんだよつ……！」と怒気を露わにする。

防毒マスクの女は「うおうつ、いつものツンケンした感じ、まだ残ってたんかいっ！」とダボついた白衣を振りたじろいだが、素振りだけ。「でもでもお〜」と身体をくねらせ、頬擦りし始めた。

「ぬっふふふふ、前よりも更に増してえ、すんごくかあんわえよおお……あああゾクゾクするう」

「気色悪いっ……死ねっ……！」

心の底からの悪態も、相変わらず甲高く迫力が足りない。下劣な笑い声は止まらず、突然「あつ、ミマタさん！」と首を他所に向けて見せる。

彼はひゅつと喉の奥を鳴らして一瞬青ざめてしまった。嘘だと分かっているのに。真に余裕が無かった。

「ふひひひひっ！ …ごめんつい意地悪しちゃったあ〜！」

毎晩の夜伽教育が、心身を着実に蝕んでいた。

使用人としての仕事が終われば行われる、風呂場と、ベッドの上での淫行指導の数々。覚えさせられたはしたない言葉や、知りたくなかった行為が、退屈や不快感を感じた瞬間頭を回ってしまふ。

その日その時過ぎたのは、クシヤクシヤのシートの上。この不毛な教育が始まった日から当日前夜に至るまで、毎晩延々とさせられていた、〃逸物を模した張り方をしゃぶらされる〃という記憶。

——これを口の中に含んで、練習しましょう。

っ、そんな太いものっ……んっ！

鼻を摘まれ、無理矢理口を開かされて、太いそれを喉奥に挿し込まれる。

そして胸や尻を揉まれたり、内腿や、股を擦ったりされながら、抽送される。

フェラチオは今の様に身体の消耗している時でも奉仕可能な手段の一つです。舌をしつかり使って……ダメです、ちゃんとやって下さい。分かるんですよ？

んんうっ！ んんううううっ！

上手く出来ないと殿方の響感を買っちゃいます。必須技能ですから、出来る様になるまで毎日練習を——うーん中々上手く出来る様になりませんね。化粧の飲み込みは早いのに、こっちはどうしてダメなんでしょう？ 私教え方にも自信あるんですが——
今晚もやらされると思うと、憂鬱な感情と共に腹奥から淫熱が込み上げる。

必死に記憶を捨てようとしても、脳内のゴミ箱は類似する物でもう満杯。蓋の重しを増やさねば忽ち溢れ、嗅げば淫臭が香り出す。

「——っ、もう、いい……かってにしてください……」

「ああんごめんつてばあ〜」

「かってにしてくださいと、いったはずです……全てムシ、しますから」

「まま、そう言わずう、今から触……も兼ねたいつもの問診？ ってやつするからさあ〜」

服を剥かれ、白衣の背から伸びる蜘蛛脚の如き機構腕によって手脚を抑えられれば、苦悶の時間の始まり。

まずは胸の装具の密着が解除され、ペろん。取り外されて、赤く膨れた乳輪を先端に乗せた白桃色の双丘が露わになる。

瞬間、空気が淫毒と化し、じゅわあつと覆われていた箇所を蝕んでいく。「あつ、っ……」と甘く熱い吐息が漏れると共に腹奥まで浸透して、イカの腹にも似た未熟なアブクラックスが微かに痙縮した。

「うわあ、かあいとおっぱいちゃん、また育ってるねえ〜。発育が強過ぎるせいか乳首がちよつと埋まっちゃってるけど、色も形も綺麗〜。感触はどう〜？」

白衣の袖が捲られ、ぴちつとした白い手袋をした手が出されると、それがワキワキと怪しい指の動きを繰り返しながら膨らみへと近づく。

彼はキュツと口を結んで備えるが、向こうはお構い無しにもみゆり。掌で真正面から包み揉んだ。

「んっ……ふっ、っっ！」

激しい快感電流が生じてつま先から頭の天辺までを駆け抜け、全身が震える。

必死で声を堪えるが、「まだちよつと硬いかなあ」と確かめるが如く弄られてしまい、吐息は徐々に切なげに鼻に掛かり出す。

と、その時。

「つて、おやおやあ〜？」

ぎゅつと強く揉み潰されてしまい、「んっ、うっ！　っっ！」と細い腰は二、三度、ふわっ、ふわつと浮き上がった。紅の瞳の奥で白い閃光が走り、白黒する。

尚、相手の関心はその胸の感度に非ず。圧迫と同時にその埋まった先端から薄らと滲み出す、白い液体にあった。

彼女は更に数回試す様に揉んで彼を悶えさせた後、その正体を告げる。

「あつりやあく、これ、母乳だねえ」

「っ、はあっ……!?？」

当然彼にも知識はあった。言葉に驚愕し、普段は目を逸らしている自身の胸の先を一瞥する。

すると確かに。赤くぷっくり腫れた半球の中央、その窪みは乳白色の汁を湛えていた。

「えっ、なっ、にいつ……っ!?？」

「大丈夫う？　張って痛かったんじゃないこれえ〜？　てか今どう？　これ痛い？」

「あっ、あっ……!?？」

もぎゅつ、もぎゅつ。更に揉まれれば、圧迫に合わせて汗はその量を増し、窪みに留め切れずっつと柔和な山肌の上を伝い落ちる。

そこに痛みは無かった。あるのはただ、滲み出す汁と比例した甘くてじんつと腹底に響く官能のみ。

「ううくんあんま痛そうじゃないなあ。結構強く揉んでるのにい。ミマタ氏痛覚変換切り忘れてない？」

その感覚も光景も、彼はまるで状況が飲み込めず俄かにフリーズする。

これだけ膨らんでいるだけでもおかしいのに。通常妊婦だけが乳房から出す、赤子の為の命の源。それが何故自身の胸から出ているのか。

理解が追い付くその前に、女はガスマスクを外し、口元だけを出してペロと乳汁を舐めた。

「うあつー！」

「つあんまあつ。味もちよつと濃いめだなあ」

原因は、彼女にもまだハッキリと説明が付かないらしい。「追って精査するとしよおう」と後回し、続けて手際良く尻と股間、双方の穴を埋める装具の圧着が解除され、ずるずると引き抜かれ始める。

「まつ、あつ、くああ、つー！」

はつきりと張り型の形をした尻穴の物は兎も角、股間の割れ目の物が出て行く時は思いの外細い。

にも関わらず彼は強烈な刺激にのたうち、その過程で情けない悲鳴を上げた。

しかし「はい暴れないでねえ」と腰まで抑えられ、呆気なくちゅぽんつ、と抜かれてしまう。

「はあ、つ、ふつ、あ、あああつ……！」

離れていく、糸引く装具。

拘束が解かれ、支柱を失った鉢は微かにそれを追いかけたが届かず。

「つ、うあつ……あ……！」

ひくひく、ひくひく。空いた二つの穴をひくつかせ、その一方からはごぷりと粘液を吐き出しながら暫し震えた後、力を失いくたりと堕ちた。

「はあゝ——……あゝつあゝ——……！」

「んっはあ……すっごいメスの匂いい……」

解放された、蒸れた二オイ。癖になる甘酸っぱさを含んだ濃密な性臭が辺りに広がる。

——ああっ、だめらっ……これっ、はあっ……。

腹の内を淫熱が回り、それに堪らずきゅうつとその芯が強張れば、熱の一部は蜜となって股下から溢れだす。

さながら膿んだ傷口の様。反射で内股を締めると、割れ裂けたその箇所がはつきりと分かってしまう。

「……もお、前見た時から更に一段と女の子……っっていうか、雌になつたねえ〜」

「ふっ……ぐうううっ……」

情けなさで殊更に大粒の涙が零れ、頬を伝った。

貶める言葉それ自体だけではない。あろう事か、肉体がそれに対し興奮の反応を示し始めたのだ。

「うっ、っんうっ、ふうううううっ……！」

一層惨めさに拍車が掛かって、しかもその惨めさまで何処か甘苦しさを覚えてしまう。

恥も苦心も、毒された心身では淫らな方向へ向かっていく。最早問題無い感情は、全てに對する怒りだけ。

「んっふっふっふう〜」

尚、相手は苦悶する胸の内を見透かしたのか、何やら不穩に機構腕を駆動させ始めた。

二本を繋ぎ合わせ半球状に変形させると、「ほおれご覧」とそれを白銀髪の頭部に被せ、光を流し込む。

すると彼の瞳の奥に直接、彼の肉体変化の記録の数々が転写される。

「いっ、っ、いやっ、っ、やゝあゝあああああゝあゝ！」

目を瞑っても無駄。映る物は消えてくれない。克明に脳裏に焼き付けられる。

腕で取り払おうと思っても腕が動かない。故にただ身を捻って必

手指は我を忘れて迷走しだす。上は乳首を、下はカリ首を。双方持ち易く扱い易い、訳知った突起を探し求め、熱っぽく灼け痺れる肌の上を這いずり回った。

「っ、はあ、っ、はあーっ、っつ？　っー……？」

凸部がダメならと、疼く尻穴に細指を挿れてもやはり同じ。想像通りの気持ち良さに届かず、装具の快感を知っているだけに、差を感じて仕方がなかった。

ならばともう一つ空いた筈の穴を探すのも、いまいち何処か分からない上億劫で、ひたすら陰核近辺を空回ってしまう。

まだるっこい電流が生じて、悩ましげに身はくねる。内腿は擦り合わされ、兎角取り留めなく動く。滑りが股の間に広がり手指の滑りが良くなれば刺激はより甘くなるものの、こそばゆさに耐え切れない。

「っあつ……ふっ、っー……？」

視界に映る自身の姿が、その答え合わせと言わんばかりに少女の裸体に変わり、更に変化を続ける。

ただだからといって一致はしない。彼は女の身体など知らない。ましてや体感の事など、知る由もない。

——ちがう、これは、ちがうっ？

けれども確実にその様に退廃的倒錯を感じてしまい、心拍は壊れんばかりに上昇する。

浅い呼吸が何度も吐かれて、時折喉に引っ掛かり、悶々とした女声が絞り出される。

何処にも収まらず、落ち着かず。そんな肉体に頭は煮やされて、何もまともに考えられない。延々と不毛な行動を繰り返す。

「ふーっ、ふう、っ……っ、んう、うううっ、っ……？」

本来の聡明な彼であればあり得ない、この上なく愚かしい姿。

防毒マスクの女はくつくつ笑い声を押し殺した後、赤子をあやす様な調子で言った。

「だよねええ、分からないよねええ」

曰く、女体化して早晚手脚の自由を奪われてしまったが故の弊害。自身の身体に自由に触れる機会を失い、装具に性感制御を頼り切った

結果だと。

「鏡での自己認識修正を重要視させてたけどお、同期させなきゃ意味が無いもんねえ。そもそも男の子の時のオナニーもだあいぶぎこちなかったし、無理もないよなあ」

舗装された道を歩かせ過ぎたと彼女は反省し、そして言う。

「仕方ない。可哀想だからあ、お姉さんが手取り足取り、教えてあげよお」

脳裏に映る映像が現在に追い付いたその時。機構腕で両脚を持ち、股を開かせると、彼女は生身の手の方で彼の手を取った。

映像の中の少女も、同じ様に動く。今現在の己の身を俯瞰させられる。

「ひっ、あうっ……っ？」

「基本的に臆病なんだよねえレイちゃんは。前は浅くても満足出来たかもしれないけどお、女の子の身体は深あいからさあ」

陰核下にあった中指を摘み上げ、その腹を割れ目の筋に押し付けながら、更に下へゆつくりと誘導する。

「やめっ……っあっ」

「指先も細く弱くなってる分もあるしい……もっと大胆かつ繊細にやらないと」

つつ。蜜をしとどに湛えた入り口に指先が触れ、そのままつつ。

浅く侵入。指の爪の根本までが体温に包まれフィットした。

「うああ、あっ！」と情けなくて甘ったるい悲鳴が上がる中、それはゆつくりと掻き混ぜる様な動きを見せた後、更に奥へと挿入していく。

「あっ、ああああっ……っ！」

「どおう？ 気持ち良いでしょお？ 『自由にシていいよお』」

「あっ、んなこと、なっ……っいつ、んいつ……っ！」

ずっぷり。あっという間に中指は根本まで飲み込まれてしまった。

「いつ、いやっ、んう、うっ」と首を振るも、完全に未知の感触に翻弄される。

「うそつけえ、自分でぬぶぬぶしてる癖にい」

「それっ、はあっ……」

まるで別の生き物の如き肉の筒の内壁、可視化された無数の肉ヒダに包み込まれた指が、己の意志でうにうにと動いてしまう。別の物だと思いたいのには、指も肉筒も明らかに彼の物。双方生々しい触感がしつかり伴い、その意識を引き込んでいく。

「あっ、だっ……う、っ……！」

身体は、どう足掻いても既に装具で教え込まれた感覚を追う。

導かれた先に近しい心地良さがあって、苦悶から解放される確信が得られてしまった。それに抗えない。

——っやつ、ここっ、ここっ、すぐっいいっ……！」

「こあっ、ちがつ、あっ、ああっ……！」

「おお、気持ちいい所、見つけたかなあ？ どれどれえ？」

俯瞰映像の少女の下腹部にスポットライトが当たり、妖しく光る淫紋の浮き出したその向こう、細指を包む媚肉が透視され、弄っている場所が明かされる。

「んな、っ、あ、っ……！」

「おおくやつぱりい！ 開発済みの男の子の頃の名残りが好きなんだねえ。慣れ親しんだ場所って分かるのかなあ」

若干張り痾る、肉筒の中腹少し奥側辺り、輪のように巻き付いた組織。指先はその一部を圧していた。

くにくに、こりこり。感触を転がせば、尻穴を弄っていた時の快感が更にダイレクトに、鮮明になったかの如き官能が走る。

脳髓で火花が散り、肢体は映像に合わせて淫らにくねった。

体感と俯瞰、双方で暗い悦びが湧き上がる。意識が、耽溺してしまう。

「あ、っ、っ、へう、っ！」

「実質大きめのGスポットだもんなあ、気持ちいいよねえそりやあ」
視界は何度も白んで、射精時に近似した感覚に断続的に苛まれる。

赤らんだ頬の少女は陶醉し、瞳を潤ませ舌を放り出した。股倉から浅ましく潮を吹き、そのあどけなさからは想像も付かぬ程爛れた色香を放つ。

「でもお、そこは男の子の頃でも味わえた部分だからねえ」

しかし、その快感ですら装具が示していた手本とは異なっていた。この上なく気持ち良い筈なのに、更に上が有ると分かってしまう。

彼は更に欲する。

何かが足りない。もつと奥、もつと、もつと――

「もつと冒険してみい？」

再び女に手を取られ、深みを目指そうとしていた指先は少し浅い場所しか弄れなくなる。

これでは届かない。「にやつ、じゃま、するなっ」と不快感を露わにしたのも束の間。抵抗の為力を入れた指の腹がぐいと陰核の根本、裏側を圧した刹那、ぶわっと濃厚な官能が広がり「んきゅっ?!」と全身が仰反る。

「うゝ……うゝ……うゝ?」

再現しようと先の動作を反芻した。場所は分かり易く可視化されている。

同じ様に、同じ場所の粘膜をぐっ、ぐっ。圧して捏ねて滑らせれば、忽ちそこから火の出る様な快感が広がって虜となった。

「んはっ、っ、っ、っ、っ……!」

「おっ、いきなり当たったねえ」

教えられる。「一応そこが本当のGスポットだよ」と。そしてそこを弄りながら、もう片方の手で胸を揉む様誘導され、その通りに揉み上げた。

すると全身は深い快感の熱湯の中に沈んだかのような錯覚を覚え、ふわり。浮遊感の中彼の意識は白んだ。

「あっ、――っ、あ、あっ……!」

腰がくんと突き出て、挿入している指が肉壁に締め付けられ、搾られた胸の先から母乳が滾々と湧き出す。狂おしい切なさに、肉体はひたすら淫靡に悶えてみせた。

それが、長い。終わらない。男子の頃ならば一時頭の熱靄が晴れて少し落ち着く類いの、体外へ迸る絶頂。なのに、寧ろ彼の頭はぼーっとして蕩けたまま、帰って来られない。

あつ、あ、そうか……やっぱり、そうなんだつ……。

逸物を、厳密には射精という区切りを失つてからの絶頂の質の変化をその時はつきりと理解し、絶望した。

これ、おわらないんだあつ……だから、わからなかったのかあつ。腰が動けば、指の刺激が勝手に入る。女性らしく広がった骨盤が前後に滑らかに揺れて、蕩ける快感を浅ましく貪ってしまう。

「今のでイけちゃったかあ」

遠い女の声が近付き、「でも、まだまだあ」と彼の耳元で告げた。股倉を弄る手に添えられた彼女の手にまた力が入り、今度はぐつと奥へと押し込んでいく。

「あつ、へあ……あつっ」

「ほらっ、分かるでしょおお？ 一番奥のところがあ、さつきより浅くなつてるのお」

「つやっ、つ、ふっ、ふうっ、ふっ」

本来存在しなかった筈の通り道の先の終点。袋小路。

彼は直感的に察知した。その場所こそが、官能の核心であると。「今ならきつと届くよおお？ ほらあ、もう少しっ、あとちよつとでえ」

「うっ、つ、やえっ、つ、しよこお、つ、つ」

滑る肉襞の中を滑り下り、未だ冷めあらぬそこへ、細い己の指先が伸びていく。

——だめだつ、むりっ、それは、ほんとうにっ……おわつ。

つにゆっ。呆気なく触れた。瞬間、ダイレクトに脳髓が撫でられた様な感触が走り、彼は求めていた答えを得た。

「おっ、つ、ここお、つ……おつ、お、おっく——」

知ってしまった。己の全てを支配する物を、感覚を。

「きもひっ、いっ、つ……んお、おおつ、つ、んお、つ、いつ、ひあっ」

知った指先は、もう迷わなかった。指の腹はその核心部を撫で弄べば、力を入れ曲げた第二関節が肉輪を押し、官能の芯たる肉の筒は拓かれる。

くちゆくちゆくちゆくちゆ。はしたない水音が脳に響く。咽頭に引つ掛かる甘い嬌声も止まらない。

「ああっ、ああっ、ああっつゝゝゝ——」

そうして己が何をしているのか理解しているにも関わらず、彼の中で混ざって、弾けてを繰り返す。終わらない、終わらない。

「後は……大丈夫そうだねえ」

狂い咲く小さな淫華を見下ろす、防毒マスクのその向こう。狂気の瞳は好奇に揺れ、添えていた手をそつと離れた。

十四話 分岐点 前編

「問題とは何ですか？」

国の要人達には、秘密裏に連絡を取り合う秘匿回線が存在する。

ある日、ある時。魔力によって生み出されし仮想の現実空間にて、六つの影はやり取りした。

「おや、フクマ殿はご存知でない？」

「いや知っていますとも。ただ何が問題なのかと話しているだけですな」

一つ間を置いて、国の声を代理する進行役は主題を述べる。

「皆様周知であると思いますが……ドクターヘルゼンより報告がありました。某母胎、通称零番の魔力成長が、想定を大幅に上回ったとの事です」

より詳細なデータが一齐送付される。

そこにはすっかり変わり果てた少年の肉体の胸元から漏れ出す乳白色の液体が、過剰化した魔力の漏出現象であるという結論が書き記されており、以下その根拠とされる見識の数々が列挙されていた。

予々不安視されていた事態がいよいよ現実味を帯び、一部を除いて一同呆れた様な溜め息が漏れ、騒つき始める。

「おやおや、美しく成長なされましたなあ」

「ふん、あの想定を更に上回るとはな、恐れ入ったわい」

「厳しい待遇が、器の更なる成長を促したのか……？」

「おいミズチの！ お前の所の飼い犬が余計な事をしたからなんじゃないのか？」

「ふ、フクマ氏にも責任がきましょう！ 自分の所の愛人なんかを主任にするなんて、適当が過ぎる！」

六つのうち四つの影の矛先は、緩やかに此度の責を追うであろう二つへ向く。

が、双影の内の片方、大きく丸いシルエットは「ほっほっほ」と笑っ

て見せた。

「先程申したままですな。これの何が問題なのですか？ 国母の著しい成長ですぞ、喜ばしく思うべきではありませんかな？」

「んなつ、分かって無いのか!?？」

「念の為訊いておくが、玄霧の若造の方は？」

厳つい男の声の問いに、尋ねられた一つの気怠げな影が静かに首を横に振った。

進行役は苦々しく「フクマ殿。幾度も言われている通り、この計画は子を成さなければ……」と口にする。

が、その声はふくよかな笑い声に遮られた。

「ほほっ！ まったく、何事にもサブプランというものは用意されているのですよ！」

直後、一同の前に新たなデータが送付される。

「む、なんだ」

「……は？ は？」

その内容を一瞥した者達は俄かに総毛立つ。

仮想紙面は思考が過去で止まった軍部が筋書きを書いたかの如き前時代的絵空事の大きく躍る、一見短絡的な見出しで始まる物だった。

しかし、書かれている詳細を読めば、彼らは考えざるを得なくなる。

「責任逃れの為の虚言にしては手が込んでおるが……おんどりやあ、これ本当なんだろうなあ？」

しわがれた老人の声が真つ先に凄んだ。

対し、相手は全く動じず。「安心なされよ御大老」と一蹴してみせる。

「他の御不安な方々も。そこに書かれている事はミズチから提供されこの私が精査したものの。嘘偽りは御座いませんで」

「これは、凄いぞ……本当なら、この国は世界を牛耳れるっ」

若輩の影が一人歓喜した。

素直に喜んだのは彼一人だったが、覇権を狙う人間は皆心中穏やかでは無かつただろう。

「して、国家元首代理殿。如何様に？」

「……閣下に伺わねば、何とも言えません」

「うむ、それはそうですね」

大きなシルエットは両手を広げてその場を仕切って見せる。「この場今すぐには決め兼ねましょう。皆一度持ち帰って、それから、という事で宜しいですか？」と。

元首代理が先送りの意思を決めた以上、その場にいる者達に反対する者は居なかった。

流れのままに解散の号令が下った。その中、真つ先に切り上げた者が一人。「朱馬^{あかま}」という立て札の置かれた執務室の机の前、仮想現実から意識を戻してすぐに一つ荒々しく息を吐くと、気怠そうな皺の深い顔を俯かせ静かに愚痴を溢す。

「……この狸めが」

そこへ「如何でしたか」と問う、涼やかな男の声。

美しくキレのある面長の容姿、黒の短髪に青い瞳の、黒いスーツを着た若い長身男性が、赤茶けたスーツ姿の執務室の妙齡主人を出迎える。

「お前の読み通りだ……早急に動く必要性が出てきた。急ぎ国主を説得する資料を作れ」

「承知しました。して、潜り込ませた彼女らは」

「機を見て動かす……」

「早い方が宜しいかと。かの切り札を切って来たという事は、向こうはかなり強引に動いて来るでしょうから」

彼はそう言い残して、慌ただしく部屋を出て行くこうとする。

妙齡主人は「待て、クロギリ」と彼の名を言って呼び止めた。

「そろそろチハヤ君に伝えた方が良いのではないか……？」

「……………いや」

知性深き青の瞳が物憂げに細まり、「これは我々大人が起こした事態です、我々が対処せねばなりません」と返す。

「何より、あの子の大事な時期に、煩わせたくはない」

「そう、か……」

「急ぎましょう。子供達の為にも、ここで負ける訳にはいきませんから」

霧の掛かった日々はあつという間に過ぎて、年の瀬。

世間一般では殆どの者が休みを取る期間であろうとも、使用人としての仕事に休みは無い。

昼間、しんしんと積もる屋外の雪景色と同じ色合いの髪を揺らす給仕服姿の少女レイは、結露した窓の掃除を言い渡され、ボロ雑巾を手で冷たいガラスを拭いていた。

「はー……はー……はー……はー……」

熱い吐息が、意図せず外と内の境界を曇らせる。

引き攣る腹部をくの字に曲げながら、彼は人知れず葛藤していた。

「はー……オナニーしたいっ……」

覚えさせられて以来、頭の片隅は常にそれだ。着せられて以来サイズの変わらない給仕服に無理矢理収められた肢体はもう破裂寸前。成長した尻と胸が強調されて、思考はどうしても其方に引つ張られて止まなかった。

特に胸は酷く、何らかの理由で装具が外されてしまっている故、布に包まれた柔肌が強烈な刺激に苛まれ続ける。

正気を保つていられず、懸命に繋いできた耐え凌ぎこの窮地を脱するという心は、とうとう淫欲によって腐り堕ちかけていた。

「はー……はー……はー……はー……」

もう死ぬしかない。死んでしまいたい。近頃強く抱く様になった絶望さえ、塗り潰される。

終わりを望んでいるのに、夜の夜伽訓練が待ち遠しく感じられた。上手に張り方をしゃぶれば、褒美にオナニーさせて貰えるし、装具でイかせて貰えるのだ。

「上手くなりましたね」と褒められ、頭を撫でられながら身体を慰めた記憶が過ぎる。

——後は達する時、何かが来そうな時はイク、とちゃんと言いましょうね。

イク。言えた。イク。褒めて貰えた。イク、イク、イク。どの快感の爆発がイクなのか分からないし、言えてるのかも分からなかったが、撫でて貰えた。

植え付けられた強烈な依存心が振り払えない。続け様に昨日のシスイの言葉が反芻される。「明日は一年の最後だから特別な事がある」と。

果たして、どのような気持ち良い事をして貰えるのか。期待に胸が膨らみ、内腿は滑ってしまう。

オナニーしたいオナニーしたいオナニーしたいオナニーしたい――

体重を掛けて雑巾を動かし、前がかりになった所、出っ張った胸元が不意に冷感と接触し「ひゃんっ」と声が上がった。

近くで同じ仕事をしていたカゾノが、すぐさま「どうしたの?」と駆け寄って来る。

彼は慌てて取り繕った。

「はー……っ、なんでも、ございません……」

「ほんと? 顔赤いよ? 風邪じゃない?」

しかし、指示を受けていないので身体は止まらない。彼女に意識が向いた事で再び胸の先がガラスにくっ付き、そして擦られる。

滲む母乳と熱っぽい肌への刺すような冷感が快感を呼び覚まし襲い来るが、羞恥とバレて止められたくないという心理が結託し、今度は声を堪えられた。

「っ……かおがあかいのは、いつものことにございます……」

「……敬語、上手になったね。嘘は下手くそなままだけど」

しみりした様子の彼女は、その八重歯で唇を甘噛んだ。

何かを口にしようとしている。と、そんな時だ。

カツリカツリ、硬質な靴音が二人の下へ迫る。

廊下の曲がり角、その影から姿を現したのは、知っての通り黒髪長身の女、キクチだ。

「カゾノ、呼び出しです。行って来なさい」

「えっ、今ですか? 忙しいので急ぎの用でないのなら……」

「火急の用事だと申ししていました。急ぎなさい」

「えっ……わかりましたっ」

彼女は大慌てで去っていった。

続けて、取り消されていけない指示を淡々と続ける彼に「止まりなさい」と冷やややかな声が飛ぶ。

手脚は指示の通りに止まり、彼は仕方なく惚け顔をキクチの方へ向けた。

「……う？ なん、でしようか……っ!?？」

瞬間、「喜びなさい」と彼女。彼の濡れた給仕服の両胸をもぎゅつと掴み上げた。

長身の女の両腕にすっぽり収まる程度の華奢な肢体は鋭い刺激に襲われ爪先立ちになった後、冷たい胸の先端に熱いものが滲み出し、温い快感で一気に力が抜ける。

「はっ、ぐっ……なに、をっ……」

「こんな浅ましい姿に成り果てた貴方に、素晴らしい役割が舞い込めました。来なさい」

そのままぐいぐいと引つ張られ、何処かへ連れて行かれる。

露骨な乱雑さに、久々に痛みを痛みとして感じ、唯ならぬ雰囲気、正気に引き戻された彼は「クソっ、やめろっ……！」と堪らず悪態を吐き、自由な挙動を許される体幹の力を使って後ろへ倒れようとした。

「はあ、まだそんな口が叩けますか。前々から封じたかったです
が」

キクチの手にある白い指輪が赤く光りだし、そして悪辣な笑みを浮かべて言う。

「今ならやつても構わないでしょう。『クソと言ったら絶頂』」

「なにいつてんだこのクソっ……くっ……っ……?？」

ゾリゾリゾリ。下腹部に何やら高速で刻み込まれる感覚が走った。

その後、何のキツカケも無しに背筋をかの快感が駆け上がり、あつという間に体内で飽和する。

苦しみは全く収まらない。

しかし、余りに苦しいが故、正気を保つ事が出来た。

「はあ、っ……ぐう、っ、これ、っ、なん、っ……！」

「おお、メンタルの方は本当に素晴らしいねえ……折角だから話しちゃうか」

そうして語られたのは、現状のレイと、それを取り巻く勢力争いに関する話。

「君の魔力量がねえ、ちよおっともう色々と身に余りそうなんだあ」その胸から搾り上げられる乳白色の液が証拠だと彼女は言つて、既採った分の物を入れたビーカーを揺らして見せた。

そこには特濃の魔力が含まれているという。小水等排泄物にも多分に含まれている為さして不思議では無いらしいが、其方とは違つて加工利用が出来る可能性が高い故、念の為採取に励んでいると気怠げながらも楽しげに説明した。

「そのせいで先方は早急に計画の変更を行う様命令してきてねえ……」

行われたのは、パワーゲームを振り翳しながらの電撃戦。所属不明という体の兵を動かし、秘密裏にレイを確保、先行して改造手術を施してしまおう、という物である。

後に分かる事だが、既成事実によつて選択肢を早期に潰し、主導権を握る意図がそこにはあった。

情報の開示隠匿を握る者達にとってはローリスクハイリターンの賭け。やらない意味が無かつたのだろう。

「何を無駄話をしているんですか？」

「ひっ、キクチしゃん!?？」

話は、突如壁を捲り上げ外から訪れたかの女によつて遮られた。

「余計な情報は与えないで下さい、無意味です。それより必要な手順の完結を願います」

「ここで出来る事はもう全部やったよお！ 魔力リソースを出来る限り埋めておいたから、ちゃんとした設備と例のモノさえあれば、後はもう」

刹那、屋外からの強襲か。白い壁に見える空間が一瞬歪み、捲れ上がった。

外から吹き込んだ雪と極寒の風と共に、キクチの舌打ちと「シスイもかっ……！」という眩きが耳に入る。

「でしたら此処は任せました、私は迎撃に参ります」

「えっ、あつ、はいく」

整った黒髪と羽織っている雪除けのコートを翻し、彼女はひとつ飛びに外へと消えた。

その場に一時の静寂が戻り、彼自身の呻き声だけが再び聴こえてくる。

ヘルゼンが「あつ、慌ただしいなあ」と口にした、その時。白衣の背中から出ている機構腕が瞬間的に駆動し、背後から飛来した硬質な何かをキンツと弾いた。

「んっ」

鈍く光る八本が広がり、鋭く尖って獲物を探す。

針が飛んで来た方向は防護の壁がある。果たして、どうやって――

ドスツ！

その内の一本が何かに反応して振り下ろされた。

先端は床に刺さる。貫く物は無し。しかし、その先に一人、小柄な人影あり。

上から下まで赤の少し差した黒一色。頭は頭巾、上半身は余らせ気味の布を出来る限りだぶつかない様巻き付けたかの如き上衣を纏い、下は動き易そうな袴を履いている。

所謂忍び装束だった。尚、機構の視覚が姿を捉えた時間は瞬きの間にも満たない。

その者は先程吹き込んだ風よりも速く動き、機構腕達の電光石火の反射的追撃を置き去りにしてレイを連れ去っていく。

取り残されたヘルゼンは一切何が起きたのか分からず。ただガラ空きになったベッドを眺めて「おやあ？」と首を傾げるのだった。

十五話 分岐点 後編

熱い肌に、身を裂くような冷たい風が直に吹き付ける。

真つ白な景色が高速で流れていく。後方遠くで鳴り響く、何か爆ぜる様な轟音と、ヒュオオオと空を切る音が耳元で止まない。

いつの間にやら運び出されている。朦朧とするその意識は、直前乳房に走った、肌が引き剥がされるかの様な激痛を思い出しながら「あゝっ……?」と薄目を開き、己を肩に担いだまま雪上を高速移動する人間を見た。

「——イちゃ——乱暴に——めんね」

女声は殆どが風の音に遮られ、僅かにしか彼の耳に届かない。が、頭巾の目元から覗く認識障害の白いベールと、自身と大差無い体格を加味するに、その者はカゾノであると判別がついた。

どういう事なのか。彼は靄に囚われた思考を、緊急時の緊迫で必死に引き上げて考える。

助け、られた……?!

誰が、どうして。自分が人に助けられる事なんて初めてだ。

いや……ちがう、か。

自分には利用価値がある。恐らく争奪戦だろう。

そう結論付けられたその時、突風とは明らかに異なる衝撃波が轟音を伴い襲い掛かった。

「きゃあつー!」「つうあゝつー!」

小さな二人は軽々と巻き上げられ、深雪の上にぼふんつと突っ込んだ。

黒装束は瞬時に起き上がるも、裸体の方は埋もれて姿が消え失せる。

「レイちゃんっ!」と声を上げ、その人物は雪の中を探すも、間もなく。紅蓮の炎が齎す煌々とした灯りが迫り、その方へ向き直る。

「あらあら、ダメですよカゾノさん。裸の子をこんな極寒の中に放

り込んで」

おっとりとした口調からは想像も付かない程激しい灼熱を纏ったふくよかな女人は、吹雪の中でも全く館の中と変わらない服装でふわり、足元の積雪を蒸発させながら舞い降りると、彼女らに歩み寄った。

「ハルノミヤさん……やっぱり、行かせてくれませんか……！」

「何処へ行こうというのですか？ 我々の任務は要請の通り、レイさんを所定の場所へ送り届ける事ですよー？ 其方は真逆です」

両者睨み合うも、差は歴然。小さな黒装束はじりりじりりと後退させられ、布で隠した口元をまごつかせる。

「同郷同輩のよしみです。今ならまだ、いつもの早とちりという事で済ませてあげますよー？」

「ご冗談を……っ！」

業火によつて周囲の雪が次々溶けていく中、埋もれていたかの白銀髪が露わになった。

それに逸早く気付いたカズノは、懐から何かを取り出し即座に地面に叩き付ける。

ボンツ。着弾点から軽い爆発音がして、煙幕が広がった。

「あらあ……」

（何とかして、これで逃げるっ……！）

煙の中、彼女は幻惑魔法の一種を行使。裸の少女を担いだ己の幻影を十体生み出すと、他に伏せる彼を拾い上げ一目散に駆け出そうとした。

が、その直後、熱風が吹き荒び、幻影は煙ごと全て吹き飛ばされてしまった。

「何をしているのですかー？ こんな強風の中煙を上げても、直ぐに吹き飛ばされてしまいますよー？」

「っ、そんなあ……」

カズノが子犬の鳴く様な涙声で震える。万事休すか。

と、思われたその時だ。季節に逆らつて熱された周囲の空気が一気に凍て付くかの様な、そんな戦慄がその場の一同に走る。

「——はあくい、ご機嫌よお」

吹雪のカーテンの向こう、怪しく紫に光る双眸、揺れる細長いシルエツト。

するりするり、雪の上を滑る様に歩き、使用人の皮を被った妖怪の如き蛇女が姿を現した。

「ミマタさん」と反応したハルノミヤは、一瞬身体を突っ込ませた後その穏やかな顔を顰める。

「……どういふつもりでしょう？」

「どおどお、落ち着いてえハルちゃん。私敵じゃないよお、現状は」

「その呼び方、止めてとっ……！」

炎に包まれたその身が、何かに阻まれているかの様に動かない。稀にごうごうと炎熱が伸びるが、吹雪に流されてその形を保てず霧散する。

「落ち着いてつてばあ、止めるの大変なんだからあ」

「つどの口がほざきますかー……？」

方やカゾノの方は微かに震えるのみで、動く事も話す事も儘ならぬ。その心中はどうして私もと狼狽え、彼女がどちらの味方なのか計りかねている。

ミマタは笑みを絶やさず、視線をハルノミヤから逸らさず。相変わらず悪ふざけじみた調子で「レイちゃん」と呼んだ。

「まだギリ動けるでしょお？ 『立ちなさあ』い』」

雪解け水でぬかるんだ泥の中から、少女の裸体がフラフラと立ち上がった。

全身に刻み込まれた刻印が、薄暗い中赤々と輝く。熱源が近くにありとはいえ吹雪の中。だが汚れの隙間から覗く紅潮した白肌は寒さによつては震えていない。寧ろ茹っているが如く濛々と蒸気を立ち上げている。

「ふー……ふー……」

意志の光が、付いたり消えたり。爛々と揺れる紅の瞳。

その様子を知ってか知らずか、一瞥もしていないのに蛇女の口元は「アハっ」と開き、手は懐から刃物を取り出して彼の方へ投げた。

金属音はカランと一度跳ねた後、ビチャつと水溜まりに着地する。

「ええっ!?？」

「どういうつもりで問いに答えて無かったなあ。その答えはこおくれっ。あの子に一度だけチャンスをあげようと思つてねえ。」

『そのナイフを取つてえ、後は自由だよお。』

「なっ、何を、言っているんですかあー!?？」

「そのまんまだよお、主任の雑務押し付けられてえ、忙しくてあんまり構つてあげられなかったからさあ。」

「はいいつ!?？」

ハルノミヤの立ち昇つた怒りの炎を尻目に、泥だらけのか細い手脚は指示を遂行する。ひたり、ひたり、裸足の歩みを進め、落ちているナイフを手を取つた。

その時、「だっ、だめっ……レイ、ちゃん……！」と、カゾノが沈黙を打ち破り、声を搾り出す。

「おつとおく? カゾノちゃん?」

「あなたが死んじゃつたらっ、っ……！」

しかし、何らかの力が強められ、再び口は塞がれた。

「アハハア、子どもの成長はすごいねえ。」

「此方に集中……しなくて、よろしくて?」

「ギリギリだねえ! 『自由だ』つて言つたよおレイちゃん、早く決めてえ!」

均衡が不安定になり、ハルノミヤの炎が次第に大きくなる中、朦朧とする彼の意識は強いストレスと手段を得た事で俄かに知性の光を取り戻し、葛藤する。

手脚は動く。感覚が戻っている。とはいえ貧弱で、過去の幼いながらも鍛え上げられていた腕は見る影も無い。

自由と言つていた以上、恐らくサポートが無いのだろう。疼く股倉は少し力を入れるだけで擦れて、滑る内腿の刺激で足取りもおぼつかない。

泥が付いてひんやりする胸の先は、搾乳機で引き出されたせいかな。陥没していた筈の乳首が顔を出して乳汁を湛え、今すぐ搾り上げ快感

に浸れと誘惑して来る。

いつまで正気が保つのかも分からないし、此処からミマタの下に辿り着けるかどうかすらも怪しい。

叛逆の目は、存在しない。彼女らや、背景で蠢く陰謀を一蹴する手段はただ一つ。

このナイフを、首筋に一刺しすれば――

瞳を涙が伝う。この世を怨む言葉が、腹の底で滾って渦巻く。

いつも何かに追い立てられていた人生だった。楽しかった事など一つも。

「っ……っ……っ……」

腕が震える。何故だ、何故、こんなにも死にたくない。何故抗っている。

死を意識して浮かぶは、やはりかの憧憬。そして、そこから始まった、かつての拮抗した勝負の日々。

彼と競っている間だけは、背後を見ずに済んだ。彼と共に過ごしている間だけは、確実に景色に色が付いていた。

ふざけ、んなっ……。

彼は真に気付いた。チハヤ、彼との時間が、その心の内に唯一残る誇りであったと。

今ここで死ぬ事は、その誇りを穢す事に他ならなかった。先に彼との時間を穢した者達を始末せねば、死んでも死に切れない。

そして何より、やはり彼の知らぬ所で、彼が今どうしているのかも知らずに、恨み言の一つも言えずに死ぬのだけは、我慢ならなかった。

どっどっどっどっ。鼓動と共に煮え滾る怒りは腹の底から溢れ出て、熱と痛みを発して尚も止まらず。行動と共に、発露した。

「ふうっ、ふう……っ……」

彼は後ろ髪を掴んで、その根本に刃を当てた。

場が騒然とする中、ぎっ、ぎっ、ぎっ……ジョキンッ!

伸びた長髪が切り落とされ強風に舞う。直後、くの字に曲がった下腹部からドクンッ! と、赤桃色の光の波動が放出。

「なっ、切ってっ……まほうっ……っ……っ……」

風に舞わず、その光は宙を漂い続ける。驚愕し瞳と炎を丸めたハルノミヤ。へたり込むカゾノ。ミマタは表情を変えず、視線を彼へと向けた。

張り詰めていた空気はその色と同じ、何処かとろんとした、それでいて熱を帯びた何かに上書きされ、一同の視線は皆彼の方へ集中する。

「ごくり、誰かの息を呑む音が聴こえてきた。」

彼は息を切らしながら、か細く掠れた声を絞り出す。

「ミマタっ……あいつにいつ……チハヤに、あわせろっ……！」

「……引き換えに、何を？」

「はあっ……？ このじょうきよおっ、つくったのっ、おまえらろっ……！」

「そうだねえ、だからなあにいく？」

「っ、じょうほううっ、うってないってっ……！」

「あくだって、『国に売ったか？』って訊かれたからねえ」

徐々に細っていく声は、消え入るかに思われた。が、最後に「ああもういいっ」と頭を振って、語尾を上擦らせ、震わせながらも力強く叫んだ。

「アイツの子ろもでも、なんでも産んれやるっ……！ だからっ、だか、らっ……！」

体力の限界が訪れ、彼はフラフラと前方へ倒れ込んでいく。

カゾノはハツとして、颯の如く駆け、彼を抱き留めた。

妙な空気が徐に晴れて、続け様にハルノミヤの炎に勢いが戻り動き出す。

が、それはまたしても何か見えない力に阻まれたかの如く堰き止められた。

「っ、ミマタさーんっ……？ どうして止めるんですかー？」

「うーん、めんごお。やっぱりこれから敵同士っばいわあ」

「はあー……？」

「カゾノちやくん、レイちゃん抱えて逃げていいよお。アタシが足止めするからあ」

「えっ!??!」

「えっじやなあ〜い早く逃げるう〜!」

「わっ、わかりましたっ!??!」

カゾノは再びぐったりとしたレイの身体を肩に担ぎ上げ走り出す。揺れる雪景色、徐々に小さくなっていく炎の灯りを瞳に写し、彼は静かに瞼を閉じた。

当時の事件は内々に処理され、表向きには何一つ残らなかった。

しかし、無かつた事にはならない。事態は国家管轄母胎零番、通称レイを巡る新たな力関係で膠着する。

当件で中心的立ち位置に着いたのは、元来の計画で長子が種子として選定されていた新進気鋭の名代、玄霧である。

当家は上層の計画変更の可能性を当初から想定し、六大名代の一角朱馬の手を借りて、某家主導で進んでいた場に息のかかった女衆を潜入させ準備していた。

結果として騒動の渦中、母胎の確保に成功。種子選定という主導権を握っていた彼らは、その正当性を認められ、当初の予定を前倒して事後的に計画進行の権を得る事となる。

が、一筋縄ではいかなかった。当件で板挟みにあつた母胎は、計画変更の煽りを受け幾つかの問題が生じていたのだ。

「っ、なんて、酷いっ……………!」

「この子があの、レイト君だというのか……………」

確保した際、その様を目撃した玄霧名代夫妻の言葉である。

当時のレイの肉体は大量の即興刻印により激しく損傷と再生を繰り返していた。

幼気な少女の、筆舌に尽くしがたい痛々しい肢体は、まともな親である夫妻にとってはショッキングに映つたのかもしれない。

「これを、チハヤに伝えろとっ……………」

「くろ…………り、みようち…………っ……………」

「待つて貴方、この子何か言ってるわ!」

「…………何だ」

「……じぶんが、つたえ……まつ、て……」

「つ……くつ……!」

少女の身元は、朱馬の後ろ盾の下、玄霧のとある医療施設で保護され、一年程の療養を余儀無くされた。

尚その後間も無く、国の上層で議論闘争が巻き起こる。

伏魔、蛟を筆頭にした派閥、後の世に言う戦兵派が、母胎零番の戦術兵器化を主張したのだ。

「残念ながら、母胎の想定魔力が唯一の種子候補の想定魔力を遥かに上回ってしまいそうなんですなあ」

朱馬、玄霧を筆頭にした派閥、生誕派は「医療魔術の随意を集め、魔力調整によって可能とする」とこれに対抗したものの、〃不確実な世継ぎ継承よりも兵器化し今代にて覇権を〃という声は大きく、元来の路線は劣勢。

末に、国が保障出来る最大とされる三年の猶予が、当初計画に設けられてしまった。

療養期間を差し引けば二年。その間に母胎が一度でも孕まなければ、国は兵器化に踏み切る。

差し迫った危機を前に、少女当人は、限られた時間で最善を尽くそうとしていた――

「はーっ……このっ、なんだよっ、頑なにつ、――にー、させてくれない癖につ、『精液を摂取しなければ発情』ってえっ……!」

『『会わせる』って約束の対価も兼ねた、ちよつとした手助けだよお』

「あれはもう清算しただろおっ……それに、この下着いつ……!」

「いいでしょお〜? 似合ってるよお〜」

玄霧の館、消灯された二号館三階の廊下。

頭一つ以上大きなヒョロ長い女の影に見下ろされながら、鼻に掛かった艶声を奏で、赤ら顔で内股をもじもじ擦り合わせる、給仕服姿のレイ。

「っ……やっぱりお前じゃなくてカゾノか、シスイにつ……いやっ、

しかしっ……」

「うだうだ悩んでないでえ、『早く行きなよぉ』」

「クツ……絶対いつか、惨たらしく殺してやるっ……」

「うんうん、がんばってえ〜」

かくして、その階の廊下の先の角部屋。かの御曹子の待つドアへ向け彼は歩いた。

傍目には、すれ違う者皆が目を奪われる様な愛らしき乙女。

その胸の内には、誰もが目を逸らしたくなる様な苦痛と怨嗟。

自身をこの様な姿にした者達に復讐を。

未だ何も知らずに過ごす元好敵手にも、ささやかな報復を。

——少年だった少女は再会を果たし、目的遂行を開始した。

月光の下、青い魔光は霧散して、重なり合った二つの吐息が解ける。

「げんきに、してたかーっ……？ 敗者のボクを、忘れてさ」

愛らしく微かに掠れた女声が上がから挑発的に吐かれて、温く湿っぽい空気を揺らす。

対して、低く凜々しい男声の下から突き上げる。

「っ、忘れてなどいないっ！ ずっと気にかけていた！ しかしっ……」

「ひひっ、目を背けてたんだろおー……どーせ」

華奢で柔和な肢体が、仰向けに倒れている雄々しい胸板の上を這う。豊かな乳房の先から乳汁を漏らし、彼の寝巻きに甘く芳しい、淫靡な雌の香りを擦り付けていく。

双方の心拍は高鳴って、互いに脈打つ鼓動を感じ合う。肉を包む肌が、張り詰める、張り詰める。

「クツ、ずっ……ボクはこーんなチビなまま、柔らかくなっちゃったのにつ……こんなデカくっ、筋肉質になりやがってえっ」

「悪い冗談だっ……って待て何だよせっ！」

赤らんだ柔頬を歪める悪戯な笑みと共に、括れた細腰が俄かに浮いた。かと思えばしとどに淫蜜に濡れた秘裂が、反り勃った肉茎を押し倒す形であてがわれる。

すりすり、ぐりぐり。押し擦り付けられ、彼は「うっ……！」と表情を切なげに顰めた。

少女側も唯ならぬ様子で眉をハの字にして腰を震わすが、艶っぽい吐息を漏らしながらも、必死に堪え底意地悪さを崩さない。

「声もカツコよくなつちやつてさあ……女にモテそうだなっ、うらやましっ」

「なんて不埒なっ……一体、何があったらそうなるっ……！」

「はー……本当にカケラもっ、知らないのか……？　ボクを女にしてっ、お前の子種で孕ませるって、国の計画うっ……」

「孕っ!?？　本気か!?？」

「本気のマジだよっ……期間は二年っ、それまでに、孕まないとおっ……あっ、やばっ、いつ……！」

厚ぼったく柔らかな割れ目から、またしても淫汁がプチュツと噴き出した。「んっ、うっ、うっ……！」と心底辛そうな苦悦を漏らし、女体はガクガクと痙攣して男体に身を預ける。

「なんて……こんなっ、浅ましいっ……！」

「くふうっ……ふーっ……お前程のヤツならっ、幾ら、ボクと玄霧現当主が隠してたとしても……ちゃん和本気で調べてたら、すぐに気づけた筈……」

「父さんと……？　父さんは、知って……」

男声は俯いて勢いを失い、消え入っていく。

助けが来るとしたら、お前が関わっているものだと思っていたのに。そんな言葉を呟きかけた桃色の淡い唇はキュツと固く結ばれた後、再び挑発を紡ぐ。

「はっ、負い目でもっ、感じてるのかあ……？　っ、そんなタマじゃ、ないと思っただけだなあ……」

とろんと濡れ滲んだ紅の瞳は、狂気に澱みつつも知性的に訴え、極限の当惑に揺らぐ蒼の瞳を射抜き、捉えて離さない。

聡明な御曹子の頭脳はもう十分に理解していた。それが真である。しかしそれでも尚、シヨックからか「嘘だ、そんなこと……」と逃避を続け、黒の短髪は横に振られる。

少女は痺れを切らした。

「まあっ、別にいいよっ」

少しいじけた様にそう溢した後、何やら覚悟を決めるが如くふーつと一つ息を吐いた。

「ささっつと、おわらせるからっ……壁のシミでもっ、数えてなよっ……!」

腰をズラし、擦っていた肉茎の先端へ秘裂を合わせる。「だっ、待てっ!」と制止し強張る彼を尻目に、少し浮かせて対象を立たせると、「はあっ……!」と息を吐いて腰を下ろした。

「ぐわっ!?」

ずるんっ。鬼頭は女陰の縦筋の上を滑って逸れた。

桃尻が落ちて、「くうくうっ」ともどかしげに震えた後、暫し呼吸を整えて、再度先の動作を行おうとする。

「んだよこれっ……訓練の時より全然、むずかしっ……じゃねえかっ……」

「何やってんだっ……! それはっ、ダメだろうっ……やめろっ、やめてくれっ……!」

普段は冷静沈着そのものな筈の男子の唇は徐々に青くなって、パクパクと取り留めなく開閉しては、狼狽えた言葉を紡ぐ。

「悪かったっ……悪かったからっ……!」

「ボクはっ、お前が悪いなんて言っていないしっ、思っていないっ……!」

ぐっ、ぐにゅっ。割れ目がとうとうその先端を捉えた。

「まっ、待て馬鹿早まるなっ、やめっ……!」

「うるさいっ、っ、っ、あ、あっ……!」

ずっ、ぬぷうっ……挿入っていく。鬼頭は収まり、更に奥へ。

最早止まらない。腰が降りる。そう思われた。が、途中「あ、っ、いっ……!」と、少女は突っ掛かる様な抵抗と痛みに喘ぎ、身を強張らせ腰を浮かせた。

その隙に、窮地のチハヤの魔力が爆発する。

「やめろっって言ってるだろおがっ!」

「んぶっ！」

青の波動が、少女の肢体を弾き飛ばした。

蹴りと同等かそれ以上の衝撃を受け、軽い女体は後方へ吹っ飛んだ後、床に背中を打ちつける。

「んいっ、っ！　っ〜っ〜！」

部屋を満たしていた妖しい空気もまたその波動によって打ち消されていき、追いやられていた男体は自由を取り戻した。

彼は「はあっ……はあっ……！」と数度荒く息を吐いて、すつくと立ち上がり、床に転がったまま身体を丸めて悶える少女を一瞥。そして顔を顰め微かに後退りすると、踵を返し逃げる様に背を向けてドアへ向かう。

「——てっ……まってっ……！」

継る様な声が聴こえたが振り払い、結局自室を去ってしまった。

十六話 過酷

国の黒い思惑に関しては分かりきっていた。唯一無二の好敵手レイト。彼との最後の御前試合の決着と、その後の訃報。

勝利の喜びなど一切無い後味の悪い結末に、腹が立たないワケが無かった。

「父さん！ これは一体どういう事だ!?!？」

「……チハヤ」

「訳を話してくれ！ こんな納得が」

「シヨックなのは分かる。しかし、そうやって感情任せに詰め寄って何が分かる?」

「つ……!」

らしくないことをしている。そう自覚させられ、掴んだ襟を離すと、父はそれを正して言う。

「聡いお前なら分かる筈だ。発言と行動に気を付けろ」

父は国の上層部の事情を知っている。そういう役職だ。

しかしだからこそ口を噤む。余計な情報を漏らせば、危ういのは家族だけでは無いから。

理解していた——理解、していたんだ。

(……アイツが簡単にくたばる筈は無い。国側が粛清に動くとしても、命を奪うより何らかの手段であの魔力量を利用しようとするだろう)

チハヤは情報集めに奔走した。個人事務所の探偵を雇い、己は鍛錬の合間に家を抜け出し、密かに国とレイトの背景事情を片っ端から探った。

そうして分かったのは、レイトの家、古豪と称されていた白神家の危うい実態。

「噂にはあったが……本当なのか?」

「ああ、間違いいねえぜ。外見こそ取り繕えてたが、白神家はもう、殆ど中から腐って堕ちる寸前だったんだ」

掃き溜めに鶴だったのだと、探偵は語った。

彼の曾祖父にあたる白神六助名代。その人が血縁抗争の末勝ち残った所から、家の失墜は始まっていた。

野心家だった六助は多くの血縁者を内々に殺し回り、宗家の血筋が途絶。暴君である彼もまた長生きは出来ず、早晩他界し、その息子である弥祿は若くして当主の座についた。

「ミロクは……残念ながら若過ぎたんだ。負債は膨らんで、徐々に御家事業の傀儡化が進んだ」

悪い流れは断ち切れず、その下の代にも引き継がれた。ミロクも早晩に死に、その弟も立て直しに失敗。レイトの父である明羅に家督が移った頃にはもう、再興は困難という所まで来ていた。

「親父さんが一時期酷い飲んだくれだったのは、この界限じゃ有名な話さ。この住所の飲み屋に行つて店主に訊いてみるといい。色々ぶち撒けてみたいだ」

「でも、アイツが生まれてからは……」

「ああ。傀儡化を目論む入洲家の令嬢との子、かのレイト君がとんでもない神童だった」

彼の出生を境に、まるで天地がひっくり返ったかの如く白神は急速な体制の健全化を見せた。

余りの様変わりには、レイトがある時から家の全てを取り仕切る様になったのではと、そう噂が立ち、彼を神聖視する人間も現れていたとか。

「まあでも、性急過ぎたんだろうなあ。入洲や国からやつかまれて、結果はアレだ」

「……そうか」

影響力が大きかったが故、そして突ける隙があったが故潰されたのだと。結局、そんなありきたりな結論に終着した。

彼は納得いかなかった。

簡単に言うが、歴史ある魔術師の家を取り潰すのは相当なケースで

ある。

恨みを買った、というだけでは説明が付かない事が数多あり、彼は更に調査を続けようと試みた。しかし、

「悪いな、これ以上は俺も危ういんでね……お兄さんも気をつけな」
それ以上の情報は、何一つとして出ては来なかった。

何があったのか。どうしてこうなったのか。

御前試合の決着も、露骨に自分の有利に働く様な意志が働いていた事は確かだ。

どうして、レイトが犠牲になったのか。どうして、自分はここまで徹底して情報隔離されているのか。

気になるが、これ以上踏み込めば、どうなるか……。

警鐘は鳴らされていた。監視員増加、妨害工作の顕著化等々。これ以上は、ただでは済まないと暗に知らせている様だった。

失敗すれば、父、母、弟、妹二人。それだけではなく、玄霧に属する全ての人間に危機が及ぶ。

過去、国の上層部の大人に忠告された記憶が過ぎった。「出過ぎた事をすれば、迷惑を被るのは君と親しい人間達だ」と。

蛮勇を行うには、彼は背負うものが多過ぎた。

そうして結局答えの出ぬまま、その日が来てしまった。

「はあっ……っ……はあっ……い！」

トイレの個室で晩を明かした。一睡も、出来なかった。

憔悴した脳内に残るのは、かの甘ったるい少女の匂いと声。そして、好敵手の魔力の痕跡。

決して一致してはならない情報が延々と巡っては、それが現実であるという答えに至る。

「はあっ……なん、なんだっ……い！」

ここまで情緒を掻き乱され、平常心を失ったのは初めてだった。

まるで便座を除き、足場が全て消え失せたかの様。未だ平衡感覚が無く、目眩が治らない。

目元に手を当てると、脂汗がまた一つぽたりと落ちた。着たままの

寝巻きが肌に張り付き、不快感を催す。

その感覚の中にも、昨晚の少女が居る。自分の汗の匂いの中に、彼女の匂いを見つけてしまう。

「っ、うあああっ！」

寝巻きを脱ぎ捨てた。嫌悪感が止まない。

高潔に思われた同性の名を騙る、不潔不純な異性も、それに一時興奮した自分も。意識をすれば、内側から食い破るが如き名状不能の不快到苛まれる。

何なんだこれは一体っ……！

「——さん、にいさん！」

「ツッー」

ノックの音と、男児の声に驚き、連呼される「にいさん」という言葉によって急速に日常に引き戻される。

それはチハヤの弟、晴希ハルキの声だった。

「にいさん！　ねえどうしたの？　お腹いたいなの？」

「っ……ああ、そんな、感じだ………」

彼は心底兄を心配した様子で、ドアの向こうから言葉を投げ掛けて来る。

昨晚の異常な光景が嘘の様な平穏だ。個室の外に恐怖したまま強張っていた彼は、徐々に緊張を解く。

「お医者さん、呼ぶ？」

「いや、そこまでじゃない、大丈夫だ……」

兄として、この状況はあまり好ましく無かった。着たくない寝巻きを再び着て、表情を取り繕い、恐る恐るドアを開く。

「あっ、にいさ……うわっ、酷い顔だよっ!!？」

未だ幼げで愛らしい弟の顔が見上げていた。

彼は思わずホツとして、微かに腰を抜かしてふらついてしまい、近くの壁に手をつく。

「それにちよつと変なニオイするっ……やっぱりお医者さん」

「大丈夫だつて……」

「ぜんぜんそう見えないよっ！」

廊下を警戒する。点在する使用人に、怪しい人影は無し。

アレは悪い夢だったのでは。一瞬そう救いを求めた所に、『にいさま』とハモる声が。

「父さまが呼んでますよ」

「酷いお姿です。お世話係を呼びます」

「つ、マリと、サラか……」

双子の妹、万理^{マリ}と沙羅^{さら}が、揃ってそっくりな仏頂面を並べていた。

「……愚弟の心配は尤もです。寝巻き姿のまま、その様な憔悴なされたお姿では」

「ああ、心配させて悪い……」

「くんくん……これは……まずお身体をお清めになった方がよろしいかと」

「ああ、そうする……ありがとうございます……」

程なく使用人が来て、彼は弟妹達に感謝し、慌ただしくその場を後にする。

残された三人は、兄の姿が見えなくなると話した。

「……愚弟よ、気付きましたか？」

「? 何に?」

「やはりですか……にいさまの弟失格です」

「ええつ、何!? 何なの!?」

「聞くばかりでなく考えなさい、だから貴方は愚弟なのよ」と辛辣な言葉を吐いた後、マリの方が少し顔を険しくして言う。

「これはお家の危機。我々も、何か行動しなくては」

身だしなみを整え、父の書斎の前に辿り着いたチハヤは、一つ深呼吸をしてノックする。

ドアが開き、いつもの黒のスーツ姿の父の顔が上から覗く。黒縁眼鏡の奥のその目は、暫し吟味するかの如く息子の憔悴した顔を見るが、それに関しては何も告げず。ただ「入れ」と促した。

「はい……」

そこで、彼は目を背けたくなる様な現実を目の当たりにした。

「っ……っっ、これはっ……！」

父の机の上に置かれた一台のモニター画面。特に説明も無く「見てみる」と言われた彼は、液晶の向こうに昨晚の少女を見た。

数人の白衣を着た人間と、二人程の給仕服を着た人間に囲われた彼女は、カプセル容器の様な物に包まれた寝台の上に仰向けになり、瞼を閉じたまま苦しげに息を吐いている。

その肢体には、痛々しい真っ赤な痣の如き刻印が刻まれており、呼吸に合わせて静かに明滅を繰り返していた。音声は無い。が、その様だけで周り含め、状況を察するに余りあった。

「まず初めに、謝ろう。こうなるまで、お前に何も話してやれなかった事を」

「いや、それは……」

仕方の無かった事だと口にしたかったが、声に出なかった。

父は出来る限り冷淡に努める様に抑揚を抑え、その上で語尾を微妙に震わせながら、残酷な言葉を並べていく。濁さずはつきり、整然と。

「彼女は、あのレイト君だ。戸籍や家柄全てを抹消され、今は国に帰属する存在、国家管轄母胎零番と呼ばれている」

直後、画面の向こうが俄に騒がしくなる。赤い明滅、アラートが鳴っている様だ。

容器の中の肢体が苦しみ、もがいている。股倉から鮮血の混ざった液を垂れ流し、蕩けた紅の瞳を上擦らせ、背筋を逸らしたり、くねったりしている。寝返りを打ち、透明な容器の面に乳汁を湛えた胸を押し付ければ、浅ましく擦って、擦って、擦って――

「我々玄霧は、時限的に彼女の身柄を管理する立場を引き受けた。その上で一つ、プロジェクトを……」

「母胎、孕ませる……俺の、精子で……」

「そうだ。お前は国から唯一基準を満たす、種子として選定された」
視界が歪んで回り出す。机の上についた手が震え、脚はたたたらを踏んだ。

「父として、出来る事がこんな事しかないのは心苦しいが、頼」

「勝手過ぎる、だろ……！」

彼は父の言葉を、押し殺した震える怒声で遮ってしまった。

「これは、人がどうこうしていい領域の話じゃない……！」

揺れる青の瞳が、同じ色の瞳を真っ直ぐ射抜く。

「そうだな」と、父親は観念した様に目を伏せた。

「そうだなってっ……父さんはっ……！」

「すまない。私は、お前や家族を守るので精一杯だったんだっ……」
変わらぬ様に思えた鉄面皮が、悔恨の念で歪んだ。息子の見た事のない、父の顔だった。

そうして彼は懺悔した。かの御前試合、自分はチハヤとレイトの対戦情報を国に提供し、その上でチハヤが有利になる様操作した事。白神敗滅の折、その情報操作に加担した事。レイト母胎化の法案可決に際し、優位な立場を維持すべくそれを承諾した事。

「っ、もういい……やめてくれ……」

「っ……はあ……わかった」

チハヤはただ静かに項垂れた。大小の差はあれど、その選択は自身の取ったものと同じ故、責めるに責められなかった。

己と同等かそれ以上に狼狽える大人の姿を見たお陰で、彼は多少の冷静さを取り戻し、少し先の方へ頭を回す。

「で、孕……妊娠しなかった場合はどうなるんだ？ 期限は二年、とか言ってたな。これだけの事態を看過しておきながら……口振りかまして、避けなければいけない事態が待っていそうじゃないか」

「ああ。その折には、母胎は決戦兵器に改造され、この国は刹那的に世界最強の軍事力を得る事になる」

なんだ、いいことじゃないか。などという楽観的な軽口が聴こえた気がした。

無論、そんな訳が無い。

「刹那的に、ね」

「そうだ。軍部と、それを煽る伏魔は『永久化は可能』などと宣っているが、奴らの運用方法では実際の所母胎の、レイトの身体は保って十年が限界だろうと推測している」

「十年か。その兵器の内容を知らないから何とも」

「人々の、潜在意識の上書きだ」

随分あっさり。機密情報では無いのか。

彼は少しキョトンとした後、それが己が当事者として認められた合図だと解釈した。

「……………詳しく頼む」と、話を促す。

そこでチハヤはまた一つ知った。好敵手の隠していた秘密を。

五年前の四月九日。灰原病院。

そこには一人の、夢破れた男が横たわっていた。

伏魔財閥系列の某建設企業役員、灰原桐尾^{はいばらぎりお}。初老に差し掛かろうという彼の身体は病に蝕まれ、己が中心となつて携わった事業の完遂を見ないままに、その生涯を閉ざそうとしていた。

が、その日。その病床へ一人、花束を手に持ち、足を運ぶ小さな少年の影があった。

周囲の誰もが、彼を親類縁者の誰かだと勘違いした事だろう。目深に認識阻害術式の組み込まれたパーカーのフードを被つて、「見舞いに来た」と。それだけ受付に言つて、彼は病床を訪ねた。

「……………なんだい、また君か」

「すみません、またボクです」

灰原はハハハと笑つた後、優しい目をして、まだ何も言われていないのに断つた。

「答えは変わらないよ。何度も言つたらろう？ あっしは、君の役には立てない」

「そんな事は無い。都市開発事業の根幹を担つていたのは、間違いなく貴方だ。まだ役職も役員のままでしょう？」

「席だけね。こんなザマじゃ、だーれもついてこないよ」

少年の顔貌はあまりに幼く、まだ初等教育も終えてない年頃にも見え

た。微かに笑みを浮かべる口元もまだ小さくあどけない。しかしそこから発せられる言葉はあまりにも明朗であり、大人以上にも聴こえた。

その上珍しい紅の瞳に、白銀の頭髮。見るものが見れば、人外だと怯えすくんでもおかしく無かったであろう。

だが灰原は物怖じしなかった。窓の外へ視線を移し、静かに言った。

「お引き取りを。あつしは、もう満足なんだよ」

怯えず一片の曇りも無く、嘘を吐いて見せた。それが見抜かれているとも知らずに。

「いいや、やはり貴方は不満に思っている。自分の掲げた事業が、他の誰かに横取りされて完遂される。その事をね」

「……………あつしの何をご存知で？」

「隠匿された功績は全て」

「だからどうしたというのだね？ 若い君には理解出来んだろう？

この無念が」

逆撫でされ、弱った肺で目一杯老人は声を荒げた。

少年はそれを見逃さない。

「ええ、理解することは難しいでしょう。しかし、その無念を晴らす事は出来る」

フードを外すと、その身から魔力を発し、告げる。

「ボクなら……………我ならば、貴方に悔いなき生涯を全うする力を与えられる」

「……………どう、やって」

「悪魔に魂を売って、願いを叶えて貰う……………簡潔に説明すると、それに似た様なものだ」

「君は、悪魔なのか？」

老人はそう問うてから、顰められた童顔を見て「いや、違うか……………」と呟いた。

「そんな嫌そうな顔をして、墮落を進めるのかい？」

「……………ふん。白状するとこれは、最終手段だ。今回はかりは、これ無しで勝てる算段が立たなくてな」

「なら、何も言わずにやればいい。こうして許可を取るのは……………許しが欲しいのかね？」

「……………」

少年は何も言わず目を伏せた。

この時、灰原側にも、少年側にも選択肢など用意されていなかった。にも関わらずやり取りが生じたのは、偏に彼らが情のある人間だったからなのだろう。

老成した声は、それら全てを悟ったかの如く言った。

「いいよ、許そう。君の目的に、あつしを捧げなさい」

「っ……………」

「どうなるかはイマイチ想像が付かないが……………まあ良いさ、このまま終わるよりは良い」

「良い……………のか？」

困惑する少年を見て、老人は少しばかり勝ち誇る。

「やると決めたら躊躇うな。なんて、月並みなアドバイスだろう？」

「……………ああ、わかったよっ」

密やかに病床に光が満ちた。そしてその日その瞬間を以て、はいばらきりお灰原桐尾は個人としての純粹性を失った。

「……………我こそ絶対だ」

「そうだ。貴方こそ絶対だ」

「……………始めよう」

「ああ」

数週間後、某建設企業は伏魔財閥と手を切り、白神、入洲の系列傘下に入る。

それを皮切りに更に幾つかの業者が離れた事により、伏魔は都市開発事業のシェアを大幅に失った。

事の起点が当役員にあった事は明らかだが、彼とレイトに繋がりがあつたという確証を持つ人間は、ある時まで埒外な手段を持った一人だけだったという。

「……………父さんは、いつそれを知ったんだ？」

「母胎化計画始動後、比較的すぐだ。裏を取るのにも、あまり苦労はしなかった」

「伏魔が、先に」

「いや、恐らくはほぼ同時期だろう。先程言った通り、情報提供者が特殊なんだ」

胸騒ぎが、収まらなかった。

「俺は、なんて怠惰な……」

決心を迫られ、父とそっくりな青の瞳が揺れる。

そこに希望の道筋は未だ見えず。葛藤の日々の始まりを暗示していた。

十七話 虚勢

「はあっ……っー……」

症状が落ち着いた少女レイは、病衣に身を包みカプセルの中。治療室の外からの視線に配慮したマジックミラーの如き壁を見つめたまま、静かに涙を流していた。

……サイアクだ。

胸の内の靄は、これまでにない色を見せていた。

単なる状態的な発情による悶々としたもののみならず。悔しさ、侘しさといった、何か女々しい感情が多分に混雑していて、消化がままならなかった。

そこへ給仕服姿の小柄なツインテールの少女、カゾノが心配そうに「レイちゃん」と声を掛ける。

「大丈夫……？ お腹痛い……？」

「痛くない……」

「ほんと……？ 何か出来ることない……？」

「ない……頼むから、一人にしてくれっ……」

確かに下腹部は鈍痛と気怠さに苛まれている。恐らく生理のせいだろう。

初めての頃は、本当に落ち込んだものだ。玄霧に保護されてから一月も経たない頃だったか――

当時、治療が始まって間も無い頃。朝の起き抜けに見た股下の血の池地獄が、鮮明に思い出される。

シヨッキングではあったものの、逸物がまだあった頃に、性器から散々血を噴き出していた故、彼は悲鳴は上げなかった。

しかし女性としての肉体の完成を告げるかの如きそれは、覚悟していた以上に受け入れ難く。一日中女々しく涙を溢し、精神的に参っている様を衆目に晒した。

医師曰く、装具によるものか、はたまた極限状況下におけるストレ

スか。妨げていた原因が取り除かれた為、本格的に生理が始まったの事。

そのせいで鬱症状に悩まされるとは、とんだ本末転倒だ。

彼は心中で皮肉って笑おうとしたが、口角はピクリとも動かなかった。

痛い、怠い、辛いだけならまだ耐えられる。しかし、気分には直接となると、慣れたつもりになっても、どうしても苦渋が滲み出る。

余りに非合理、余りに理不尽。これが子を孕めるという事、女として生きていくという事だと、どうして割り切れようか。

——これまで道の険しさに幾度も心が折れそうになった。ミマタ相手に大見得を切っていなかったら、きつと挫けていた事だろう。

その茨の道を越えて、やつとその先に辿り着いた。そう、思ったのに。

「……………ぐすっ」

失敗した。拒絶された。

当然だ。元は男で、こんな身体で、厄種盛りだくさん。自分だって拒絶する。

だからこそ、強引に行った。理解される前に、何も分からぬ内に子種を中に注いで貰い、目的だけ果たすつもりだった。

甘かった。彼は、チハヤだ。この国最高の才人だ。敗れ被れでは上手いくわけが無かった。

想像は付いていた。なのに何故、こんなにも傷付いている？

彼は傷心を自覚しながらも、己の心理を測り兼ねていた。父や母に愛されないと分かった時よりも、こんな身体にされて、女達に蔑まれていた時よりもずっと胸の内が痛むのだ。事態はそれらの方が余程深刻だった筈なのに。

分からないが故、全て肉体のせいにして、折り合いを付けようとしていた。しかし初めての生理の時の、えも言えぬ不快と不安ともまた更に異なり、上手く行かず、今は周囲に当たり散らしている。

「レイちゃん……………」

「いいからっ……………！ 全員出ていけっ……………！」

さめざめ泣く彼の元を一人、また一人と離れていく中、看護服を着たクリーム色の短髪の女だけがその場に残って動かない。

「シスイ、一人にしろと、言ったはず……」

「言いたい事は、そうではない筈です」

何かを見透かした様に彼女はそう言っ、カプセルを開いた。

そして少しばかり不機嫌そうに、そのセクシーな声でくだを巻く。

「前々から思ってたんですけど、こういう時は、はつきり言っちゃった方が良いでしょう。辛い、とか、ムカつく、とか」

「思ってない……見透かした様に言うなっ」

「見透かすまでもありませんよまったく……他者への悪態で、怒りと不満で自分の感情を押し殺して隠そうとする癖、やめた方が良いでしょう。悪態吐くなら、己の感情を吐露する方にしましょう」

「つ……普段、悪態吐くなど言う癖にっ」

「お行儀は良くありませんからね。場合によりけりです。因みに少なくとも私は今、少々ムカついています。手塩にかけた教え子が袖にされたのですから。玄霧の御曹子は不能だつて、言いふらしちゃいたい気分です」

己を悪く言われる以上に、チハヤの悪口に彼の心のささくれは引っ掛かった。

癩に触つて、眉を顰め、瞼の腫れた双眸で睨むと、元のレイトの調子で悪態を吐こうとする。

「アイツを悪く言うな……こんな気持ち悪いモノ前にしてっ、逃げない方がおかしい」

「それを言うなら、貴方は貴方をこんな気持ち悪いモノ呼ばわりしないで下さい。メイクセットとかも私が手伝ったんですからね？それは私への侮辱にもなるって分かってます？」

「つ……うるさいっ……」

しかし、弱々しく言葉は震え、消え入ってしまった。

認識障害のベールの下、シスイの顔は曇り、ため息を吐く。

「そこは『そのつもりだが？』みたいな感じで言い返す所でしょうに……相当参っているんですね」

「うるさいって言っているだろうがっ……はやく失せろっ……!」
「……分かりました。本日は終日お休みにする様ミマタさんに伝えておきますから、ゆっくり休んで下さいね」

彼女はそう言い残し、自動ドアの向こうへ去って行った。

少女は訪れた静寂に一つ吐息を震わせ、くすんと鼻を嚙ると、奥歯で涙を噛み殺す。

意識するは、次の一手。チハヤの視線。役割を遂行する、女の自分。こんな姿はアイツに見せられない。早く次の自分を作り上げる。瞳の奥で、虚勢への原動力を燃やす。

泣くな……泣いてる時間なんか無いんだ……考えろ、次だ、まだ終わりじゃない、考えろ……。

「……………」

治療室の内と外を隔てる、マジックミラーの如き壁の向こう。

気丈に振る舞う元好敵手の壮絶な始終を目の当たりにした青の双眸が宿す光は、惑いの色で揺れ動く。

「……声、掛けなくて良いんですか?」

通りすぎる看護服の女衆にそう問われたが、彼は返事無く、立ち尽くしたまま。ただ拳を握り、奥歯を噛み締め、震えていた。

数日後。

「はあっ……………」

チハヤは未だ、囚われた責務から逃れる様に己が研鑽に励んでいた。

その日は朝食後から昼食の時間まで玄霧の訓練場で剣術と射撃術をローテーション。

事情を知らぬ他者から見ても何処か荒んでいて、鬼気迫っている様に映った。女性使用人が声を掛ける。

「チハヤ様、そろそろお休みになつては……」

「昼食か……!?? 違うのならば口を出すな……!」

「ひっ! すみませんっ!」

人を遠ざける事が増えた。以前から近寄り難かった彼だが、より強く、より露骨に。誰も寄せ付けなくなっていた。

その脳裏で延々と回るは、少女レイの様々な姿と、父親から受けた言葉。

——事が事だ、決して無理に受け入れろとは言わない。だがどうか……。

途中で途切れた言葉の先には、様々な葛藤が詰まっていた。そしてそれは、チハヤ自身にも。

「ああ、っ！」

ドツ。苛立ちを込めて放たれた魔弾が最後の的を射抜き、仮想空間を生成する魔法の光が消え失せる。

彼は息を切らし、操作板に手を付いて寄り掛かると、俯き心中で嘆く。

どうしろっていうんだよ……！ どうしろって……！

事を知ってからというもの、彼は人工授精を検討し、技術者、研究者を散々訪ねていた。

しかしどれだけ粹を集めても、魔術師の受胎は、自然な交配以外では不可能という常識範疇の答えしか返って来ず。足掻きは徒労が募るばかり。

いつそ強要してくれれば……いや、されたとしても……！

動悸が激しくなり、一層呼吸が苦しくなる。

考えれば考える程、その頭は重くなる。

出来る限り思考から逃避しても、肉体に失調を来してしまう。

「ち、チハヤ様、昼食の時間ですっ、シャワーは」

「浴びてから向かうっ……！」

「承知しましたっ……！」

女の用人を見ると、かの少女の姿が脳裏にチラつく。

視界に入れない様にしても、甲高く姦しい女声が気に障る。

チハヤは、己が感情の制御が狂っている事を自覚せざるを得なかった。

汗と共に苛立ちを流そうと、彼はシャワーを浴びる。

物理的に清められ、多少気分はマシになった。

が、何が変わる訳でも無い。問題は骨身にへばり付いたまま、剥がれない。

食事に移っても同じ。一刻も早く焦燥から逃れる為の手段を探る思考が止まらず。

食器を使う手は、最低限のマナーこそ守れどそぞろ。料理の味もせず、口はただ栄養の為だけに、出された食物を飲み込むばかり。

「もう少し、ゆっくりお食事を——」という外界の声もあった。が、彼は雑音として全て無視し、流し込み続けた。

早めにそれを済ませた後は、追い立てられる様にして、その脚は自身の書斎へと向かった。

心を閉ざす様に強く部屋の鍵をかけた後、席につき、大学院の研究論文の返答に目を通す。

安心出来る環境下での頭脳労働による没頭。限られたその時間だけ、彼は平穏が保たれる気がした。

———ここ、そこ

が、深海の底の如き集中に、突如としてそこに存在し得ない筈のふわりと香る甘臭と、耳元を擦る囁き声が届く。

「そこ、間違ってるぞー……」

「ツ——」

彼は声にならない声を上げ喫驚し、身を仰け反らせ、バランスを崩した。

そのまま椅子と共に転倒、床に転がり、無様を晒す。

「はっ、おい、大丈夫かあ?」

動揺したまま上げた彼の視線の先には、挑発的に笑うかの少女、レイの姿があった。

「んなっ、なっ……!」

チハヤは溜めに溜めて叫んだ。

「なんでここに居るッ!?」

「うおっ、うっさっ!」と少女は耳を塞ぐも、その悪戯な表情を変えない。

揺れる白銀の前髪の下、紅の瞳のすぐ横、泣き黒子のある目尻が愉
快に撓み、薄紅色の艶めく唇の端が片側だけ上がっている。

「何でって、分かりきってるだろ？ お前が逢いに来ないからさ」
首から上は、耳に軽く掛かる程度の長さの中性的髪型から何から寸
分変わらず。懐かしい、かつての好敵手の面影と重なって、そこからあ
の頃と殆ど変わらない、気持ち少しばかり甲高く、愛らしくなった様
に思える声音が発せられる。

動揺は極限に達し、相手とは異なり低く変わった男声が、情けなく
ひっくり返った。

「っ鍵を、鍵を掛けてた筈だっ！」

「ああ、すまん。合鍵、玄霧夫妻から貰ったんだ」

「はあっ!?」

聖域が崩れ去る愕然とした感覚で、チハヤの腰が抜ける。

困惑と絶望の入り混じった彼の表情に、見下す童顔は暫しぷつと笑
いを堪えたものの、間も無く破顔。

「ぶふうーっ！ つ、うひひっ……わっ、悪いっ……ちよつとたん
まつ……！」と女性的デザインの給仕服を揺らし、爆笑して見せた。

「お前っ……！」

一瞬怒りで我を忘れそうになった彼だが、沸点は振り切れず。
はあーっと長い溜め息の後、震える言葉を吐き出す。

「お前そんなっ……人を笑える様な立場じゃないだろっ……」

「ひー……ああ、まあ、そうだな」

レイは目尻に涙を湛えながら一歩前に出て「立てるか……？」と手
を差し伸べようとした。

しかし、上がらず。「あれ、おかしいな……？」と首を傾げるその左
腕は、細腰の横でただプルプルと小刻みに震える。

苛立ちを覚えながら、チハヤは奮い立つ。一瞬にして目線は逆転。
彼は白銀髪に乘せられた白のカチューシャを見下ろし冷淡に言い
放つ。

「出て行きたまえ。ここは執務室だ。使用人の君が勝手に立ち入っ
て良い場では無い」

「いや、別に勝手について訳では」

「出て行け！」

ドアを指差し、怒号が室内を轟く。

へらりと笑っていた幼気な顔貌が、寂しそうに、切なげな笑みへと変わった。

「……その様子だと、玄霧名代から話は聞いたんだな」

小動物の如く上目で見上げざるを得ないその姿は、どうしようもなく少女であった。

微かに震える肩幅もあまりに狭く、ボディラインが比較的出難そうなデザインの給仕服を着ているにも関わらず、丸く膨らんだ胸と腰の曲線が目立つ。

変わり果ててしまっているのだ。肉体は、何もかも。

「へへ、やっぱ、キツイよな、こんなかさ……」

チハヤの口はへの字に曲がって、返事を返さない。否、返せない。いざ認識してしまうと、突き放す言葉すら憚られ、何と声をかけて良いのか分からず、ただ沈黙してしまう。

少女はそんな彼へ向け、優しい口調で続ける。

「いいんだ。軽蔑してくれて構わない……ただ一言、謝りたくてな」かの面影が、今にも消えて無くなりそうな、弱々しくて儂げな顔で微笑む。

「この間は、悪かった。いきなり襲う様な事をして……」
やめろ、やめてくれ。

チハヤの胸の内は無意識のうちに張り裂ける様に痛んで、そう悲鳴を上げた。

「気分を害したよな、ほんと……ひでえザマだもんな……」
かの面影が、離れていく。

「まあ、なんだ……それだけ。へへっ、じゃあな」
こんなこと、許されてなるものか。

刹那的衝動が、去り行く小さな手を掴ませた。

「……なんだよ」

「……もう少し」

「ん？」

「もう少し、話そう」

十八話 初体験

——実際に手に取ると、それはあまりに小さく感じられた。

——実際に掴まれると、その差に驚くしかなかった。

「話そうだったって……なに話すんだよ。出て行けって言った癖に」

「取り消す」

若干ギラついた青の瞳に、目論み通りと笑みを作ろうとした少女の顔はたじろいだ。

赤らんだ頬をより赤くして「わっ、わかった！ 分かったから手離せっ！」と、身体を回してその手を振り解く。

離れるとふらついて、後ろの書棚に寄り掛かり、肩で息をする。

なっ、何だ、今の……。

一瞬の気分高揚、理解不能の鼓動の昂まりに、一時惑った。

浮ついた、ふわふわとした実感。決して不快では無いものの、翻弄される様な怖さがあり、真っ直ぐ立っていられなかった。

ただ少々レイは敢えてはそこに理屈は付けず。先ずは目の前の課題をと向き直り、呼吸を整えて今一度尋ねる。

「はー………で？ 何だ？」

「……分かん」

「分からんって、お前……」

「話さなければいけないと思ひ、咄嗟に引き留めた。だから、内容は今考えている」

対する美丈夫もまた、戸惑いの中に居た。先の自分の行動に説明が付かず、優秀な頭脳は空転し煙を上げている。

さながらポンコツ。普段見せる隙のない姿とは対極の状態。

新鮮味を感じた少女側は、その様を見て理解の吐息を一つ吐き、身の強張りを解き、ペースを少し取り戻す。

「まあ、いいよ。そつちも参ってる、こつちも参ってる。お互い様だ」

「いや、お前程では……」

「あん？ 使用人に当たり散らしてる様な余裕の無い奴がつ、それを言うか？」

「見てた、のか……？」

「ふははっ、ばつちりな」

己の振る舞いを省みて、今更ながら彼は自らを恥じた。

両耳を赤らめ、への字口を暫し結んだ後、観念した様に肩を落とす。

「っ……はあ、確かに、お互い様か」

「おう」

が、そこで切り替わる。カチリ。まるで機構が再起動したかの如く理性のスイツチが入り、隙の無い才人チハヤがカムバック。

目の色が変わるとは正にこの事か。彼は「尤も、今この場に於いてに限り、だがな」と口にして、普段の冷徹さの中に激情を激らせながら、給仕服姿の少女に詰め寄る。

「へえっ……？」

「そうだとも。お前には話さねばならない事が沢山ある」

「チハヤ、さん……？」

「互いに腹を割ろうじゃないか。話すから、話せ」

「ひっ、い……！」

空白の時間を埋めるべく、積もる話が、一遍にその場に雪崩れ込んだ。

「やっぱりあの勝負仕組まれてたのかよ！」

「ああ、すまない」

「いや別にお前が謝る事じゃないわ。関わってないんだろ？ てか

関われるとも思えん」

「まあ、そうだが」

「はあー、腹立つよなあ」

「ああ。俺も、この件には憤っている。タダで済まそうとは考えてない」

「へっ、どうするつもりだ？」

時に意気投合し、

「お前の家の事情は分かっている。状況が厳しかった事は百も承知だ」

「へえ、調べたのか。同情でもしたか？」

「いいや、ただ呆れた。何故周りの人間を頼らなかつた？」

「比較的、頼つてたつもりだが」

「違う、お前のそれは利用だつた筈だ。己の意志で、己の手足として動かそうとしていたに過ぎないだろう」

「……だつたとして、何の問題がある？」

「お前が失敗した場合に取り返しが付かなくなるだろうが。現に今、そうなっている」

「分かつた様な口を聞くなっ！ 頼れる人間が居なければ、己でやるしか無からうが！」

「意固地になつて探さなかつただけでは無いのか？ お前にはそれだけの能力があつた筈だ」

「っ、何が言いたい？ 説教か？ 過ぎた事を論つて何になる？」

「お前の行動原理を知らなければ、この事態に対処出来ないんだよ」

「マジ？ 対処する気なんだあ？ へえー？ ふうーん？」

「話を逸らそうとしても無駄だ。さあ話せ。何故一人で動き続けた？ その先に何を求めた？」

「だあーからっ、しけた古豪の出自のボクが一番になろうと必要な事をしてただけだつて」

「それは答えになつてない」

「この分からず屋めえええっ！」

時に紛糾し、

「使用人の仕事、結構大変でさー……ミスつたりすると鞭で打たれたりすんのよ」

「……………」

「まあ、それは全然マシで、一番キツかつたのは」

「ギブアップだ、もう少しほかすか、省略して話せつ……」

「ええっ、手脚が動かせなくなる経緯とか」

「いいからっ……」

「えー……思いの外弱いなあ」

「お前が強いつて事で良い……」

「……へへっ」

時に、深刻になった。

そうして窓の外、カーテンの隙間から射し込む陽光がオレンジ色に変わった頃。

「はあっ……まだ何かっ、隠してるだろう……」

「そっちこそっ……んっ、っ……」

へばり果て、絨毯の上に腰を下ろす二人は、互いに語り尽くせないまでも、相互理解は概ね深まっていた。

ただ、内面は兎も角、外面の擦り合わせが間に合わないチハヤは、西陽に染まる少女の横顔を覗きながら改めて思う。

(コイツは、本当にあのレイトなんだな……)

由緒正しき家柄らしからぬ砕けた物言い。随所に見せる強かさ。ハングリー精神。どれをとっても彼そのもので、一切の否定が出来なかった。

そして、内面ばかりに意識を向け、かつての彼として考え始めていたが故、抜かっていた。

日が陰った瞬間気付く。異様な程に赤く火照って苦しげな、その弱々しい顔貌に。

「……レイト、お前、顔色がっ！」

慌てて腰を上げ、彼は駆け寄る。

もう自身と同じでは無い。あまりにも違う。疲労も、体調も。

その上健康ならまだしも、過酷を受け続けたか細い肢体は決して健全では無い。

「はー……っ……まだ、その名で、よんでくれるんだな……」

「悪いっ、夕陽で分からなくてっ……って、その顔は、まさかっ」
しかし人一倍強がりな人間である。計算して、強かに隠し通していた。

にやり。真っ赤な顔で、悪戯っぽく笑って見せる。

「ひひひっ……だーまされてやんのっ……ほんと、だいじょーぶ

「かあー……?」

「何をふざけた事をつ……! 待つてろつ、今すぐ人を呼んでつ」
刹那、少女は中腰の彼に飛び付いて、その手で押し倒した。

「ふっ……んううっ、んっ!?」

無駄の無い動作だった。油断し切った男体が女体に絡め取られ、むちりとした腿で口を塞がれている。

ただし、少し動いただけにも関わらず酷く消耗した様子で、上からの吐息は荒く吐かれた。

「はー……っ、マジで、なめすぎっ……さすがに、かなしいぜ……?」

「んんんんっ!?」

柔らかな感触がじんわりと筋肉質な肉体を侵す。スカートの中から甘酸っぱく香るは、淫靡な雌臭。既に汗か何かのシミが広がっていて、少し湿っぽい。

「叫んでもいいけど、んっ、かぶが下がるだけだから、やめたほうがいいぞー……?」

外に待機しているのは計画をサポートする女衆である事を示唆した後、少女は「そこんところわかったならあつ、はい、どーぞ……」と、口元を塞いでいた脚部を退けた。

「……どういう、つもりだ」

「見たまんまのとーりだよっ……ここで、済ませるんだっ」

続いてするするするり。手際良く、細い手指はチハヤの腰に巻かれたベルトを外していく。

抵抗は可能だった。しかしながら、彼は啞然としてされるがままだ。

「絨毯、掃除大変になるかもしんねーけど……あ、さっきまですわってたとこ、シミできてんじやん……サイアク……」

「嘘を、ついたのか? 手が動かないと」

「んっ、うごかないぞ……? 脚もだけど、決められたこと、以外の目的では、な……」

夜伽教育で教え込まれた動きと、使用人の仕事、そして最低限度の

歩行と受け身。

それ以外の目的では指輪のサポートを受けられず現状動かせないと、息も絶え絶えに説明がなされた。

「っ、どうして、不意打ちの様な事をするんだっ……………！」

「だって、おまえにげるじゃん……………」

「んなっ！ 当たり前だろう！ こういう事は、双方の同意と心の準備が」

「それ……………してるヒマあると思う……………？」

「っ……………な……………は」

言葉に詰まった。チハヤは急ぐ理由を知っている。

説得力のある否定を、用意出来ない。

何かするのも憚られ、その手はカーペットの上でただ震え惑う。

「いつでもできるわけじゃないんだっ……………とにかく、孕まないと先がないんだからさ……………大事なのはっ……………カラダの準備だろ」

「いや、それは……………」

「あ、そうそう、ちなみにボク、つい先日、生理、おわったんだよな……………しんどいんだぜ？ 機会があれば、ぜひ味わっていたきたい……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

……………」

ズボンが剥かれ下着だけになった。が、男物のパンツの中は全く勃起の兆候が無い。

その様に「この間はあるなに勃ってたのにつ……………結局あれ、暴発した魔法のおかげだったのか……………？」としよぼくれる少女。

漸く、チハヤは言い返す。

「少しは想像してみろっ……………！ つい数年前まで男だった相手が、女になって性交を求めて来ている状況をつ……………！」

「……………たしかにキツイ」

共感が得られたかに思えた。しかしながら、揺れる紅の瞳は再び狂気を孕み、止まらない。

「でもさ」と返事を返し、するり、するり。給仕服を脱いで、艶かしい裸体を露わにした。

「やるしか、ないんだよ……!」

「うっ……!」

体毛の痕跡も傷跡も無い、透き通る様な白い絹肌。それが火照って赤熱し、随所に赤紫色の淫紋が、怪しく光り浮かんでいる。

ショーツも脱げて、むんつと蒸れた色香が放たれる。

丸いぼん尻が、毛のないつるりとした股間がチハヤの顔に近づく。

ぼつてり厚い、閉じた陰唇の一本筋から糸引く淫蜜が垂れた。

むせかえる様な淫臭で彼の鼻腔は満たされる。

「おまつ、これっ……!」

それもその筈。玄霧の淫欲感度遮断剤の効果が切れ、その身は狂おしい程の淫熱に苛まれていた。

ここまで会話に終始し、我慢に我慢を重ねた結果今まさに、限界を迎えている。

「みりゃわかるだろうっ……こっちはっ、正気とのたたかいもっ……あるんだっ……!」

(こいつっ、どうしてこんなになるまでっ……!)

細指を逸物に這わせ、大慌てで扱きだす。

「ただでさえ、望みはうすいんだしっ……はやく、回すうをこなさなきゃっ、いけないしっ……」

「待てっ、待てっ……!」

口調は取り留めを失って、下腹部の紋様が、怪しい輝きを増している。

いよいよまずい。切迫したチハヤが動いた。

「待てと言ってるだろうがっ!」

「んきゅっ!」

彼の右手が、股間を弄るその手を取って止める。

その何気ない刺激が、並々と溜まって溢れそうな女器を揺さぶって

しまった。

刹那、どうんっ！淫紋から波動が放たれ、室内に薄紅の光が充満する。

「くっ、あっ……………」

直撃を受けたチハヤの精神は、強烈な淫欲の上書きを受けた。

心拍は張り裂けんばかりに回数を増し、送られた血流は逸物へどつと流れ込む。

どっ、どっ、どっ、どっ！反り勃っていく。主人の意志を無視して、ビキビキ、ビキビキ。

「ふーっ……………っ、おまえが、わるいんだぞっ……………」

「っな、理不尽、なっ……………」

少女の細腰は、鍛え上げられた腹筋の上を滑り、その肉竿へ真っ直ぐ向かっていく。

獣の如く吐息を吐きながら、淫らに肢体をくねらせ、直上に着けば、ぬりゅっ、ぬりゅっと卑猥な前後運動を行い、割れ目を何度も押し付けて淫蜜を塗りたぐる。

「こんな事でっ、いいと思ってるのかっ、おいっ……………」

「おもってないっ……………！ けどいまはっ……………いまはっ、もうっ……………！」

楽に、なりたいつ……………！

切実な願いは、成就した。

思い切って腰が下ろされ、ぬぶうつと鬼頭は割れ目の中へと滑り込む。と、勢いそのままに、前回行き止まった突っ掛かりをぶちんつ！と越えた。

「はっ……………あああ、っ……………！」

「くおおおおっ……………！」

低音と高音の苦悶が重なる。凹凸がずつぷり、深々と嵌まり込んで、接合部からこぶちゅっ、と空気混じりのはしたない音を立てた。

「あ……………ああっ……………！」

痙縮する裂かれた女陰から赤い血が滲む。挿し込まれた肉茎の根本を伝い落ちていく。

強烈な圧迫と激痛に見舞われ、少女は痛苦に叫ぶかに思われた。しかし。

——あんらっ、これえっ……………!

「っ…………おいつ馬鹿っ! 大丈夫、ぶ、か……………」

「ん、っ…………んお、おっ…………い、じよぶ、じゃっ…………い、っ……………」

その女体の官能の芯たる肉壺が得たのは、途方も無い悦楽。

確かに痛みはあった。しかし浅い部分に過ぎず、その先の深部は脳天まで突き抜け、内側から全ての細胞に快感の火を通す熱源となる様な、そんな感覚に襲われていた。

暴力的で支配的な衝撃に息も吐けず、少女はただ瞳を白黒させ身を震わすばかり。上手く話せない、動けない。

「痛い、のか……………」

チハヤ側からは顔が見えない。判別付かず戸惑いながら問う。が、返事は当然喘ぎばかりで形にならなかった。

彼の方も決して余裕では無く、ヒクヒクと痙攣する肉襞にキツく締め付けられた肉茎は、己の意に反して凄まじい速度で暴発へと向かっていく。

ドクドク、ドクドクと引き攣りが起こる度、内からマグマの迫り上がりを感ず、焦燥を隠せず。

「っ、今抜くからっ、待ってろっ!」

緊急性を感じ、そう言つて細腰を持つとした。次の瞬間、

「ま、っ、うごかすなあ、っ……………! だめらっ、ああ、っ……………!」

苦悦に蕩けた形相で、少女が必死に反抗した。

咄嗟に彼は手を引いたが、またしてもその僅かな揺れで均衡は崩れる。

「っ、あ、っ、だめっ、うごくなっ、うごくなつてえっ……………!」

「はあっ!? 動いて無いぞっ!?」

「うごいてう、らろっ! ぐんっ、ぐんっ、んっ……………てえっ……………!」

「それはっ、お前の方がっ……………くうう!」

張った肉茎が蜜壺の蠕きを受けて暴れ、その暴圧を受けて女陰が悦楽に乱れ締まる。

連続する互いの痙攣が、互いを増幅し合って止まらない。女体も男体も、甘く痺れる閃光に脳髓を灼かれ、視界の奥にチカチカ光る星を見る。

明滅は飽和して、両者の意識を白ませていく。

「あゝっ、あつ、あめつ、クるつ、きてうつ……くつ、いゝっ、いくつ」

「やめろっ、待てっ抜っ……!」

両者切迫し、その時が訪れた。

「いゝっ、っ、っ……!」

「ふっ、うっ……!」

ビクンツ! 若い肉体二つが苦悶の声を上げて仰け反り、天井へ向かって跳ねた。

そしてびくっ、びくっ。一度で終わらず、二度、三度と打ち震える。

その度繋がり重なるその接合部。どくどく、どくどく、激しい脈動と共に命の熱が広がって、男女の淫らなデュエットが夕暮れの部屋に染み入る。

「つうゝっ、つゝゝゝゝ、っおゝゝゝゝ……!」

「くっ、絞られっ、っ……!」

「おゝっ……っ——」

女体は幾度か波打った後、ゆっくりと後ろへ倒れ、チハヤの胸板の上にとんと力無く落ちた。

空間を満たした妖しい光が失せ、快感の余韻と、荒々しい呼吸が落ち着いていく。

彼は腹上でぐったり弛緩している肢体を揺すり、声を掛ける。

「っ、はあっ、はっ、おいっ! 馬鹿レイトっ、このっ……!」

「っ……っ……」

応答無し。柔らかそうな白銀髪の下を覗き込むと、幼顔は意識を失い眠りについていた。

何処に触れても崩れて、壊れてしまいそうな儂い存在を感じながら、チハヤは大きく息を吸い込み、そして溜め息として吐いた。

「……はあああ……」

十九話 悪女

ある日ある時、ある通信回線で。本日も内密に報告が行われる。内偵と思わしき謎の女声は言った。

「母胎、種子と交合した模様」

「ほほ、ついにですか」という大らかな男の返答の中には、女の喘ぎ声が混じる。

通信中の不貞。だがやり取りは一切それに触れる事無く、つつがなく続く。

「しかし魔力差が未だ大きく、子を成すには至らない事が想定されます」

「それはそうでしょうなあ」

「よって、特段手を加える必要は無いと思われませんが、如何致しますか?」

「うむ、問題は無いでしょう。しかし気は抜かない様に。依然干渉はせず、偵察を続けて下さい」

「了解致しました」

プツリ。通信が途切れた。

続いて、内偵の女声は別の人間へ報告する。

「——と、この様な反応でした。ミマタ様」

「うんうん、了了」

結局の所、焦りに焦って行った初行為は、散々な結果に終わったと言っているだろうか。

「つえ、ダメだったのか……?」

「ええ、残念ながら。受胎の反応は見られません」

あの日の翌日。再びの治療室の寝台の上、看護服姿のシスイから報告を受けた少女は、ホツとしながらも落胆した。

下腹部の奥、かの圧迫感と、灼熱を注がれ満たされていたといった感覚が

まだ残っている。

故にぼーっとした頭は楽観的に思ってしまった。これはいきなり孕んだのではと。

そわついてしまっている自分を恥じずにはいられなかった。うつ伏せになり硬い枕に顔を埋めようとする。

「アハっ、あくんなおぎなりなセックスで気を失うなんてえく……そんなんで孕めるわけなあくいつしよ」

「見てたのか……」

「見てない訳ないでしょ？ あんなおつきい声出してえ」

「っ、ミマタさんっ！ デリカシー！」

追い討ちを掛けようとするミマタと、それを諫めるカゾノ。

羞恥の振り切れた少女は二人を尻目に俯き、何度も逡巡する。彼は、チハヤはどう思っているのかと。

訊けない胸の内を察したかの如く、ミマタは言った。

「孕みさえすればそれで良いと、功を焦るのも分かるけどさあ……ちやんと訓練通りにやらないと、あつちに嫌われちゃうよ？」

「うっ……そんなこと、どの道……」

その為に、彼女らに仕込まれた技術がある。

一度もまともに使えていないのは、偏に心理的な壁を越えられないからだ。

己はそこまで堕ちていない。本物を扱う抵抗感には抗えない。やった所で円滑に進むとは思えない。どの道、無様を晒し続ければ心は離れていく。

悪循環だった。だから早く済ませるしか無い。だから、必要以上に焦る。

「ここにきて、ちよおつとヌルいよねえ。過保護にされちゃうのはやっぱり良くないのかなあ？」

「ミマタさんっ！ 彼は十分」

「その最たる例のカゾノちゃんにはシャアラアップ。これは決して単純な問題じゃあなくい」

長い舌が巻かれ喋る。

「分かるでしよ〜？ 向こうはキミの浅ましさに勘付いてえ、だあくいぶお冠だったぞお〜？」

「っ、チハヤはっ、チハヤは、なんて」

「この場に来ない事が答えじゃあないかなあ〜？」

「だったらっ、直接、訊きに……」

末尾は消え入った。

歩み寄った所を、感情的都合で騙し討ちしたのだ。どの面を下げて良いのか分からない。

暫し沈黙が流れた後、はあ、と呆れた溜め息が吐かれ、長い脚の踵が返る。

「ま、暫く頭冷やしなさあ〜い。シスイちゃん、夜伽教育は暫くご褒美抜き、お薬抜きで〜」

「……分かりました」

口答えする事も叶わず。以降、使用人私室の一角、もとい夜伽実習室では、これまでもとは比べ物にならない哀叫が木霊する様になった。

「——っ、ごめんらさいっもうしわけありませんゆるしてくらさいっ」

「ダメです。もう一回、キチンと胸で挟みながらしやぶって下さい」朝目覚めた段階では抑制剤の効いた身体を、昼の使用人としての仕事で干された上で行われる、狂乱の教育の数々。

内容はシスイの装着したペニスバンドをしやぶらされたり、脚で扱いたり、胸で挟んで扱いたり等々。

その間ご褒美たる手淫自慰は無し。「オナニーさせてくらさい」と幾ら強請っても無駄。

「ダメですって。キチンと私をチハヤ君だと思わなきゃ。彼の前でそんな事言えないでしょう？」

「うっ、うっ、うっうっうっ……」

「催眠系の魔法にキチンと掛かってくれちゃえば楽なんですけどねえ……」

本番での失態を思い起こさせられ、それだけで軽く達し、尚も悶え苦しむ。

救われるのは、ある程度の量奉仕した後、口にすする、相手に全てを捧げる旨を伝える言葉のみ。

「……………」

「はいっ、よく出来ましたっ」

後は尻穴を貫かれ、気絶しない為の耐久訓練が行われ、末期に果てる。

繰り返した。繰り返した。繰り返した。

やがて少女は彼を求め、彼を探す。

昼の使用人の仕事の間、あらゆる物陰に彼を見る。そうして彼が現れたのは、更に数日後の事だった。

朝、治療室で目が覚めて間もない頃。給仕服姿の彼女らも同室している中、ドアが開く。

姿を現したのは、顰め面で腕を組んだ本物のチハヤだった。

少女の紅の瞳が俄に歓喜と緊迫に見開かれたのも束の間。その視線は少女ではなく蛇女に向けられ、初っ端険しい口調で静かに声を荒げる。

「ミマタ、貴様一体どういうつもりだ？」

「いや、何の事お？」

「トボけるな。あの偽の任務はお前が」

「本当に分からないんですけどお、自分のミスを人になすり付けるの、やめて貰って良いですかあ？」

「……信用を得たくばふざけるのを止めろ、今すぐ首を落としても良いんだぞ？」

「あら、ご勘弁下さいまし」

頗る険悪。何かあったのかと少女が勘繰った所で、彼は「レイトと話がある。女衆諸君は一度退室を」と命じる。

「んん？ ここにはそんな名前人間は居ないけどなあ？」

「貴様は……良い加減にしないか？」

「ミマタさんストップ！ 坊ちゃんも喧嘩しないで下さいっ！ ほらっ、出て行きますからっ、ねっ？」

仲裁するカゾノが目配せして、シスイの協力の下、半ば強引にミマタを外へと押し出していく。「まあいいけどお、また苦勞するぞお〜?」とミマタは言い残し、ドアの向こうへ去っていった。

そうしてその場にはチハヤと少女だけが残されたが、チハヤは不機嫌なままだ。鉄面皮は変わらないが、怒りのオーラが目に見える。

少女は何処か浮ついてしまっている心を抑え、愛想笑いを浮かべながら恐る恐る問う。

「あはは、何かあったのか、お前」

「良くもそんな口を聞けるな……」

悪手だった。詰め寄られて恐怖に慄き、か細い喉笛は「あひゅっ」と声を漏らした。

彼は柔頬をつねって捲し立てる。

「勝手に人を襲い、その後は気をやって事後処理も何もかにも投げ出し、挙句その様な澄まし顔を晒すとは良いご身分だ」

「ういっ！ 仕方ないらうっ本当に余裕が無かったんらうっ！」

「計算づくで余裕の無い状況を演出しておいて何が仕方ないんだ？」

言ってみろ」

「それはっ、悪かつらうっ！ でも事情は理解してくれへっ」

「分かった上でも嘆かわしく思うぞ？ お前はどうか？ 恥とプライドを捨て去り過ぎていると思わないのか？」

「……………ううっ」

かつての好敵手の視点からの指摘は、的確に心を抉った。

言い返せず瞳に涙を浮かべて、震えてしまう。殊更に悔しくて仕方が無くて、改めていっそ殺せという気分させられる。

チハヤはその弱々しきを見透かし、心痛で顔を顰めながら「はあ……」と深く溜め息を吐くと、頬から手を離し改った。

「俺は、その事も含めこれからについて話に来た」

最早後回しには出来ないからと、真っ直ぐ少女に向き合い、簡潔に伝える。

第一に、勝手に動かない事。必ず何か行動を起こす時は相談する事。

「流石に三度目は許されないし、許さない。己の信条に賭けてな」
「相変わらず固いなあ」

「破った場合は美味しい飯は二度と食べなくなると思え」
「うっ……」

第二に、体調管理を徹底する事。先の様な魔法暴発事故を二度と起こさない事。

「あの妙な光を浴びるのはもう二度と勘弁だ」

「これは管理でどうこうなるものか……？」

「玄霧の医療研究員達が全力を上げている。指導にキチンと従え」
そして第三に、夜伽は双方の都合を合わせた上で、時間を決めて行う事。

「えっ」

思わず少女は声を上げた。それは受け取り様によつては他ならぬ合意である。

俄に戸惑った空気を察し、チハヤは額に手を当てて言う。

「勘違いをするんじゃないぞ？ 俺は決して受け入れた訳ではない。こうでもしないと、お前はあの女衆達と結託して何をして来るかわからないからな。仕方無くだ」

「んなっ、何だよそれっ、失敬な……」

普通に次の手を考えていた為、あまり強くは反論出来ず。少女は言い淀んだ。

そこへ更に理由が付け加えられる。

「そして嫌な話。これから先、成功如何に限らず行なっているというアピールが無いと、向こうの計画が前倒しされる危険性もある」

「……密偵がいるのか」

「どうもな。諜報を防ぐのに難儀している」

玄霧は急成長したグループだ。人の入れ替わりが多い。故に簡単に紛れ込まれてしまうのだと、説明が為された。

少女は皮肉っぽく笑う。

「まあ、要は逃げるに逃げられなくなったって事か」

退廃の香りに、浅慮にも素直に従ってしまった。彼も同じだと、そ

う思い込んだ方が楽だったからだろう。

ただ、チハヤはそんな逃避を許さない。

「本当にそう思っているか？」

「……は？ 思ってる、が？」

「ならば今までの条件に一つ追加だ。共により良い道を模索し続けると約束しろ」

「っ、子供を産む以外の道が、あると……？」

「見つかつて無いから探すんだろう」

何を当たり前の事を、と言わんばかりのあつけらかなとした答え。少女は空笑いする。

「……はっ、お前は、まだ余裕があるからっ、そんな事が言えるんだ」

「そうかもな。しかし思考停止は奴らの思うツボだ」

卑屈な一言も一蹴して、彼は淡々と説く。

「そも、後二年弱で子を成す事は現実的じゃない。上手くいかない前提で考えるべきだ」

「……ダメ元で挑む方の身にもなってくれよ」

己が酷く卑小な存在になった様に思えて、白銀の眉間に皺が寄る。

そこへ、トドメの一言。

「やはり、内面まで軟弱に成り果てたか」

「っ……っ」

彼は「時間だ」と口にして、踵を返しドアへ向かう。

背中が遠ざかる。置いて、行かれる。

手が上手く動かない事に、少女は感謝した。手を伸ばして、去り行く袖を掴んでしまいそうだったから。

「今伝えたいことは全て伝えた。次話す時までには、少しはマシになっっている事を願う」

彼は去って行った。

内心流石だな、と気丈にも讃え、気を紛らわせる。

チハヤは立ち止まらない。いつだって先を行こうとする。

その速度に、昔はついていけた。でも、今は――

「はあっ……っ……っ……うっ……っ」

ほろり、ほろり。堪えていた涙を溢しながら、少女は滑る内腿を擦り合わせ苦悶する。

元々は間に挟まる袋と竿があつた。今はそれが無い。虚しさと切なさが増なつて、身体を疼かせる。

当惑は必至。薬は効いている筈なのに。空いた股倉はかの満ち足りた快感を思い起こし、飢えた反応を見せている。

己が心の制御が全く効かない。胸が張り詰めて苦しい。息が詰まる。

悲しくて、悔しくて堪らない。そんな感情が、惨めな欲求不満を駆り立てる。

——何なんだよ、ほんと。

気付けば身を振り、うつ伏せになつていた。幾度となく取つていた行動は、最早身に染み付いてしまつたらしい。

己が体重で圧迫された胸が押し潰される。その二つの先端はじんわり、病衣にシミを作っていく。

甘いミルクの香りと、発情の色香が混ざり合う。

「ううっ……」

この部屋は監視されている。

が、最早痴態は晒し尽くして、他者の目はブレーキ足り得ない。こんな身体であるという理由もある。

ボクは、もう……。

少女はまた気付かされた。だらしない肉体に相応しい、墮落し切つた自身の精神に。

自覚したとて止まらない。浅ましい腰の動きで、股倉を下に押し付ける。

滑つた下着の中が、硬めの病衣に擦れる。

もどかしくも痺れる快感に身は酔いしれ、つま先はくつと丸まつたり、ピンと伸びたりを繰り返す。んんうっ、と悩ましげな艶声が絞り出された。

とその時、がたり。室内で物音がした。

「っ……えっ？」

いつの間にそこに居たのか。音のした場所に目を向けると、そこには小さな三つの人影があった。

「痴女です」「痴女がいます、愚弟は見てはいけない」

「ぐうう痛い痛い痛い」

大人の腰の高さ程の背丈の女兒二人と、その後ろ、術式の光が浮き出ている風呂敷で目元を縛り隠された、更に一回り小さな男児一人。女兒二人は双子のようで、見た目そっくりの顔貌を少女へ向けている。

「ああ、愚弟のせいでバレてしまいました」

「ようやく侵入出来ましたのに。バレてしまつては仕方ありませんね」

「うっ、痛いよおっ！」

見た目の幼さの割に明瞭かつ整然とした口調の彼女らは、乱暴に男児を足蹴にして隅へ追いやると、はしたない姿の女体を揃つて指差し、拙いながらも鋭い魔法の光をその爪の先から生じさせた。

『にいさまを誑かし煩わせる悪き存在、成敗致す』

直後異変を感知し、外からカゾノと使用人複数人が駆け付け三人を取り押さえる。

「私達は玄霧です」「使用人なら私達に協力しなさい」と抵抗しわちやわちやとするちびつ子達を、「めっ！ 血筋を権力を振り翳すなんてみつともない事しちやめっ！」と嗜めるカゾノ達。

それらを他所に、少女の瞳からは光が失せ、赤らんだ顔貌に俄かに絶望の影が差す。

そっか、そう見られてしまうよな。

感情が溢れ、また大粒の涙が零れ落ちる。

苦しい胸の内が、震える口を突いて出た。

「その通りだ……ボクは、悪しき存在だ……」

彼女らの言葉を借りた、半ば冗談に乗るような一言。

しかしその場の人間皆が少女へ視線を向け動かなくなり、軽薄だった場が一気にずんと重くなる。

「どうか、殺_成して_敗くれ……」

少女らは何も言えず、その藍色の眼を丸くして固まった。

二十話 赦免

度重なる修練と執務により泥の様に重くなった身体を引き摺りながら、チハヤは久方ぶりに自室のベッドに向かう。

移動の最中も考える事は山積みで、一つ欠伸をしては、何かを忘れてはいないか確かめる。

……ああ、まったく。

脳内に大きく居座るのは、当然かの好敵手、レイトのなれの果てたる少女の存在。

孕ませなければ国は滅びの道を歩む。孕ませても、己は何か根本的な尊厳を失う。

余りに異質かつ深刻な事態であり、対処を一步間違えれば全てを失いかねない。

彼のみぞ知る、何処の誰にも計り知れないプレッシャーを背負い、ふらつきながら、彼は慣れ親しんだドアを開けた。

灯りは付けない。閉じられた、真つ暗な自分の為だけの空間。

いつもの清潔感のある香りに包まれながら、習慣だけを頼りにふらふらと進み、自身の長身も余裕で収まるキングサイズのベッドに倒れ沈む。

刹那、違和感。香りの中に混じる、何処か覚えのある甘ったるさ。

一瞬跳ねて沈んだ何かの重みによる揺れ。

彼の頭脳に確信めいた予感が過ぎる。

有り得ない。かの一件を機に、施錠魔法に独自の術式を加えて強化した筈。

しかし、恐る恐る振り返れば、違和感の元凶がそこに横たえていて、目と鼻の先で紅の双眸が光っていた。

「……おい」

咄嗟に暗視魔法を行使した青の網膜が姿を捉える。

沈んでいるのは、ベッドか、はたまたその肢体か。

身を包む、清楚感ある純白のレースのワンピース含め、白銀の頭髪
の天辺から爪先まで、全てが柔らかな少女が、とろんとした紅の瞳を瞬
く。

薄紅の唇から吐かれるのは、庇護欲を擦る小動物じみた可愛らしい
女声。

「ん……？　ようやく来たか」

少し眠たそうに紡がれたのは、さも自身がそこにいる事が当然の如
きセリフ。

「いいベッドだな、思わずうとうとしてしまった」などと呑気に、軽
妙に語られる。

「何故……」

一呼吸、ストレスで震えた溜めが入り、そして放たれる。

「何故またここにお前がいる!?」

夜伽の予定も何もまだ決まっていけない、突然の奇襲に対する問い。

答えは、遡る事実^に約十時間前の出来事^にあった。

『アナタが、かのレイト様……？』

発端はチハヤの妹たる玄霧の双子、万理^{まり}と沙羅^{さら}が、自家が持つ医療
施設の地下最奥、集中治療室の少女に逢い、その結論に辿り着いた点
にある。

「信じて、くれるのか……？　というか名前を、知って……」

「にいさまのお話に比較的高頻度で上がる、唯一の魔術師」

「噂でも神童と評される程のお方。嫌でも耳に入ります」

「その魔力量、最初は見間違いだと思っておりましたが」

「話せばその器量と物言い、成る程、納得致しました」

招かれざる客である彼女らは、女性使用人に両手を後ろ手に拘束さ
れながら、その仏頂面に興味の華を咲かせている。

本来であれば即刻その場から追い出されて然るべきだった。

しかしながら、「親族である彼女達にはキッチンと話を通すべき」とい
う少女の計らいによって、その場で話を聞かされたのだ。

「しかし、話し振りや名前から殿方だと思いましたが、ま

さかこの様なち、女性だったとは」

「少々意外でしたわね」

「ですわね」

尤も、元男であるという肝心の情報を彼女らは知らず、知らされず、必要最低限のピースが繋ぎ合わされた結果、政変で深手を負った、秘密裏に匿われている許嫁候補” という認識が内々に出来上がっていた。

話合わせに即興で参加したツインテールの女衆がこそり、「これによかったのレイちゃん？」と不安げに耳打ちする。

少女がそれに応答する前に『お黙りなさい下女』と双子が揃って遮った。

「我々の様な幼い子供を、子供だから」と邪険にせず、この様な酷な事情をお話し下さった方の心情を無碍にするおつもりですか？」

「お家を失ったとはいえ元御令嬢なのですよ？ 弁えなさい」

「ええ……お二人共もうご自身を棚上げになって……」

『お黙りなさい』

教育者側の苦労は兎も角、過酷な体験を下地にした物語はそれだけ説得力があり、胸を打つものがあつたのだろう。

その上、彼女らは聡い。事情を鑑みた上で、兄を慕い敬い、取られないくない気持ちと、家の利益。総じて後者を選択する玄霧としての資質も持ち合わせていた。

「訳あり痴女で心苦しいですが」

「にいさまに比肩する優秀な血筋の方とあらば話は別」

「にいさまは比類無きお方。故にお世継ぎが難しい」

「お世継ぎは家の安泰に重要」

「お世継ぎさえ居ればにいさまは磐石」

『されどそれは我々には、叶わない役目……』

その点で苦勞している事を周知していて、我が事のように悩んでいない。

葛藤を噛み潰した表情で揃って俯いた二人は、その場で少女を応援する決心をした。

「レイト」

「レイ様」

『いえ、お姉様』

同時に、彼女らは年頃の娘である。

ロマンチックな色恋に飢え、憧れていた。

目的が切り替われば、目の色も変わる。

「な、なんだ……？」

その転換が余りにも極端で少女は驚いた。

ただ理解が追い付く間も無く、容赦も無い。

挟み込む様な形で迫られ、覗き込まれる。

「その泣き腫らした瞼」

「そして一人でお慰めだった様子を見るに」

『にいさまと、上手くいってないのでは？』

「っ、ちがう……そんなんじや」

「我々にお手伝いさせて下さい」

「我々なら出来ます」

目の前に現れたドラマに前のめりになった娘達は、二人でマシンガン
ントークをラリーし続けるスタイルだ。

口を挟む間も、考える間も与えない。強引に聞き出され、話はあれ
よあれよと勝手に進んだ。

「思うに、共に過ごす時間の不足が問題だと思うのです」

「お二人はお話し合いが足りていないのが現状なのでは？」

「いや、この間二人で沢山話して」

『また逃げましたわね』

「ひっ……」

「痛い所を突かれると目が泳ぐ」

「核心に近付くとへたれる」

『淑女としてなってますんわ』

んな事、言われたって……。

少女の女性として過ごした歴は、赤子同然である。
た、たすけて……。

カゾノへ救援サインを送るも、申し訳なさそうに黙って首を横に振るばかり。

「ちよつと聞いてますの?」

「女子としてはポンコツも良いところですよわね」

「ゆるしてくれ……」

『許しません』

そんな嵐の様な応酬の中、一方的にこき下ろされた末、彼女らから結論が下った。

『兎に角先ずは寝食を共にして下さい』

「やはり夜伽以外別々に過ごすとか有り得ません」

「許嫁を名乗るならもつときちんと仲を深めて下さい」

「なあ本当に待ってくれ! それには色々問題が」

「順次解決していきましょう。うだうだしていたら老けますよ」

「善は急げ。今宵からにいさまのベッドに忍び込みますからして」

「アグレッツィブに行きましょう」

「大事なにいさまじゃないのか……?」

「大事だからこそです」

「最善策を取るのです」

双子は全く止まらず。「全員纏めてついて来い」と言わんばかりに先を行く。

「愚弟、お前もです。やりますよついて来なさい」

「ええっ!?? いや本当ににいさまに悪い」

『やると言ったらやる』

「はいいつ——」

「舌戦で、あれ程までの劣勢を味わったのは初めてだ。流石お前の妹だな……」

「それはそうだ、アイツらが二人揃ったら俺でも敵わん」

「はは……」

戻って現在。尚も少女の内で鳴り止まぬステレオボイスが事情として語られ、チハヤとの間を取り持った。

「術は……弟だな」

「怒らないでやってくれ……あの子はやらされただけなんだ」

弟晴希は、五歳にして術式解析の天才的な才能の持ち主である。

彼にかかれれば、通常の部屋に掛けられる規模の施錠術は簡単に突破されてしまう。

かの双子はそこに目をつけ、日頃悪行を尽くし屋敷の人間を困らせているんだとか。

「アイツの才能を悪用しないで欲しいんだがな……って、それはそれだっ！」

が、チハヤはふと我に返り、警戒を再び強め身構える。

「勝手な行動はするなと言ったばかりだろう」

「いや、勝手に部屋に入ったのは悪かったって……でもさ、そう思うなら、出来る限り行動を共にした方が、理に適ってると思わないか？」突っぱねようとした返答が詰まった。

確かに、それはそうなのだ。心理的な側面を除けば。

「それをお前が言うか……馬鹿な脅しみみたいな事はよせ」

「ええっ、予定だつて決め易いし、他にも理由が」

「気が！ 散るんだよ！ 今の自分の姿を今一度俯瞰して良く確認しろ！」

「う……」

彼も年頃の男子である。性欲は無い訳では無い。

少女がかのレイトであるという事を理解していても、肉体は別。

蠱惑的な肢体の魅力に惹かれ、執務がままならなくなる事は想像に難くなかった。

「大体现状のその身体は勝手に暴発しかねない爆弾だろう？ 何故

近くに居られると思うんだ？ その根拠は？」

「ああ、それなら大丈夫だ」

何やら少女はゴソゴソと自身の腰か太腿の辺りを探り、そして「あった」と呟いた。

取り出したのは、抑制剤の入った注射器。細い手指はその先端を首筋に構えると、一瞬躊躇い表情を強張らせた後、プシュツ。一息に注

射した。

痛みと苦しみに顔を顰め、「っ…………はあっ…………！」と荒く息を吐いた後、ニツと強がった笑みを浮かべる。

「話し忘れたけど、双子の助けもあって、ミマタと話が付けられてな…………これで、少なくとも暫くの間、身体感覚を抑えられる…………」

「おまつ、何を…………」

「なんで自分で注射を、って？ これもまあ、命令で補強して貰ってな…………あ、そうそう」

更に立て続けに「あと、はい、これ」と口にして、彼の目の前に白い指輪を転がす。

「万が一の時は、それで命令してくれ。お前の魔力なら、かなり強力なのも実行出来るだろうから…………」

チハヤは顔を掌で覆うと一つ息を吐き、嘆いた。「勘弁してくれ…………！」と。

「お前またっ…………こんな事の為に何を犠牲にした？」

「…………やっぱ話したんだな、ミマタと」

「質問に答えろ！」

「…………肋骨の骨を左右下から数本。体型がより細く見窄らしくなっ
て、呼吸がちよつと苦しく」

刹那、ドンツ！ 飛びかかったチハヤの拳骨が振り下ろされ、少女の顔面のすぐ横を叩いた。

白銀の頭髮が、風圧でふわりと舞う。

その上で、暴圧的な青い魔力の波動が猛々しく荒ぶる。

「いい加減にしろっ…………！」

押し殺された怒声。ひりつく空気。

それらを前に、少女は動かない。静かに微笑みを浮かべたまま、何処か虚げな紅の瞳をほんの僅かに揺らすだけ。

低く涼やかだった男声が更に昂り、震わされる。

「俺はっ、この家を、家族を守る為に…………常に重要な選択を迫られている今もな！」

「…………だから？」

「っ……！ お前はっ……！ お前はその事の重みが理解出来ないだろう！ だから軽々にその様な振る舞いをつ！」

「そうだよ。ボクには理解出来ない。大事な人間なんて、居た事無かったから」

虚に、仄暗い闇の中に吸い込まれ、堕ちていく。

そんな錯覚に襲われ、青の波動は勢いを失う。

怒声は静まり、ひび割れた言葉が続く。

「ああ、でも強いて言うなら、自分が大事だったか」

何かを察し、「待て……」という声が消え入った。

女声は無機質さを増す。

「自分が絶対。だから、自分の為に何でもやった。悪事も働いた」

「嘘を言うな……」

「嘘、そう、全部ウソ。ボクは、ボクの魔法を自分と両親に使ってたんだ」

「待て、もういい……！」

「全部、嘘で作り上げた。本当の部分なんてない嘘がボクそのものだ」

「もういいと言っているだろう！」

沈黙。痛い程の夜の静けさが二人を包む。

「何故遮る？ そんなに聞きたくないか？ 見たくないのか？」

「っ……」

返事は無くとも明らか。チハヤの腕は震えている。複雑な胸の内は、*「聞きたくない」*と拒絶していた。

「なら指輪を取って命じろ。静かにさせろ。それかせめて物理的に口を塞げ」

虚しく響く声音は段々と震え、弱々しくなる。

そして末に、「それが出来ないのなら、せめて……」と口にして、細まった瞳から一筋、涙が零れた。

「せめて……そこに居させてくれ……」

チハヤは、儚げな白い華を前に何も返せず、ただ苦々しく息を呑んだ。

すう……少女の意識が薄らいでいく。

その身体から力が抜けていく様を見て初めて、「おい……っ、おい待て！」と彼は少女の肩に触れようとした。

が、途中で背後で蠢く気配に気付き止まる。

「……やはり居たかお前達」

背後で姿を表す、小さな三つの影。

左向きのサイドテール、サラは「お気づきになられましたか」と口にし、続いてその鏡写しマリが「流石にいさま」と讃える。

その真ん中すぐ後ろで小さく丸まった影、ハルキは「にいさまごめんなさいっ……！」と震え、頭を抱えると、前に立つ二人も頭を下げて謝った。

『勝手な真似をして申し訳ありませんでしたにいさま』

「そんな子女、レイト様はご心配無く」

「薬の作用と疲労が重なっただけと思われませう」

「起こさずそのまま眠らせて差し上げて下さいませ」

「かなりお疲れの様子でしたから」

「ああ……はあ……」

彼は振り返らず、心底しんどそうに溜め息を吐く。

双子娘は流石に焦燥感を露わにし、わたわたと継り付いた。

「お家の一大事と見て、居ても立っても居られず」

「差し出がましいと思いなながらも、ついこの様な事を」

『どの様な罰でもお受け致しますので、どうか』

「いいっ、許すから……今は、今だけは……」

若くして家を背負う背中が、丸まって細かく震えている。

弟妹達にとっぴいつも大きく見えたそれが、少し小さく見えた。

翌朝。固くないふかふかのベッドの感触の中、少女は目覚める。

久々の良質な睡眠からの起床を噛み締めたのも束の間。隣を見ても誰も居らず、起き上がったって人影を探す。

が、然程時間は掛からず直ぐに見つけた。

ベッドの横の床。壁にもたれ掛かり、弟妹達に囲われて眠るチハ

ヤ。

朝の陽光の射すその場所を見て、少女は愛おしげに、かつ少し寂しそうにふつと笑った後、口を固く結んでただ静かに遠目で見続けた。

羨むその輪の中には入れず。

されどその日以来、少女レイはチハヤの側に侍る事を許された。

二十一話 結闘 前編

数日後、午前、玄霧訓練施設。

今日もその床に御曹子の汗は滴り落ち、覇気のある声が木霊す。ひたすら続く、剣閃の風切る音と、拡散する魔力の波動。

それが漸く止んだ頃。給仕服姿の少女は、白銀の短髪を揺らしながら、彼の元へ歩み寄る。

「お飲み物は？」

小さな手元が差し出したのは、ボトルに入った飲料。

彼は一瞥し、ぎこちなく「つ、ああ、有難う」とだけ言っ受けて取ると、無言で飲み干し、空になった容器を返す。

少女は受け取ると、ふわりと香る甘い残り香を残し、軽い羽根が落ちたかの如き存在感の希薄な足音を鳴らして去って行った。

ある種日常的光景の一つ。傍目には何も特別な事は無い。

しかしながら、何かを振り払うが如く再び修練に勤しみ始めた彼の心理は、大きく騒めいていた。

こいつ、本当に普通に使用人の仕事を……！

悶々とする彼を他所に、少女は極めて自然に、彼の日常に溶け込んだ。

それはもう、彼の側にとっては意外な程に違和感無く。

玄霧領内に限り、また定期的な治療時間を除き、朝起きてから夜眠るまで、さも当然の如く連れ添って見せたのだ。

その日の朝もそう。

「おはよう御座います」

「……おはよう」

起きれば当然の如く先に起きて支度を整え、枕元に立って待っていた。

「御支度中に敷布団を片付けますので、少々お待ちを」

「あ、ああ……」

少女はチハヤが起き上がると、彼の寝ていた布団をサツと畳んで片付け始める。

就寝を共にする様になって以降、彼は少女と共にベッドの上では眠らず、床に敷かれた布団で眠っていた。

発端は、初日の夜。

「俺は……布団で眠る……」

彼は万全を期していた。情欲に飲まれぬ様、ひいては少女の魔力成長に追いつく様日々の訓練強度を倍以上に増やし、男根が張り痼る気力も体力も無かった。

計算され尽くした気絶寸前の状態。だが心の安寧の為、彼はそう要望したのだ。

「かしこまりました」

「……えっ」

反論してくるかに思われたが何も無く、ただ簡単にそう返ってきた。

「? 如何なさいましたか?」

「いや、何か……無いのか?」

「御座いませんよ」

しかも、それを予期していたかの如く。ベッドの下のスペースから敷布団を出し、ものの数秒で敷いて見せた。

「……今更使用人気取りか?」

「ええ、使用人ですから」

張り合わない。挑発に乗らない、して来ない。

まるで冷たい機械の如く、ただ淡々と仕事を熟す使用人と化した。恐らく専属の者としては、これ以上無いという程のクオリティで。食事の席でもそう。

「あつ……」

「どうぞ、変えの物です」

「あ、ありがとう……」

隣の弟が箸を落とした時に一番に対応して見せた。

訓練時は内容を把握している故か、給水や休息の呼吸合わせもぴっ

たり。

執務室の掃除は細やかに行き届いていて、コーヒーはいついかなる時も、まるで欲したタイミングを知っているかの様に出て来る。

今までの他の者達がダメな訳では無い。寧ろ玄霧で働く者は皆優秀だ。

「……その君」

「は、はいっ」

「よくやっているが、アレに引っ張られ過ぎない様に」

「はひっ、頑張りましゅっ」

「あっ、ちよつと待ちたまえっ」

現に全てを少女が行っている訳では無かった。ただ触発されたか、はたまた少女が何か触れ回ったのか。皆の職務まで活性化したのだ。当家家政婦長に直接話を聞いた所、この様な答えが返った。

「近寄り難い者ですが、非常に優秀でして……彼女、何も言わず手記を渡してきたんですけど……その内容が素晴らしく、参考にした結果業務効率が飛躍的に改善致しました」

「そうか、有難う……」

お陰でして貰いたい事が、全て命じる前に終わる。痛快であった。本来なら喜ぶべき所だろう。しかし、チハヤの気分は晴れなかった。

詰め寄り、直接問い質した。

「どういうつもりだ？」

「……質問の意図を測りかねます」

「っ、その妙な態度を続ける意図だ。今度は何を考えている？」
「何もありませんよ。これが本来、今の自分取るべき態度というだけです」

原因は、恐らくあの夜の言葉の中にある。

「嘘が僕そのものだ」

「せめて……そこに居させてくれ……」

真意は共に過ごす上での条件を守る為か、はたまた別の何かか。単純に傷付き、疲れ果てた末の防衛反応とも見て取れる。

何にせよ探り当て、適切な対処を――

しかしどれだけ探っても確かな答えては得られず、頑なな姿勢は崩せなかった。

「お前は孕むつもりなんだろう？　だとしたら目指すのは妻なのは無いか？」と冗談気味に問うても「自分には今それを選ぶ権利がありません」と無表情。

「随伴が嫌なのか」「嫌ならやめるか」と尋ねても「特別思う事は御座いません」と一蹴。

「別にそこまでしなくてもいい」「気持ち悪いからやめろ」と直球で命じても「そういった命令は、指輪を通して下さい」と返事された。状況を元に戻す事も検討したが、戻した所でどうにかなると思えず。

そのらしくもない氷の表情と態度には、心理的距離以上に、唯の皮肉では済まない何かがあると感じてしまい、諦めて放置するのも憚られた。

今の少女^{レイト}は、自分から強くメッセージを発さない。ならばと今度は妹達をあたった。

「お前達発案だろう？　その時はどんな顔をしていた？」

昼休み中。レイトの付いて来られない男子更衣室の中、態々魔力回線を使用した念話でそう尋ねた所、双子は、揃った仏頂面をキョトンとさせて答えた。

「困った様な顔をしていました」

「嗜虐心を煽る表情をしていました」

『とてもいじらしかったです』

彼女らはとても良い性格をしている。

心配事が増えた気がして、チハヤは溜め息を吐く。

「はあ……今の具合はどう思う？」

「気になって伺いましたが、何とも言えません」

「高度に感情を殺している様に見えました」

『なので想像ですが、好き避けでは？』

理解出来ず小首を傾げた所、更にこう続いた。

「にいさまに非があるとは言いませんが」

「にいさまは唯一女心の把握に関して疎く御座います」

『何卒、積極的に理解に励んで下さいませ』

(アイツは一応中身は男の筈なんだがな……)

心中で考えた折、身体を重ねた時の事が過ぎる。

いや、そう思っているのは、もしや俺だけで……。

彼女達の意見も一考に値するとはいえ、確証は得られず。

今度は領外で行う職務に託けて、かの女衆をあたった。

「やくやく、言われた通り、頑張っている様だねえ」

「ミマタ、貴様また何かしたのか……?」

昼間の郊外、初夏の陽気の下、人里離れた長閑な田園の淵で。

蛇女を前に、彼は本気で魔法の刃を向け威圧し問うた。

が、相手はいつもの如く飄々と笑うのみ。

「やくつてないってえ。もお、分かってるでしょお?」

「露骨に遠ざけられてアタシや悲しいんだぞお?」と泣き真似をする当人の言う通り、この妖怪はもう出来る限り少女には近づかせない様徹底していた。行動も常に監視している。

とはいえキツカケになった夜の直前には、取引をした記録がある。

その内容に怪しい点が無くても、何もしていないと信じ切る理由は無い。

「いや、貴様はあの夜、アイツの肋骨と引き換えに、指輪を」

「八つ当たりはやめて欲しいな」

追求は遮られた。

「アタシはあの子の行動選択までは捻じ曲げてなあ。全てその意に沿った手助けをしているに過ぎないんだよねえ」

「取り返しのつかない対価を散々要求しておいて、何を言っているんだ?」

「んんん、取り返しが付いたら対価じゃないっしょ。それにいゝその対価があの子の行動を左右した事あったっけなあ?」

知る由も無い。ただ、分かる事がある。

「そもそも、アタシなんかがどうこう出来る様な精神性かなあ?」

出来てたら、もうちよいい上手くやれてると思うんだけどなあ〜?」
この化け物は、嘘は言わない。ここで嘘を吐くメリットが無い。
ここに居て、レイトの成れの果てと共に帰還した以上、此方に与するしか無い存在だ。

「ああなつたのは、アイツの意志だと?」

「それ以外ある〜?」

「理由は……」

尋ねかけて、噤んだ。

これは、自分で考えなければならぬ問題だ。

「……二度と妙な取引をしないと誓え、と言っても無駄なのだろう
貴様は」

「そだねえ〜、それがアタシの役割だからさあ〜」

戦略上、ここで切り捨てる事も出来ない。

刃を納め、彼は彼女を捨て置く。

その背に「あくまっつてまっつて」と言葉が飛ぶ。

「夜伽は、せめて週に一度はした方がいいよお〜」

彼女には、敵側の情報収集も担当させている。

術式によって送られてくるその内容は完璧。毎度正確で、他の情報員の報告とも概ね一致する。

憎らしくも間違っていた事は、今の所無い。

「……忠告助かる」

「……んも〜かわいくないなあ〜」

仕方ない。言い出したのが自分である以上、ここは此方から言い出すのが筋だろう。

そう彼は覚悟を決め、何時もの常態魔力強化訓練を控え、少女の元へと向かった。

「お帰りなさいませ」

玄関で当人に迎えられ、そのまま共に執務室へ移動する。

最中、気恥ずかしさ全開ながらも、若干の突破口になるのではという
打算的期待も込めて遂に切り出した。

「夜伽についてだが、今夜する。其方は大丈夫か？」

「……承知致しました。問題御座いません」

特に眉一つ動かさず返された。

馬鹿な事をした。我に返り、少し腹立たしくなつて言う。

「お前のそれは、こうやって誘い易くする為の配慮では無いのか？」

「そうお思ひになりたいのなら、それでよろしいかと」

スカされて更に腹が立つだけだった。

翻弄されている。この気分だけはまさに、かの好敵手と相對している時の感覚である。

が、改めて能面を演じる少女の、ただぞくりとする程愛らしく、美しいだけの愛玩人形的顔貌を目の当たりにすると、心は噛み合いを失う。

「気味が悪い。本当にやめてくれないか？ それ」

「やめさせたいのなら、指輪を使って下さい。それで済みます」

またこれだ。頗るムカつく。

彼はいつもの挑発的な態度に対する物とは別の、何か込み上げるものを感じた。

何なんだ、自分は、コイツをどうしたい？

口に出す所か、形にする事すら憚られる。

儂くも美しく可憐で、いじらしく、愛らしい。

抱き締めたい。優しくしてやりたい。愛して、やりたい。

今の少女は、日に日にその肉体的魅力を増している。歩けば弾んで踊る、胸と尻の膨らみ。首輪の嵌められた細く綺麗な頸を撫でる、短めの柔らかな白銀髪。その都度振り撒かれる、男を悩殺する甘美なフェロモン。

外見からそう思うのは男として当然だろう。

しかしそう割り切ろうとすると、必ずと言って良い程今の少女と昔のレイトの面影が並び、重なる。

コイツは男だ。それも自身と唯一競い合った程の豪傑。

見る影も無いが、確かにその筈なのだ。

沈黙の中、ごくり。息を呑む。水分は足りている筈なのに、喉に渴

きを感じた。

その筈なのに、そうだと分かる程に、かの存在は儂く、脆くなる。抱き締めてしまえば、愛してしまえば、壊れてしまう。己の中の好敵手の印象の崩壊と、運命を共にしてしまう。

そんな気がしてならなくて。もどかしさ、歯痒さが解消されないまま、手は虚空を撫で、歩調を合わせていた脚は速まった。

「……ふんっ、誰が使うものか」

「っ、お待ち下さいませ」

「待たんっ」

気持ちにケリの付かぬまま、定刻を迎える。

約束した場所は館一階の浴場。彼が訓練後よく、汗を洗い流す場所。

広い割にいつも自分だけが独占していたその場にぽつり、あどけなさに不釣り合いな程豊かで妖艶な、弾けんばかりのトランジスタグラマーの裸体が待ち受けていた。

怪しげに輝く、痛々しい下腹部の淫紋に吸い込まれる様に彼は歩み寄ると、相手は少し伸びた白銀のショートボブを丁寧に下げる。

「……本日は、宜しくお願い申し上げます」

涼やかで美しいソプラノの女声の木霊すと共に、ふるんっ。その胸元の魅惑の果実が揺れた。へたの部分は前と違い恥ずかしそうに隠れているのに、それ自体はまるで恥ずかしげも無く漫然と弾んで、その豊かさを主張して来る。

チハヤの方が思わず羞恥と劣情を催し、前屈みになり、腰に巻いたタオルで股間を抑えてしまった。

……畜生。

触れた自身の逸物は痼り勃ち、脈打っていた。

余力が有ればこうなるという事は既知の事実。意識しても如何にもならない事を悟り、切り替える。

「……だいぶ、薄れたな刻印。腹のやつ以外は」

「ええ……お陰様で」

治療のお陰か、全身に広がっていたアザのような刻印は今や殆ど見えず気にならなくなっていた。

尤も、少女の魔力を糧とする下腹部の物は別で、初期よりもいっそ禍々しくも見える程未だ濃い。

首元のチョーカーが光っている以上、全く以って健全とは程遠いのが実状である。

「っ、まだその調子なのか」

「ええ。調子は万全です。如何なさいますか？」

噛み合わない返事。紅の瞳は、チハヤを見ている様で見えていない。決意は硬い様だ。

彼は一つ深呼吸して冷静になり、慮る。

成る程、要はこいつは、これを私情を挟まない仕事の間と取り、演じる事にした訳だ。

これ以上先延ばしにする訳にも行かない以上、理に適っている。良いだろう、乗ってやろう。

そう胸中で息巻いて無理矢理対抗心を燃やし、腹を括り、彼もまた一つ恥を捨てる為、演技に興じる事にした。

「ではまず、身体を洗って貰おうか」

比較的定石通り。軽い先制ジャブのつもりで放った一言は、「かしくまりました」の定型的で淡白な返事で味気なく返された。

唾然とするチハヤ。その手を、小さく嫺やかな手が引き、シャワーの前まで誘った。

そして腰掛けを手に取り、所定の位置に置く。

「腰のタオルを取り、腰掛けて下さいませ」

「……ああ」

言われるがまま座った彼の前、諸々の道具を桶に入れ背後に周ると、少女はシャンプーを手に取り泡立てた後、黒の頭髪を掻いた。

「痒い所は御座いませんか？」

「……ああ」

耳元を擦る女声。頭皮を搔く細い指の絶妙な力加減。首筋で稀に感じる柔和な肌の存在感。

ここまでは何の問題も無く、「目を閉じて下さいませ」という掛け声の下、泡立った頭髪を洗い流される事によって一段落。

しかし次。少女は泡立て用のスポンジタオルを手に取り泡立てると、自身の身体に泡をたっぷりと塗り込んだ後、ふにゆり。弾力ある柔らかな感触を、筋肉質な広背筋に押し付けた。

んなっ……！

逆る、思春期男子の健全な情動。

それを彼は必死に押し殺し、涼しい顔を取り繕って耐えた。

尚容赦無く、「んっ、ふっ……」と、甘い吐息を漏らしながら、女肉が背中の上で往復する。

官能を誘う、よくよく訓練された動きだった。同時に手元の泡立ったスポンジタオルは、手の指先から足の爪先の隅々に至るまで彼の肉体を洗っていく。

こいつはっ……！

覗き込んだ至近距離のその瞳は、相変わらず何も見ていないものの、何処か淫欲に蕩けて濁っていた。

「はあっ……失礼します……」

「くおっ……んっ……」

泡塗れの華奢な手指が、痾り勃った逸物に触れた。

文句の一つでも言おうとしたチハヤだが、腑抜けた声が出てしまいそうに言うに言えず。

すにゅっ、くにゅっ。玉と竿は、丁寧に洗われていく。

っ、耐えろっ……でないと、格好が付かんっ……！

「……っ、このまま、いたしますか……っ……」

吐息混じりの甘い声と共に、誘う様に、鬼頭が撫でられた。

ぐんっつと惹き込まれ、彼の視界はぐらつく。

競り合う理性と本能。末に、強靱な理性が勝った。

明らかに正気じゃないコイツに、そのまま主導権を握らせてなるものか。

「いや、泡を流してから、そうだな……逸物でもしゃぶって貰おうか」

参考の為読んだ小説中の鬼畜のセリフ、テンプレートと共に、ぴんつと勃った逸物を突き出して見せる。

……畜生、なんて恥辱だ！

本来男同士だから見せ合っても問題ない、などという理屈は当然存在しない。男同士でも恥部を見せ合うのは抵抗感のある行為だ。

彼はどうかと思いつつも感心する。場数の違いか、向こうはよくも顔色一つ変えない物だ、と。

しかしいきなりこう言ってしまうば、元は男だ。必ずボロを出す筈。そう思いながら、出来る限り鉄面皮を維持して見せた。

が、対する少女の表情は動かさず。ただ涼やかな鈴の音の如き声で「承知しました」と返事して、サツと逸物をシャワーで流すと、床に跪き、その高さで口を開けた。

おい、おい嘘だろうっ……!!??

口元がゆつくりと近付いていく。淑やかで、上品に、普通の食事を頬張るが如く。

幾度と無く問うた疑問の答えが迫る。

少女はもう、本当に自分の知るレイトでは無いのか。

仄暗い帷が胸中に降りていく。

いや、これでいいのかもしれない、これで――

彼が一つ何かを諦めかけた、その寸前。

「……うゝえっ」

少女は、嘔吐した。

「……んなっ!!??」

すぐさま取り繕い、「申し訳ありません」と謝って頬張ろうとするが、出来ない。涙目で嘔吐いて止まらない。

「む、無理するな、止めていい……」

「うゝっ……うゝえっ……」

なんだ、この、何だ……。

股間は、落ち度は無かった筈だ。此方が傷付く必要は無い。

それより、無理をさせ過ぎたんだ。コイツの体調の心配をしなければならぬ、のに。

興奮とショックと心配と、各種入り混じった言い知れぬ精神的ダメージを受け、チハヤは片膝をついてしまった。

一方、吐き気に俯いたまま動けない少女は逡巡する。

——ああ。

もう、何も感じたくない。

切なくて、愛おしくて、憎らしくて。

少女は堪え兼ね、感情の弁を閉ざしていた。

思えば玄霧の環境は過ぎたる薬であり、毒の様だった。

ここは何もかもが揃っている。自分も十分に恵まれた立場だと思っていたが、焦がれずにはいられなかった。

下々の所まで堕ちたからこそ、より理解させられる。

「チハヤ様、ちよつと荒れてたけど二元に戻ったね」

「そう？ 私はなんかまだ……」

「良かったあ、荒々しい姿も素敵だったけど、やっぱりいつものチハヤ様の方が素敵だわ」

「私今日頑張って窓掃除したら気付いて貰えてさ」

使用人を褒める、か。した事も、無かったな……。

「レ〜イちゃん！ 君のお陰だよお！ ありがとねえ！」

その中の一人が不意に飛び付いてきて、抱かれた身体が「ひやあつ！」と跳ねた後、床に崩れ落ちる。

「あつ、ごめんなさっ」

「ごらっ、あんたねえっ！」

「御免なさいねえ。この子人懐っこいけどちよつとスキンシップ過剰で——」

あんな仏頂面だが愛し、愛されていた。親も弟妹だけでなく、遣える人間達ですらも。

暖かさがこれ以上無く痛切で、苦しく感じられた。

ここは場違いだ。自分は居るべきじゃない。

ここならば、自分も受け入れて貰えるかも。

拒絶されるべきだ。

甘えたい。許されたい。

裂けた胸の奥から、黒くて赤い、醜いドロドロしたものが溢れて止まらなかった。

「せめてそこに居させてくれ」

何故口にしたのか。何故実現してしまったのか。

火に呼び寄せられた虫が焼かれるが如く、苦しみは増した。

故に必死に、心理的に距離を取った。己が本心を、かの過酷によって副産物的に築き上げられし心理要塞に閉じ込め、使用人として、自分ではないレイとして振る舞う事で、自身を守ろうとした。

されど、より心は歪さを増した。

訓練中の彼の姿。

執務中の彼の姿。

就寝中の彼の姿。

眺めれば眺める程、近くて遠い存在は遠く、大きくなった。

あの頃の憧憬のまま、より強く、大きくなった。

眠る時、彼の部屋の匂いに包まれ、妙に落ち着くと共に、妙に昂るようになった。

鼓動が高鳴って堪らなくなった。

だめだっ……これだけは、絶対っ……。

「はぁー……っ、っ……」

薬が効いていても常に下腹が熱く、頭は常に彼を追い、ぼーっとする様になった。

濡れた内腿が、淫熱を孕んだ下腹部が気になって、薬に頼らなければ眠れなくなった。

すりすり、くちゆり。耐えかねて枕カバーをはんだ。

気持ち悪い。

気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い——

冷徹な嫌悪の膜で包み、ひたすらに潰した。

潰す度、感情は増した。

どんどん歪になって、自分が何なのかも分からなくなって。

そんな折、遂に向こうから夜伽に誘われた。

浮ついて足元の感覚が無くなった。首輪の力が無ければ、きつと無様に尻餅をついていただろう。

もう嫌だ。早く、早く早く。ボクを楽にしてくれ。

こんな気持ちから解放してくれ。

そんな折、泡を纏い、乱れた身体と急ぐ情緒の眼前に、遂に男根が差し出された。

解き放たれる、根源的なパトス。

練習は何度もした。身体だけでなく、首輪にその動作が刻み込まれている。

導かれるままその通りに動いて、それを口元に運んでいく。

頭はもう、拒んではいなかった。

身体も、途中までは拒んでいなかった。

……いやだ。

けれど、本物の肉竿が近づくにつれ段々と狂っていった。

やっぱりいやだ。なんで？ でもいやだ、いやだいやだいやだいや

だ――

チグハグな心理、肉体は、結局の所限界で。

胃の中から込み上げてきた物を、堰き止める事が出来なかった。

っ……やっぱり、だめ、か……。

暫くして。慌ただしくなった双方は落ち着きを取り戻し、絶妙な距離感で並んで湯船に浸かる。

長らく沈黙が続いたが、チハヤ側から切り出した。

「……いいのか、体調が悪いんだろう？」

「……お医者様が言っただけでいらしたでしょう？ ただの心因性による

一過性の物。薬を飲んだのもう大丈夫です」

「何時でも、合図が有れば応じます」と、そう言う少女の顔には、先程までの硬さが失われ、気落ちした感が露わになっている。

一時蒼白になっていた血色は良好で、医者も気遣えば問題無しとは言っていたものの、元気には見えない。

「だからとはいえ」

「もう遅らせる事は罷り成らない。でしよう？」
遮る様に吐かれた敬語も、何処か観念したニュアンスを含んでいた。

彼は気持ちを汲んだ上で、少し拗ねた態度を取り戯れる。

「……これ以上心配させるな」

「……申し訳、ありませんでした」

しかし、少女はそれ以上にいじけていて、再び閉ざした感じの返事が返った。

この期に及んで向き合い切ろうとしないその姿勢にカチンときてしまい、チハヤは一転、厳しい事も言う。

「っ、あのな、その見た目で目の前で嘔吐されるの、それなりに傷付いたんだぞ。少しは埋め合わせしろよ」

「う……申し訳ありません」

「埋め合わせその一として先ずはその妙な敬語をやめろ」

「……妙？ 女衆にも誉められたんですよ？ 上手く出来ている筈ですが」

「元々の立場のせいだろう。敬い方が何処かズレている」

「……はあ、気をつけるよ」

会話が途切れ、再び沈黙。

トクン、トクン。凧いだ湯の水面が、僅かばかり二人の鼓動で揺れる。

トクン、トクン、トクン、トクン、トクン、トクン――

――焦りたい。もういい。

その波紋を先に崩したのは、チハヤだった。

こんな関係、壊してしまえ。壊れた先どうなるかは分からないが、きつと今よりマシだ。

そう決心し、勢い良く湯船から立ち上がった。

二十二話 結闘 後編

「……するぞ」

いつもよりワントーン低い声に上から見下ろされ、小さく丸まって座る肢体はその影に入る。

雰囲気の違いに俄かに竦み、「お、おう」と戸惑った少女は遅れて立ち上がるうとした。

矢先、脚が立つ前に細腰を持たれ、半ば持ち上げられる様な形で湯から出される。

「んおつ、ちよつ、急にっ……っ！」

軽々と後向きになる様に回されて、濡れた熱い肌と肌は湯煙の中密着した。

ゴツゴツとした身体を背中を感じ、少女は一瞬反射的に抵抗する。が、岩肌挟まったかの如く、びくともしない。

大きくて硬い掌から伝わる意志と、自身の肉体の小ささ、非力さを味わい、甲高い声は徐に振り返って穏便さを求め軟弱に震える。

「あつかつてにっ、勝手にっ、触るのは、はんそ」

「散々勝手にした側が何を言う？」

が、少し威圧的な低い声に遮られ、末尾は「く、だぞ……？」と消え入っていく。

その時、覗き込み、冷ややかな笑みを浮かべる彼の顔を見てしまった少女は理解した。彼が相当、腹に据え兼ねている事を。

そして思い出した。こんな表情をしている時の彼を敵に回すと、必ず背筋の凍る様な思いをするという過去の教訓を。

「もっ、もうっ、もうしわけありまひえっ!!？」

腰を挟んでいた両手の一方が下腹部を抱え、もう一方が乳房横に不意に回された。そろりと謝った声が跳ねる。

手つきから伝わるは女衆達以上の熟練と慣れ。そして壊れ物を扱うが如き気遣い。

予感に強張る肢体に、彼はふつと一層サディスティックに笑う。

「女の扱いを知らない奴だと侮っていたか？」

「う、あ……ああつ」

「あり得ないだろう。教育はきちんと受けている」

少女の精神的余裕はみるみるうちに剥がれていく。泣きぼくろのある目尻を下げ、頭髪と同色同柔な白銀の眉をハの字にして、言葉は哀願するが如く切なげに絞り出される。

「なあつ、ちよつと待つ……てえつ……！」

乳房に添えられた大きな手指が、ふわふわと横乳を弄ぶ。

今まで感じた物とは全く異なる大きさと力強さに包まれ、敏感な柔肌はそれだけでこそばゆくもじんつと官能に痺れ、下腹部奥で常に燃える淫熱に薪を焚べる。

臍下が激しくそわつく。抱く腕に伝わってしまう。

（自分でするのともつ、女衆とするのともつ、ぜんぜんちがつ、つ……なんれつ、こんなつ……！）

軽い刺激なのに、恐ろしい程に腰はガクガクと痙攣し、膝が笑ってしまう。背筋をぞくり、ぞくり駆け上がる、悪寒と似て非なる熱を持った震えが走って止まらない。

「あつ……まつ……はあつ……！」

「お前は待てと言われて待たなかっただろう？」

「んっ、はっ、わるかったつ、からあつ……！」

「都合のいい奴め……！」

彼の声が猛々しさを増し、桃尻に付けられた男根が熱く硬くなり、その圧迫感が徐々に高まる。

あまりの昂りに紅の瞳の奥の景色が回り出す。女声は淫靡な吐息の割合を増し、取り留めを失う。

擦り合う肉付きの良い内腿が、股倉から大量に伝い落ちる滑りを覚えた。拒絶する言語は悦びに震え、表面上だけ嘲る。

「はっ、んっ、ふへっ、へんたいっ……！」

「ああ？」

「もう勃ってるっ……ならあつ、あつ、さつさとっ、いれろよっ……」

襲う様に仕向けてたんだらう?」

「んっ、うっ、ちが、うっ、つつ」

「目論み通りだ。俺は歪められた。全く腹立たしい限りだ」

だが、と前置きして、彼は下腹部を抱く腕を蛇の如く這わせ、くちゅり。その指先を、しとどに濡れそぼり果てた秘裂へと滑り込ませ、数回捏ねた。

「んっ! う、ああっ……!」と悶える女体が内股を締める中、意趣返しと言わんばかりに挑発する。

「そんな恥ずべき行為を行って、その末この様に女陰を濡らしている。そんなお前は、なんと呼ばれ、蔑まれるべきなんだらうな?」

捏ね回し掬い取った滑りを、彼は少女の目の前に向かわせ、わざとらしく指を開き、ぬちやあと糸引く様を見せびらかした。

紅の瞳は瞬く間に涙が溢れ、蚊の鳴くような声が震える。首は横にゆるゆる振られて、最早まともな答えは返りそうに無かった。

(薬は、効いているんだらうが……)

虐め過ぎたか。滲み出る痛ましさに、チハヤは一瞬我に返った。

しかしながら、その刹那。胸を圧する掌が感じた、蕾が徐に顔を出す感触で、慈悲の心は露と消えた。

激る破壊衝動に等しい嗜虐心と愛おしき。同時に冷めて終わりゆく、対抗心と敬意。

「……まあいい」と全ての感情を押し留めて呟き、彼は一度愛液で濡らした指先を、その晒されたばかりの突起に触れさせる。

「はっ、あっ、あ……!」

走った強烈な刺激に耐え兼ね、女体はくの字に折れ曲がった。過剰に飽和した快楽を逃す様に、くんっ、くんっ。

指先はそれを許さず、もう片側の乳首も捉えんとパフィーニツプルをなぞり上げ、同じ様に引つ掛かる痼りを見つけた所で捕まえて、責め立てる。

引けた腰は浮き上がり、腹筋は引き攣れる。腹奥で淫熱が暴れ、口元から心底心地良さげな嬌声を漏らし、舌を突き出して善がり狂う。

「あーっ……あっ、あ、ーっ、んあっ、もっ、やつ、ああっ」

「この様な身体に、なりたくてなった訳では無いだろうからな」
振り切れた憐れみと劣情。双方の籠った、丁重で容赦無き愛撫。
少女の瞳は上擦って淫蕩の色に染まり、白み、飽和していく。
追い詰められ、逃れられず。切迫し、暫しじたばたし、その末。
「あつ、らめつ、つくつ、いきゅつ、とめつ、い、っ……………う、っ
！っ！　っ……………！」

少女は耐え兼ね、呆気なくその身を絶頂の波の中へ投げ出した。
腕の中、はしたない声を上げて痙攣する華奢な女体。

愛おしくも何処か蔑視し、大事に、尚且つ乱暴に抱き留める。ギラ
ついた青の瞳の奥。混沌の炎の渦を揺らめかせながら、彼は告げた。

「これからは、お前をただの女として抱く。それでいいか？」

双方が一つ、苦しみから解放される為の免罪符、最終通告。

虚な間が場を支配する。

広い浴場に木霊するのは、悩ましげで苦しげな少女の吐息のみ。

迫力ある鍛え上げられた男体は息を殺し、その唇が言葉を紡ぐのを
待つ。

「……っ……………あつ、っ……………」

呼吸が俄かに整った。直後、掠れたソプラノは湯煙と心を震わす。

「かんちがいつ、っ、すんにやつ……………ボクはっ、ただのおんなっ、な
んかじやなひっ……………」

「……………はっ…」

抱く腕は反射的に湧き上がった意図を反映し、むぎゅつと胸の性感
帯を刺激した。

忽ち「んうっ」と甘ったるい雌声が上がって、言葉が途切れる。

「良く聴こえなかった。もう一回言ってみろ」

「はっ、あつ……………もう、そのと^難し^聴で、なんち^難ようかあつ……………？　っ、

ん、んっ！」

なんだ、今更。

ここに来て未だ、この様な態度が続けられるとは。

ただただ腹立たしくて、チハヤは手元の乳首を虐める。

「たらっ、はおっ、おっ、おんな、じゃないっ……………」

「どこがだ！」

「んにっ！」

更に再び股の間の割れ目に指を這わせ、今度は滑ったその先を、一際敏感な陰核へ滑らせた。

「この豆の様に小さな物をペニスとでも呼ぶつもりか？ それともこの豊富な胸を、ただの肥満による物だと言い張る気なのか？」

「あゝっ、うあつ、ああゝゝっ……っひああっ！」

「どう考えてもただの淫乱女だろう！ それとも何だ？ 美少女だ、とでも自称したいのか？」

「っ、いじがっ、わりゆっ」

「意地が悪いのはお前の方だこの畜生め！」

「んゝ いっ、ふっ、っゝ、つああゝっ！ つあゝっ、ああゝっ！」
にちにちにちにち、肉豆を転がされ、肢体は大きく畝り、腰をガクつかせ悶える。

(あつ、くっ、やばっ、なんっ、こんなっ、うまいゝっ……！)

開いたり閉じたり、ひくつきを繰り返す蜜壺。そこから漏れ出す蜜は泡立ち、白く濁り出す。

更には潮が噴き出され、ぷしっ、しっつと一際浅ましい音を立て始める。

「いい加減にしてくれよ、なあ！」

「あゝ あつ、あつ、やめっ、へええっ、んっ、ふっ、ふあゝ あっ！」

「俺はもうっ、割り切って先に進みたいんだ……煩わされたくないんだよ……！」

迫り上がる。また、イカされる。

このままゆだねるのも——悪くなくは、ないっ……！

極限状態。視界が明滅を繰り返しながら白んでいく中、少女はチハヤの迷いを肌で感じ、淫蕩の淵で力を振り絞って言った。

「っゝゝ……！ はっ、あつ、よりよいっ、みちいっ！」

「……………っ」

責めの手が止まる。

「さがし、つづけろっつていったのっ……おまえらろっ……！」

「……そうだが、それと何の関係がある」
偏に、対抗心。そして、野心。復讐心。

淫熱で溶け落ちた心の蠟に残る、最後の芯。

頼り無いか弱き女体に、ほんの一時の力が張る。

「しょうぶ、しろっ……！ そっしたらっ、はなすっ……」

「……ふっ、そのザマで……か？」

逸物はか細い手に掴まれた。かと思えばぐっと体重を掛け押し下げられ、濡れそぼった少女の股間に跨がられる。

「んんっ！ っ！」

「うおっ!? なにをっ……！」

「っはっ、かんたんらっ、これからっ、さきにいつ……っ、さきにっ、
いったほうの、まけなっ……！」

「何を、馬鹿な事を言っている……？」

そんな物、勝負にならない。

呆気にとられるチハヤ。それを悪戯な笑みが嘲る。

「まけたほうはっ、んっ、かつたほうのいうことっ……なんれもひと
つきくっ、てっ、ことぞっ」

「それはっ、俺に何のメリットも無いだろうがっ……！」

「あっ、はあっ、っ、まだボクがっ、かちこしてるっ、はず、だぞっ
……んへへっ、いいのかっ？ まけっばなしっ、でえっ……！」

割れ目が肉竿を圧迫、往復しながら、徐々に鬼頭へと近付く。

「くっ、んっ、びびってんのっ、かあ？ それでもっ、おとこ、かあ
？」

「っ、お前はっ……！」

「こんなじよーきよーからっ、まけをそーぞーしてっ……」
良いだろう。

美丈夫の額に青筋が立った。

今度は逸物側からその先端を向かわせ、割れ目を捉え、そのまま
ぐっと押し込んだ。

「ふやっ、あっ!?」

挿入っていく。奥へ、奥へ、ずっ、ぬううううう……。

「ふっ、うっ、っ……………」

「引導をつ、渡してやるっ……………」
ぶちちちっ、ズンッ!

「うっ!…っ、っ……………」

浅い肉壺は熱り勃った肉棒を最奥まで啜え込んだ。刹那、ぷしいっ! と潮を噴いた。

細腰は弾み浮き、背筋は逸れ、突き出された下腹部の怪しく輝く淫紋が、臍下の激しい波打ちに合わせて揺れる。

涙で滲んだ瞳はくりんと上擦って奥で火花を散らし、口元から舌を突き出し喘ぐ。

(や……………ば……………あ)

肉の充足。過剰な多幸福感。

少女の意識は一瞬飛んだ後、身を抱く腕の優しい圧迫により舞い戻る。

「……………くあっ! あっ、ああっ!」

「っ……………あ……………」

震える桃尻。痙縮する極上の肉壺。

迫り上がる強烈な射精感を必死に堪える中、チハヤは目敏くその違和感に気付いた。

「っ、おいっ、お前! 何故血がっ……………しかも啖呵切っつておいてもうっ……………」

「っはあーっ……………っ、らいじよう、ぶっ……………いたくない、しっ……………
伊っつて、んいっつ、んっ、おおっ……………」

「何を、強がってっ……………」

接合部から滲む鮮血。痛みは無い。されど男根を抱く肉脰は絶頂時特有の蠕動を繰り返し、強くキツく締め付けている。

半分は真で、半分は嘘。ただし、どちらも他者に分かる様な物では無い。

少女は汗と涙と鼻水でぐちゃぐちゃの蕩け顔を引き攣らせながら、不敵な笑みを作った。

「いまのれっボクがっ、いったかどうか、なんへっ……………なこれ、わか

るんらあっ……?」

チハヤの綺麗に通った鼻筋とシャープな顎を汗が伝い落ちる。ふつと、不意に浮べてしまった自身の笑み。

それを自覚し、俄かに動揺してしまった。

「……成る程、なっ」

「んはあっ!」

冗談じゃない。まんまと嵌められた、などと笑ってなるものか。一層険しい顔に戻り、抽送運動を開始。

たちゅっ、ぱちゅっ、ぷちゅっ。

「あっ、あっ、んっ、っ、ふっ、ああっ!」

波打つ湯船。リズミカルに木霊す濡れた肌と肌の打ち合う音と、淫靡な喘ぎ声。

それらを憤りの男声が切り裂く。

「そんな愚かな勝負は無いだらうっ? ふざけるのもっ大概にしろっ……!」

「あっ、うっ、ふあけてなっかつ……はっ、はあっ、んんっ!」

反駁の言葉は、甲高い艶声に吞まれて失せていく。

抜かれて、貫かれて、また抜かれて、また貫かれる。ヒクつくGスポット、締まる痼つた前立腺肉輪を経由して、男根は最奥を幾度も突く。

その圧迫感と衝撃だけで快感の雷が脳天を突き抜け、全身に官能の熱が通り、飽和したそれらが少女の口元から溢れて止まらない。

(しらなっ……こんな、のっ……)

拓かれ切っているにも関わらず、機械的な刺激しか知らぬ初心な肉壺は、新鮮な快楽を脳に届ける。

耐えられない。苦悦に悶え、潮が噴かれる。何度も、何度も。

(こわれ、ひゃっ……!)

「あっ、あっ、っ……っ! あへあっ、っあ、っ、あ、あっ!」
抗いようも無く、一突き毎に達してしまふ。

瞳の奥の光が瞬きを繰り返しながら、淫らな色に染まっていく。微睡み、沈み行く意識。

(ちがうつ、まけ、ないっ……まけっ……っ……！)

それを、少女はひたすらに気力で持ち上げ耐えた。

彼の前でだけは、何としてでも強く在りたい。

そんな意地で耐えて、耐えて、耐え続ける。

「くっ、強情なっ……はあっ……！」

(マズイっ……出そうだっ……って、何で俺はっ)

最初から限界の男根がペースを落とすのに、そう時間は掛からなかった。

チハヤの腰の動きが緩慢になり、やがて止まる。

が、少女の腰は違う。

「あぐっ、っ、っ、んんんっ」

「うっ！ おいこら待てっ、動くなっ……！」

意図せず無意識に、浅ましく痙攣を繰り返しながら唸り、その桃尻を男体に擦り付け続けてしまう。

「動くんじゃない！」と彼ががっしり腰骨を掴んで止めようとしても、「んおっ、おおっ！」とより悦楽に狂い果て、肉壺が精を搾り取らんと蠕動する。

ならばと引き抜こうとしても、強い締め付けがそれを許さない。無理矢理やろうとすれば、どの道果ててしまいそうで彼は動けない。

「このっ……くっ」

別に吐精してしまえばいい。この様な不成立の勝負などに付き合わず、ぶち撒けてしまえばいいのに。

何故か悔しくて、堪らなくて、チハヤは必死に堪えてしまう。瞳に涙を浮かべ、声を震わせてしまう。

「お前はっ……何なんだっ……」

「っ、んんん……っはあっ、あっ、んんっ」

「何者なんだっ……」

かの好敵手の面影で、態度で、淫乱に振る舞う雌。

最早彼には、その真意を推し量る事叶わず。

ただただ心折れて問い、そして嘆く。

「何者でもないならっ、せめてっ……」

?)

チハヤがそう認識した瞬間、フツと景色はまた白んだ後、現実の浴場へと戻る。

「はあつ、はあつ、はあつ……!」

「つはあつはあつつ……つ、あつ、つはあつ……」

方や大型動物、方や小動物の呼吸間隔で荒々しい吐息が吐かれる中、双方の接合部は蕩ける様な熱感を訴え、官能に微睡んだ。

どろりどろり、灼熱が溢れて、湯船へと落ちた後、繋がった二つの身体はそのまま膝を折り、湯へと沈む。

背中を預けてくれたりとしなだれる少女を胸元に抱いたまま、彼は先に呼吸を整え、その耳元で静かに言葉を紡ぐ。

「お前は……昔、その魔法で、俺の潜在意識を映し取った、というのか……?」

「フー、はあつ、つ……」

小首が幅の広い肩の上で転がり、少しばかりバツが悪そうな頷きを返した。

悶々とした熱を吐き出した後の、冷やされた彼の頭脳が回る。

前のただ乱雑に発情を伝播させる様な物とは異なる、形を帯びた過去の情報と、感情の送信だった。

発動原因は不明。意図した魔法を放てる様な状態では無い。余計な物も多かった。故に恐らくは、此方側が取捨選択して拾った物か。

奇跡の様な確率。だが伝わって来て、理解してしまった。

——だからだと言うのか? だからだと、言いたいのか?

「くつくつくつ……ふざけるなよ……その割に全く、似ていた試しが無いではないか……!」

彼は、込み上げる皮肉っぽい笑いを抑え切れなかった。

一瞬読み取れた術式からして、その頃は未熟で発動が不安定かつ不完全だったのかもしれない。幼少の彼の願いを叶える程の物では無かったと思われる。

しかしだからこそ驚いた。純然たる才覚に。この者はそれすらもあの時映し取ったが為だと思ひ込んでいる様だが、そんな筈は無い。

懂れ？ お互い様だろう、これは……。

術式演算不要の固有魔法であるという事と、魔力の動きが多い場所だったという都合を差し引いても、チハヤ含めその場の腕利き魔術師の誰にも気付かせなかつた程に出力は迅速であり、瞬間的に要したであろう純粹な魔力量は推し量るのが困難な程膨大だった。

瞬発力という点に於いてはあの時点ですら人外。チハヤは、自身の焦がれた好敵手の真価を垣間見て、改めてそれを痛感した。

しかしそんな存在が、これほどまでに自身に焦がれ、拗らせていたとは。思いもよらず、笑うしかなかった。

「っ、れもっ……ボク、は……」

「大馬鹿物がっ……はあ……気にする事自体、間違っていたんだっ……」

兎も角、先程伝えられた物こそが、紛れも無く確かな、この腕の中の朧げな存在の核である。

絶対に無碍には出来ない。確かに感じた羨望に、向けられた敬意に。

疑う余地は無く、彼はもう、答えずにはいられなかった。

「男だの女だの、偽物だの、嘘だの……どうでも良いっ。俺の前には確かに、お前が居る」

「うっ……っ……」

「お前が自分をどう思おうと、俺はお前の存在を認める。だから、言えっ……」

滲み蕩け、気を抜けば湯に溶けてしまいそうな紅の瞳に、彼の真摯な顔が映る。

「お前は どうしたいんだ？ 望みを言えっ……！」

その水晶は淫蕩の色に濁り、最早まともな受け答えはままならぬかに思われた。

「ぼく、は……」

が、そこに俄かに知性の光が灯り、哀切する様に答える。

「ボク、は、おまえと……またおまえとっ、ならびたつもので、ありたいっ……！」

そして真つ赤な柔頬を綻ばせて、健気にも笑みを作って見せた。
「はあつ、いまの、しようぶ……んつ、ひきわけらつたし……いいよ
な……？」

「……ふつ、馬鹿言えつ」

締め付けられる様な胸の痛みも、何も解決していない。

寧ろ一線を越え、互いの想いはより歪な物へと変化してさえいる。
しかし二人とも不思議と、前を向いていた。

「それは許諾を取るものじゃないだろ？ やってみせろよ。出来る
ものならな」

「つ、いったにやつ……？ らつたらつ、このまま、もういつかいつ
……」

「あつ待て！ そうじゃないつやめろ！」

「うあんつ！ つ、まへつ、なんれにげつ、つ…………！」

「このままだとお前のぼせて死ぬぞ！ ほらつ、まず風呂から上
がって……」

「つ？ ……？」

（あれ？ なんか、あれ……？）

「……はあ、啖呵を切るならもう少ししっかりしてくれよな……
ああ、もうつ——」

名状し難い関係性。そこに確固たる名前が付く日は、果たして。

二十三話 抱擁

今日も今日とて、内密な通信が記録される。

「経過報告。母胎と種子、関係良化。交合回数も増加傾向にあります」

返答は無い。一方的な報告。

されど伝える密偵の女の声が、俄かに焦燥した様に震える。

「種子側の魔力成長も、時を同じくして良化。想定を大幅に上回り、母胎に迫りつつある模様」

混じるノイズ。早る呼吸。

「玄霧はっ、何か計画をっ」

「はっい、そこまでっ」

蛇女の声が割り込み、報告は途絶えた。

記録は最後に、挑発で締め括られる。

「もう勘付いて動き始めてると思うけどお、ぜえくんぶ無駄だと思うから、諦める事をお勧めしまあす。いじよ」

聞く者を、その心理を見透かし、逆撫でするかのように。

主人に先んじて一報を拾った、かの黒髪長身の女は憤怒する。

「絶対、殺すっ……っ！」

変化する関係性と日常の中、目まぐるしく時は過ぎていく。

「違うだろ！ ここは……こっちで進めた方が絶対に良いって！」

「いいや、それだと確実に問題が発生する。ここは動かせない」

ある日の晩の執務室、資料に囲われたスーツ姿のチハヤと、給仕服姿の少女は、端末を挟み論を交わす。

「ならここ弄れ！ そうすりゃもう少しマシになる！」

「そこは……確かに」

「だろお？」

「だろお？ じゃない、効率化のアイデアが幾つもあるからと言っ

て安定性に欠ける物まで提案するな」

「えー、試してみてもいいじゃねえか」

「試すにしてもこれで試すんじゃない。玄霧が潰れたらお前も潰れるんだぞ、分かっているのか？」

「分かっているよ！ 次いこ次！」

少女は使用人としての仕事を減らし、チハヤの仕事を手伝う様になっっていた。

日夜白熱した議論と作業を行い、そして。

「んっ、んっ、っ、あっ、はあっ、っ、っ」

「このっ、っ……い！」

「ああ、っ、あっ、あっ、ああっ！」

合間の時間には、情事を交わす。

「仕事の最中に色目を使うなとっ、何度も言っているだろうっ」

「つかってにやっ……つかってな、いつ、ひいつ！」

専ら体位は後背位。チハヤは下着以外着衣したままの少女を窓際に追いやり、背後から肉脛を揺さぶる様に突く。

給仕服のスカートが捲れ露わになった、華奢な肩幅、細く括れた腹の割に大きく豊かに張り出している白桃尻。

香り立つ、甘く芳しい雌の色香を堪能しながら言葉で責め、興じる。

「だったらあそこのカーペットのシミはなんだ？ 涎を垂らしていた浅ましい股の間は？ 言ってみろっ」

「っ、それはっ、わかるかっ……っ、っ！ んああ、っ！」

意地の悪い言い方をしながら、責め手は甘く、優しく。

ひたすら女体を慮り、官能だけを最大限引き出す動きを繰り返した。

「んきゅっ、んっ、っ、んお、っ、っ……」

例によつて少女側が誘う事も無きにしも非ず。

だが昨今は概ね、チハヤ側が率先して行為を主導する様になっただ。た。

その行為の暫く後、風呂場で少女は尋ねる。

「はあー……っ、そんなっ、気が、散るならっ……別々の部屋で、

しごと、すればっ……」

「ふっ。散っても問題無いからやっているんだぞ?」

「むっ……」

現に、何故かは分からないが、プランの進捗は側から見ても頗る速かった。

とは言え、当然気は散らない方がもっと上手くいく筈。

「それにお前を一人に出来る訳ないだろ? 発情してばかりで、碌に働かなさそうじゃないか」

「それはっ、こつちも、お前で気が散ってるだけでっ……一人なら、大丈夫だしっ」

「ほう? それは本当か?」

「うっ……」

青の瞳が浮かべる嗜虐的な笑みを見て、言葉に詰まった。

何処か吹っ切れたのだろうか。彼の責めから迷いが失せて、此方がたじろぐ事が増えた気がする。

所と日が変わり、朝のトイレの個室で。少女は下腹部の鈍痛を感じながら、物思いに耽る。

仕事に関する討論なら問題無く渡り合えているが、その他は劣勢著しい。

ここに来て何処か覚悟の差が出て来たのではないか。

昨今何時もの様に身に着けている玄霧の改良した装具を装着したまま用を足し、妊娠のサインが出なかった事に安堵と落胆、二律背反の感情を抱きながら俯いた。

——— どうにも、釈然としない。

意図はしていなかった。が、忌まわしい魔法の暴発があった事で自分は曝け出され、全てを理解されてしまった事で、今の展開がある。何故こうなるのか。何故、彼は自分に嫌悪感を抱かず、受け入れ始めたのか。

理解に苦しみ少女は想起する、初めてベッドを共にした日の事。

「ああ、敷布団はもういい、枕だけよこせ」

「えっ、じゃあ、またっ……」

「いや、流石に草臥れたから、寝るだけだ」

「へっ?」

風呂場で気をやったあの後の夜。もう一回戦かと思つた此方を他所に、「おやすみ」と、彼は寝腐つた。

憤慨した自分は今もう床で寝てしまおうかと思つたが、それでは翌朝の敗北感が拭えまい。そう思い、仕返しのため隣に寝転がった。

「んー……」

「ひああっ!?」

すると何と、程無く熟睡した彼は、隣に転がった華奢なその身を抱き枕にしてしまったのだ。

「あ、あああ……!」

離れようと思つても、起こす危険を考えると離れ難く。

胸は訳も分からず高鳴り続け、ついぞ一睡も出来ず翌朝を迎えた。陽光がカーテンの隙間から射し込む中、漸く彼の腕が解ける。

しめたと転がつて離れようとした。が、その刹那。再び背後からひと抱き留められ、頸に何時もの抑揚の薄い挨拶がかかる。

「おはよう」

「おはよう、ごいいますっ……」

最早立ち直れず。誤魔化す様に「申し訳ありません、今から急いで支度を……」と使用人としての振る舞いを見せようとした。

そこへ、追い討ち。

「ふっ、やはりあの言葉は、妻を指すという言葉だったんだな」

「はあっ!?」

「何だ? 違うのか?」

「ちっ、ちげえーし! キモいからはなせっ!」

「キモい、は聞き捨てならんな。普通に傷付くぞ? 俺も、元男のお

前も」

「うっ、うっううう……!」

距離が近づいた、と言うだけならば聴こえは良いし、問題は無い。この身体になってからずっと抱いていた、置いて行かれるという感覚は無く、概ね好ましい様にも思える。

が、以前の心地良かった好敵手の距離感とは明らかに異なる。肌と肌が触れ合う距離だ。

正直、近過ぎる。こそばゆくて慣れない上、何処か一方的に翻弄されている気がしてならず、あまり愉快では無い。

少女が複雑な悶々を抱える傍、その手は後始末を始める。すると一時だが其方に意識が向かう。

—— やっぱり玄霧改良型の動作補助の首輪、良い感じだ。

指輪所持者の命令が無くとも、日常行動程度であれば少女自身の意志を反映し、登録された動作補助を精密に行う。快適性は段違い。

細い手指で紙を巻き取り、つるんとした白い装具に保護された、割れ目以外何の凹凸も無い股にそれを収め、拭って水気を吸い取る。

「っ、んっ……」

改良装具も素晴らしい。経血処理、処女膜の再生阻害に加え、性感の暴走した局部の鋭敏さがかなり抑えられている。

本来排便、排尿によって生じるべきでは無い悦楽もかなりカットされていて、中の蒸れ感も無いし、痒みも無い。

「あっ、んんっ」

にも関わらず、その内側がじんと熱く痺れて止まず、少し声が出てしまった。

快感の紐付きを感じ、まだ正気の筈の脳は危ぶむ。

常態的発情では無い。確かな、チハヤという男性に対する欲情。

文明の利器による体調管理が万全であるからこそ、浮き彫りにされてしまう。

これだけの頻度で責められていたら仕方が無——くはないっ！

ゴンッ。惚けてしまいそうだった頭を仰げ反らせ、後頭部を後ろの壁に叩きつけた。

痛みに悶絶する頭を他所に、手指は濡れた状態の股を妥協して離れ、トイレの水を流す。

足元に下げていたショーツのクロツチに、手持ちの新品の吸水パッドを当てがってから履き、捲れていた給仕服のスカートを整えた後、脚は立ち上がり、ドアの前へ向かう。

ここからが大事なんだっ。ここからが、ボクが望む結末を掴む為に
意気込み、スライドして開いたドアの先。

「こんにちはレイト様、いや、レイ様」

「どうやらお困りの様で」

訳知った様な仏頂面が二つ、胸の高さに並んでいた。

「ま、マリサラ……なんだよ一体」

「いえ、聴こえた反応から、遂に孕んだのかと思ひまして」

「ですがどうにも違うござ様子」

そうか、学業が夏期休暇に入ったんだったなそういえば……。

変わった事と言えば、此方もあったか。妙に懐かれた様で、双子が良く絡んで来るのだ。

「ごめん、今急いでるから……」

脚は意図せず勝手に動き、双子を迂回して元の持ち場へ向かおうとする。

それを双子は遮りはしない。が、ぴつたりと追随し尋ねて来る。

「おかしいですね。何故未だ使用人の真似事など続けているのですか？」

「周りはまだ皆把握していますよ？ にいさまとレイ様のご関係
を」

今の名前でわざと呼び始めた辺り、諸々把握された様だ。

その癖呆気らかんとして、何と白々しい。

此方も相応の態度で答える。

「残念ながら、現在の私には身分が御座いませんので」

そう、あくまでまだ自分は国持ちの奴隷である。玄霧には預けられないに過ぎない。

一応体裁としては使用人として振る舞う必要がある。

「おかしな話ですね」

「奇特な話ですね」

これに関しては、今更論う程の事では無い。

自動扉を潜り抜け、玄霧訓練場の外周廊下に出た所で、視線を双子から切る。

そして遠目に、演舞の如くシミュレーションを熟す彼を見た。

美しく無駄の無い迎撃。光速の魔弾により瞬殺されていく仮想敵達。

何処を切り取っても格好が良い。目を奪われる。

所定の持ち場に辿り着き、漸く脚を止めた少女レイ。

紅の瞳は羨望と哀切の色を宿し、常に赤らんで見える頬の赤みが俄かにほんの少し広がった。

その様を双子は見逃さない。

「やはり嘆かわしく思います」

「歯痒く思います」

『愛し合い、操まで重ねている男女が夫婦で無いなど』

容赦無い直球を投げ込むステレオボイスに、少女は思わず吹き出してしまった。

「っ、マリ嬢、サラ嬢……？ 少々お言葉が過ぎますよ……？」

『奇譚無き意見です』

「過ぎる事など御座いません」

「我々は応援しているのです」

「お気持ちは嬉しいですが、もう少し、ご遠慮を……」

廊下に並ぶ他の使用人達の視線が、いつの間にかチハヤの方から此方に向いているのを感じる。

酷い恥辱プレイに、顔面が赤熱していく。

それを見て双子の藍色の瞳はより輝きを増す。

「まだまだ受け身な印象が見受けられます」

「もっと積極的になっても良いのでは？」

「この後にいさまの遠征で時間が空きますよね？」

「共に買い物に向かいますよう」

詰め寄る二人、強まる庄。

とそこで漸く「はいはいお二人共そこまで行く！」と、カゾノとシスイが現れ助け舟を出した。

「まずは夏季の課題を消化してからにしましょうね〜！」

「チハヤ様の遠征中は、レイ様の治療が入っちゃってますから、申し訳ありませんがそのご予定もキャンセルで……」

『邪魔しないで下さい』と揃った声で退場していく愉快な双子。

少女は愛想笑いでそれを見送った。気怠さと、下腹部の痛みを隠して。

「何故せ……体調不良を隠そうとする？」

「っ、やっぱ、臭うか……？」

尚、晩の共同執務中。チハヤに対しては隠し切れなかった。

「血の臭いもそうだが、顔色で分かるぞ。冷や汗も酷い」

午後の治療で示唆された通り、生理痛は徐々に悪化して、現在は立っているのがやっとだ。

曰く刻印の、常に細胞を破壊し、より母胎として最適な物へと変える類の術式悪さをしてるとの事。

本来、この身体はもつと雑に扱われる予定だったのだろう。それが現在は肉体的ダメージが無い故、釣り合いを取る為に破壊作用が過剰に働いているというのだ。

額に汗かかない様気張っていたが、服の下の方はどうしようも無い。

対人に於いて相手の発汗量まで洞察する彼の前では、誤魔化す事罷りならなかった。

「はあ……痛みには強いつもりで、いたんだけどな」

「夕飯もあまり喉を通っていなかった」

「おまつ、使用人の食事見てたのかよ!?」

「何だ、悪いか？」

「っ、いや……」

何を言ってもカウンターが来そうで踏み込めず、少女は口籠もり俯く。

チハヤはそれを見て一つ溜め息を吐くと、語気を和らげて言った。
「仕方ない。今日は休みにしよう。とつと身を清めてベッドに入
れ」

「は？ 何でだよ？ 仕事なら出来」

「何故焦る必要がある？ お前のお陰もあつて進捗はかなり前倒し
になっている筈だ。休む余裕はあるだろうか？」

「んなのっ……出来る限り速い方が良いだろ」

「だとしても、無理をしてまで速める必要は無い。玄霧は白神とは
違う。我々が休んでも、多少の減速はあれど、他の者が埋めてくれる」
事実を突きつけられ、白銀色の眉尻は更に下がる。

別に事実だ。こんな。なのに何故ここまで落ち込む必要がある。
殊更に振れる精神。忌々しい、生理中に現れる特徴だ。

嫌悪に陥る。こんな身体でなければ。こんな、人間でなければと。
葛藤する精神を反映し、ハの字眉の眉間に更に皺が寄った所で、チ
ハヤの腕に優しく抱かれた。

「……なんだよ、するの？」

「あり得ないだろう、俺はサディストだが鬼畜では無い」

「っ……じゃあ何なんだよっ」

「何って……ふっ、こうでもすれば、お前は無理をしなくなるんじや
ないかと思つてな」

感じた。間違いなく彼は何か言おうとして、誤魔化した。

しかし、それを正確に指摘出来る程、今の少女に余裕は無かった。

「るせっ……んなわけないだろっ……！」

「だろうな」

まただ。キツく締め上げられている訳でも無いのに痛い。痛くて
堪らない。

涙が溢れる。コイツの前では泣きたくないのに。

嫌だ、いやだ。

「はなせっ……」

経験の無い温度。怖くて、痛くて、切なくて、振り解こうと身じろ
ぎする。

が、その身に力は無い。腕すら自由に動かない。ただただ、子ウサギの如く震えるばかり。

「離せば、考えを改めるか?」

「いやだっ……」

「ならば離さん」

何で、こんな事するんだ?

少女は、根本から愛を知らなかった。

レイトとして歩んだ人生でも、レイトとなった後も。

頭脳が客観的なこの世の善意の仕組みを理解していても、親愛すら縁遠かったその身は、それを理解出来ていなかった。

そのままチハヤは風呂を共にし、寝室を共にした。

情事に及ばず、ただひたすら、少女を情愛で包んだ。

「お前までっ、早く寝る必要はっ……」

「黙って寝ろ」

「はあっ……っ……わかったっ、寝るからっ……もう、いいだろっ……」

「それは俺が決める」

性愛ならまだ理解出来た。性欲から来る情動は、その身に確かに存在している。

現にベッドの上、雄々しい男体に包まれた女体は、生理痛を遥かに上回る情欲を催していた。

痛みと淫熱で悶え苦しみ、息を荒げる少女。

彼はそれを純粹な生理痛と思い込み、痛感緩和の魔法を込めたその手で下腹部を抱いて離さない。

「っ……まじでっ、っー!……はなしてっ……っー!」

震え絞り出される哀願は無視され摩られる。すり、すりど。

伝わる善意に感覚が狂う。性感とも、別の自然的な快感とも取れる暖かくて優しい痺れが、じんわりと少女の内に広がっていく。

「これで少し、楽になるか?」

「っ、っ……っー!」

胸の先と股の間が熱く、何かがぷちゅりと溢れて濡れる。

同時にまったりとして、強張っていた身体が弛緩していく。
枕を食み、自己を嫌悪し、必死に声を抑えた。

何だよこれっ……何なんだよっ……。

気持ち良い。落ち着く。嬉しい。ずっとさされていた。もっとくつつきたい。

子供じみた欲求が次々湧き上がる。

善意に対して、何と邪な。身体のせいだ。こんな、身体の——
その内、薄く広大な絶頂とも表すべき境目の無い純白が広がって、騒々しかった思考は微睡蕩けて眠りに落ちた。

翌朝。

「……んっ………？」

目覚めて最初に感じたのは、身を包む温度と感触の心許なさだった。

柔らかな布団とベッド。甘ったるい自身の女体の香り。その中に微かに残存する、清涼で高潔な男子の残り香を見つけ、切なさに胸を締め付けられる。

えっ、え……？

先に起きられる事も、起きた時に居ない事も、共に寝る様になって初めての出来事だった。

カーテンの隙間から射し込む朝日が、空々しく思えた。

幾ら見回しても彼が居ない。喪失と不安で急に目が回る。

手元が空を切る様な感覚の中、寝巻き姿のまま少女は立ち上がり、ふらふらと部屋を出た。

あれ？ あれ……？

何で居ないの？ 居なくなったの？

幸せな夢の後の落差に、寝惚けた頭は追い付かない。寄る方のない稚児の如く取り留めなく、求める人物を探してしまう。

「……？」

「——っ！ レイさまっ！」

甲高い男児の声に呼び止められ、少女は漸くハツとして我に返っ

た。

「ねっ、寝巻き姿のまま歩いちゃだめっ！　だめですよおっ！」
臍の高さ、真っ赤な顔をしたチハヤの弟、ハルキが小型犬の如く吠えている。

少女は恐る恐る視線を自身の身へ落とす。すると、案の定。フリル付きの白いワンピースの肩紐がずれ落ち、胸元がまろび出てしまいうな状態だった。

紅潮は伝染。成る程、これはまずいと悟り、「あっ……申し訳、ありません……」と両手で衣服を抑える。と、更に背後から声が。

「朝から騒がしいと思えば」

「何をやっているんですか」

「あっ、あ………」

暫し双子の説教を浴びた所で閑話休題。

マリの方が着ていたカーディガンを羽織らされ、両手を取られる形で彼女らに浴場へ引っ張られる中、チハヤについて尋ねた所、驚いた様子でこう返った。

『知らされてらっしやらない……っ？』

「成る程、にいさまにも抜かりがありそうですね」

「困った事です」

双子同士で顔を合わせ首を傾げる様に、「良いから、知っているなら話してくれ……」と促す。

「いえ、仔細は我々も存じ上げません」

「ですが、今朝方日の出前に、何やら急いだ様子で人を引き連れ、慌ただしく御出立なされていました」

聞くに、緊急の案件に駆り出された様に思われた。

ただ次代当主である彼が出るとなると、事は大事だ。

念の為、首輪へ意識を送り、カゾノ、シスイ、ミマタへの呼び出しを入れる。

「……如何なさいましたか？」

左向きのサイドテール、サラが不安げに問うた。「……いや」と気もそぞろに返し、そのまま歩く。

妙な沈黙の間が空く。酷く胸騒ぎがした。

刹那、轟音が響く。

前方少し遠く、廊下の側面は爆風で吹き飛び、間もなく三人は衝撃波に襲われた。

視界を覆う煙の中、失神から復帰する。

耳鳴り。懐かしい硝煙の臭い。

下肢に走る激痛に顔を顰める。が、少女は自身の回復を待たない。首輪の力で徐に立ち上がると、双子の安否を確認する。

「けほっ、っ……マリっ、サラっ……大丈夫っ……？」

後方、足元から微かに呻き声が返った。

意識はある様子。二人共魔術師の卵だ、自分より問題は無い筈。

判断する最中、異様な程早く目眩と聴覚の失調が回復する。

大量の魔力が、勝手に肉体の修復に回されている様だ。痛みもあつという間に失せた。

今だけは、外傷に強いこの身体に感謝を。そう戯れに考えた直後、鼓膜は迫る甲高い靴音を捉えた。

カツツ、カツツ、カツツ。

聴くだけで少女の身体は強張り、震え上がる。

濛々と上がる煙幕の中に浮かぶ、長身の女のシルエット。

聴こえるは、かの背筋の凍る様な、低くドスの効いた声。

「ふふっ、ようやく幸運が回ってきましたか」

キクチが、姿を現した。

「っ、なん、で……」

「知る必要はありません」

ドスツ。下腹部を衝撃が貫く。夢の様な幸福や甘い快感より、ずっと親近感のある苦痛に見舞われ、少女は呼吸に詰まる。

視線を下げると、ドス黒い魔力を帯びたキクチの腕が肘まで、臍下に入っていた。

「ふっ」と喉から空気が漏れる。背後、下の方から小さく「うそ……」と呟く声が聴こえた。

「浅ましい女の格好。胸と尻の贅肉、雌豚みたいに育ちましたね。それで女子にでもなったつもりですか？」

蔑みを前面に押し出したセリフが吐き捨てられる。

背中へ貫通した彼女の手には、少女を女たらしめ、子を孕み育む為の重要臓器が握られていた。

そこに浮かび上がるは、妖しく光る無数の禍々しい刻印。ドクン、ドクンとまるで心臓の如く脈打ち、魔力の波動を発する。

「なんて凄まじい魔力……もう回復しようとして、私の腕を締め付けて……ああ、気持ち悪い」

「あ……あぐっ……！」

「二度潰しておきましょうか——」

肉が潰れ、血が零れ落ちる音。つん裂く双子の悲鳴。

濡れる紅の瞳から、光が消え行く。

ああ、やっぱり——

全ては徐々に遠ざかり、ぷつり。少女の意識は途絶えた。

二十四話 救合

幸せな夢を見た。

チハヤの腕の中、ただ共に語らう夢を。

話す内容は取り留めが無くても。

魔法の事だったり、家族の事だったり、兎に角何でも無い話をして
いた。

そこに居るボクは、何でもない、最初から普通に生まれた、普通の
女の子で——

ぶちり。千切り取られる様な痛みと、抉られる様な快感で、朦朧と
した現実が交差する。

「おおお、馬鹿な事したねえ」

「はやくしなさい！——で、主様の元へ——」

「ああ——わかったよお、人使い荒——」

聴き覚えのある口調。白衣の背から伸びる機構腕に掴まれ、乱暴に
揺られる景色。

直ぐに薄れて、消えて。元の幸せに戻る。

「どうしたんだ？」

「？ 何でもない、けど……」

「けど？」

違う。こんな幸せは存在しない。

ボクは罪に塗れた男だ。

勝つ為に人を蹴落として来た。

こんな、無垢な幸せを享受出来る人間じゃない。

人間、人間かどうかも怪しい。人を好き勝手に上書きして、操って
きたんだ。

我は、ボクはきつと——

何処かの屋敷の、幅の広い廊下で。

魔力で浮遊する、献上品用の装飾が施された荷車の上。その柔和な肢体を鉄のベルトの様な物で乱雑に縛り上げられた白銀髪の少女が意識の無いまま揺られ、運ばれていく。

その横を歩くは黒髪長身の女。黒の瞳の奥、狂気の光を爛々と揺らし、主人の下へと急ぐ。

やったぞ、やった。

結論として、彼女はあまりに呆気なく手に入れてしまった。親の仇を、自由の鍵を。

出来る事は全て行つた。媚び諂い、身に余る権限を得て、全てを総動員した。

その結果引き寄せた幸福だ。文句はあるまい。そう信じ込み、双眸を完全に曇らせていた。

耳元の通信機器から次々報告が舞い込む。中には女の独断専行を書き下ろす声もある。

その声音は一切彼女には届かない。

脳裏に浮かぶは、失われし令嬢時代の満ち足りた幸福ばかり。

胸に抱くは、裏切り者の汚名を着せられ、無念に終わった父の思いと、自身が被つた不幸への際限無い怒り。

これで、終わる。報われる。

目的の扉の前に立ち、押し開く。

出迎えるは、相も変わらぬ湿度の高い淫臭。

侍る女達に囲われ、垂れ幕の向こうに鎮座する巨漢のシルエツト。

「おや、来ましたか」

「お目通り願います、フクマ様」

女は懐から極小端末を取り出すと長身を折り畳み、頭を垂れる。

巨漢はベッドの上で座したまま問う。

「ふむ、それは？」

「はい。此方、ご所望の物で御座います」

下げた頭が、相手を伺う様に微かに上がる。刹那、不可視の速度で飛んだ魔力の圧が彼女を扉の遙か後方へ吹き飛ばした。

異物を吐き出した伏魔殿の口は微かな血痕を残して閉まり、その主

人は静かに憤る。

「まさかそこまで成し遂げるとは思いませんでしたよ」

所望していた物はただ一つ、台頭著しい玄霧が企んでいるとされる計画の情報のみだった。

それを捨て駒に過ぎなかった彼女が届け、あろう事か時期尚早で不相应な土産まで寄越すとは。

裏で蠢く、かの蛇女の存在を感じずにはいられず、彼は苦虫を噛み潰す。

「お喜びで無いのですか……?」

侍る女の一人がふくよかな尊顔を見上げ問うた。

彼はそれを一瞥し、鼻で笑う。

「駒の勝手な行動が齎した物ですぞ? 手放しに喜べた物ではありませんな」

万事順調に事が運べば、労せず合法的に手に入る筈の切り札。

それが、思いもよらぬ一手で転がり込んでしまった。短絡的に考えればこれ以上無い幸運と呼べなくも無いが、常に万全を期し、確実に物事を進めていく性分の彼に見える視点は別。

「それもあろう事かこれ見よがしに献上するとは……早く抱えておけば良いという物では無いのです。まったく、一気に難しくなりましてぞ」

苛立ちを隠さず、擦り寄る侍女を「どけ」と足蹴にしてベッドから降り、天幕の向こうからローブに包まれた全身像を露わにすると、荷台の上の少女の元へ歩み寄った。

至近距離、値踏みする様に睨め付け、白色の指輪がめり込んだ太い指で弛んだ自身の顎を弄りながら思索する。

「二度こうなつてしまった以上、勝負に出る他ありませんかねえ……」

その時、苦しげな吐息と共に少女の紅の瞳が徐に開かれ、彼とかけ合った。

柔軟で小さな薄紅の唇から言葉が絞り上げられる寸前、首元の輪が光り、喉を締める。

「かつ、あつ……！」と顰められる童顔。ふくよかな顔面は、それを見ても顔色一つ変わらない。

「はてさて、どうするべきか……お伺いしたい所ですな、ドクター」裸体に巻き付いた拘束具の丸い箇所から『おやあお気付きでしたかあ』と気の抜けた女声が発せられ、続けて下卑た意見が述べられる。『状況は概ね把握されてらっしゃると思いますしい、今ワタクシが述べられる事でしたら、どうぞ、時間の許す限りお楽しみ下さい』としか』

「おや、良いんですかな？」

『此方手が離せなくて、暫くは施術に入れませんしねえ……』
「そうですか」

『あ、少しばかり注意点が、うつ、ちよつ、本気でキツイのでまた後でえ！ 宜しくお願いしますう！』

末尾は少々慌ただしく切れた。

同時に首締めが解かれ、少女は咳き込む。

「つはつ、あ、はつ、え、ほつ」

「さて、積もる話がありますが……今はレイ、でしたかな？」

男はその乱れた白銀の前髪を払い撫で、頬に手を添え言う。

「随分と美しく成長なされましたなあ。文字通り、見違えましたぞ」
なんなんだここはつ……こいつはつ……！

不快感に耐え兼ね、少女は相手に唾を吐き、「クソくらえ……！」と口走った。

刹那、下腹部が発光し、その身は強制的な絶頂に晒される。

「あつ、ふぐつ、う、つ、つ……！」

「ほほつ、口の悪さは相変わらずの様ですがな」

歯を食い縛り、相手を睨め付け必死に堪えているが、身体は痙縮し、股座からは小水が漏れ出て荷台に水溜りを作っていく。

ただ、そうなる事が分かっているながらも、悪態は止まらない。

「くそつ……くそつ、お、つ、つ！ んつ、おお、おつ！」

「ペナルティを押しまで言う事ですかそれ」

「つ、だまれつ、さわるなつ……きもちわるいつ……！」

咽せ返る様な催淫香の香り。自身を性の対象として見る卑しい視線と手付き。集まる侍女達の興味と嫉妬が混濁した衆目。

激しい屈辱と嫌悪を前に、こうでもしていないと気が狂ってしまいうで。少女はひたすら震える身を機械的絶頂で誤魔化し、潤んだ瞳で睨み返す他無かった。

「ほっほっほっ、いやしかし面白い。生意気な態度も、ここまで印象が変わりますか」

「男だっしてしってるだろっ！ この好色じじいつ、つぐつ……！」
なぞる様な指先の動き一つで、キツく締め上げていた拘束が解かれる。

露わになったのは、くつきりと浮かんだ圧迫による鬱血と刻まれた淫紋の痛々しい華奢な裸体。

鬱血の方は目に見えて異常な速度で消え失せど、間も無く力無く倒れ、男の太腕の中に落ちた。

「否定は出来ませんな。男色も嗜んでいる身の上故、性別に関しては特段の問題ではありませんが……」

軽々抱き上げられ、あつという間にベッドの方へ運ばれる。俄かに振り返って抵抗するも、まるで意に介されず。

シーツの上に投げ出され、柔い喉笛から「ひあつ」と甲高い声音が上がり、豊かな乳房は揺れて先から乳白色の汗を滴らせた。

香る小水混じりの芳醇な雌臭。二回り以上小さな女体の上、巨漢は体軀相応の反り勃ち脈打つ巨根を、ずっしりと重い玉袋ごと乗せて見せ付ける。

「こうして面と向かうまでは全くそそれ無かった自分が今、これ程までに昂っている」

「う、あつ……」

「味見せずに壊すには惜しいと、そう思ってしまった。気が変わりましたよ」

脂肪の多い上半身の肉塊が覆い被さった。

太指は濡れそぼった秘部に這わされ、空いた広い掌は乳房を丸々包み、大きな舌が薄紅の唇の中へ滑り込もうとする。

危険性を知る当人の制止など気にも留めず、最前列の三、四人が蜜に群がる昆虫の如く女体に集り、競う様に二つの乳房を奪い合い、その乳汁を舐り始めた。

うそつ、だめつ、だめだつてつ……！

強い刺激に少女が身を強張らせたのも束の間。体液を接種した女達の表情は、ほんの数秒で一層狂乱の度合いを増す。

猛り狂い、興奮し、鼻血を垂らしたかと思えば、退行し、赤子の如く振る舞い始め、尚も少女の柔肌をしゃぶり続ける。

懸念された魔力酔いの症状だ。

それも急性かつ激甚的。奇跡が無い限り、彼女らの人格は今ここで完全に破綻したと言えよう。

「ドクターの忠告しようとしていたのはこれでしょうかねえ」

「おまつ、なん、つ、れつ……」

「何故って、貴方が意地を張った結果ですよ」

男は一頻りその様子を観察し、「まあ、問題ありませんな」と呟くと、払い除ける様な手の動きで女達を次々ベッドの外へ吹き飛ばし昏倒させ、今度は己が乳を舐る。

「う、つ、あ、あぁつ……！！」

「じゅつ、ちゅつ……つ、おおつ、何と芳醇なつ……じゅちゅちゅつ」

「ふざけつ、つ、く、そつ……つ、つ！ つつ……！！」

「つ、こんな嘔き出しても飲み切れませんぞつ……」

そしてある程度飲んだ後は、「ふう。美味しい。力が張る。漲る……」と口元を拭いた後、さておきと両手で乱暴に両乳を掴み、宣った。

「今のは良い例だ。貴方が意地を張る度、誰かが犠牲になる。当たり前前の事です。まさか、ご理解でない？」

「いつ、あ、つ、つっー！」

言つてのけた。とんでもない理屈を。人を人として扱わない振る舞いを以て、堂々と。

それを通して、少女の首を締めんとする。

「責任重大ですよねえ？ 玄霧も、この国の民も。貴方が従順に振る舞うか否かで、運命が決まるのですから」

「あ、っ、う、うっ……！」

邪悪な尊顔が微笑んだ。

小さなうさぎの心は萎縮する。思わされる。これはもう、張り合える相手では無いと、頬に涙を伝わせ、身を震わせてしまう。

「お分かり頂けた様で何よりです。そんなに震えて、可哀想に。逃げたい気持ちも分かりますよ、ほほっ」

こわいっ……？ どうしてっ……？

自分が貶められる事ならば、どれだけの物でも堪えられる。それは今も昔も同じつもりだった。

しかし、怖い。かの暖かさを知った心身が素直に反応する。

これ以上穢されてしまったら、見限られてしまうかもしれない。

そもそも、感じる事すらも、触れ合う事すらも出来なくなってしまうかもしれない。

みつともなく思ってしまう。失いたくないと。

……だめ、だっ。

ただそれ以上に、かの心ある者達に危害が及ぶ事が堪らなく怖くて。

脅かされる利己と利他。その双方に押し潰されていく。

知らなかつた類の恐怖を知り、少女は絶望する。

「やはり、内面まで軟弱に成り果てたか」

脳裏に浮かんだのは、またしてもいつかの彼の言葉。

最早否定しようが無かった。

「今度は、受け入れてくれますよね？」

小さな身体を破壊しかねない、圧倒的な暴圧が女陰に当てがわれ、頭を一飲みしてしまいそうな程大きく見える口元が目と鼻の先まで迫る。

慣れた手付き、口振りは常套手段である事の証。周囲の女達も、恐らくは。

もう分かったっ……もう十分、分かったからっ……。

これは己の報いだ。ならば甘んじて受けなければ。

念じて、割り切ろうとする。胸が張り裂けそうだ。

自分が痛いだけ。耐えられる。問題無い。問題、ない。
いやだっ……。

冷徹な自己暗示は、どう足掻いても憶えた心の熱に溶かされる。
もう、いやだっ……。

堪え切れない。感情が溢れる。

瞼を強く瞑り、心の内、少女は初めてはつきりと、一人の人間に助けを求めた。

おまえのせいで、もうむりなんだっ……だからっ、たすけて……たすけてよちハヤっ……！

刹那、大量の魔力が下腹部に集まり、淫紋が発光する。

「むっ、何ですか」

が、男の掌に触れられると、直ぐに霧散。

同時に絶頂反応に襲われ、少女は声にならない悲鳴を上げた。

「そういうえば、感情の昂りに伴う暴発があるとか何とか言っていたね」

そう、だよな……だめ、だよな……。

諦観の帷が降りていった、その時。入り口の扉がぶち破られ、轟音と衝撃波が伏魔殿を駆け抜けた。

「っ……！… なんですっ……!?？」

インテリアや布の類が豪風に舞う中、落ち着きに満ちていたふくよかな顔面が風圧と動揺で崩れる。

ただ巨軀は倒れず、その場で片膝を立て一つ踏ん張ると、その身に緑色の魔力の光を纏い身構えた。

風が静まる。

尚も大気を震わす、圧倒的な圧力。

何奴という彼の分かり切った疑問も、瞬く間に吹き飛ばす。

(想定より一時間お早い……抜かった上、ツキも無かった……直前の暴発未遂で、感知が遅れた)

激しく揺らぐ景色のその向こう。床から数段上の宙空で佇む、長身男子の影有り。

その身から立ち昇るは、青の焰。合わせて黒の短髪が、身に纏う破

れたワイシャツが、スーツのズボンが逆立ち、青い双眸が力強く輝いている。

玄霧千隼。その人の、荒々しい参上であった。

「ほっほっほ、お待ちしていました」

巨漢は余裕を繕い、彼を見据える。

視線の先、いつの間に奪い去ったのか、その両腕には姫抱の形で少女が抱かれていた。

(ハルノミヤ、ドクターの報告は……ありません、か)

「二瞬何方か分かりませんでしたよ。随分と野生味溢れるご登場でっ」

言葉を投げ掛けた途端、魔力の圧が飛び、重い身体が達磨の如く後方へ転がされる。

「口を開くなこの汚物が」という殺意の籠った一言。それだけで、肥満体は潰れる様な圧を味わう。

「っ……………これまた一段とっ……………」

最中、彼の腕の中。少女は目を開け、瞬きながら「おまえ、なのか……………」と美丈夫に問いかける。

返事は返らない。代わりに今一度強く抱き締められた。

「っ、いたっ、くるしいっ……………」と声を上げると、今度は多分に籠った怒りを泥濘の中に沈めたかの様な、低く静かな声が返る。

「少し我慢している。すぐ終わる」

「ばかつ、おまえっ、なんでっ……………」

二人の会話は、部屋床から湧き出す大規模な緑光によって遮られた。

「あっ……………!?？」

「青い、甘い、拙い、ですねえっ……………」

チハヤの青い光が、一瞬にしてそれに飲み込まれる。

涼しい表情は変わらない。が、浮遊していた長身は少しずつ地に沈んでいく。

「っ……………」

「おいっ、チハヤっ、こらっ……………」

それに反比例して、地に伏せていた巨漢は起き上がり、言葉は威勢を取り戻す。

「ふう……もう少し聴い者だと思っていましたが、まさか単身乗り込んで来るとは思いませんでしたぞ」

緑光の元は、周囲に転がる侍女達からだった。

微かに上がる呻き声と共に、彼女らの身はどんどん痩せ細っていく。

「邪法か……属性は、風化と腐食か？　つ、何処までも、醜悪なっ……」

「奥の手です。飛び込んで来たから使ったまで。卑怯とは言わせませんぞお」

光の集約はより高まり、彼の逞しい肉体がミシミシと音を立て始めた。

「いよいよ「ぐうっ……！」と苦悶の声上がる。が、少女を抱く腕は強く、その身を離さない。

「おいばかつ、はなせつ……！　カツコつけといて、これはないぞっ……マジメにたたかえっ……！」

「っ……ダメだ、今離せば、お前が潰れる」
「んなのどうでもっ、っ！」

より密着され、女声は言葉を失う。

重なる、速くて荒々しい鼓動。体温が熱い。こんな時なのに浮ついて、上気してしまう。

「ふう……ほほっ、チハヤ君。それどころでは無いでしょう？　このまま後一押しすれば、君の脊椎の方が侵されて、ポツキリいきますぞ？」

そんな心胆を、悪戯で冷酷な一言が寒からしめる。

「そのまま次は魔力経絡を、そして次は精神を……侵し腐らせて差上げます。一息に、一瞬で」

出力が上がる。空気が、チハヤの奥歯が軋む。

「どうですか？　降参すれば、精神の自由は保障致しますが」
「ぬかせっ……」

「チハヤっ……!」

彼は名前を呼ぶ少女の耳元へ、「静かにしてろ……」と囁いた。

(まだまだ……深く、もっと深くっ……!)

(おまえっ、んっ、まさかっ……!)

「そうですか……残念です」

巨漢はその拳を握る。

パキンッ! パシッ、ピシッ!

何か不快な音がして、チハヤの逞しい身体から力感が失われ、だらんと少女を下敷きに床に落ちた。

呆気ない結末。ふうつと一つ息を吐いて、男は脂ぎった額を拭う。

「はあ、嘆かわしいですなあ。かつての両雄が、このザマとは」

緑光が失せた、その刹那。寄り添う二人を中心にして、爆発的な魔力の波動が生じた。

立ち上がる、青と紅の焰の渦。混ざり合い、溶けて、七色の白光の柱となり辺りを照らす。

「んなっ!?」

閉じた糸目が驚愕に見開かれる中、少女を胸に抱き、「はあっ、はあっ」と荒く息を吐きながら、チハヤは立ち上がった。

異様な光景。密着する両者の呼吸の感覚と質はまるで同様であり、単一の生命の様。

双方瞳はとろんと蕩け、その色まで混ざり合い、薄紅とも瑠璃色とも見える眼で何処か遠くを見つめている。

「成る程、術式共有、ですか……?」

それは文字通り深く繋がり合った者同士が、その身の魔力と術を共有する術である。

それなら身体機能回復の説明は付く。少女の刻印は現在肉体変性の大部分を終え、大半が身体機能の維持回復に過剰に回されている状態だ。共有してしまえば、その恩恵にあやかる事が出来る。

が、これ程の相乗は有り得ない。魔力が、存在の次元がまるで異なってしまうている。

本質的な違いを肌で感じ、巨漢は当惑しながら後退りしていく。

「はあっ、はあっ、っ、くっ……」

事実、チハヤと少女の意識は共有どころか混合していた。

感覚に境目が無く、女体が抱える淫熱も、男体に張る肉体の力強さも。困惑も、昂りも。双方の肉体は同様に感じ、反応してしまっていた。

それは所謂、交合時に味わう体感の遙かその先の物であった。故に一歩も動けない。何もかも満たされた充足感の中、微かに痙攣を繰り返してしまう。

「ほっ、まあ、そうですね？ 苦しいでしょう？ 刻印の共有な

ど、苦しくて動けないでしょうチハヤ君！」

男は気付いて、ニヤリと笑った。

正対したままゆっくり側面へ回り、捨て台詞を吐く。

「口惜しいですが、仕方ありません。今日の所はこれにて」

『逃す訳、無いだろうっ』

二人の敵意が揃ってかち合い、彼へ向いた。

刹那、膨大な魔力が指向性を持ち、一気に集約。

純粹な圧を受け、「おっ」という断末魔を最期に、巨漢は一瞬にして丸く潰れ、ただの肉塊へと成り果てた。

直後、後方より駆け付ける足音。「チハヤ様！」と呼ぶ声達。

張り詰めた緊張の糸が解ける。二人の意識は、ふっと暗闇に落ちた。

二十五話 レイ

「……はあ」

うろろうろ、うろろうろ。黒短髪長身の男子は落ち着き無く治療室の中を彷徨く。

首元には白銀のチョーカー。青の瞳には憂いを浮かべ、また一つ溜め息を吐いては、ベッドの上の少女へ言葉を投げ掛ける。

「早く起きろよ、ばか……」

常に苦しげに上下する、華奢な女体の下腹部。

そこに刻まれた妖しげな紋様は、病衣越しでも分かる程に、未だ煌々と赤く輝いている。

何でだよ……。

美丈夫は俯き、その小さな手を取って包み、握った。

何で、ボクだけが起きてるんだよ……それも、お前の身体で……！

かの一件により、事態は混迷を極めた。

犠牲者約十数名。人的被害の殆どは邪法の生贄による物で多くは無かったものの、少なからず名も無き魔術の才ある者達が犠牲になったのは国にとっても痛手であり、大きな反響があったという。

尚玄霧は朱馬の後ろ盾の下、当事件に関する情報のほぼ全てを掌握、制御し、伏魔以蔵の失態と失踪という一点だけを国上層で取り沙汰す事に成功。

戦兵派側の権力に空いた一時の大きな空白の下椅子の奪い合いが起き、権力者達の盤上は大いに荒れた。

その間、対岸の生誕派は躍進。大局を握るかに思われた。

が、一件の中心人物達が無事では済まなかった事から、大元の問題は先送りにはされなかった。

玄霧領内にて、帰還した種子と母胎は数日昏睡の後、種子のみが先んじて意識を取り戻す。

「にいさま……！」

『とおさま、にいさまがお目覚めになられました……！』

「っ、チハヤツ……！」

「……あ？」

なん、だ……？

「……？ どうしたんだ……？」

『にい、さま……？』

それはなんと種子の肉体で目覚めた、母胎側の意識であった。

専門家弟のハルキ曰く、原因は母胎側の刻印術式の誤作動。幾重にも編まれた

複雑怪奇な状況故、詳しい原理は特定不能との事。

程なく親族は気付き、体外的な対策を講じたものの、やはり主たる人物を欠いては事は進まず。全体を通じて二の足を踏む事を余儀無くされた。

「っ、本当に、申し訳御座いません、玄霧名代っ……ボクは、ボクなんかがっ」

「いいんだ、大丈夫、大丈夫だ。落ち着いて——」

そうして数日経ち、現在。

チハヤとして暫し過ぎた少女は、葛藤していた。

熱感に苛まれない筋肉質で硬質な感触。久しく無かった股下の存在の安心感。高い目線。低く落ち着いた声音。

逞しい男子の肉体は、穢され尽くした少女の物とは異なり健全そのもので、一切の鈍重さ無く動く。

精神に課せられた手脚の不自由は解けない為万全とまではいかな
いものの、圧倒的に快適で、喜ばしく思わずにはいられなかった。

しかしながら、それは罪悪感の上に成り立つ物。そして何より、無
二の理解者を失ってまで手に入れる物では無い。

やがて純粹に、目覚めを願う様になっていた。

語り掛ける程に強く、強く。

「起きろってばっ……！」

「……んだっ」

「っ!?？」

少女の重そうな脛が徐に開き、掠れた高い声音が微かに漏れた。低い男声が期待に弾み、大柄な身は前にのめる。

「チハヤっ、おまえ、だよなっ……?？」

「ああっ……っ、これはっ、はあっ、なるほどっ……」

「成る程ってなんだよっ! しっ、心配させやがって」

彼の意識は、目の前でコロコロと表情を変える有り得べからざる己の姿を捉えた。

所作の端々から滲み出る、素行の悪さと妙な愛嬌。気恥ずかしく、直視に耐えず直ぐに視線を逸らす。

しかし更には尋常では無い淫熱に爛れた柔い身の重怠さと、慣れない甲高い声が己の喉を通る様を実感し、それを一言の深刻な感想に纏めた。

「っ、キツいな……色々な意味で……」

「どういう事だよおっ!?？」

閑話を挟みつつ、二人は情報を共有し精査する。

「そうか、やはり影武者の線が濃いか……」

「ああ、鑑識の結果は案の定別人だったよ」

早晩判明した事だった。用心深いかの怪物は、今も何処かで生きている。

「されど、収穫が全く無い訳では無い。

「とはいえ当分、表には出て来れまい……」

「証拠はしっかり握らせてもらったからな」

彼に雇われ手を貸していた主力女衆、ハルノミヤ。重要参考人のキクチ。そして、国家指名手配犯ヘルゼン。

チハヤの獅子奮迅の活躍により、三名の確保に成功。内ハルノミヤが尋問に応じて此方側の陣営に下り、玄霧は伏魔並びにその系列にiggざとなれば切れる手札を手に入れた。

「あの、お前と少なからず因縁があるとかいう女衆は……」

「一命を取り留めたよ、しぶとい奴ばかりだよな全く」

「どうする、つもりだ?？」

「別にどうもしない。ケジメは、つけたつもりだ」
伝文のみの謝罪に、彼女がどう思ったか。

知る必要も無いだろう。これ以上の不幸な交わりは、お互いの為にならない。

「……そうか」

少女は心の底から敬意を表し、感謝を述べる。

「お前のお陰だ。本当に有難う」

「礼は良い。このザマだから……」

「それでもだよ。というかボクに損がないだろうがこんなの、救われてしかいないし……」

礼をしてもし切れない。一生掛かっても返せない程の恩が出来てしまった。

対等で有りたいたいと言っていたのに、情けない限りだ。

自覚し、俯きながら尋ねる。

「なあこれ、どうやったら元に戻ると思う？」

「……ふつ、なんだ？ 戻りたいのか……？」

「戻りたい訳じゃ無い、お前を戻したいんだよばか……でないとお前の家族に、顔向け出来ない」

伏し目な様子を見て、チハヤは揶揄った微笑みを止めて言う。

「はあつ、そうだな……お前のこの、下腹部の刻印に集まった魔力が一度切れれば、戻るんじゃないか？」

「んな当たり前の事考えてない筈無いだろ！ 一体、それにいつまで掛かると思ってたんだよ……！」

解除手段の分からない常態術式は供給魔力を断つ。

余りに単純で明快な手だ。それが非生物触媒の上であるならば。

「お前と俺を合わせた魔力供給で作動した術式だ……下手をする
と、解ける頃にはお前はもうこの世に居ないかもしれんな」

「笑えねえよ……」

術式として成立した物には入り口があっても出口は無い。解析し、口を作らなければ動力たる魔力の排出すら不可能である。

故に解析不能術式は供給がある場合は絶ち、無い場合はそのまま放

置する。物の場合はそれで良い。

しかし生物の場合は十割型当人が供給源であり、断つという事はつまり、暫しの仮死状態に入る措置の実行を意味する。

今回の場合、現実的な手段とは言い難かった。

「二応実行した魔術は術式共有の筈だよな？ ……つたく、何で解析不能のゲテモノを共有なんか……」

「つあ、くつ……」

少女が思慮を巡らせた途端、チハヤが俄かに苦しみの声を上げた。

「っ！ どうした？？」と心を寄せたのも束の間。横たわる小さな身体その股下、清潔なオムツの中に暖かな濡れ染みが広がっている。

原因は常に苛む熱感と、会話と思考に気を取られていた事。膀胱の切迫に、気付かなかった。

事前のケアに救われているとはいえ、彼は今は愛らしきその顔貌を恥辱と絶望に歪め嘆く。

「……………世話人を、呼んで来てくれっ……」

一先ず、彼の意識が戻ったという朗報は内外問わず好意的に拡散。家族は無事を喜び合い、国は最優の魔術師の生存に安堵した。

しかしながら情勢が大きく変化する事は無く、兩人に求められる物も、その猶予も変わらない。

更には奇妙な事態が、二人の間に俄かに波乱を呼ぶ。

「はあっ……………んっ、うっ、っ……………！」

「……………おっ」

更に三日後。蒸し暑い夜。

チハヤとして執務を熟した少女が身支度を終えて寝室へ向かうと、ベッドの上、淫らな肢体を持って余し、自らの手で擦り回し耽溺する者の姿があった。

「あっ、っ、ぐっ……」

少女の視点では彼が目覚めた日以来の逢瀬である。

時間と機会が合わず、暫く姿を見なかつたかと思えば急にこれだ。

驚愕し、少しばかり声を荒げずにはいられなかった。

「おいつての！」

「っ……………」

気付いた紅の瞳が見開かれた後、バツが悪そうに逸らされる。

鈴の音の如き女声は暫し言葉に詰まって、それから開き直り、可能な限り低く抑えた声で静かに発した。

「……………分かるだろう？」

「ああ、そりゃ、まあな」

自分と違い、彼は両手足が自由に動く。抗い切れなければ、当然こうなってしまうだろう。

赤みを帯びだ絹肌の嫋やかな曲線。香る、甘い女の媚臭。

変わり果てた元の己の姿が酷く艶やかに映り、肉体の男の部分が反応する。

「っ、悪い……………ちがうんだ……………本当に、悪かった……………」

対し彼は反省し、散々な今日一日を反省しながら俯く。

酷いハプニングだが、これも少女への理解を深める機会。そう思い、彼はカゾノとシスイに頼み込んで、相手の気付かぬ所で敢えて同様の一日をなぞろうとしていたのだ。

しかし結果は散々どころか悲惨であった。少し動くだけで芳しい匂いが鼻腔を擦り、擦れた箇所が甘く痺れ、如何わしい気分にはせられる。葉や装具に頼っても使用人としての仕事はおろか、歩行すら困難だった。

——アイツは、こんな中で正気をつ……………！

「っはあつ、っ……………！」

「チ、あ、ええと、チハヤ様っ!?？」

「カゾノっ……………！ 頼むっ、誰にも、見られない場所をつ……………！」
用を足す事も、シャワーもままならず。淫欲に負けて、自慰を覚えて。
殆ど一日中、肉欲に溺れてしまった。

ギブアップのつもりで、詫びるつもりで自室に帰った。

それでまたこの始末。彼は自分が恥ずかしくて、堪らず謝りながら

も、言い訳がましく口走ってしまおう。

「本当に、まさか、(´▽｀)までとはっ……………」

雄々しき身体が吸い込まれる様にして華奢な女体に向かい、覆い被さった。

「うおっ!?!?」

「っ…………はあっ、やっぱダメか。上手く動かない」

「お前っ、今何しようとしてるっ……………」

「そりゃ、いつもの仕返し」

動作手段そのものを欠落した精神は、やはり自由に動かす事ままならない。

愛撫を行おうとしても未学習の動作に首輪は反応してくれず、相手の無い竿を弄ろうとしてしまおう。

手は使えない。なら、どうするか。

「待てっ、其方は良いだろうが、しかし此方はっ……………」

「ふんっ、いつもボクが味わってる屈辱を、この機会に味わえっ!」
代わりとして口が使われ、乳汁でシミの出来た寝巻きの胸元、乳房の先を甘く食み、快感を与えた。

その刹那。

『はんっ!』

男女の声が重なって、部屋に木霊した。

「はっ……………あ?」

「…………っ?」

二人、特に少女側は当惑する。

確かに今、チハヤの身体に精神を置いている筈。

それなのに、乳房を舐った瞬間に同じ場所を舐られたかの様な感触がして、跳ねる程の快感に襲われた。

「…………言えた事じゃないが、何故俺の身体で、変な声を」

「ち、ちちちげーし! このっ」

もう一度。確かめる様に口を付ける。

すると『んっ、っ…………?』と先程同様、反応が被った。

「っは、なんだよ、これっ…………?」

「……口の中が、甘い？」

「おまつ、まさか……」

感覚が繋がっている。

双方の頭脳は、ほぼ同時にその結論に至った。

「条件は何だ？ 触れ合ってる事、なのか？」

「はあっ……恐らくは、そうだろう……」

「くっ、やばっ……!」

男体は狂おしき淫熱の切迫を感じ、その身をベッドの上で転がして距離を取る。

最中、「こうなる気はしていた」と、少女の声でチハヤは眩き、離れ行く背の裾を掴んだ。

「術は常に起動しているんだ……はあっ、ならばあの時と近い状況を再現すれば、或いは……」

「お前っ、分かってたんだなっ、コンニャロー……!」

「ああ。この俺が、自分で行った術を全く把握していない、なんて訳が、ないだろう……?」

細い腕が伸びて、大柄な肩を捕らえた。

極小なれど的確な力で引いて、倒して、ベッドに背を付けさせる。仰向けになった、今は自分の物では無い身体。彼はその上に、ひよ

いと跨った。

「んなっ!?」

「実を言えば……あの時行った術式共有。わざと必要な範囲以上に行った」

「何でっ」

「理解したかったからだ、お前を」

はあ、はあという互いの吐息が同調して、より速く、昂まっていく。「っ、分かったっ、その身体のせいで、おかしくなってるんだなっ、な

あっ」

「何故逃げようとする？ 其方から先に歩み寄った癖に」

少女の身体は相手の服を捲り上げ、鍛え上げられた分厚い胸板に倒れ込んだ。

「俺はもう、隠していないぞ」

汗ばんだ肌と肌、鼓動まで重なり、景色が揺らぐ。

周囲の音が遠ざかり、真っ白になり、二人が発する音だけが響く。触れ合った箇所が熱く蕩けて、一つになる。剥き出しの感情が交差する。

「どうにも、好いているんだ。堪らない程に」

「やっ、やめろっ……」

「伝わっているだろう？ 言葉以上に」

「分かったっ、分かった、からあっ」

「元男だからどうかでは無い。お前だけなんだ。俺と対等に並び立てる者は」

「っ……ばかやろっ……」

互いの孤独の輪郭をなぞり、互いに知った。

両者の穴は、共に埋め合えると。

心同士が溶け合って、そして。愛と呼ぶに相応しい姿を象った。

翌朝。カーテンから差し込む祝福の如き光の膜の下。

「んっ……」

「っ……ふっ」

深く重愈くも、それ以上に心地良い疲労感の中、二人は元の身体で目覚めた。

「何を笑って……あっ、元に、戻ってうっ……!」

唇が改めて重なる。互いが別の存在であるとはつきり分かった状態での、初めてのキス。

不快感も抵抗感も無い。微睡みのまま舌を絡め、昨晚の感覚を呼び起こさんと求め合うそれが、互いの身体に残る激しい愛の痕跡を浮き彫りにしていく。

双方頭がはつきりする程に徐々に羞恥が込み上げ、時を同じくして慌ててちゅはっとな離れた。

「っ、おまつ、お前なあっ……!」

「くっ……何だ、これはっ……!」

「お前がやったんだろがっ！」

「いや、これはお前が……って、そこを論つても仕方ないだろう」

「つゝつゝ……！……！……！……！……！……！」

少女の羞恥の悶絶が木霊す。

刺激にふやけ、微かに痛む各局部もさる事ながら身体中、特に首筋と胸の横辺りに大量に残ったキスマークがむず痒くて、堪らず身を転がしくねらせる。

「……ふっ、ははっ」

チハヤもまた、同様に残る赤みの刺激に全身の皮膚が裏返るかの如き搔痒を覚えつつも、その様を見て笑い、目の前で転がる肢体を後ろからそつと抱き寄せた。

「ふあっ、っ……なんだよっ、この、恥知らずっ……！」

「そうだなっ、俺達は恥知らずだ」

「んっ、ボクを含むんじやつ……んんっ、待てっ、そのっ、やさしく腹を抱くのやめろっ……！」

この時、二人は感じていたのかもしれない。

下腹部に感じる、新たな命の予感を。

「なんかっ、へんになるっ……！」

「ああ、なつてしまえ存分に。大好きなんだろう？　これが」

「こっつ、このサディストめっ……！」

そうして一頻り乳繰り合い、ただ肌を重ね合つて、落ち着いた頃。

「……なあこれ、シャワーどうする？　浴びたくなつてきたんだけど」

少女は、その身のベタつきが流石に気になり始めてしまい、彼に苦言を呈した。

臭いも少し落ち着きや情欲を齎す限度を超え始めている。予定だつてある。いつまでも抱き合っている訳にはいかない。

が、そこには問題が。

「そうだな、魔法が効いているとはいえ夏場だ。少しキツくなってきた。行こうか」

「色ボケしてポンコツになったのかあお前っ、このキスマークだら

けのどう隠すんだって言ってんだよ」

かくも余裕が奪われていたとは。二人はその点に関してあまり考慮していなかった。

一応チハヤは思い付き、ベッドの下やクローゼットを漁り始める。

「ああ、それならハルキから没収した透明化迷彩膜が……………つてあれ、何処にしまったか……………」

その様にはいつものキレが微塵も感じられなかった。

「おいおいしっかりしてくれよ……………」

「まあ仕方ない。タオルを巻いて……………」

「バレバレじゃねえかつ!」

「何故だ? 跡が見られなければ良いだろう? それに行為に及んだ事は寧ろアピールした方が」

「ボケなのか冗談なのか分からないけどお前のそういうところ嫌い!!」

「そ、そうか……………」

オマケに叱責を受けると、美丈夫が弟君そっくりの仔犬の様な表情に。

前々からその気配はあったが、よもや、チハヤが心を許すとはこういう事なのか。

嬉しいやら、残念なのやら。

「ガチ凹みもやめろつ! 面倒臭いなあ……………」

「……………」

「あーもう言い過ぎた悪かったから、頼むから、元氣と知性を取り戻してくれ」

「……………なら、名前で呼んでくれ」

「本当にどうしたお前」

「お前でなくチハヤと呼んでくれ。俺も……………何と呼べばいい?」

「聞くなよ……………はあ」

少女は仕方ないなど一つ吐息を吐いて、暫し瞳を揺らした後、憑き物が落ちたかの如くふわりと、優しくはにかんだ。

「レイ、でいいよ」

エピローグ

「えっ、なにこの、ぴかぴか……まさかつ」

少女レイの排尿時に装具が検知し、陰核付近の結晶箇所が赤く光った日。

データは方々に送信され、一部を除き祝福と歓喜を以て受け止められた。

『おめでとう御座います、にいさま、ねえさま』

「お、おめでとうございます！」

「ああ、有難う……」

「相変わらず耳が早いなお前の弟妹達は……」

その瞬間を以て戦兵派の意見は一時凍結。生誕派が計画進行の権を握る。

母子の保護を巡って若干の論争が起こったものの、朱馬、玄霧は全責任を持つ形でこれを鎮めた。

「出来る事はやった。後は、頼んだぞ……」

そうして当人は当家の24時間体制の体調管理の下、過ごす事になつたのだが――

「んっ。本当に、ここにお前の赤ちゃん、いるんだな……」

「お前と俺の、な……」

「んひっ……」

チハヤの執務室で。

恍惚に笑顔を歪める少女は彼の膝上に座り、彼の手を取って下腹部を撫でさせていた。

(あゝ……身体しんどいのにもラムラムする……触られたとこじんじんして、気持ちいい……)

対し彼は苦労感たつぷりに言う。

「だから頼むから、安静にしてくれないか……?」

「してるだろ? おとーさんっ」

その日、国を動かしていた財閥群の重要産業は、彼らによって買収された。

「まあ、これは御祝儀って事でええ」

裏にフクマの懐刀たるミズチの叛逆の影があった事も一因となり、二人の影響力は国外への波及を防げず。

荒稼ぎされた海外資本を以て、的確に古豪達の喉元を裂いてしまった。

「ボク達を引き合わせておいて、好きに出来ると思ったのが奴らの間違いだよねえ」

「またゴタつくだろうが……これで一先ず、お前はお前を取り戻せる」

「ちよつ、んんっ……」

チハヤは少女に頬を寄せ、唇を奪う。

「あの一、お二人さーん……?」

そして、置いてけぼりの女衆を尻目に言う。

「つは、籍を入れるぞ。これからは、玄霧レイだ」

「漢字、本当にその、あれにするつもりか……?」

「なんだ、不満か」

「いや、なんか恥ずかし……んんっ」

少女レイは、旧姓として白上麗の名を受けた上で玄霧に入籍。

制御不能とはいえ彼らが国力の増進に寄与する以上、国はそれを受け入れる他無く。国有母胎案は実質結実こそすれど、事実上形骸化した。

月日は流れ、半年後――。

海辺に建てられた、一面ガラス張りの景観美しい豪華な式場の壇上で。

集まる数多の注目、体格の良いタキシード姿の美丈夫の隣。目の前で厳かな祝詞が唱えられる中、豊かな胸と尻以外、未だ幼く見える華奢な体躯に不釣り合いな大きな腹を抱えた妖艶な少女は、その身を豪華な白無垢姿で包み、幸福と羞恥の表情で彼を見上げていた。

「……これ、どうなんだ？」

「名前に違わず綺麗だぞ」

「っ、そうじゃっ……っ」

嬉し恥ずかし、困った様にはにかむ頬に筋張った手が伸びる。

咄嗟に紅眼は閉じられたが、手指は白銀の髪をさらりと撫でた。

「髪、だいぶ伸びたな」

「みんなに切るなって言われるから……」

この日の為に整えられた頭髪は、ベールや髪飾り等の装飾に合わせ後ろで編み込まれた上で肩に掛かる程度まで伸び、女性らしさを際立たせていた。

それをチハヤは愛おしげな眼差しで見下ろし、草花を愛でるが如き手付きで撫で続ける。

またっ、こいつめっ……！

一応公衆の面前であるにも関わらず、普段の振る舞いで二人だけの世界へと引き込もうとする彼。

観衆が俄かに色めき立ち、盛り上がっているのが見てとれた。

むず痒さが限界に達したレイは、仕置きも兼ねて目線を下げてやろうとサテン特有の光沢ある純白手袋に包まれた細い手を伸ばす。

「お前こそっ、また背伸びやがったなっ、このっ、頭に手っ、届かないだろっ」

「どんな髪型でもお前は美しいが……甲斐甲斐しい準備が有ると思うと感慨深いな」

「知った様な口をっ……」

刹那、「ごほん」と目の前で老齢の神父が咳払いした。

閑話は打ち切られ、二人はハッとして今一度向き直る。

と、遂に冗長な祝詞の重要箇所が告げられた。

「貴方は病める時も健やかなる時も、愛し合う事を誓いますか？」

「誓います」

「っ、誓いますっ……」

「では誓いのキスを」

双方顔を合わせる。

周囲は急に静まって息を呑む。

高鳴る鼓動。過ぎる、この瞬間を得るまでの過酷な道程。

レイは感極まり、堪らず視線を先に逸らしてしまった。

その瞬間、対面の美丈夫の面が底意地悪そうな笑みを浮かべ、軽々と少女の身体を抱え上げ頬を寄せると、何の躊躇いも無く瑞々しいその唇を奪った。

割れんばかりの黄色い歓声上がる。

「っ！ はっ、おいバカチハヤっ！」

「この勝負は俺の勝ちだな」

「やり過ぎだこんにやろおっ！」

こうして家族や玄霧の系列に属する者達が一堂に会する中、式は盛大に行われ、冷めやらぬ中閉じた。

その夜、一頻り祝い事が終わった後のホテルの一室で。

「はあ……うう……」

レイは何処となく悩ましげに、不機嫌そうに唸っていた。

「どうした？ 寒いのか？」

「いや……っー、大丈夫、だけどさあ……」

夏場に行く筈の式が、繁忙と出産スケジュールの兼ね合いでこの時期にずれ込んだ事も去る事ながら、大きな腹で皆の目の前に立ち、あらゆる事かあの様な。

「毛布を取ってこよう」

「ちがうってばっ……もー……」

更にはそれ以前に、赤子を気遣い薬は薄め。欲求の解消も本格的な物はご無沙汰である。

(くうっ……あいつに触られたところ、痺れてっ、カラダうずいてっ、胸と股ヌルヌルでっ……こんなんで人前、立つなんてさあっ) 心身共に落ち着かず、最高に幸せである筈なのに、今一步幸福を実感出来ずにいた。

熱を孕んだ肌が張り詰める。未だ着たままのドレスが苦しくて、着てられない。

チハヤが居ないのを見計らって、先ずはぐっしより汗気を吸ったシヨーツを脱ぐ。

ずるずる、太腿で捻れながら、びちやつ。比較的気に入っている、水色だった筈のシルクのローライズシヨーツが床に落ち、無惨な群青色の姿で発見された。

「うあつ……」

愛液が内腿を伝う感覚で、スカートの下がどうなっているのかが分かかってしまう。

下腹部でひりつく淫紋は消えていない。己が身を焦がし続け、今も尚淫靡な雌の肉体へと変えていつている。

恐ろしさと共に、搔痒が込み上げ、解消欲求が湧き上がっていく。

最中、チハヤが毛布を持って戻って来る。

「ほら、体調が悪いなら……」

「っ……ちよつとは察してくれえっ！ もーこんなっ、はずかしいに決まってるだろっ！」

「ああ悪い、それはそう、だよなっ!!?」

レイはふらりふらりと徐に彼へ近寄ると、八つ当たりで押し倒し、流れる様にそのズボンを剥く。

少し引っ掛かった後、ボンっ。

「はっ? はあっ?」

艶やかな新妻の色気に当てられ、真っ赤に張り痲っていた逸物が露出した。

「クツ……しっかり勃たせやがってえっ、っ」

「んなっ!!?」

少女は自分もドレスの肩紐を下ろして胸をはだけさせて、ふるんつと張って苦しげな乳房を震わせると、逸物をその白磁の谷間に挟み込んだ。

「おりやつ、どうだあっ」

たぶたぶ、たぶたぶ。どどめ色になり果てた二つの乳輪の先から乳汁を滴らせながら双丘が踊る。

「やめろはしたなっ……いっ」

極上の感触に弄ばれ、チハヤは腰を抜かしてしまった。

男根の先は堪らずぼつてりと我慢汁を讃え、大きく首を逸らせる。

「お、いつ……」

（うあつ……すごつ、においつ、へんになるっ……）

己にかつて付いていた物とはまるで別物の、圧倒的肉感。放たれる雄の臭気。

レイはそれを吸い込むと酷く劣情を催し、目を回す。

（こんなのどうかしてる。けど、ああ……）

湧き上がり、狂う。激烈な愛おしさに、胸の内側が灼かれる。

衝動に任せ、「はむっ」と逸物を頬張った。

「嘘だろっ、ちよっ、待てっ……」

性行為すらも勝負化しがちな二人である。

が、これまで前戯は専ら手淫や尻擦りで、口淫は躊躇いの連続だった。

初の事態に、チハヤは動揺を隠せず手を拱く。

「っ、幾ら何でもっ……」

「んふっ、じゅっ、んじゅっ」

（勢いでやっちゃった……いつものデイルドよりふとい……かたちはいっしょらけど）

「ったくっ、くっ、うおおっ……」

柔軟な唇が尿道口をちゅぱつと吸い上げられた後、また食まれ、鬼頭の裏筋やカリ首が舐り回される。

肉棒は度々弾けそうな勢いの挙動を見せるも、少女はしっかりと挟み、啜え込み、逃さない。

「なんでこんなっ……うっ、くうっ」

乳圧の上下運動に合わせ、更に喉奥まで迎え入れる。

器用に、執拗に。訓練された技の数々に責め立てられ、逸物は限界を迎えた。

「やめろっ、吸い出されっ……うっ……」

「んぶっ！」

勢い良く射精された白濁は、小さな口に収まり切らず吹き溢れる。

「はあっ、あゝあっ……！」

「んっ……んくっ、ふっ……」

(やった……やっつと、出来たあ……)

青臭い雄汁の不快感も、チハヤの情けない乱れっぷりとセツトだと喉に引つ掛かる感覚さえ愛おしく感じ、レイはこくり、こくりと飲んでしまう。

食道をどろりとした灼熱が滑り堕ちていく。紅の瞳はとろんとしたまま微かに上擦り、その視界で俄かに星が飛んだ。

「んひひっ……」

優越感で口角が上がり、蠱惑的な顔貌が恍惚に微睡む。

が、次に相手の纏う覇気が変わったのを見て少し正気に戻り、徐々に崩れていく。

「……やべ」

「お前はっ……！」

「ひゃっ！」

身重であるにも関わらず、レイの身体は青筋走った隆々の腕に軽々持ち上げられ、あつという間にベッドの前まで運ばれた。

若干振りかぶられ投げ出されるのかと思いきや、直前でそつと下される。

「すうー……はー……」

深呼吸。寸での所で理性を保つ、血走り気味の青の眼差し。

少女は尊敬と揶揄いを込めて言う。

「っー……んっ、えらいぞパパっ」

「こんのっ……！」

瞬間、何かが切れた音がした。

チハヤは細い御足を掴んで、それを開脚姿勢に固定。

ドレススカートに顔をつつ込み、白い装具の縦スリットから覗く、淫蜜たっぷりの花卉に舌を這わせた。

「んひっ、いっ、ひああっ！」

上がる甘い嬌声、跳ねる白無垢を、くぐもった声が責める。

「っ、自分をつ、棚に上げてっ……そっちはどうなんだっ」

「んにやつ、なに、が、ああつ……？」

「母になる自覚だよつ、妊娠してからの痴態は目に余るぞ、足りないんじゃないか？」

「そんなあつ、ことつ……ふつ、んんっ！」

「装具しか付けてないだろうがっ、この変態っ！」

「あゝっ、やあゝあつ！」

言葉と息で痺れさせられ、舌先で弾かれる。

唇を結ぼうとしても、恥ずかしい声は止まらない。

細腰は仰け反つてガクガク震え、割れ目から潮が迸る。

「しかも何だ？ 尻のこれは」

「あつ、それはっ、ああつ……！」

見つけられてしまった。尻穴を埋める、旧式の装具を。

「まさかこれで式に出てたのか？」

「ちがっ、んんっ、さつき脱いだっ……あつ、んうっ、ぬるぬるしてっ、いやだったからあつ」

「パンツはそうだろうが尻のこれはどうなんだと訊いてる」

「っ……付けて、まひたっ……あつ、おっ、おおっ」

空気の抜ける音がして、装具の密着が解かれる。

「まってまってまって……」と往生際悪く頭が振られる中、掴まれ、一気にずるうんっ！ と引き抜かれた。

「んおおっ！ ふっ、ふううっ！」

上がるはしたない声。

淫らな肛門は取り留めを失い、暫し空いてひくつく。

「全く……嘆かわしいぞ」

ペチンっ。大きな両手が軽く二つの尻たぶを叩いた。

「ひんっ！」

鳴いて弾む媚肉。チハヤは容赦しない。

続け様に仄かに赤み差す白い桃尻を揉み込み、更に深く秘所を舐つた。

「あつ、うああつ！」

「幾ら諸事情でキツイとはいえっ、淫欲に負けてどうする？ お腹

の子に顔向け出来ないだろう」

「うっ、もうしわけありま」

「必要なのは謝罪じゃない」

「分かったつちゃんどまけないっ、いつ、まっ、まけないようにっ、努力するからあっ！」

「だったら耐えて見せろ」

陰核の根本と、その少し奥。Gスポットと前立腺肉輪の、二点の急所が責められる。

じゅちちちっとはしたない水音が連続して、腰が浮く。官能の雷が止めどなく走り、下半身に飽和する。

痛々しく光る臍下の淫紋が忙しなくヒクついて、霰も無い雌声が溢れ出す。

「あああつまつれっ、あつむりっ、それむりっ、つあ、あっ……」
静止しても最早止まらない。

レイは次第に腰をくの字に折り、そして。

「やらいぐっ、いっ……んぐうっ、りっ！」

くんっと跳ねて、糸が切れたかの如く脱力したかと思えば、暫しベッドの上で打ち上げられた陸の魚の様に身を小さく弾ませた。

「うっ、っ、っ………！」

「っ……っはあっ……」

チハヤは被っていた白のロングスカートを捲り上げ、荒く息を吐きながら、余韻に悶える少女を見据える。

揺れる赤と青の視線。暫し見つめ合い、互いにその奥で沸る情熱を確かめ合う。

———ずっと、過去に追い立てられていた。

———孤独で、未来に恐怖していた。

でも、一緒なら、もう。

「っ、きて……」

レイが震える両腕を広げ求めた。口元を栗の形に開き、糸引く赤い舌を物欲しげに差し出しながら、いじらしく、愛らしく。心の底から甘えた声で欲しいと訴えた。

チハヤはごくり、一つ息を呑む。そして、無言で応じた。
「っ……………」

激しく粘膜を擦り合う尻穴と男根。

重なる濡れた熱い肌と肌。

絡み合い、口内を貪り合う舌と舌。

「んむっ、っ、んんっ、れろっ、はふっ、っ」

むせ返る様な淫臭の中、華奢で柔和な肉と大きく猛々しい肉とが打ち合い、乱れ、踊り狂い、湿った衝突音の度、汗と性汗が飛び散り、艶声が止めど無く続く。

「しゅっ、っ、きっ、いつ、っ、はんっ、んっ」

揺れる胸尻。膨らんだ腹の伸びた淫紋から桃色の妖光が広がって部屋中を包めば。二人は限り無く溶け合っていく。

果たして誰が望んだだろうか。

「あっ、あっ、すきっ、んっ、んんっ、んおっ、んんんっ」

国は、大人達は、初めからこうなる事を望んでいたのかもしれない。事実、二人の愛は、この上ない力となって国の未来を支える事になる。

「おお、っ、おっ、んむっ、っ、っはあーっ、んんっ」

しかし彼らを阻むモノは、古今東西既に無し。

「はあっ、っ、出すぞっ……………」

「まつ、いつてうっ、い、っ、んっ、ん、んんんっ！」

誰も侵せない。虐げられない。

「っー」

「ん、んんんん……………」

最終的に魔術師としては異例の十二人の子宝に恵まれ、一族は後にも先にも類を見ない繁栄を見せる。

そこに既得権益の介入の余地は無し。排斥され、彼らの構築する体制の下黄金期が築き上げられた。

「はあっ、っ、おきてるっ……………ボクのかち、なっ……………っ、っ……………」

はっ、キス、やめろっ、ごまかされないぞっ……」

「……分かった、次の短期プロジェクトは、お前に任せよう」

「ふひっ、やりいっ……っ、んんっ」

「あくまで腹の子第一でな。無理をする兆しがあれば止める」

「んへへっ……わかってるってえっ……んっ」

寄り添い合い、時に競い合い、時に支え合う。

奇妙にして一つの理想を体現した父母たる二人の生涯は、互いに満ち足りていたとされる。

終。